

---

# 滅びの王 下巻

P 琢磨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

滅びの王 下巻

### 【Nコード】

N3145D

### 【作者名】

P 琢磨

### 【あらすじ】

《滅びの王》である神門練磨は、夢の世界で遂に幼馴染である間儀崇華と再会を果たしたが、彼女は《悪滅罪罰》と言う、咎人を抹殺する一族の末裔だった。《滅びの王》、神門練磨の旅はどうなってしまうのか？《滅びの王》の力とは一体？そして葛生鷹定が為そうとしていた事とは？《滅びの王》 完結編をお送り致します。

「 どういうつもりだ、スイカ? 」

「 ……? 」

目覚めた……つまり現実世界ではオレは眠りに就いて、夢の世界  
……『向こうの世界』にやって来たという感覚を味わって、そ  
れから、やっと今の事態に気づいた。

「 ……ミヤリ? おまえ……何やってんだ? 」

オレは布団から起き上がって、視界に映る異状を認めた。

僧侶姿の少女が、起き抜けに違いない少年が握っている鞘さやに向か  
って錫杖しやくじょうを振り下ろし、武器と武器がぶつかって、拮抗きうこうしていた。

少女は 一瞬分からなかったけど、紛れも無く、さっきまで現  
実世界で話していた崇華すづかだった。

崇華が、ミヤリに攻撃を加えてる。何故? 何でこいつは、ミヤ  
リに喧嘩ケンカを売ってるんだ?

「 見て分かるだろー? 奇襲に遭った 」

「 奇襲って……そいつ、崇華だろ!? 何で……戦ってたんだ!? 」

ミヤリの話では、崇華は仲間だったはずだ。オレがこの世界に來  
て始めて見る崇華の顔は、やけに焦燥で彩られていた。何か、焦っ  
て事を急かしてるような、そんな表情をしてる。

こんな崇華を、初めて見る。

「 えとえと……練磨れんまは、動かないでっ! 」

「 崇華……? 」

「 練磨は、この世界を敵に回しちゃったんだよ? えとえと……悪  
しき力が、練磨を悪い方に持ってっちゃうんだよ! 」

崇華の、いつものよく分からない言葉の羅列が、今だけは何と無  
く悟れた。

オレの……《滅びの王》としての力が、オレ自身を悪い方へと持  
っていく……? それはつまり……

「オレは……これから悪くなるのか？」

「うんっ、そうだよっ！」

「なるかアアアア！」

即座に突っ込むと、崇華はビクツと身震いして、ミヤリの長刀から錫杖を引っ込ませた。

「えっ？ えっえっ、練磨……？」

「確かに、オレは《滅びの王》だと言われてるけどな、オレには世界を滅ぼすつもりなんざねーんだよ！ だから、悪くなるつもりも、滅ぼすつもりも、これっぽっちも無い！ それとも、崇華。おまえは、オレがそんな事をする奴に見えるか？」

「うん」

「即答かよ……」

それはそれで酷い。つか、すっげー傷ついた……

突っ込みながらも、ちよっと立ち直れない感が漂っていると、崇華が錫杖をブンブン振り回して、

「練磨は悪い事をしない人だって、わたし知ってる！」

「じゃあ……？」

「でもでもっ、《滅びの王》は、世界を滅ぼしちゃうんだよ？ そんな力を持った人は、絶対におかしくなっちゃうよ！」

……崇華の言いたい事は、分からないでもない。

人間、生きていく上で必要な力以上の強大な力を手にした時、精神がマトモではなくなる。つい使ってみたくなくなったり、試してみたくなったりするモノだ。それによって弱き者を苛める事だって、力を持たない者に対する脅しに使う事だって在るかも知れない。それが、人間の愚かしい所だ。

オレは絶対にそんな奴じゃない！ ……なんて偉そうな事は言えない。きつとオレにもそういう部分が在って、どこかで歯止めが利かなくなる力を放出する事だって在るだろう。力……それは人を魅了し、墮落させる。

オレだって、《滅びの王》の力を知ってしまったら、もしかした

らという事だつて、充分に考え得るんだ。

「……オレは、そんな事はしねえ。そんな……おかしくなんてならねえよ」

「えとえと、……無理だよ、練磨……。《滅びの王》の力は、絶対に世界を滅ぼしちゃうもん！」

「崇華は、オレが信じられないのか？」

えとえと、と口ごもつて、それ以上言葉が続かない崇華。

でも……きつとそれは良心だ。オレを信じる信じないではなく、信じなければ嫌われるとか、そういう感情が働いているんだと思う。だから、『《滅びの王》をこのままにしておけば世界は滅ぶ』という考えと、『練磨に嫌われたくない』という考えが拮抗しているんだ。……オレと世界を天秤てんひんに掛ける辺り、崇華らしいと思うが。

「えとえと……。わたしだつて、練磨を信じたいよう？ でも、《滅びの王》の力は……」

「なら、こうしないか？ もし、オレが力を見せたら、その時は崇華の好きにすればいい。焼くなり煮るなり倒すなり。でも、今はまだ見ていてくれねえか？ オレにはまだ、やる事が在るんだ」

「……」

崇華が、錫杖を両手で握り締めて黙りこくる。

……ここで崇華が取引を呑まなければ最悪、戦闘も余儀無いだろうと、オレは推測していた。できる事なら崇華と敵対したくない。

この世界でも仲好くやっていきたい。それは叶わぬ望みだろうか？

「……じゃ、じゃあじゃあ、……何でも、していいんだね……？」

「ああ、男に二言は無いつ」

「……う、うん、分かったよう。それなら……いいよう……」

そう言いつつ、崇華の顔が真っ赤に染まりつつあるのは何故だろう？ あいつは、オレが《滅びの王》の力を使ったら何をする気なんだろう！？

ちよつとした恐怖に駆られながらも、オレはどこかで安堵していた。やっぱり、崇華だ……

「……わたしも、仲間になっていいの、かな……っ？」

ミヤリが面倒臭そうに布団に寝転びながら、オレに視線を向ける。  
……やっぱり、決定権はオレに回って来るらしい。

オレは当然の答を口にした。

「当たり前だろ？ 崇華は、オレの仲間だぜっ！」

「う……うんっ」

「じゃあオレはスイカの先輩だな。今度からミヤリ先輩と呼べ」

「はい、ミヤリ先輩！」

「いや、そこはいいから……」

何はともあれ、これでオレはようやく、現実世界と夢世界が繋<sup>つな</sup>が  
つたと確信した。

崇華が仲間になった！ ……なんて、ちょっとゲーム風に。

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます。――(・)――  
お待たせしました、【滅びの王 下巻】の始まりです。

【上巻】よりも幾分か長い物語ですが、最後までお付き合い下さい、  
宜しく願います。――(・)――

「……そう言えば、言ってたよね？ 王都に行くって」

宿屋の一室 オレとミヤリが寝泊りした部屋で、ミヤリと崇華<sup>すいつか</sup>、そしてオレの三人は車座<sup>くるまざ</sup>になって向かい合っていた。

「ああ。鷹定<sup>たかさだ</sup>が言ってたんだ。……でも、どうして向かっているのか、結局聴いてねえんだよな」

「王国を攻め滅ぼしてえのかもな」

「……おまえ、それ冗談だよな？」

座ってる姿勢に疲れたのか、ミヤリが寝転がりながら応える。

「他にメンマの力を使って何がしたいってんだよ、ヤサイは」

「葛生<sup>かさい</sup>だから！ いい加減、人の名前、覚えるよ！ それとオレは練磨<sup>れんま</sup>！ れ・ん・ま！」

「《滅びの王》の力を使いたって事は……えとえと、やっぱり罪悪感？」

「……もしかして、『悪代官』と言いたいのか？」

「それだよ！ 練磨、よく分かったね？ やっぱりすごいよう」

……そしてこいつは『頓珍漢<sup>トンチンカン</sup>』、と。

「鷹定が急いでたみたいだから、今すぐ王都に向かいたいんだけど……いいか？」

オレが二人に切り出すと、崇華がミヤリに視線を向けた。オレも自然とそこに向かう。

「……まー、いいけど。カレーコヤヤサイは待たなくていいのか？」

「カレーでも作る気かよ？ ……できるだけ、時間のロスは避けた方がいいだろ？ 今すぐ行こう！」

そう言っ立ち上がると、ミヤリは面倒そうな顔をするもオレに続き、崇華は喜んでお供さんと元気よく立ち上がる。

「ここから王都ってどれ位なんだ？」

宿屋の受付でミヤリが支払いをしている間に、崇華に尋ねてみた。

崇華は顎あごに指を添えて小首を傾げる。

「湖太郎くんが頑張ガンバれば一日で着くと思うよ？」

「湖太郎？ やっぱり、まだ仲間はいたんじゃねえか。どんな奴なんだ？」

「どんな奴つて……えとえと」

「人じゃねえし」

ミヤリが支払いを終えてオレの前に立ちただかり、するりと身を躲かわして外へ出て行く。

「おい、待てよっ」

追い縊すがろうとしたけれど、異様に足の速いミヤリに追いつけなくて、町の外まで来てしまった。

そこに、一人の少年が座り込んでいた。手には紙パッケのジューズ。

「おい、湖太郎ー。走るぞー」

「……おいら、もう疲つかれたよお……」

「やっぱ仲間がいるじゃんか。ちゃんと人だし」

追いついてミヤリの顔を覗き込むと、オレを不思議そうに見返してきた。

「こいつ……人に見えるか？」

「は……？ いや、人以外の何に見えるってんだ？」

「あれ？ あんさんは昨日乗せた……確か滅びのおっさん」

「王だ！」オレが子供にすかさず突っ込む。

「初めまして、って言うべきだよな？ おいらは走平虎そうへいこの湖太郎つて言います！」

「そーへーこ？ 何だそりゃ？ ……つて、崇華が前に言ってたような……」

オレが不思議そうな顔をして問い返すと、湖太郎の方が逆に不思議そうな顔をしてきた。

それを見て、崇華がニコニコとオレに向き、

「走平虎。『平野を走る虎』で、走平虎。わたし達を乗せてくれる

「トラさんなんだよう」

「トラ……?」

崇華の返答を聴いて、オレは再び湖太郎に視線を向け直す。……  
どこからどう見ても人間の子供にしか見えないけどな……

そこでオレは気づいた。

「耳が……」

頭の横に在るはずの耳が、頭の上に付いていた。それも、猫のような耳が。

いや、話の流れ的には、虎の耳なんだろう、きっと。

虎耳は本物だと証明するように、ピクリと動いた。

「玲穩さん、この人、何か変な人ですね?」

「ん〜。まあ存在自体が不思議な奴だしな」ミヤリがテキトーに。

「悪かったなっ」ちよつと拗ね気味にオレ。

「えーと、ちなみにあんさんの名前は……?」

走平虎の湖太郎が上目遣いにオレを見た。そう言えば名乗ってない事を思い出して、慌てて口にした。

「あつと、オレは神門練磨。よろしくな、湖太郎! ……で、いいよな?」

「あい! どうぞよろしく、練磨さん!」

中々気のいい奴だ、とオレは頬を綻ばせた。

「……で、どちらまで、でしょう?」

「王都へとんぼ返りだ。……できるよな、湖太郎?」

「へ〜い……」

明らかに疲れてますよ的な返事をする、その体に変化していき、骨格とか格好とか全然無視して、大きな水玉模様の虎に変化した。

「うわっ、虎になった!」

「だから走平虎だって言ってたんだろー? 見て分かんなかったのかよ?」呆れ顔のミヤリ。

「分かるかっ!」

大きな水玉模様の虎……その鼻先の方に歩み寄って、愛くるしい瞳を覗き込んでみる。

「……ほんとに、湖太郎なのか？」

「がう！」

「うおうつ！ 噛まないでっ、噛まないでー！」

慌てて尻餅を着くと、オレの鼻先を舐めてくる虎。

やっぱり、湖太郎なんだろう。……虎に変身する子供か。やっぱりリアンタジー……だな。

「ほら、乗れっ。時間がねーんだろ？」

「あ、お、おう！」

先に乗り込んでいた崇華に手を貸してもらい、湖太郎の背中に乗せてもらう。……鷹定が飼ってる野渡狼の雪花の背中也気持ち良かったけど、湖太郎の背中也毛がフワフワしていて触り心地が良かった。やがて、のそっ、のそっ、と動き始め、それは助走だったのだろう、ただだっ、と地面を踏み鳴らして駆け出した！

「おお〜！ 意外と速いんだな、走平虎ってのは」

雪花もかなりの速度で走ったけれど、それと変わらない位の速さを、湖太郎は出していた。風を切る感覚は、やっぱり何度味わっても楽しい。

「……走平虎ってね、本当はこうやって人を運ぶのが仕事じゃないんだよう」

「へえ？ でも、こんなに速いんなら、もしかして物を運ぶのが仕事なのか？」

「戦争に使われるんだよ」

え？

先頭に乗るミヤリの言葉が妙に冷たくて、オレは思わず問い返していた。

「本来、大人しい野生の走平虎は戦闘なんかしねえんだけど、戦争に賛成派のバカ共は、走平虎を調教して、戦闘用……戦争用に育て上げてんだよ。走平虎は力だけ見ると、充分に脅威だからな」

「……………」  
確かに、今の湖太郎に乗っていると、それだけの力は在りそうな気がする。……でも、それを戦争のために、戦争の道具として使われるという現実には、オレはちよつと、……否、かなり嫌な気分になった。

戦争なんて、起こらなければいいのに。でも、現実には戦争はどこの国に行っても在る。戦争に大きいも小さいも無くても、起こしたくも無いのに、得る物なんて何も無いのに、どうしても起こってしまう。それは、オレなんかが努力してどうなる問題でも無いけれど、それでも……やっぱり、悲しくなる。戦争を経験した事が無いオレが言っても欺瞞きまんだと言われそうだけだ。

でも……さっきの湖太郎を見たオレの思いは、戦争なんかに出て行ってもらいたくない、だった。湖太郎の外見が年下に見えるからか、それとも虎だけど人間の時の姿も見たからか、こんな子に戦争なんかさせたくないと思った。

「……………湖太郎は、そんな事しないよな……………」  
フワフワの背中を摩さすりながら呟つぶやくと、湖太郎の背中が震えたような気がした。

「しねーよ。……………でも、何もしねえ奴が生きていけねえのは、世界の道理だろ？ 戦う時は戦う。殺されそうになりゃ、抵抗の一つもする。むぎむぎバカに付き合っつて死ぬ程、こいつもバカじゃねーよ」  
ミヤリが眠そつに應えると、湖太郎が「がう！」と吼ほえた。……それが、妙に嬉しく感じられた。

安心して背中を摩さすっている、不意に湖太郎こたろうが速度を落とし始めた。

何だろつ、と思つて視線を崇華すづかの前に向けると、一人の男が進路ふいさを塞いでいた。

街道のど真ん中でモノクロの格好の男が、杖つえ ステッキを地面に突いて、湖太郎の上に乗るオレやミヤリを見上げて、軽く会釈した。

「いやー、どーもー。またお逢いできましたね、矛槍むすづくん」  
白いシルクハットを被り直すと、黒いステッキの上に両手を載せて屹然きつぜんと見上げてくる男……だと思つ。スレンダーな体格の人物は、顔に猫の面をしていて、性別がハッキリしないのだ。ただ、声を聴く限りでは、やはり男のようだ。

「どうやら、ミヤリと面識があるみたいだけど……  
ここからじゃ、ミヤリの表情は窺うかがえなかつた。

「えーと……あんた、誰だっけ？」

「あらら。お忘れですか？ 先日伺つかいましたのに。もう一度、名乗り直しましょうか？」

「いや、いいよ。邪魔だから退どいてくれねえか？ 喰くうぞ」

「短気なお方ですねえ 僕の話はなしを聴いてくださいよ、矛槍くん。

それと、《滅びの王》様？」

「こいつも、知ってるのか？ オレが、《滅びの王》だと。  
それ即ち、滅びの王を狙ねらってきている奴に相違ない。

オレは警戒しつつ、道具袋に忍しのばせていた ぶっ飛ばしの 附ぶ石せき に手を伸ばす。

「……ああ、思い出した。黒イチゴだっけ？」ミヤリが、呟つぶいた。  
「黒一くろいちです。』』』は要いりませんね。そこで取引をしませんか

？ 矛槍さん。僕は《滅びの王》様とお話したい事があるのです。故に、少しばかりお借りしたいのですが。ご安心ください 用事が済めばお返ししますので」

……借りるとか、返すとか。オレはレンタルビデオか！？

「あー、無理。今、オレが使ってるから」普通の口調で返すミヤリ。……しかも使用中かよ！？ もっと気の利いた言葉で返せよ！

『仲間だから』とかさ！ ちょっとガツカリなオレ。

「それは残念ですねえ。では、力尽ちからずくなるのですが……構いませんよね？」

オレにはモノクロ服の青年が戦えるとは思えなかった。武器らしい物と言えばステッキ位だし……いや、待てよ。もしかして 附石を持つてるんだらうか？ 附石 を持つていれば、麗れいこ子さんみたいな杖を出現させる事だってできるし、何よりオレの ぶっ飛ばし のような 附石 を持つていれば、武器なんか無くたって戦えるだろうし。

だがミヤリは、青年ではなく、向こう側に視線を向けていた。

「助っ人、か……。あー、かったりい」

ミヤリが湖太郎から降りると、オレと崇華を見上げて、

「オレがここで足止めしとくから、おまえらだけで目的地へ向かえ。

……湖太郎、頼むぞ」

「ねえねえミヤリ。そういう時って湖太郎くんじゃなくて、わたしに頼むべきじゃないのう？」

崇華が不平を漏らしたが、

「おまえ、頼りねーしなー。ま、そういう事だ。湖太郎、頑張れ」  
「がっ！」

威勢のいい返事を聴いて安心したのか、ミヤリは黒一と呼ばれる長身瘦すく躯のモノクロ男に向かって言を飛ばす。

「早く終わらせてえから、さっさとしてくんねーか？」

「 本当に短気なお方だ いいでしょう。僕も早く《滅びの王》様とお話したいですからね どうぞ、折敷おしきさん、小ヶ田おがた

さん、方雲かたくもさん」

黒一の背後から現れた三人組を見て、オレは驚おどきを禁じ得なかつた。

「あんたらは！」

「……テメエは、いつぞやのガキじゃねえか」

折敷と呼ばれた男は、初めてこの世界に來た時に襲い掛かつてきた、あの幹みき久ひさという男だった！

残りの二人も、あの時の連れだ。……まさか、再び逢えるとは思つてもみなかつたぞ……

「おや、面識が在りましたか？」

折敷さん。あちらの少年は殺

してはなりませんよ？ 彼 矛槍くんを倒してもらえればいいだけの仕事ですから」

「はんつ、分かつてる。給金以上の働きをするつもりは端はなからねえよ。臨時収入が在るのなら、話は別だがな」

「いいえ〜 そんなモノはございませぬとも では、あなた方のお力を信じて、僕は《滅びの王》様とお話させてもらいますよ」  
「勝手にしろ」

そこまで会話が聴こえた瞬間、湖太郎が駆け出し始めた。向かう先は、恐らく王都だろう。街道を迂うが回して、草原のような大地を駆け抜けて行く！

「ああ！ 待つてくださいよ〜」

背後で黒一と言うモノクロ奇術師のような男の声が出たけれど、聴かなかつた事にした。

「崇華！ あいつ、誰なんだっ？」

湖太郎の背中を抱き締める形で寝そべっていた崇華に声を掛けると、「う〜ん」と考え込むような声が返ってきた。

「わたしもよく知らないよう。でも……湖太郎くんがこんなに怯おびえてるって事は、きつと凄い人なんだと思うよ？」

言われて気づいたけれど、湖太郎の体が小刻みに震えている事が、毛皮越しに分かつた。

百獣の王でも怯える相手だつて言うのか、あの男が？

……俄かには信じられない話だった。どう考えても、肉体的にも力的にも上回つていそうな湖太郎が、あの棒みたいな瘦せつぼつちの男に怯える理由なんて無い。……何か、あの男には隠された力でも在るんだらうか？ 例えば……動物を飼い慣らす力とか？

「……な訳ねえか」

自分のあまりにアホらしい考えを否定すると、急に湖太郎の速度が落ちた。全力疾走だった分、少し前のめりに足を滑らせて、情性を殺して停止した。

「……っ！」

崇華が息を呑む心配が伝わって、男が追いついて来たのだと察する事ができた。

「いやー、問答無用で逃げないでくださいよ、《滅びの王》様。走るのは疲れるんですから」

「おまえ……速過ぎだろ……？」

時速何キロくらい出してるのか分からなかったけれど、恐らくオリンピックに出れば入賞できる速度だと思つ。それだけの速さを有して尚、余裕さえ感じられた。

走つて来たとは思えなかった。

「ははは。さて、《滅びの王》様。僕に付いて来てくれませんか？ ちょっとした事です、すぐに帰しますから心配ご無用です」

「……」

「……」  
「……すがすがしい程に怪しさ満点だ。」

付いて行けば、どうなるか。……殺されてしまつのが、一番あり得る妥当な線だと思つ。こんな存在を生かすとけば……以下略。きつと彼も崇華と同じ考えの持ち主なんだらう。

そんな奴に殺されてしまつのは、この世界の道理に適つてる。……でも、オレはここで死ぬ訳にいかないんだ！

「……崇華」

「なになに、練磨？」

「ここで、待ってる」

「え　？　えとえとっ、それって……？」

「心配すんな。付いてく訳じゃねえ。……ここで、あいつをぶっ倒す」

「おや？　僕を倒すつもりですか、その　《滅びの王》様の力を以てして？」

黒一の声は実に楽しげだった。

オレは　附石　を握り締めて、湖太郎から飛び降りた。……こいつの力は底知れねえけれど、多分ダメージを与える位なら、オレにだってできるはずだ。倒せなくても、ちよつと動けなくさせられれば……。

そう考えて、オレはミヤリが追いつくまでに片付けようと、すぐに黒一との距離を縮める。

「勇ましいですねえ。このままじゃ僕は、完全に悪じゃないですか」

「楽しそうに言ってるじゃねエエエ！」

何の策も無く、　殴りかかる！

距離を縮められても全く対応が無かった黒一は、殴りかかってきた拳をステッキで受け止め、　そこに生じ得ない強大な力に突き飛ばされ、ステッキごと宙を舞った。

「　ほう、これが　ぶっ飛ばし　の　附石　の力ですか、ナルホドナルホド」

「な　っ？」

宙を舞った黒一は、そのまま何の抵抗も無く落下し、　着地はあり得ないくらい優雅に決まった。ぶっ飛ばされた時も、どこにも無理が無いような体勢だったし……惚れ惚れする程の身のこなしだ。どこかの雑技団にでも入ってるのだろうか？

とか考えていると、猫の面を被ったまま顔が徐々に近付いて来ていた。

「できれば抵抗なさないでくださいね？　痛い思いをさせるつも

りはございませんので」

「練磨っ！」

オレの前に出て来た崇華。錫杖しゃくじょうが、震えている両手に合わせて揺れている。

「崇華……？」

「練磨は渡さないんだから！ わたしが相手をするわっ！」

「おや、こちらも勇ましいお嬢さんじょうさんだ　して　練磨さん？　どうしても付いて来る気は無いのですかな？」

「……」

この男の力は底知れない。……オレだってあいつに付いて行きたくないけれど、ここで崇華を戦わせたくなにか無い。何より、オレを巡って戦うと言う現実が、オレには耐えられない。

事は穩便おんべんに済ませたい。……崇華にも戦ってほしくない。そしてできる事ならオレの力で解決させたい。

「……すぐに、帰してくれるんだらうな？」

「はい　それはもちろん　ただ、確認させていただきたいのですよ。《滅びの王》様のお力と言うものを、ね」

「……分かった」

「練磨……？」

崇華が驚いた顔で振り返った。オレは、小さく苦笑を浮かべてみせた。

「大丈夫だって、崇華。……オレは必ず戻って来る。心配すんな」

「……」

「返事は？」

「う、うん……分かったよう。……練磨を、信じる」

「よし」

崇華の頭をぐしゃぐしゃに掻き回すと、オレは猫面野郎を見据えた。

「連れてけ。……今すぐだ」

「ええ、そうさせていただきます」  
青年は近寄ると、オレにステツキを当て、  
瞬間、視界が一変した。

「ここは……？」

「町です。滅ぼされた、ね」

確かに、町と呼んでも差し支えないような場所ではあった。辺りには軒が連なり、商品も少なからず置いてある。だが

「……誰も、いないぞ……？」

人っ子一人いない。無人の街。そう形容できる場所だった。全ての物が寂れ、棚に並んでいる物も、もう商品として成り立たない物がほとんどだった。灯りも無い。空には曇天が蔓延り、辺りに埃っぽい空気が蔓延している。

「いなくて当然ですよ。この町は滅んだのですから」

「滅んだ……？」

「その話はまた後日するとして、  
練磨さん、あなたのお力を見せてください。そしたら、帰して差し上げますよ」

黒一は猫面越しにオレを見据えて、そんな事をほざいた。

「……あのさ、一ついいか？ えつと……黒一さん？」

「ああ！ 紹介が遅れましたね。僕は禍谷黒一と申します。以後、お見知り置きを……。因みに、呼び捨てで構いませんよ？」

「えつと、じゃあ黒一。オレの力なんだけど……オレも分かってないんだよ」

間が在った。

「ははは。中々笑えない冗談ですね ……まあそれは予測済みでしたが。では、『滅びの王』様と知ったのは、何故なのでしょう？」「……応える必要はねえよな？ あんた、オレの力を知りたいって言っただけだし」

「これは手厳しい！ ナルホド、《滅びの王》様たる素質は在るみたいですね」

「どんな素質だ……と思わず突っ込みたくなる。

それにしても、この黒一とかいう男でも、《滅びの王》の力は分からないのか。……まあ知ってる方が逆に胡散臭いけどな。でも、このままだと、オレは自分の力さえ知らずに殺されてしまうかも知れないんだ。そんなのは、やっぱり嫌だな。

黒一が頭を捻ひねっているので、オレは興味本位で訊きいてみた。

「オレの……《滅びの王》の力なんて知って、どうするんだ？ どうせ殺しちまうんだろ？」

「ええ！？ どなたがそんな物騒な事を？」

「あれ？ 違うのか？」

拍子抜けって言うか、寧むじろ変な気さえした。

黒一は猫の面の上から頬をポリポリと搔かいて 無駄だろ、そこ

搔かいても オレに視線を向けずに、言を返す。

「そうですね……僕みたいな道化としては、そういう力は寧ろ重宝すべき物だと考えますがねえ」

「重宝？ いや、世界を滅ぼすような力を入れてどうするんだよ？ あ」

そういう事か、とオレもようやくその思考に辿り着けた。

オレの 《滅びの王》としての力は、絶大だ。何せ、世界を滅ぼしてしまうだけの威力が在る。それを利用するのだ……使い道を考えれば、どんな事だってできてしまう。そして、それだけの力を一個人が手に入れたら……例えば、一国の王ならどうだろう？ 戦争中の国家に在ったらどうなるだろう？ ……考えるまでも無かった。答は容易だ。

抑止力には当然なるだろうが、それよりもっといい使い方が在る。例えば戦争中の国家が敵国を瞬時に滅ぼす事だって、恐らく可能だ。《滅びの王》の力さえ手に入れば、世界を手中に治めたも同然なのだ。

だからこそこの国も、いや世界中が《滅びの王》と言うレッテルを貼られた存在を是が非でも手に入れようと奔走している……それこそ、血眼ちまなこになって探している事だろう。それだけの価値が、オレ

レ 《滅びの王》には在るんだ。  
「僕もその力に肖あやかりたいですよ、ホント」

黒一はそう言って面越しにため息を漏もらす。

……やっぱり、この世界でのオレは、ちょっとばかり優位に立ち過ぎだ。ある意味、オレは神なんだろう。世界の命運を、この体に宿しているのだから……神は神でも、疫病神やくびょうがみかも知れないけれど。

それでも……オレは死ぬ訳にはいかないんだ。オレは生きて、尚な且おがつこの世界を滅ぼさない。

それが自分に立てた誓い。忘れてはならない、誓い……  
「……黒一でも、オレの力って何なのか分かんないのか？」

せめて、どうやって世界を滅ぼすのかさえ分かれば、それを使わないようにするとか、対応策も出て来るんだろうけど……今のままじゃ手の打ちようが無いんじゃないだろうか……？

黒一は小首を傾げて腕を組んで悩んでいたが、不意に、白い礼服のようなピリツとした服の内ポケットから何かを取り出し始めた。

取り出した物は 一見、石のように見える。

「附石ふせき……ですか？」

「ええ。……ただ、コレで練磨さんのお力が分かるのかどうか、僕には分からないんだけどね あくまで、確認のために持って来たのですが……仕方ないですね。使っちゃいましょう」

石 限りなく白色に近い乳白色の 附石 をオレに近付けて、  
澄んだ声で黒一が唱える。

「汝なんじ、その御身おんみに宿した力、我に映し見せ給え！」

唱えた瞬間 石が砕け散り、パラパラと地面に落下した。粉々こなこなになっ

ていた。  
「……見石けんせき が、それも相当浄化されていた物が破壊されるなん

て……。やはり……僕みたいな道化には見せられない機構になって  
いましたか……」

「壊れちゃったぞ、コレ……？」

汚れた地面に落ちた、砕けてしまった石を見下ろしていると、仮  
面の奥から小さな吐息が漏れ出した。

「……ま、僕の物じゃないから、いつか　さて、と。練磨さ  
ん。本当にご自身のお力には気づかれてない？」

「何度も言わすな！　知らねえって言うてんだろ！」

「ふうむ、困りましたね。僕としても何の土産も無く帰るのは忍び  
ない。……そうだ、練磨さん。その　附石、どこで手に入れま  
したか？」

「　附石　って……これの事か？」

オレが　ぶっ飛ばし　が附与ふよされた　器石うつわいし　を見せると、黒一は  
大きく頷うなずいた。

「それを、どこで手に入れましたか？」

「どこって……そんなの、言う必要は無いだろ？」

「うーん、秘密主義ですね。困ったなあ。……あ。いつそ、ここ  
で亡き者にしちゃいますか」

……何か、不穏な空気が漂い始めたぞ。

猫のお面が、やけに黒く見えて来た。

「な、何を言ってるんすか……！？　よ、用件は済んだんですよ  
！？　早く帰してくださいよっ」　ちよつと丁寧語ていねいを使い始めるオレ。

「《滅びの王》様には悪いけど、ここで消えちゃってもええせん  
か？　きみと言う存在が消え去るだけで、僕にはとつても都合がい  
いのです」　黒い影を背後に、黒一。

「あなたの都合なんか知るかアアアア！？　ちよつ、マジで勘弁し  
てくださいよ！？　あなた、いい加減にしないと　！」

握り締めた　附石　の硬さだけが、オレに自信を呼び戻して  
くれる。

何が何でも、ここで死ぬ訳にはいかないんだ！　オレには……オ



黒一はあくまで突進して来るオレを優雅に見据え、仮面の下でため息を零す。

「ここまで短慮たんりょなお方だとは……仮にも『王』を名乗るのであれば、それに相応ふんわしい品格を持ち合わせていたただきたかったですね」

残念そうに、あくまで自分に勝てないだろうと高たかを括くくって、オレを見上げるこの男が、どうしようもなく憎い！

そこには、きつと殺意さえ芽生えていたんだろう。

苛立いじだち、怒り、憤り……あらゆる負の感情が宿って、オレの頭の中はグチャグチャにされたッ。

「うおおおおおおあああああああああああああああ！」

その時には、もう自我なんて無かったんだろう。ただ、ム力つく男を殴ろうとしていた。が、その手が、……届かなかったのを、憶えている。

ガキツ、と頬に衝撃が走って、オレは横滑りに倒れ込んだ。

頬が、焼けるように痛くて、オレは即座に立ち上がる事ができなかった。痛くて、胸が苦しくて、泣きそうな感情が目元に込み上げてきて、……呻うめく事によって、どうやっても泣き喚わめかないように、必死に耐えた。

多分、ステッキで殴られたんだと思う。後から黒一のため息が聴こえてきた。

「……やれやれ。手が無くなったら単身で挑みかかるとはね。実力行使で今まで生き抜いてきたのですか、きみは？ ……それとも、この 附石 に頼り過ぎていたのですか？」

「……返せよ……」

「これで『王』とは笑わせませぬ きみみたいな人は、世界中に転がっていますよ？ 自分が《滅びの王》様だと名乗っていらつしやるおバカさんなんて、山ほどいます。きみも……その一人のようですね」

「返せ、つってんだろ……」

「さて、と。きみの自信の根源である ぶっ飛ばしの 附石。

そんなに返してほしいのですか？」

「返せよッ!!」

頬の痛みは治まってなかったけれど、もうそんなの関係ない。こいつは、絶対にぶっ飛ばす!

怒りが、オレの中で燃え盛っている。心が、砕けんばかりに叫んでる!

返せエッ!!

「返してあげますよ、心配なさらずとも、ね?」

「うおおおおおお ……え?」

黒一が 附石 を掴まんで、不意に

「 還元せよ 」

「 還元せよかんげん 」  
唱えると 附石ふせき が輝き出し、……光が収まると、ただの石がそこに在った。

ここからじゃよく見えなかったけれど、……石に刻まれていた文字が消えているように見えた。

「これで、 附石 じゃなくなりました ただの 器石うつわいし です」

「あ？ え？ そ、んな……っ、てめ、え……！」

「どうしました？ きみは、この石を返してほしかったのでしょう？ 今、返して差し上げますよ。ちゃあんとね」

投げてよこされた石からは、やはり文字が消えてなくなっていた。ただの 器石 に戻ってしまったていた。

「どうです？ まだ、刃向かいますか？ 僕は構いませんよ 弱者を翻なぶるのは好きじゃないのですが、たまには日頃溜うづめている鬱憤うづぶんを晴らすのもいいですね それもまた一興、という奴です」

……この 附石 は、あの青年を助けた時にもらったモノだ。それを……こんな簡単に失ってしまうのは、オレの中の何かが許さなかった。

しみつたれた矜持プライドか。  
貧弱ひんじやくな正義か。

……何でもいい。オレの中のそういった感情が渦巻いて、神経系を全部焼き切ってしまう……！

憎しみ。怒り。憤りこたはら。……何でもいい爆発するのに理由なんて要らない。

あのバカを、殴らないと気が済まない。

殴らないと、オレはオレを認められない。

「……おや？ どうしました？ 練磨れんまさん。戦意喪失、ですか？

僕はそれでも」

「黙れ」

自分でも驚く程、冷静で低い声が出た。

……少し怖かった。自分が、自分でなくなってしまうようで。オレが……オレ以外の何かが変わってしまったいそう。

「……そうですか　でも僕は黙りませんよ？　僕を黙らせてみてくださいよ、その　《滅びの王》様の力を以てして、ね」

「……」  
応えてやるつもりなんて無い。ただ、殴ればそれで解決だ。

その時に、あのバカが死のうが逝こうが構わない。今の最優先事項は、あいつを一発、ぶん殴る事に在るのだから。

気づけば、足が先に動き始めていた。体は後から付いて来る。拳が、自然と振り被られる。

「やれやれ。またごり押しですか。芸の無い方ですね」

「うおおおおおおあああああああああああああ！」  
ステッキが、見えない速度で振り被られる。

オレの体は追いつかない。また、頬を殴られる。今度は左頬。

オレの体が吹き飛ばす。地面を滑って、また体も服も擦り傷だらけになる。

オレが起き上がる。今度こそ一撃見舞わせてやろうと黒一に向かって駆け出す。

黒一が面倒にステッキを振り直す。オレの側頭部が殴られる。視界で火花が散る。

オレは転がって、それでもまだ、オレは立ち上がる。

何度と無く繰り返し返される同じシーン。

何度だって殴られて、飛ばされて、倒れて、立ち上がり、駆け出して、　殴られる。

オレはいつからか、泣いていた。

自分の弱さに。自分の情けなさに。自分のどうしようもない不甲斐無さに！

「わあああああああああああ！」

どれだけ立ち上がったも、殴られて。どれだけ起き上がったも、飛ばされて。

……オレは泣いていた。悲しいんじゃない。自分に、呆れてるんだ。自分を、憐れ<sup>あわ</sup>んでるんだ。

いい加減、体が麻痺<sup>まひ</sup>してきた頃、オレは地面に突<sup>つ</sup>つ伏<sup>ぶ</sup>して動けなくなっていた。

痛い……体のあちこちが悲鳴を上げて、もう動きたくないとしてライキを起こしてる。……精神も、死に掛けていた。この男にはどうあっても敵わない。諦<sup>あきら</sup>める。……そう、心の底で理性が叫<sup>さけ</sup>んでる。砕かれた心は、中々修復されなくて、オレは苦しいままだった。

「ふう。一仕事でしたね。きみも、そんなになるまで頑張<sup>ガンバ</sup>らなくても好かったのに。……僕も、一思いに殺すべきでしたかね？ 大丈夫 今、その努力に免じて、一撃で葬<sup>ほうむ</sup>り去<sup>さ</sup>つてあげます 練磨さんも、もう苦しみたくないでしょう？ 楽になりたいでしょう？ 任せてください 僕の力を貸してあげますよ」

……言葉が、出ない。

オレは、こんな奴にやられるためにここまで来たんじゃない……

オレは、世界を滅ぼすために生まれてきたんじゃない……

オレが生まれた理由なんて、オレが決めてやる。

オレしか決められないんだ、誰にも決めさせてなんかやるか。

だから……こんな所で死ぬ訳<sup>わけ</sup>にいかないって、言ってるだろ……！

「じゃあ、さようなら、練磨さん。今度は地獄で逢いましょう」

頭に衝撃が走って、……何も考えられなくなった。

生きたい……それだけが、オレの口の中で反芻<sup>はんそう</sup>していた……

そこには闇しかなかった……

5頁 神門練磨の書12

『生きたい』

(後書き)

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます。――(・)――  
今頁はこれにて終幕と相成ります。  
次頁をお楽しみに

……風の便りたよ が返ってこない。

俺は爾生の背じしやうに乗りながら 風の便り を練磨れんまに送ったのだが、  
……中々返ってこない。

空は完全に青々と晴れ渡り、朝を通り越して直じきに昼になるだろう  
という頃合いになっていた。朝には、まだ練磨と連絡が取り合えて  
いたが、……『王都へ向かう』という返信が来て以来、何も返って  
こなくなつた。

冷静に考えれば、移動で疲れた練磨が寝てしまったとも考えられ  
るし、単に 風の便り を返すのが面倒になつたか、気づいていな  
いか……相変わらず、都合のいい考えしか浮かばない。そんな希望  
的観測をしていて、ためになつた事など無いと言つのに。

「……私にも返ってきてないわ」

鈴懸麗子すずかけれいこもそうらしい。彼女が嘘を吐いているという考えだつて  
思いつかない訳じゃないが、今ここで練磨と秘密の通信が在つたと  
しても、それが何の意味も成さないと分かつている。第一、俺が言  
うのも何だが、練磨はそんな事をしない奴だと、俺は信じている。

それに……今は、今だけは、彼女を信じるつもりでいる。彼女は、  
練磨の居場所を知る唯一の人物なのだから。それがどれだけ愚かな  
事かも、承知の上だ。固もとより、選べる手段など初めから多くなかつ  
た。

「……《救いの勇者》に、間儀家……」

最悪の取り合わせだな、と思わずにいられない。どちらも《滅び  
の王》と言う名を聴いただけで殺人を犯せる程の、絶対正義の名の  
下に動ける人物だ。仮に《滅びの王》として普通の人間を誤つて殺  
してしまつても、正当性を得られるのだから、性質タチが悪い。

今こうしている間にも、練磨は殺害されていてもおかしくない。  
「そろそろ、追いつくはずよ」

町を通り越して街道沿いに飛び続けていれば、やがて王都が見えてくるだろう。この速度を維持できれば、今日の夜半には王都入りが可能だ。

俺は伽雅丸を肩に掛けて、下界に視線を投じた。

……何の変哲も無い世界がそこに広がっている。今現在、この近くに脅威と目される人物がいる事を誰も気づいてない様子だ。……それでいい。脅威を知られば、それだけで民衆と言つものは混乱する。得体の知れないものは、それだけで安易に恐怖に繋がるものだ。

「見えたわ！」

俺の視界でも捉えた影は、三つ。

一人は、自分の身長程も在るんじゃないかと思える長刀を携えた少年。一人は僧侶のようで、長刀の少年と同じ年に見える杖を持つ少女。最後に、少年の姿に擬人化した走平虎。合計三人が車座になつて空を見上げていた。見上げていた……と言つか、爾生が近付いたから見上げた、と言うべきか。

爾生がゆっくりと降下し、地面間に近付くと、俺は自主的に飛び降りた。雪花、鈴懸麗子もそれに続く。

「……練磨はどうした？」

三人の中に、練磨の姿が無いのは、上空で見て取れていた。それでも聴いたのは、彼らしか知り得ないからだ。

杖を持った僧侶然とした少女が俺を見上げて、継るような眼をする。それが、最悪の事態を連想させる。

「……何が遭つた？」

「連れ攫われた」

応えたのは長刀を持つ少年 恐らく《救いの勇者》だろう

だつた。

大凡そこに感情がこもっていない。ただ事実として述べたに過ぎない、と言つた様相を呈していた。

それが、何故か酷く癪に障る。

「何をしていたんだ、きみは？」

「戦ってた。……逃げられたけどな」

誰と、と聴くべきなんだろうが、とても聴く気にはならなかった。現実として、練磨が攫われた事実だけが蟠って、色々と気になる事も在るのだが、どれもこれも、分からない事だらけだ。

人に逢つたら、まずは疑え。嫌でもそんな気にさせられる。

「……練磨、すぐに戻ってくるって言ってたんだよう」

僧侶然とした少女が、小さな声で呟きを漏らした。

彼女が恐らく、間儀家 《悪滅罪罰》の末裔なのだろう。それにしても……若い。こんなうら若い女の子が、《滅びの王》を滅そうとしているなどと、誰が思うだろうか。普通は考えまい。

「……どこに行つたかも、分からないのか？」

「知らねーよ、ンな事。それに、分かつてたら何らかの行動に移してると思わねーか？」

それもそうだ、と言う思いも確かに在ったが、こんな状況にした少年が、妙に許せない。

……もう俺にはどうしようもない所まで練磨が行ってしまったみたいで……帰って来る事が二度と無いような気がして、俺はもどかしい、やるせない気分になって、頭をガリガリと掻き毟った。

「禿げるぞ、おっさん」

「……俺は葛生鷹定。おっさん呼ばわりは止めてくれないか」  
そんなに歳を食つたつもりは無いからな。

そう告げると、少年が「アーナルホド」と手を打った。

「あんたがヤサイか。よろしく、オレは矛盾槍玲穂。んでこつちが……」

「間儀、崇華ですう……この子は走平虎の湖太郎くんですう」

「よろしくです」

「……よろしく」

場がもう少し和んでいれば、俺でもきつと頬を緩ませられたと思う、自己紹介。

それでも今は、少しでも練磨の情報が欲しい。彼が今、どこへ行

って、何をやらされようとしているのか。事と次第によっては、土栗くわでの一件を、そこでも再現せねばなるまい。

「聴きたいんだが……練磨は誰に攫さらわれたんだ？」

せめて、王国軍や共和国軍の下っ端だとか、傭兵の組合……【三つ矛の剣士団】の一員だとか、それだけでも分かれば、自おのずと向かうべき場所も出て来るのだが……

「わたしの知らない人だったよう……？ ミヤリは、面識めんしきが在ったみたいだけど……？」

「あー、あいつな。黒イチゴっつーんだけどよ」

「黒一くろいちさんって名乗ってたよう！」

……聴き覚えの無い名だ。

「禍谷まがや黒一、の事かしら？」

思わぬ所から声がして、俺達の視線が鈴懸麗子すずかけりこに注そそがれる。

「知ってるのか？」と俺が即座に尋ねる。

「名前はね。……大戦争時に暗躍したとされる、奇術師よ。ただ、当時の彼はどこの組織にも就ついていない、無所属の人間だったの。あの頃の共和国と同じだった訳」

「大戦争時の人間か……とすれば、目的は帝国復興か、もしくは王国滅亡、二つしか考えられんな」

大戦争とは、ちょうど二十年前に大陸全体を巻き込んだ、王国と帝国の戦争の事である。確か帝国側が突如とつじゆとして武装蜂起ぼっしきし、王国側に攻め込んだ事が発端はつたんだったはずだ。その頃の俺はまだ幼かったが、ぼんやりと憶えている。あの頃は、地獄だったと言う事を。

「共和国を攻め滅ぼそうとしてるのかも知れねーんじゃないか？」

俺の考えにもう一つ案を付け足して来たのは、矛槍玲穩ぼしやうれいむらだった。座まつてるのも面倒なのか、草原に寝転がって俺を見上げている。

「……どうしてそう思う？」

「確か、その頃の共和国は完全な傍観を決め込んだんだろ？ 黒イチゴが帝国側の人間だったと仮定するなら、共闘、んでもって最後には援助を乞こったにも拘かわらず、共和国は何の反応も示さなかったん

だ、明確な拒絶を感じた帝国が逆恨みしちまう事だつて、充分あり得るんじゃないかなーと思つて」

矛槍玲穩の言つてる事は、確かに考えられる。

ただ、何故彼がそんな事を知つてるのか、それが気掛かりだった。

「オレ、共和国の人間なんだよ」

言いながら、欠伸あくびを浮かべる矛槍。

共和国の生まれだから、二十年前に行われた大戦争の時に共和国がどんな行動を取つたのか、それを知る事ができたらしい。それを知つた矛槍は、何だかやるせない気持ちになつたと言つた。

「戦争に参加しなかつた事を咎とがめるつもりはねーよ、オレだつて。そんなの、結局戦争の火種を大きくするだけだからな。……そうじやなくて、戦争を止める努力をしなかつた共和国が、何だか嫌いになつた。だからこうして、また戦争の火種に成り得る力を持つてる《滅びの王》とやらを拝みに来た訳だ。結局、どっかに行つちまつたけどな」

「……責任を問うつもりは無いよ」

練磨が連れられて行つたのは、元はと言えば自分のせいだ。一昨日のあの時、俺は練磨を引張つてでも旅籠はたごを脱出すべきだったのだ。そうすれば、こんなややこしい事件に絡まれずに済んだ。……俺の注意力の落ち度に、少し落胆する。

四人の人間と、三匹の擬人獣ぎじんじゅうの車座は、妙に静かになつた。

「……取り敢えず、練磨を連れ去つた奴の居場所が知れない以上、行動の仕様が無い事は確かだな」

要点を摘まみ上げて呟くと、三人とも似たような表情を浮かべた。皆が皆、自分のせいだと悔いているような顔をしている。……きつと、俺もその一人だろう。

「話に関係ねーけど、一つ、いいか？」

一人だけ平常心のままらしい矛槍が、俺を見つめて指を一本立てた。

俺は振り向き、「何だ」と短く返した。

「《滅びの王》を使って、何するつもりなんだ、あんた？」

「……………」  
練磨が話したのだろうか。……今になっては、それを責める事すらできないが。

それに……練磨が《滅びの王》だとしたら、何れは話さなければならぬ事でもあった。

だがそれでも、誰かに話すつもりは無かった。これは俺の問題であり、他人を巻き込んでまで済まそうとするべきじゃない。

俺は首を振った。

「……………言えない」

「王都に何が在るんだ？ それとも、あんたも王国を滅ぼそうと考える、帝国派なのか？」

そう思われても仕方ない、としか言いようが無い。

寧ろ、そう思われていた方が好都合かも知れない。……そういう、それらしい理由を提示しておけば、無理に話を聴こうとしなくなるだろう。……だが、幾ら《滅びの王》に群がった連中とは言え、嘘は吐きたくなかった。

それは、小さい頃から叩き込まれた武士道精神が、俺の意志に反してそうさせるのかも知れない。

「……………何れ分かるだろう。それより今は、練磨を探しに……………」  
言葉が唐突に途切れたからだろう、三人とも不思議そうな顔をして俺を見つめている。

「……………どうしたの？」

鈴懸が尋ねたのが、一瞬、聴こえなかった。

眼前に現れた 風の便り。自分に届いた 風の便りが、他の誰かに見られる事は無い。本人しか気づけないような仕組みになっっているからだ。……練磨の 風の便りに気づけた咲希は特別だ。

俺は、凍りついた。

「嘘……………」

間儀宗華の声が聴こえて、俺は虚ろになりつつある瞳を、そちらに向けた。

間儀宗華の顔が、生気を無くして青褪めていた。

「……まさか」

鈴懸麗子が口に手を当てて、瞠目している。……きっと、俺と間儀の顔色を見て、その意味を察したのだろう。そしてそれは、……認めたくなかったが、恐らく正解だ。

「……どうしたんだー？ メンマから 風の便り でも来たのかー？」

一人、場の空気を読めていない少年の声を聴きつつ、俺は頂垂れるように頷いた。

「……練磨が、死んだ」

赤い 風の便り は死亡通知だ。

ある人物が死ぬと、一度でもその人物と 風の便り をやり取りした事のある全員に死亡通知が届けられる。

死亡通知には、亡くなった場所や日時が記されるので、縁ゆかりのある人はそこへ向かい、葬儀を行うと言うのが、世界では通例となっている。

「練磨くんが……死んだ……？」

鈴懸すずかけの妙に沈んだ声が、耳朶じだを打つ。声が震えていないのは、きつとこういう事が一度目じゃないからだろう。仲間の死を目の当たりにするのは一度や二度じゃないと、纏まとった空気が暗に告げていた。矛盾むじりは沈黙して寝転がっている。大した反応を見せないのは、既に予測済みだったからだろうか。

唯一感情らしい感情を見せたのは間儀まぎで、通知が来てからずっと泣きじゃくっていた。

「死んじゃやだよ、練磨あ……っ。うえっ、うっ……」

「……《滅びの王》は、死んだ、か」

矛盾が、間儀を気遣う素振りを一切見せず、起き上がる。その顔に悲愴ひせいな色は全く浮かんでいない。ただ、事実を淡々と受け入れる、まるで機械のように起伏の無い感情を見せていた。

「……」

これで……事件は収束するのだろうか。

世界を終わりに導く《滅びの王》は、呆気なく死に絶えた。これで世界が滅びる事は無いだろう。突如とつじょとして危機が去った世界は、どのように変わっていくのだろう。……毎日、少しずつは変わっていくだろうが、大きな変化は訪あひれずに終わってしまった。

それとも、もしかしたら練磨は《滅びの王》などではなかったのかも知れない、……とも思う。そう思いたい気持ちもある。俺の心

には、練磨が《滅びの王》であってほしいという想いと、《滅びの王》であってほしくないという想いが拮抗していた。……どちらであつても、練磨が死んでしまった今、もう論争をする必要も無い気がする。

結局俺は、あいつを救おうとして、練磨を殺してしまったんだろう。……気分は最悪だった。俺があの時、滅びの王の……練磨の力を借りたいなどと言つた時から、……否、他者に問題を背負い込ませようとした時から既に齒車は狂つていた。やはり練磨は、村にでも預けて、そこで安穩と暮らしててもらえば好かつたのだ。そうすれば、こんな最悪の結末にはならなかつたはずだ。

「……どこに行くの、鷹定くん？」

俺が無言で立ち上がったのを見て、鈴懸が見上げる。俺はできる限り鈴懸を見ないように努めると、雪花に獣化するよう呟いた。

「……もう、ここには用が無いからな。……練磨を迎えに行つてくる」

「え……？ 練磨、もう死ん……っ」

自分で言つて自分で泣きそうになる間儀は、見ている胸を締め付けられそうになるが、俺は振り返らずに、

「……せめて、弔つてやる位、俺にでもできるだろう？ ……場所も分かつてる事だしな」

「……教えてくれよ、その場所」

「ミヤリ……？」

矛槍が座つた姿勢のまま俺を見上げるので、……俺は聴きたくなつた。

「……何故、知りたい？」

「そりゃ、ま、オレも弔つてやりてえからな。一日の仲だけど、あいつは……何か、いい奴だったし」

それよりも、と矛槍は逆に問い返してきた。

「何でヤサイは、奴に構う必要がある？ やっぱ、《滅びの王》の力が欲しいのかー？」

「……練磨が《滅びの王》だと信じていないから、弔いに行くんだ。変な事を言ってると思われるも、構わないと思った。

《不迷の森》の魔女……夜霧磨は、練磨を《滅びの王》と言ったが、俺にはどうしても信じる事ができなかった。……否、できなくなっ

た。何の力も無く、でも誰かを助けたい気持ちばかりが先走る、……そんな奴が、《滅びの王》な訳が無い……そう、思い込みたいのかも知れない。だからだろう、俺は練磨を普通の人間として、弔ってやりたくなつたのだ。

「練磨が《滅びの王》だとしたら、俺はきつと弔いには行かないだろうな」

練磨が《滅びの王》じゃないと信じているからこそ、俺は練磨を弔いに行ける。……大事を、一時的に放置しても、優先したかった。僅か数日、練磨と行動を共にしただけで、心境は変わるものらしい。今は大事を措いてでも練磨を弔いたくなっていた。……人はやはり、移ろいゆくものなんだろうか。それ以上に、練磨が人を惹きつけるような人物だったとも思える。

矛槍は俺のそんな考えを聴いて、何故か皮肉げな微笑を口の端に浮かべた。

「分かるぜ、その気持ち。オレだって、そうだ。メンマが《滅びの王》だったら、きつとこんな事しねーよ。……あいつ、《滅びの王》って感じじゃねえもん。寧ろ……あいつにこそ、《救いの勇者》って称号を与えるべきなんじゃねえか？」

確かに練磨は、《滅びの王》と言う雰囲気じゃない。矛槍が言うような《救いの勇者》とまではいかないが、平穏な村で生活しているような空気を、彼は纏っている。……草花の匂いを連想させる、世間から一歩離れた場所にいるような、そんな雰囲気を感じるのだ。「……わたしも、付いてって、いいですかあ……？」

獣化した雪花に跨ると、間儀が怖ず怖ずと切り出して来た。

彼女は、《悪滅罪罰》の間儀家の末裔だ。《滅びの王》が死んだ

今、もう世界の危機は去つたのだから付いて来る必要は無いと思つたが、……やはり、自分の眼で確認したいのだろうか。《滅びの王》の死を……。

俺は頷いて、最後まで動こうとしなかった鈴懸に視線を移した。

「……きみはどうする？」

「……私は一旦、別行動を取ろうと思うわ。それで相談なんだけど……風の便りを送受信できるようにしてくれないかしら？ いざと言う時、皆に連絡が取れればと思うんだけど……」

俺はその案には快く賛成できなかった。

何故か。人を疑いたくは無いが、鈴懸は一度俺を出し抜いている。そんな彼女が与える情報なんて、全く以て信用性に欠ける。どんな人物なのか完全には分かっていない上、一度とは言え練習を勝手に連れ出した人物である、今度は誤情報でも流されて混乱させられたら、俺の大事の遅滞にも繋がる。そう思っても仕方ないだろう。

だけど、その件を知らないからだろう、二人は賛成らしかった。

「じゃあじゃあ、わたしに一旦送ってみてください。すぐに返信しますから！」

「オレも送ってくれたら返してもいいぜー。……暇だったら」

「決まりね。鷹定くんは？」

「二人と連絡が取れるなら、俺は別に……」

雪花に跨った俺に歩み寄って、足にしな垂れかかってくる。指で俺の太腿に「の」の字を書き始める。

「ねえ、いいでしょおう？ 私、鷹定くと熱いお話がし・

た・い・のっ

「……」

「それとも、私は鷹定くんの趣味に合わないかしらあ？」

「スイカ、見ちゃダメだぞ。アレはおまえにとっては眼の薬だ」

「えとえと、……毒、の間違いだよね……？」

……外野は放っておくとして、鈴懸と風の便りを送受信する事にした。

これ以上、鈴懸に色気を使われても居心地が悪くなるだけだし、何より早く練磨を弔いに行きたい。

早く弔って、……自身の問題を解決しなければ。そのためには、今すぐにでも向かわなければならぬ。ここから練磨の亡くなった場所まではかなり遠い。幾ら速く走っても、二日は掛かるだろう。それに、再度長城を越えなければならぬから、今度こそ王都へは戻って来られないかも知れない。その時は……

「じゃあ行こうぜ、ヤサイ」

「……一つ言っておくが、俺は葛生だ。葛生鷹定」

「分かってるってヤサイ。ほら、スイカが待ち侘びて髪の毛が抜けてる」

「嘘!? わたしの髪、カムバーツク! お願い、抜けないでー!」  
……取り敢えず、退屈しなさそうだった。

俺の件までは、まだ幾らか時間が在る。行って帰るだけの時間は残ってるはずだ。……弔ったら、後はもう、やるしかない。

王国を敵に回してでも、俺は、やってみせる。そう、心の中で誓いを立てた。

7頁 葛生鷹定の書3

『赤い風』

(後書き)

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます。――(・)――  
今章はこれにて終幕と相成ります。  
次章をお楽しみに

……頭が重い。

つか、この感覚は重いと言うより……痛いとか、怠だるいとか、そういうのに、近い……

動きたくない。でも、暗闇に沈んだままだと、心まで黒く染まりそうそうで、何だか嫌いやだった。

瞼まぶたの裏は黒かったけど、それが透けてくる程に外は明るみたいだ。……朝なのか？ ……分からない。ただ、ぼんやりとしていて頭が上手く機能しない。考えても考えても、闇の坩堝くわくに落ちていく……オレ、どうなったんだっけ。

よく思い出せない。記憶が前後してる気がする。

まずは、思い出せる所から思い出そうか。……それすらも億劫おっくうになつて、ただぼんやりと闇の湖に沈み続ける。

何で起きないんだろう……そう思う心があった。

起きない。て事はオレ、寝てるのか……？ ……それすらも分からない。起きてるのか、寝てるのか、何も。

闇の中だけど、光は見えている。……いや、感じている。闇の中で光を浴びている、と言う感覚なんだろうか……？

起きたい。でも、起き方が分からない。どうすればこの闇から解放されるのか、分からない。

……そうだ、オレ……崇華すうかと逢あったんだ……

ようやく崇華との邂逅かいこうを果たしたオレは、浮かれてた。……んだと思う。それでちょっと、何かへまをしたんだと思う。……だから今、オレはこんな事になつてるんだろう。

ちよつとだけ思い出してきた。……変な奴が現れたんだ。猫の面を被かつた、奇術師然とした、変な奴。そいつがオレ達に喧嘩ケンカを売つてきて……それで……

思い出せてきて、同時に怖こわくなつてきた。このまま思い出せば、

きつと後悔する。心のどこかで、そんな危険信号を発してる部分を、オレは認めた。これ以上、思い出しちゃいけない。そんな事をすれば、オレは……

オレは……

殺されたんだ。

……

……

……

…… そうだ、あの変な奴に、頭を、貫か、れ、て……っ、

…… もう、思い出した。死んだんだ、あの時。それで今、こんな所にいる。

…… バカな事をした。今更後悔したって遅い。それは分かってる、分かってるけど、でも !

…… 手遅れだって事も、今更何を思った所で何も変わらないって事も、全部分かっているつもりだ。

それでも…… またやり直したいって、もう一度だけチャンスを買って、叫んでる。胸が張り裂けそうで、泣きそうで、怒られてもいいから、ちよつとだけ痛くてもいいから、もう一回だけ…… !

…… 都合が好過ぎるんだ、オレは。そんなの、できる訳が無い。できたとしても、オレはまた間違える。何度でも、生きてる限り、間違えばっかりだ。それでもオレは、もう一度蘇<sup>よみがえ</sup>りたいと、願ってる。

誰でも願うと思う。自分の人生がいきなり終わってしまったら、どんな人でも、きつと……。

…… ここで死んでも、もしかしたら好かったんじゃないかって、そう思えてきた。

オレがここで死ぬ事によって、夢の世界は滅亡を免れた<sup>まぬが</sup>んだ、それは喜ばしい事だ。オレ一人の命と引き換えに世界が救われたのなら、どれだけ安上がりだろう。

…… だけど、だけれどっ、オレは生きていたかった。 世界を滅

ぼす存在だと罵られても、どれだけ蔑まされようと、オレはあの世界で生きていたかったんだ！……究極的に世界を滅ぼしてしまうのだとしても、オレは生きていたかった。それこそ、世界が滅んでも好かったと思う位だ。

自己中心的過ぎると、自分でも分かる。自分のために世界を滅ぼしてしまうなんて、そんな人が生きていていいはずが無い。……それでもオレは生きていようと自分に誓いを立てたんだ。何があっても、生き抜きたかった。

……どれも過ぎ去った事だ。どうしようもない。

ウダウダと思っていて、……そう言えばこの光は何だろうと、気づいた。

闇の中にいるはずなのに、体を包み込むような光を感じる。……温かくて、太陽でも浴びているような心地良さがあった、母体の中の胎児に退行したような錯覚を感じる。癒されるとは、きっとこんな状態を指すに違いない。

温かい……と思いつつ、オレはゆっくりとだが、『起きる』という行為を思い出せた。どこをどうすればいいのか、徐々に脳裏に浮かび始めて、オレはそれに倣って体を動かし始める。エンジンを掛けるためにはキーを回すという、単純な行為すら思い出せなかった。先程に比べて、今はアクセルの吹かし方まで鮮明に分かり出したのだ。

瞼を上げる……その行為が億劫になりそうな程ゆっくりで、光に包まれていたのは、現実だったと知った。

オレは天を見上げて寝転がっていた。視界には、どんよりとした雲が空を覆っていて、いつ雨が降ってきてもおかしく無さそうな天候が映っていた。……なのに、どこからか温かな光を感じる……。

「……ここ、は……っ」

起き上がろうとして、全身から悲鳴が上がり、また頭を戻した。……硬さ加減から、オレは地面に何も敷かず寝かされている事に気づいた。いつも枕をして寝ているからだろうか、妙に寝心地

が悪い。

「ようやく……気が付いたわね」

聴き覚えのある声が間近で聴こえ、オレは跳ね起きようとして  
激痛が走って寝転がったまま声の主を探す。

「咲希さきかつ？」

「他に誰がいるつてのよ、全まったく……」

確かに咲希の声だったが、妙に疲れたような声音で、いつもの快  
活な口調ではなかった。やけに弱々しく感じる。

「オレ……どうなったんだ？」

さつきも考えていたけれど、オレは黒一くいちに殺されたはずだ。散々  
殴られて、最後に脳天にステッキを……っ、

背筋に冷たいものが滑り落ちて、ぞくっとした。あの感覚は、き  
つと忘れる事を許されないだろう。それだけ恐怖を感じ、……絶対  
的な『死』を、頭に、体に刻み込まれた。

頭を触るのが怖かった。そこに……穴が開いていそう。何より、  
触れた途端に自分が壊れてしまいそう。

「……死んだのよ、あんた」

咲希が弱々しい声で応じる。

光が徐々に薄くなっていくのが分かり、それが何故か、咲希が発  
しているものなんじゃないかって思えて、慌つなてて言葉を繋いだ。

「じゃあ、咲希がオレを生き返らせてくれたの catt？」

「違うわ……あんた、何も憶えてないの？」

光が消えていく。それがオレには、咲希が死んでしまっんじやな  
いかって、不安にさせた。

何も憶えてない？ ……黒一に脳天を貫かれた後の記憶は、無い。  
恐らくオレは、死んだんだ、その時。だから、その間の事は何も思  
い出せない。死んでいるのに憶えている方が、逆におかしいだろう。  
思いつつ、光が消えた事を察したオレは、悲鳴を上げる体に無理  
を言わせ、起き上がった。

オレの腹の上に、ゆっくりと落ちてくる咲希を見た。

「咲希っ」

オレが慌てて両手で受け止めると、全身が軋きしんだ。咲希が重かったんじゃないくて、寧むしろ予想以上に軽かろくて驚おどいたけれど、そうではなく、体を動かした事によって、体が絶叫ぜっけいを發はしたのだ。……情けない話だけど、受け止めた姿勢のまま、体が動かなくなってしまった。

手の中に舞い降りてきた妖精ようせいを見て、……すごく弱よわってるのが、分かった。

「大丈夫、か……？」

「……見て、分からない……？ はあ……」

ため息、と言いつより苦しげな吐息を漏もらした咲希は、オレの手の中で寝転ねころがる。

「……ちよつと、魔力を使い過ぎたわ……少し眠るから、変な事、しないでよね……」

「誰たれがするかッ！」

「それと…… 風の便り は使つかわないで……」

「え？ 何なにで、だよ？」

「……」

返答は無なし。

オレの手の中で、咲希は猫のように体を丸めて、……眠ねってしまった。

……しばらく、そのまま固まっていた。手の中の妖精を見る。

「……こんなに華奢みやびだったんだな、おまえ……」

軽いだけじゃない。ちよつと力を加えれば、潰れてしまいそうな位華奢だった。いつも負けん気で突っ掛かってくる奴とは思えない程、今の咲希さきは脆もろそうに映った。

いつも、逢う度に握り潰してやろうと思ってたけど、……今のこいつを見てたら、そんな気も失せてしまった。こんな力の無い奴をどうしようってんだ、オレは。以前のオレがバカらし過ぎて恥ずかしくなる。

それにしても……こんな弱々しい咲希を見るのは本当に初めてだ。いつも見せている表情じゃなく、別の一面であるからだろうか、妙に可愛らしく見えてしまう。

今は、ゆっくり休ませてやろうと思って、両手の上に載せて、そのまま寝かせてやる。

「……つってもなあ」

起き上がって周りに視線を向け、そこがオレが一度死んだ場所と然程変わらないと知ると、落胆の色は隠せなかった。ここがどこなのか、結局分からないままだし、崇華すつか達ともはぐれてしまった。

立ち上がるうとして、全身の痛みが走る。一度死んで生き返ったとは言え、全快とはいかないらしい。黒一くろいちに遠慮なく殴られた箇所が痛んで、立ち上がるだけでもメチャクチャ大変だった。……思うに、あれだけ顔を殴られたんだから、今のオレって相当不細工ブサイク？

思いつつ立ち上がると、……やっぱり視界に変化は見られない。細部こそ違うが、見えている物に変化は無い。寂れた町さびが、眼前に無造作に広がっている。

……黒一は、「滅んだ町」とか言ってたっけ。

何故滅んだんだろう？ 少し思考に余裕の出たところで、そんな事を考える事ができた。

この寂れようからして、最近起こったモノじゃないだろう。……でも、時間の経過つてのは、よく分からない。一ヶ月前に戦争が遭ったと言われても信じるだろうし、十年前に戦争が遭ったと言われても納得しそうだ。寂れているのは間違いないから、滅ぼされて少しは経ったんだろう。それ位しか分からなかった。

「……それにしても、どんな戦争だったんだ……」  
歩き出してみると、色々な残骸が眼に映る。……オレの寝ていた場所から数十メートルも行かない所で、建物が薙ぎ倒されている場所に出て、その凄まじさを垣間見る事ができた。

だが、この世界にこんな事をできる兵器類が在るとは思えない。

魔法 の力……だろうか。それなら納得する事ができるけど……そんな 魔法 が在るのなら、鷹定が言ってた王国なんて、その魔法 を使える奴が一人いれば、攻め滅ぼすのも容易なんじゃ……と思ってしまう。だけど、仮にそんな 魔法 が在ったとして、王国はそれに対抗すべく何らかの措置を行うに違いないんだ、という結論に達すると、自己完結してしまった。

咲希を起こさないように慎重に歩を進める。咲希を押し潰すような事をしてしまったら、恩を仇で返す事になってしまうから、それだけは絶対に避けようと考えていた。

「ここは……」  
辿り着いたのは、残骸もそう多くない広場のような開けた場所。そこには……多くの刀剣が地面に突き刺してあり、鏢にはドックタグのような物が引っ掛けられていた。

……墓標……だろうか。  
それにしても多い。数百は下らないだろう簡素な墓標は、時折吹く砂埃の混じった風に曝され、ドックタグがカラカラと物悲しい音色を奏でていた。

「……」

自然と、咲希を潰さない程度に手を合わせて、黙禱もくとつしていた。

……誰がどんな死に方をしたとか、どうしてこんな状態になったのかとか、何も分からないけれど、それでもここに何百人つて人が眠ってるんなら、その眠りを妨さまたげるような事は冒涇ぼうじやうに違ちがいない。オレをここまで運んできた黒一に呪詛しじゆそを吐きながら、その場を後にした。

「……戦争、か」

オレには縁遠いもんだって、信じて疑わなかった。

将来、自衛隊に入るつもりは無かったし、普通に生きていく分にはそんなものと関わり合いになるなんて考えもしなかった。そういうものはテレビや映画でしか見る機会が無かったし、幾いくら授業で戦争の恐ろしさを語られても、実際に体験してみなければ恐怖や悲惨さは感じ得ないモノだと、オレは思っている。

ここでも、いつかは分からないけれど戦争が起こった。その事実だけがそこに在り、他の一切を消してしまっているような気がした。どうやって戦争に至ったのか、誰が何をして戦争が始まったのか、何が遭って戦争が終わったのか……全部、『戦争』という名のマジックペンで黒く塗り潰されてしまってる。後は、『戦争』が遭ったとだけ分かるように、跡しか残っていないんだ。

……多分、このままオレが生き続ければ、自然にこれが始まるんだと、オレは少し陰気になった。

「誰かが殺されなかつたら、別の誰かが殺されるのは、分かっているだけだな……」

究極的なところ、人は生きていれば直接的ではなくとも間接的に何人もの人を殺してしまうものだ。どんな形であれ、眼前にその事実を叩きつけられれば、誰だって嫌な気分になるだろう。自分はただ生きていただけなのに、何もしてないのに、人は自分が生きていただけで死んでいく……その現実を知ってしまったら、極論に達してしまうと、最悪自殺でもしかねない。

あくまで極論、究極的な話であって、実際はそんな事は無いのか

も知れない。オレが勝手に考えた妄想まっそうでしかないかも知れないそれを、オレは少なからず信じてる。生きている限り、人という生き物は迷惑を掛け通した。その中で、人が死んでしまう事だって、充分に考えられると思うんだ。

そんな極論に達しても、オレは生きる事を選択する。……今の考えを悟なほって尚そんな事をするのは、もしかしたら自己中心的な考えだからかも知れない。人が生きている限り人は死ぬけれど、それを選択するのは、やっぱり人だから……オレは、誰かが死んでも生きる事を選択したい。

「にしても、人っ子一人いやしねえし……」

…当然と言えば当然だけだな。

滅んでしまった町に誰が好き好んで暮らしたがるだろうか。

思いつつ、足を進め続ける。大分、体が回復してきて、歩くのは痛みを感じるけど、支障は来たさない程だ。

……咲希のおかげだな。

オレが生き返ったのもきつと、咲希のおかげだと思ってる。そうじゃなけりゃ、オレはこんな所を歩いていない。元の世界……現実の世界で眼が覚めるはずだから。

「ありがとな、咲希……」

きつと正面切ると感謝の言葉は言えないだろうから、今の内に言っってしまったおく。

眠っている咲希は何も応えず、眠り続けている。……ま、夢の中で聴こえてたらしいかな。

太陽が沈みかけた頃、オレは歩くのに疲れて、倒壊した建物の上に座った。

町は広がった。……それ位しか、分かる事は無かった。太陽の方角から見て東西南北に歩き回ってはみたモノの、町から出られる事も無く、ただ半日掛けて歩き通しただけとなった。

……いや、実は一度、町の端に辿り着いた事が在った。場所は恐らく町の北側に当たる場所で、その先には草原と寂れた街道が延々と続いていたので。……見ていて、このまま進むべきなんだろうかと悩んでしまい、結局、今日の所はこの町で一泊する事に決めたのだった。

その間、咲希が眼を覚ます事は一度も無く、ずっと両手の中で寝続けていた……このままだと、オレは何もしないまま飢え死にするんじゃないだろうかと不安になってきた。頼みの綱である咲希がこの調子では、どうしても不安が先立ってしまうのだ。

砂埃の混じった風が吹き、辺りを乾燥させていく。眼を開けていると砂が入ってくるので、風の時ではできる限り動かず、ジツとしていた。

この辺は風を遮る物が無くて、砂や埃が直接体に当たって、オレの服を砂埃塗れにしてしまう。色がちょっと白っぽくなっているのはそのためだ。

深く座り直すと、今日の事を思い出してみる。

まず……起きてからショッキングな事がいきなり遭った。

折角黒一から取り返したぶっ飛ばしの附石……いや、あの時には既にぶっ飛ばしの文字が消されていたから、ただの器石か……が砕け散っていたのだ。それには、かなりショックを受けた。……あの行商人の親切なお礼としてもらった品を壊した事に胸が痛くなっただし、何より黒一に対する憎悪が倍增した。

だからだろうか。今のオレには自身を守る術すべが無い。喧嘩ケンカが強い訳でも、策士のように頭脳が働く訳でもない。今のオレは、生まれ間もない赤子同然で、世界の情勢も知らなければ、ここがどこなのかも、これからどうすればいいのかも分からず、完全に立ち往生あいつじようしている状態だ。

「……てか、あれが無きゃオレは戦う事すらできねえってのか……？」

あんな物、なんて言ったら自己嫌悪しそうだけど、何も 附石が無ければ戦えないって訳じゃあ在るまい。オレだって、一応男だ。喧嘩はしないけど、きつと頑張ガンバつたら……！

ちよつと頭の中で戦闘を繰り広げていると、 砂塵さじんに混じって変なモノを見かけた。

小さな子供のような背丈の、角の生えた 小鬼こおに。

犬歯を見せ付けつつ、オレへとにじり寄って来ていた。

「やつ、やる気がっ!？」

「ぎぎっ?」

一瞬、何でこんな奴にビビってんだオレ! と自分を鼓舞こほして、咲希を地面にそつと寝かそうとする。……寝かそうとして、ここだと砂塵をマトモに喰らってしまうだろうと思い、残骸ざんがいの陰になる場所に移動して、そつと寝かした。

立ち上がると、小鬼が一匹から三匹に増えていた。……おいおい、三対一は反則だろうか?

「……来るかっ?」

拳を上げて、小鬼を牽制けんせいする。

そうだ、こいつらはある時だって、ぶつ飛ばせたじゃないか。今だって、きつとできる。……三対一となるとちよつと不利だけど……それでも、ここでオレがやらなくちゃ、咲希が危ない!

「ぎー!」

小鬼の一匹が棍棒こんぼうを持ち出し、飛び掛かってきた! 子供らしい単調な動きだったけれど、子供らしい機敏きびんさを擁ようしていて、即

座にオレとの距離を縮めてくる！

ボゴッ、と腕に鈍い衝撃が走り、オレはそれを認めると、思  
いつきり拳を振り抜いた！

重い衝撃、視界の隅で小鬼が転がっていくのが見えた。手応  
えは在った、コレで

思っている間に、別の小鬼が距離を詰め、  
懐ふところに爪の長い拳を  
突き立ててきた。嫌な感触が、腹を切り裂いたものだど悟って、オ  
レは腹に少し力を込めて、できる限りその感触を無視して小鬼に蹴  
りを放った。

また重い衝撃 サッカーボールよりも重い感触が返ってきて、  
オレはそのまま足を振り抜く！ すると、小鬼はかなり吹き飛ばさ  
れ 残骸にぶつかり、倒れると思っただが、即座に立ち直る。……  
衝撃だけで、思ったよりダメージを与えられないのだろうか。

次に背中に鈍い衝撃が走り、オレは痛みと共につんのめるっ。  
硬い物……恐らく小鬼が持つ棍棒だろう……で殴られて、痛みで  
背中を丸めて倒れ掛かったが、オレが倒れる事で標的ターゲットが咲希に  
向かないよう、歯を食い縛って痛みを堪こらえる。

「つてえな、チクショウ！」  
わざと声に出して、自分を鼓舞する！

動け！ 動いて、あの三人の小鬼を、何とかして追い払え！

近付いて来た小鬼の動きを、オレはジツと見据え 棍棒をどう  
にかして奪えないかと模索もさくする。武器さえ手に入れば、何とかなる  
かも知れない……そんな考えが浮かんだのだ。

小鬼はオレに駆け寄ると、棍棒を振り上げ 振り下ろされる前  
に、後頭部の鈍い衝撃が走った。

がつツ、と音がしてオレはまたつんのめる。今度は足が追いつか  
ず、それと頭に衝撃が走った事で、すぐに体勢を立て直せず、無様  
に転がった。眼前で火花が散って、焦点ピントが合い難く、それと同時に  
平衡感覚が取れず、立ち上がれなかった。

「つてえ……ッ」

起き上がるうとした直後に、　また後頭部に一発、それと脇腹にも一発、鈍い衝撃が走って、オレの体が壊れそうになる。立ち上がる前に、体の機能が全部破壊されそうで、オレは恐怖を覚えた。ドカバキツと、何度も何度も、殴られ蹴られ叩かれた。……だが、運がいいのか悪いのか、きつといいんだろうけど、痛みや衝撃は在るけれど、骨を砕くまでの威力は無く、ただ擦り傷、打撲、切り傷が増えていくだけだった。

痛い……抵抗する気力が失せていく……このまま死んだ方が  
思っ、体の内がカツと熱くなった。

こんな所で……こんな所で、　死んで堪るかアアアツツ！

「うっおおおおおおおおおおおッッ！」  
立ち上がりながらも足を懸命に動かして、　近くの小鬼に突進する！　それだけの気力が残っていたんだ。残っていたのに、これ以上の暴力を恐れて、オレは動けなかつたんだ。……でも、ここでオレが動かなくなってしまうば、自然と次の的になるのは、動けない状態の咲希なんだ。咲希に小鬼の牙が剥いたら　そう思うと、いても立ってもいられなくなった。

咲希はオレを助けてくれた命の恩人だ。そいつを危険な目に遭わせる事は、オレの精神に反する！

そんな事は絶対に在ってはならない！　オレは全力でこいつらを屠るっ！

突進　　寧ろ奇襲と言うべきだろうか　　に成功したオレは、小鬼の手から棍棒を奪い取り、そのまま蹴り飛ばして小鬼と距離を取る。

オレにしては少し小さめの棍棒を握り締め、三匹の小鬼を見据える。……二匹は初めから凶器を持っておらず、オレの持つ棍棒を見て「ぎー、ぎー」と唸り声を発し始めた。……警戒してるのだろうか？　やっぱり、人間が武器を持って対抗すれば、それだけで効き目が在るのだろう。

思っ、一歩前に踏み出してみると、小鬼達は一歩後じさった。

……なるほど、効き目は在るらしい。

「失せるッ！」

棍棒を振り回して怒鳴りながら小鬼に迫ると、小鬼は背中を向けてオレから距離を離そうとする。

だが、それ以上の距離は離れようとしなない。……まだ、オレに対して明確な脅威を懐いていない。もう少し、もう少しでいいから奴らを脅す材料が在れば……

思ったけど、やっぱり実力行使しかないという考えに至って、オレは棍棒を振り回しながら小鬼を追いかけた。

「待てやアアアア！」

「ぎー！」「ぎー！」「ぎいいいい！」

三匹の小鬼が逃げ惑う。オレはそれを追い掛け回して、そのまま去らないかと一定距離まで走り続ける。

小鬼が本気で逃げ出したのを見て、……脅威が去った事を確認すると、オレは取り敢えず呼吸を鎮めて、咲希が眠る場所へと帰還した。

「……人？」

に見える何かが、咲希さきの眠っている場所に立っていた。

やっと人に逢あえたと思つて安堵すると同時に、オレは駆け出していた。コレで、コレでようやくここから……

……そう思いながらも、近付いて違和に気づく。

人にしては、あの頭の物は異質じゃないか……と。

普通の人間なら、頭に角なんか生えてねえだろ、と。

「ぎー。うまそうなようせい。みーつけた」

「ツツ待てエエエエ！」

慌てて加速し、顔面に向かつて棍棒こんぼうを振り抜く！

がづツ、と鈍い音がして、鬼の顔面に

「……なんだ、おまえ？ おでのじゃま、するな」

「な、にい……！」

顔面を抉えくつたはずの棍棒は、鬼の手によって塞ふさがれた。さっきまでそこには咲希がいたはずなのに、どこに行ったのか、姿が見えなくなっていた。

まさか……まさかッ！

「食つたのか！？ 食つたのかてめえエエエエ！」

半狂乱状態だった。目の前の鬼が憎悪にくみの塊に見えて、ひたすら棍棒を振り被つては 殴り、振り被つては 殴るを繰り返した。

オレの命の恩人を！ こいつは！ 食らいやがったってのかアアアア！？

「うっわああああああおおおおおおお！」

「うるさい、じゃま」

鬼の手が振り被られ、肋骨りゅうこつが砕けるかと思うような一撃が、胸に走つた！

「げ、ふ……っ」

息が詰まって、上手く呼吸できない……っ。  
棍棒を取り落とし、咽返るような苦痛の中、喘ぎながらも鬼を睨みつける……！

憎い……あの鬼が、憎い！

殺意という名の感情が芽生えて、頭の中がグラグラと煮え返る。マトモな事を考えられない。ただ、どうにかしてあの鬼を殺さなければ、この気持ちは治まらない！

オレが……オレが《滅びの王》だと言うのなら、その力を見せてくれ！

あの鬼を殺すだけの力を、オレにツ！！

「……まだうごける。しぶとい。おまえ、きれい」

鬼は歩み寄ってくる、オレの頭を鷲掴みにして、胴体を思いつきり、殴りつける。

「げぼあアツ」

思いつきり吐瀉した。色んな物が出てきて、喉がヒリヒリして、口の中が酸っぱくなって、気分は最悪だった。腹への一撃は、きつと内臓を破壊したんじゃないかって思う程、キツかった。腹の痛みは全身を電流のように駆け巡り、オレの精神を破壊しようとした。

……悔しい。

悔しくて……何より情けなかった。オレに力が在れば……。そんな事ばかりが、頭の中にちらついた。

力が在れば。《滅びの王》の力が在れば、こんな奴……殺せるのに。殺せてしまえるのに。

鷲掴みにされたまま、腹にもう一撃、見舞わされる。

内臓が破裂しそうだった。気分が悪くて、また吐瀉した。喉が吐瀉物で擦れて、酷く痛い。口の中には、微かに鉄錆の味も滲んできた。

力が欲しい。こいつを、この鬼を、殺すだけの力が。

「しね」

もう一撃喰らうと、体は今までの暴力に耐え切れず、強張っ

ていた体が徐々に弛緩していく。

吐瀉する物も無くなつたのか、オレには見えなかつたけど、恐らく赤い物が出てきている。喉のパリパリ感と、口の中の生臭い味が、それを仄めかしている。

「しね。しね。しね。しね。しね。しね。しね。」

何度も何度も、腹が壊れるまで殴られ続け、オレの意識は一つだけに、完全に統一された。

殺してやる。

弛緩した体は動かなかつたけれど、  
気力とか、根性とか、きつとそういう気合で、腕が動いた。

「……咲希は……どこだ……？」

喉の奥から絞り出された声は、妙に低くて、そして嘔れていた。ただ、そんなの関係無い。

「咲希を……どうした……？」

驚掴みにしている鬼の腕を、オレの右手が掴む。掴んで握り潰してやろうと力を込める。

「さき？ なに、それ？ おで、ようせい、くう。ようせいくつて、ふしになる」

「……まだ、何も……して、ねえんだな……？」

ギリツ、と鬼の腕を掴む手に力が入る。

鬼はオレの頭を驚掴みにしたまま、手に力を込め始めた。

「おまえ、なにいつてる、わからない。しね。おまえ、くつてやる」

「テメエが死にやがれカスがアアアアアアアアアアアアアア！」

思いつきり力を込めて鬼の腕を握り締めると、爪を立てて何としても鬼の手から逃れようとする。

どれだけ力を込めても、鬼はうんともすんとも言わない。けれども、オレは諦めなかつた。ここで諦めたら、きつとこの鬼は、咲希を食らうに違いない！ そんな事だけは、絶対にさせない！

そこにはもう、気力しかない。意識も途絶え掛けてて、それでも咲希を守りたい一心で、力を込め続ける。

……だけど、力の差が歴然としている鬼の前では、オレの力は微々たるもので、単純に時間の問題だった。鷲掴みにしている鬼の手に力が込められていくと、ミシミシと頭蓋骨が悲鳴を上げ始め、強制的に力が殺がれていった。

体が、動かなくなっていく……こんな所で死ぬ訳にはいかないのに……ッ。

こんな奴をのさばらせておける程、オレは人間辞めてないんだ！絶対に……生かせておけない！

「しね、しね、しね、しね」

「テメエが……ッ、テメエが死ぬよ……ッ、チクシヨウがアアアア……ッッ！」

視界が白熱して、徐々に、何も見えなくなっていく……チクシヨウ……こんな所で、こんな所で……ッ。

もう体の限界がきたところで、腕も掴めなくなつて、オレの手が落ちそうになり

「しげぶッ」

不意に、水っぽい音が滴つて、鷲掴みになっていた頭が解放された。

大人程の背丈が在った鬼から解放されると、尻餅を着いて頭を押さえて倒れ込んだ。頭蓋骨に輝でも入ったような鈍痛が、心音と一緒に掻き鳴らされる。

「いつてえ……」

オレが呻いていると、オレの胸に腕を回してくる気配を感じた。

「立ちな！ 動けるなら早く逃げろ！ 死にたいのか！」  
女性の声だった。

オレはその声に促されるままに立ち上がり、ふら付きながらも腕に支えられながら鬼から距離を取った。

そのまま倒れるように転ぶと、すぐさま振り返って鬼と、そして女性の姿を捉えた。

流れるような紅紫色の髪は長く、腰にまで到達しているように、先が細い布で結われている。身長は、きつとオレよりも高い。痩せ型の体格で、ジャンパーのような物を羽織っているようだ。ズボンはジーンズのような硬めの物だ。とてもカジュアルな服装だった。

「ほら、鬼！ 手前の相手はウチだよ！ 掛かって来な！」

「ぎー……しね、しね！」

鬼の顔が、真っ赤になっている。鬼の形相……ってあいつ、まんま鬼じゃん！？ の表情をして、武器も持たずに駆け込んで来る。

対するカジュアルな女は、右手に槍を握り締め、左手は背中に吊つてある小太刀に据えられている。……奇抜な武器の組み合わせだな、なんて思った。普通、槍を使うなら槍だけだろうし、小太刀を使う二刀流ならもう一本は大太刀なんじゃないか？

鬼が凄まじい速度で接近して来たのに対し、女は冷静に槍を突き入れ、鬼の胸を貫く。それでも鬼が止まらなかったのは、単純に走り込んだ速度が速過ぎたために、情性を伴って止まれなかっただけだ。ずぶずぶ槍が喰い込んで、当然鬼の動きは鈍っていく。

それを見越して、女は素早く小太刀を鞘から抜き放つと、首を一閃、鬼の頭は地面を転がり、首から噴水のように鮮血が噴き出した！

女は小太刀を振り抜いた格好のまま鬼に背を向け、背中に吊っていた鞘に小太刀を納めると、槍を後ろ手に鬼から引き抜く。引き抜いた槍をクルリと回転させて、錫杖のように長い柄の方を地面に突き立てた。

「終わりっ」

と呟いた瞬間、鬼の体が、ずうっん、と音を立てて地面に横たわった。

すごい……としか形容できない程、鮮やかな、そして洗練された動きだった。

女はオレを見据えて、慌てた風も無く歩み寄って来る。オレはど

うりアクションを取ればいいのか分からなくて、ただ正直に一言だけ発した。

「 凄かった! 」

「へ? ……ああ、さっきの事かい? あんなの、何でも無いさつ。……それよりあんだ、この辺じゃ見かけない顔だけど……冒険者が何かかい? 」

女はオレの前にしゃがみ込むと、腰に吊っていた道具袋から医療道具を取り出し始めた。と言っても、湿布しつぷや絆創膏ばんそうこう、あとは消毒液に包帯と言った、見た事の在るような物ばかりだった。

それよりも注目を集めたのは、女の格好だった。背中だけを見ればジャンパーにジーンズという、どこにでもいるようなカジュアルな服装だったけれど、前から見ると一変する。ジャンパーのジッパ―は下ろされ、そこにはサラシを巻いただけというあられもない姿が鎮座ちんざしていた。隠してある物が大きくて、その……健全たる男であるオレには、少し刺激が強過ぎると言うか何と言うか……

とにかく、凄い格好だった。

「それにしても……あんだ、中々やってくれるじゃない? 」

「へ? 」

「素手で鬼と張り合おうなんて、とても正気せいぎの沙汰さたとは思えないね。それとも、あんだ拳闘けんとう士か何かかい? 」

「いや、そんな……そんなんじゃないです。ただ、やらないとやられてたもんだから……」

勝ち負けなんて、そこには無かったのかも知れない。ただ、追い払えればそれでいい、死ななければそれでいい……そんな甘い考えの下、オレは鬼と格闘する事に、いつの間にならっていた。

……もう、こんな事はしないって誓ったばかりの出来事に、オレは自分に自信が無くなってきた。

それでも……やれるだけの事はしたかった。きっと、やろうと思えば咲希を連れて走って逃げられたかも知れないけど……だけど、実際にはできなかった。……きつと、どこかで追いつかれるだろう

と、分かっていたからだ。そうなれば、結局こうなっていただろうから、今、鬼と戦った事に関しては、間違っていないはずだ。……多分。

「あんな奴がいると分かかって、こんな所に一人で来たのか？ ……それもまた、凄いなあ」

「あ、いや、オレ一人じゃなくて……」  
「じゃなくて？」

一つ、大事過ぎる事を忘れていた事を、かくせい覚醒するように思い出した！

「咲希！ 咲希はどこにッ！？」

「へ？ 仲間がいたのかい？」

「あつ、えつと、その……ようせい妖精なんですけど……っ。咲希っ！？ 聴こえたら返事してくれっ、咲希！」

慌てて駆けずり回ると、……がれき瓦礫の下に、まるで捨てられた人形のように微動だにしないまま横たわっている咲希を見つけた。

生きてるかどうか確認するため、その小さな顔の、これまた小さな口に耳を近付ける。息をしているか確認。……周りの砂風がうるさ過ぎて、ほとんど聴き取れない。

次に心臓が動いてるかどうか確認。人差し指をそつと咲希の胸に置く。……これまた微弱過ぎてほとんど分からない。

「……どうしよう……生きてんのかな、こいつ……」  
取り敢えず小さく揺さ振ってみる。すると、まゆ露骨に眉がひそ顰められた。

「生きてる……好かったあ……」

安堵してその場に崩れる。……今になって、戦っていた時の代償が返ってきて、全身が引き裂かれそうなほど痛み出した。

「いたたたたっ」

「おーい、無事か？」

女が駆け寄って来て、オレは回らない首を何とか動かして、しなす頷いてみせた。

女はオレと咲希を見比べ、頭を捻ひねっていた。

「あんた……妖精に憑つかれてるの？」

「憑かれてるって……こいつの事を悪く言わないでくれませんか？」

「こいつ、こう見えても、オレの命の恩人なんですよ」

「おっと、そいつは済まない。ちよっと言葉が悪かったね。許してくれよ」

「ああ、気にしないでください。えっと……」

名前を聴いていない事を思い出して女を見ると、彼女は二カツと八重歯を覗かせる笑みを浮かべて、

「ウチは八宵やよいつてんだ。獅倉八宵ししくら。そつちは？」

「あ、オレは神門練磨かむいつて言います。獅倉ししくらさんは……」

「何だい何だい？ そんな改まった言い方は止しとくれよ。八宵、でいいさ。ウチも練磨れんまつて呼ばせてもらうからね 敬語も無しだぞ？」

「あ、はい！ ……じゃなくて、おう！」

何だか、こういう人とは気が合うような気がする。

そう思って、オレは咲希を手の上に載せたまま、その場に座り込んだ。八宵も隣に腰掛ける。

「八宵はこんな所で何してたんだ？ さっきみたいな奴がいるなら、やっぱり危険じゃねえのか？」

「そりゃウチの台詞セリフだぜ？ こんな所に丸腰でいたら、絶対に死んじまうよ！ ……まさか、あんた」

ドキツとする。まさか、もう《滅びの王》である事がばれたっ！？

「《出人》でしゅかい？」

「違います違います勘違いです！ ……って、え？ ああ、そうそう、それぞれ。ここに出てきたんだよ、オレ」

「……何だか、すげー嘘臭いよ、練磨？ あんた、隠し事してんじやないだろうね？」

「とっ、とんでもない！ オレ、嘘なんか、吐かな……」

……オレのバカ。どうして、たとえこんな時でも、嘘は吐きたく

ないんだよ、オレって奴は。バカ正直って言われようが、嘘を吐く事だけは、したくないんだ。

「……まっ、いいけどね 何も、いきなり逢った相手にベラベラ喋るってのも、ヤな感じだろう？ ごめんね、ちよっと聴いてみたかっただけなんだ、気にしないでくれよ？」

「……ごめん」

「いいっていいって …… まあその話は措いとくとして……あんな、泊まる所は決まってるのかい？ ウチなら、宿を貸せるけど？」  
「マジで！？ それ、すげえ助かるんだけど！ ……でも、いいのか？ こんな正体不明の奴を泊めるなんて……」

「まっ、気にしないよ、ウチは。……それにその分じゃ、ここで野垂れ死にするのが眼に浮かぶよ。寝覚めが悪いのは嫌だしね」

……オレも、ちよっと自分の末路が浮かんできて、慌てて頭を振って掻き消した。

やっぱり、ここは素直に八宵の厚意に甘えるべきだ。

「じゃあ、頼んでもいいか、八宵？」

「全然大丈夫さっ 日も暮れてきた事だし、動けそうなら行こうか？ 難しいなら、背負ってやるけど……」

「大丈夫ですッ。ちゃんと歩けますっつて、ほら！」

オレは立ち上がって元気な所を見せつけようとして飛び跳ねた。

が、瞬間、体に激痛が走って、そのまま蹲る。

「……ま、頑張カンバんな。どうしてもってんなら、ウチは構わないぜっ？」

「いや……行くって行くよ行きますさ！」

何より嫌なのは、女性に、それもそう歳の離れていない女の人に背負われるという事だ。そんな恥ずかしい思いをしたくなかった。

軽過ぎる荷物である咲希を両手で抱えると、オレは八宵の後を追って歩き始めた。

……正直、体が先にぶっ壊れるだろうな、と予測できていて、でもそれがいつ起こるのか分からなくて、怖かった。

「あー！ お姉ちゃんが帰って来たよ〜〜！」

「おう！ たいま、皆！」

八宵を追って辿り着いたのは、荒廃した町の一角に在る場所だった。教会らしく、入り口から見て上方に十字架が掲げられており、中に入ってみると天井高くにステンドグラスが嵌められていた。……だけど、どれも割れていたり輝が入っていたりで、壊れていない物を数えた方が早そうだった。

「ここは……？」

「孤児院さ」

八宵はそう言っつて、何十人と群がってくる子供達の相手をしていゑる。……皆、年端もいかない子ばかりで、オレよりも年上の奴は一人もいそくに無かった。

「こんなに……？」

「一度戦争が起これば、この有様さ。……皆、壊れちまう。国も、

町も、人も、心も、絆も、みーんな……」

「……」

寂しそうな顔をしていたからだろうか、子供の一人がオレに駆け寄ってきた。男の子のようで、子供らしい純真な瞳でオレを見つめる。

「おにーちゃん、こわい人にあつたの？」

「え？ いや、そんなんじゃないよ」

「でも、ここならあぜんだよ。おにーちゃんも、きっとよくなるよー！」

「あ……」

この子はこの子で、オレを励まそうとしているのだろうか？

……その心遣いは、何だか胸に熱いものを感じさせる。とても……温かな気持ちになれる。

「……ありがとな」

「へへ」

頭を撫でてやると猫のように笑って、また八宵の方へ駆けて行った。

「お姉ちゃんっ、今度はいつまでいられるのお〜?」

「おねーちゃんっ、あそぼ、あそぼ!」

「あの人、だあれ?」

「ほらほら、質問は一人ずつだよ。そんなに一遍に言われても応えられないだろ? 順番を守りな、順番を!」

わーわーきゃーきゃー喚き合つて、子供達はとても楽しそうだ。

……オレは自然と頬を綻ばせていたけれど、彼らが皆、孤児だと言う事を考えると、笑みが引き攣つたような気がした。

戦争。オレは体験した事は無いけれど、体験したら彼らの気持ちも分かるのだろうか? ……恐らく、答は否だ。戦争に遭つたとしても、こいつらと一緒にの気持ちにはなれないと思う。分かるかも知れない、とは言えるけど、きっと完全には分かち合う事はできないだろうと、悲しい事を考えていた。

「練習は、もちろん何も食べてないんだろう? どうせだからご馳走するよ?」

「ええッ!? そんな、そこまで面倒掛けれないって……!」慌てて手を振るオレ。

「なあに、心配は要らないよ。……ま、ウチの料理に期待されても困るんだけどね」苦笑する八宵。

「八宵が作るのか?」ちよつと驚き気味にオレ。

「……何さ? ウチが作つたら悪いってのかい?」オレの言葉を挑発と受け取つたらしい八宵。

「んな事言つてないって! ……でも、それなら食べてみたいな。八宵の料理つて奴をさ」

八宵は一瞬呆気に取りられた顔をしたが、すぐに挑戦的な笑みに変わった。

「言ってくれるじゃないか？　なら、ウチの腕前って奴を見せてやるよ！」

「楽しみだぜ！」

そんな事を言い合っていると、子供達が八宵から離れて、オレに駆け寄ってくる。

「お姉ちゃんのめしはうまいんだぞ！」

「おれも、おねーちゃんのめしは好きなんだ」

「あたし、お姉ちゃんの作るごはんなら、何でも食べられるよ！」

「へえ、本当に楽しみじゃん？」

視線を八宵に向けると、八宵は照れ臭そうに笑ってから、奥へと消えていった。

「おにーちゃんは、おねーちゃんとけっこんするの？」

「はあ！？　何だ、いきなり突然？」

「だって、おねーちゃん、おにーちゃんみたいな人、つれてくるの初めてだもん」

それでいきなり結婚の話か……つか、あり得ないだろ！？　今、逢ったばかりなのに。

そう思っただけで、八宵と入れ違いに、お婆さんが入ってきた。

歳の頃は六十を過ぎた位だと思っ。背中を丸めた愛嬌の在る小さな姿に、妙に綻びの多い服を着ている。杖が必要なんじゃないかと思っただけで、腰に手を当てるだけで大丈夫らしい。

「あんたが……八宵の連れて来た男かい」

「あ、どうも。今日はお世話になります。神門練磨って言います！」

「おお、礼儀はなっとなるようじゃの。ワシは須郷きぬ、じゃ。この子らの婆やをしておるよ」

きぬさんは物腰柔らかに告げると、並んでいる長椅子の一つに、「よっこらしよ」と掛け声を発して腰掛けた。

「……あの、聞いてもいいですか？」

「何じゃ？」

「戦争つて……ここで、何が遭ったんですか？」

「聴いちやいけない事だったのかも知れない、とは分かっていた。

……けれど、オレの好奇心がそれを押しやり、口が勝手に声を飛ばしていた。」

それでも聴いてみたい。ここで昔、何が遭ったのか……

そしてその原因は、何だったのか……

「……あんたは、この世界の者じゃないのじゃろっ？」

「はい。《出人》です」

「……ここには昔、大きな国が在ったのじゃよ……帝国という名の、大きな国がのう」

オレは黙って先を促す。立ってるのが疲れたから、きぬさんの隣に腰掛けつつ、話に耳を傾ける。

「帝王が何を思ったか、突然宣ったのじゃよ。『王国を滅ぼせ』……

と。正気の沙汰じゃなかつたんじゃろっな。王国は、帝国に並ぶ大国……そこに突然、兵を攻め入らせおった。……大きな戦争になったわい。じゃが、王国は堅牢な防壁《津波の長城》のおかげで、帝国兵の侵攻をほとんど喰い止めよつた。そこからじゃ、王国の一方的な殺戮劇が始まったのはのう……」

……攻め入ってきた帝国に対し、王国は正当防衛という名目の下、帝国領土を侵犯し、あまつさえ逆に攻め滅ぼそうとした。丁度その頃、帝国はほぼ全勢力を王国に出陣させていたため、防御が間に合わず、王国の一方的な破壊と暴力によって、領土を焦土と化した……

……その時、帝王ならびに帝国の有力者は次々と惨殺され、国民もほとんどもが虐殺され、残ったのは破壊し尽くされて荒廃した土地と、国に見放された子供達だけだった……。

「終戦を唱えたのは、王国の国王じゃつたよ。もう二度と王国には逆らえないように、帝国を完全に葬り去り、今年で二十周年を迎えるそうじゃないか。……ワシは、もう二度とそんな事を起こしてもらいたくない。こうして生きてるだけでも、価値は在るのだからの

う

「……」

……帝国、そして王国の影が、少しだけ輪郭を伴ってきたような気がした。

鷹定が言つとおり、《滅びの王》はどの国からも狙われている。

それは何も、オレの命を狙ってる奴らばかりじゃない。中には、オレの《滅びの王》としての力を悪用しようとしている連中だっているだろう。そいつらはきっと、復讐のため、私怨のために、《滅びの王》の力を欲している。国を滅ぼしたり、王様を殺したり、最悪、世界を滅ぼしたり……

全ては推測に過ぎないけれど、中にはそう言った連中もいる事を肝に銘じておくべきだと、悟った。

オレの《滅びの王》としての力は、未だにどんな力なのか、全然分からない。ただ、世界を滅ぼせるだけの力が在ったとしても、オレは生きていく限り、世界を滅ぼそうとは思わない。力も、悪用されないようにする。オレが幾ら《滅びの王》だと言っても、それを証明する力が無いのは、自分でも分かっているのだ、きっと何の問題も無く、普通に生きていける。

……普通？

オレは、普通に生きたいと思ってるのか？　それは断じて否

！　オレは、『凄い』人生を送りたいんだ！　だからこそ、《滅びの王》として、《滅びの王》の力を使わずに……って、何か矛盾が生じてるようない……

よく分からなくなってきたところで、八宵の声が飛んできた。

「さあ皆、召し上がれ！」

『おおー！』と子供達の合唱。

オレも腰を浮かして八宵の姿を捉えようと、きぬさんに頭を下げて行こうとした。

「……あんたも、戦争だけは起こさないようにしとくれよ」

そんな言葉が聴こえて、オレは一瞬ドキッとしたけれど、ちゃん

と振り返って頷うなずいてみせた。

「戦争なんか、起こして堪たまるかよっ。……絶対に、起こさせない」

「……頼もしい限りじゃわい」

きぬさんが優しい顔で微笑を浮かべたので、オレは安心できた。

男に二言は無い。絶対に、戦争なんか起こして堪るかッ！

「んめーな、これ！」

オレは出てきた料理に舌鼓したつひを打った。

釜炊かまたきご飯には鶏肉や山菜などの野菜が混ぜ込んであつて、色んな食感を楽しめた。

味噌汁はジャガイモや、これまた山菜などが入っていて、何より絶妙の味噌加減だった。塩辛さも充分で、味気無い訳でもしよっぱい訳でもない。ちょうど好い加減なのだ。

野菜の盛り合わせは例れいに漏もれる事無く山菜！ 山菜のオンパレードだった！

「そうかい？ あんたの口に合つて好かつたよ」

八宵やよいも満更まんびりじやないようで、食べながら笑顔を浮かべている。

これを言うところがありがたみが無くなりそうだけど……オレ、朝から何も食べてないから、何を食べても美味しく感じるのかも知れないとか考えて、慌あわてて打ち消した。そんな事無い！ この料理は絶対に美味いんだ！ 自分の考えを完全に否定した。

これで口の中が切れてなければ最高だったんだけどな。……痛くて沁しみるぜ。……あの鬼め、それと黒くろ一いちも赦ゆるし難いな、本気で。

「ねーねーおにーちゃん。このようせいさん、まだおきかないの？」  
テーブルに寝かされている咲希咲希を見つめて、男の子がオレを上目遣いに見つめる。

オレはまず口内の料理を飲み込んでから、咲希の頭を人差し指で撫なでた。

「そうだな、今日はちょっと疲れちゃってるんだよ、こいつ」

「どうして？」

「……色々、頑張ガンバってくれたんだよ」

言つてから、咲希の寝顔を見つめてみる。

……また、起きて憎まれ口を叩いてほしい。いや、オレにそっ

うマゾっ気が在る訳じゃないんだけど、眠っているよりは、オレの前で元気そうに喋しゃべっていてくれた方がマシだって訳で……それに、静かな咲希も、これはこれで可愛げが在るし……

「……」  
そう言えば、風の便りはどうして使っちゃいけないんだろう？ オレがここに一人でいるのは、ちよつと不味まずいんじゃないか？ 仮にも《滅びの王》なんだから……と考えていて、気づいた。

オレ、もしかして、ここにいたら《滅びの王》って気づかれない……？

一度は死んだ身だ、誰も探しに来ないだろう。

世間的には今、《滅びの王》は死んだ事になっている。……はずだ。それを思えば、やっぱりここで正体を明かさず、平凡に暮らす事も、無理な話ではないんだ。……八宵も、きぬさんも、いい人だ。きつと、オレが《滅びの王》だって教えなかったら、このまま普通に……

まただ。

またオレは、『普通』に生きようと考えている。

いけない事じゃない。でもオレの意志に反するそれは、オレはきつと望んでるんじゃない。楽しくて楽な方へと逃げようとしているだけなんだと思う。

《滅びの王》として生きていけば、絶対に命を狙ねらわれる。いつ殺されたっておかしくない生活を余儀無くされる。それは……普通じゃない以前に、やっぱり怖い。現に、一度は殺されたんだ。あんな目に遭あうなら、正体を明かさずにここで暮らすのも……と考えてもみただけど、オレはどうしても納得できなかった。

逃げ隠れるような生活に、何の意味が在る？ オレは、そんな奴になりたいんじゃない、そんな男になるために今まで生きてきたんじゃない！

確かに、ここで『普通』に暮らす考えが間違ってるとは言えない。そういう生き方を選んだって、文句を言われる筋合いなんて無いだ

るう。……でも、オレはそれを望まない。オレの望んだ生き方ってのは、『普通』なんかじゃない。『凄い』なんだ。

逃げ続けるのも、それはそれで『凄い』生き方かも知れない。……だけど、オレは敢えて戦う道を選ぶ。……何度殺され掛けても、一度選んだ道に簡単に変えられない。変えたくない。

オレはオレを貫き通したい。

「にーちゃんは、コレからここにいてくれるんでしょう？」

「へ？」

いきなり現実の世界（つて、ここ、夢の中だつて忘れそうになるな……）に呼び戻されて、オレはハツとした。慌ててオレに話し掛けてきた男の子に視線を向ける。

「オレが、……何だつて？」

「おねーちゃんといっしょにいてくれるんだろ？」

男の子の瞳は、清浄無垢くわくわくそのものだった。真まつ直すぐ目の前に在る『ホンモノ』だけを見据えてる。

……オレの考えなんて、全部見透かされてるんじゃないかって思える程、透き通った眼差まなはしだった。

「いや……オレは、ずっとはいられないんだ」

「ええ……？ どうして？」

男の子の不満そうな眼差しを受けて、オレはちゃんと自分の気持ちに正直になつて、素直に応える。

小さい子に嘘を吐けるはずが無かった。ありのままのオレを応える。それが、この真まつ直すぐな眼差しへの対応だ。

「オレは……オレには、やらなくちゃならない事が在るんだ」

「やらなくちゃならないこと？ つて？」

「それは、オレにもまだ分からないんだ。……でも近い将来、オレはそれをしなくちゃならない。……それが、どうなる結果を齎もたらそうとも」

ちよつと難しかったかな、と思つて苦笑すると、男の子は瞳を爛らん々と輝かせていた。何故か、隣に座っている女の子も、いや、よく

見ると大きな食卓に着いてる皆がオレを見ている!?

「にーちゃん、かつけー!」

「おにーちゃん、すごいねー」

「どんなことするんだろー」

「気になるうー」

「……あんたが、そんな大層な考えを持つてるなんてね。その割には、体が追いついてなかったみたいだけど?」

八宵が後半、企たくらみ笑いを浮かべつつ告げるのを見て、オレはちょっと赤くなる。

「だっ、だつてよ、そんな簡単にいく訳じゃ……!」

「ま、頑張んな。ウチは応援してるよ? やりたいようにやれば、人生楽しいってもんサ」

「お、おう……」  
取り敢えず飯を掻かっ食らって腹に収めると、今度は子供達の相手をさせられた。

食後の運動を兼ねて教会の中を走り回っていると、楽しくなって久し振りに、はしゃぎ回ったような気がする。……童どうしん心に帰るってこの事だな。楽し過ぎて我を忘れて時間が過ぎ去っていった。

「ほーら皆、寝る時間だよ! 明日も朝から忙しいんだから、さっさと寝な!」

八宵が怒声一喝いっかつ、子供達はきゃーきゃー声を上げながら自分の寢床へと走っていく。……どうやら、教会に在る個室が、そのまま子供達の寢室となっているようだった。

オレはようやく解放された安堵感と、昼間ボロボロになっていた上に走り回った挙句あげく、笑い過ぎた後の虚脱きょだつ感に襲われ、しばらく動けなかった。今までで一番疲れた気がする……

「ご苦労さん! あんた、子供って好きなのかい?」

「ん〜? ……嫌いじゃねえな。ああやって、何も考えずに走り回れたのって久し振りでさ。オレも楽しかったし。……これで痛みが無けりゃ、最高だったよ」

……最近、走る度に嫌な目に遭ってるからだろう、そのトラウマが少しでも消えてくれれば、と思っただが、今日は特に意識に上る事も無くて、安心した。……てか、この世界に来てから走る機会がすげー増えた気がする……。

こりやちよつと、肉体改造も視野に入れとくべきか……？

「まあ、何はともあれ、助かったよ。あいつら、いつもウチや婆様ばあさまを困らせてたからさあ」

「まあ、そんな感じだったな。やっぱり、子供は子供らしく、遠慮も配慮も欠片カケラも無いのが、逆にいいのかもな。ああいうの、嫌いじゃないぜ、オレ」

「そう言ってもらえると助かるよ。はい、これ。焙じ茶ほうじ茶」

「あ、ども」

熱くなったカップを受け取ると、左右の手で持ち直しつつ、口に含む。サッパリしていて、気持ちが悪く落ち着く。

静かになった教会の本堂で、オレと八宵は静かに茶を啜すすった。

……過ぎ去った時間が、どれだけ長いのか、よく分からない。あれだけはしゃいでいると、あつと言う間に時間が経って、現に今も夜が更ふけて深夜と呼べる時間帯だ。教会には小さな燭台しよくたいの灯りのみで、辺りには鈍い冷たさを宿した闇やみが蟠わたかまっている。

外では虫の鳴き声が響いていた。

「……応えられないなら、応えなくていいけどさ。……一つ、聴かせてくれないかい？」

「……」

「あんた……本当は何者なんだい？ 本当に……ただの《出人でいじん》なのか？」

それは……単純にオレが《出人》ではないんじゃないかという疑念だけじゃなくて、それ以外にも色んな疑惑が込められているような、奥歯に物が挟まったような言い方だった。

……どう応えればいいのか、分からない。だけど、オレの信条が嘘を吐く事だけは絶対にしてはならないと叫んでる。それだけは、

肝きもに銘めいじている。

「……話すと、きつと八宵を巻き込みまうよ。……これは、オレの問題だから……」

「そっか……残念だね」

明確な拒絶を返されても、八宵は然程さほどの落胆を見せなかった。予測していたのかも知れない。それとも、オレの考え過ぎか……。

茶を啜ると、まるで心の中が洗われるようだった。……そんなに汚くなった自覚は無いけどな。

「あの妖精は、どこで？」

咲希を見たまま、八宵はオレを見ずに尋ねた。

オレはカップを抱えたまま振り返って、未だに昏々こんこんと眠り続けている、どこぞの姫君みたいな妖精を見やる。……寝顔は本当に掛け値無しに可愛いんだけどな。

「えつと……《不迷まよわずの森》って分かるか？」

「随分ずいぶんと遠い所だねえ……そんな所から、ここまで来たのかい？  
ちよつと見直したよ」

まあ……雪花せっかに運んでもらったり、後は攫さらわれたりで飛ばされたりで、自分で歩いた感覚なんてほとんど無いんだけどな。

結局、オレが自分の足で歩いたと言えば、《不迷の森》の中や町の中だけだったりするんじゃないだろうか。……情けない。ちよつと自分の甘さに反吐へどを吐きそうになる。

「……ここまで、その妖精と二人つきりかい？」

「いや……きつと、転送石か何かのせいだと思っ……」と言っのは、あの黒一が何を使ったか分からないからだ。

「ふうん？ ま、無理には聴かないよ。……話は変わるけど、これからの予定は決まってるのかい？」

茶を飲み干して、八宵に振り返ると、命令を待ち侘わびている仔犬のような顔をしていて、妙に可愛いと感じてしまった。

……オレよりも年上なのに。

「えつと……実は、決まってるないんだ。そいつ……咲希って言うん

だけどな……そいつが起きるまで、ここにいさせてもらってもいいか？　あまり、そいつの言い分も無しに移動したくないんだ」

「ああ、ウチらは構わないよ。寧ろ大歓迎サ！　あいつらもきつと喜ぶよ」

言つて八重歯を覗かせて顔を綻はらばせる八宵。……やっぱり、笑つてしていると女の子は可愛く映るモノなんだろうか。

「じゃあ、明日もここに寝泊りするんだね？」

「そうさせてもらうぜっ。……って、いいのか？」

「あいよ！　なら……明日はちよっくら付き合ってもらおうかね。

ウチも久々にここに戻つて来たんだ、ちよつと婆様に孝行ここうしたいんだよ」

それを聴いて、質問してはならない事だろうと思つたにも拘からず、言葉がオレの意志を無視して飛び出した。

「八宵も……孤児だった、のか……？」

「そうだよ」

即答。

それが逆に、拒絶の反応に思えて、オレは慌てて謝つた。

「ごめっ」

「？　何を謝つてんだい？　もしかして、気遣つてくれてるの？」

あはは！　ウチは気にしちやいないよっ。……ウチの家族は、

ここにいる皆がそうなんだ。本当の親とか、そんなの関係無い。ここに居る皆が、ホンモノさ」

「……」

凄いな、と思つた。

今のオレが、母さんや父さんを失つたら、きつところはなれない。悲しくて、切なくて、もう何も手が付かなくなると思う。……喪失

感や虚脱感おは、一度でも抜け出せなくなる所まで墮おちれば、這はい上がるのは難しいと思う。色々と理由をこじつけて、無気力になつて、

そのまま……多分、現実の世界にいながら、魂たましいが抜けてしまつたろう。

でも、八宵は違う。事実を受け止め、それでも前を向いて突き進んでる……。それは生半可な覚悟じゃ無理だろう。親という、自分を無償で愛してくれる人がいないんだ、それだけで人生つてのは大きく変わると思う。……なのに、八宵は頑張つて前を向いている。オレはそこが、凄いと思つたんだ。

「そろそろ寝なよ。疲れてるんだろ？ 布団は用意してあるから。付いて来なっ」

本堂を後にすると、奥まった部屋の一つに案内され、入つてみると確かに布団が一つだけ。

「オレ一人にこんな……オレ、さっきの所で寝るよっ」

「ダメダメ！ 客人にそんな事できるかい！ あんたはここで寝るの！ 客人なんだから、少しは胸張りな！ 遠慮なんてされたら、こつちが困つちまうよっ」

そう言われたら、切り返せない。だけど……客人が胸張れるか、普通？

オレは渋々その部屋一つを貸しきつて、今日一日を終える事にした。

部屋の隅に咲希を寝かせて、小さな布団……と言つか、これは三角巾だな、間違いなく。……まあ、咲希のような妖精のための布団なんて在るはず無いか。

部屋には燭台が一つだけ備えられ、その小さな灯りだけの闇の中、オレは静かに眠りに就こうとした。

「……これから、どうなるんだろつな、オレ……」

すぐにでも 風の便り を使つて崇華に、もちろん鷹定や麗子さん、ミヤリにも連絡を入れて、迎えに来てもらいたい。無理なら、無事だけでも知らせたい。できる事なら合流して、そのまま王国へ向かつて、鷹定の問題を解決させて、それから……

それから……オレはどうするんだろつ？

《滅びの王》として生きるんだから、やっぱり世界を滅ぼすのか？

……そんなの、頼まれてもするもんか！ この案は却下だな。

それじゃあ世界を滅ぼさないようにするために自殺でも図る？

……さつきと同じで頼まれてもする訳が無い。問答無用で却下だ。

《滅びの王》という身分を隠して陰に生きる？ ……今の中では一番ベストだけれど、オレはそんな風にこそと生きるつもりは無い！ 敢え無く却下だ。

……つて、どの案も通らないんじゃないか、決めようが無いじゃんか。

「……でも、オレが決めなきゃ、意味ねーよなあー……」

鷹定の問題が済んでしまえば、もしかしたらそれでお払い箱になる事だつて、充分に考え得る訳だけ……オレは鷹定を信じたい。

……それは甘えかも知れない。鷹定が絶対に裏切らない保証なんてどこにも無いのに、オレは自分の都合のいいようにモノを考えて、都合のいい考えに固執して、現状に甘えてる。

こんな事だから、何度も殺されかかっているのに、分かっているのに、どうしてもその考えを捨てきれない。……これこそが、オレの根底にしがみ付いている『甘え』なのかも知れない。

「せめて……オレにどんな力が在るのか位分かれば、ちよつとは状況も変わるかも知れねえのになあ……」

《滅びの王》という漠然とした存在だけを挙げられても、オレにはどんな力が在るのか分からないし、役割もやっぱり大雑把にしか分からなくて、世界をどうやって滅ぼすのかも、いつ滅ぼすのかも、何故滅ぼすのかも、何にも分からないのだ。そんな状態で考えても、仕方ないような気がする。

分からない事だらけで、オレは悩みつつ、……少しずつ頭が機能を停止していく感覚を認めた。

……オレが何をするかなんて、オレが決める。それだけは絶対だ。予言で何と言われようが、オレは世界なんかを滅ぼすつもりは無いし、……かと言って救う気も、実は無い。

ただ……『凄い』人生が送られればそれで……いい……ん……だ……

13頁 神門練磨の書13

『孤兒院』

(後書き)

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます。――(・)――  
今章はこれにて終幕と相成ります。  
次章をお楽しみに

……時計を見ると、時刻はすっかり昼になっていた。  
寝惚け眼で居間に向かってみると、置手紙が一つ。

「ん……?」

見てみると、……母さんは買い物に出掛けたらしい。夕方には帰るって書いてあるけど……母さんの事だ、寄り道を含めると夕飯ギリギリ間に合う頃に帰ってくるだろう。

オレは目覚ましのために、キンキンに冷えた緑茶をコップ一杯飲んで、「うん」と背伸びした。

「さて、と……今日はどうすっかな」

現実の世界と夢の世界の分別が付かなくなって来てるのか、ここが現実の世界だって分かっていても、向こうの世界も現実のようにはか思えないので、二つの境界が薄くなってきているような気がする。頭は覚めてきたけれど、やっぱりシャワー位は浴びところかな、と思って脱衣所へ向かう。

今度は風呂場を覗き込んで、誰もいない事を確認してから服を脱ぎ、着替えを置いておく。

風呂場に入って、シャワーのコックを捻ると、始めは生温かった水が、徐々に熱いお湯に変わり、オレの体から眠気を洗い落としていく。

「あ……」

気持ちいい。

眠っても向こうの世界で冒険しているものだから、疲れがちゃんと取れているのか不思議なのだが、何故か朝起きても倦怠感こそ在れ、引き摺るような疲労は感じない。ちゃんと寝た分だけ体力は回復してるように感じられる。

やっぱり、夢の世界は夢の世界って事か。現実の世界と一緒にたにするべきじゃないのかも知れない。

「おつはよう、練磨！」

「ッッ」

「思わず体が震え上がってしまった。

狭い浴室の中から声が聴こえてきた。怯えながら声の主を探すと、蓋が閉めてあった浴槽から崇華が顔を出していた。

「おまつ……！？ 何でここにいるんだ、てめえ！」

「えう？ 練磨のおばさんが、『ここに隠れてたら、練磨を出し抜けるわよ』って言ったから……」

あの鬼母……！

「つか、オレを出し抜いてどうするつもりなんだ、おまえ……？」

「え？ えとえと……え、えへへ？」

「えへへ？ じゃねえ！ 笑う所じゃねえし意味不明だしっーか出てけ！」

取り敢えず股間だけは隠して、崇華の追放を命じる。

崇華は何故かキョトンとして、「えう？」と変な声を上げた。

「てめえはオレの裸体をそんなに見たいかッ！？」半絶叫でオレ。

「えとえと、できる事なら……」恥ずかしそうに崇華。

「見たいのかよッ！？ ダメだ！ ダメだったらダメだ！ 早く出て行けエエエ！」絶叫するオレ。

「う、うん、分かったよう……そんなに怒らなくても……」シユンとする崇華。

「あのな……自分の身になって考えてみるよ？ オレに裸を見られたいか？」呆れ気味にオレ。

「……練磨が、見たいって言うなら……」頬をほんのりと赤らめて崇華。

「見られてもいいのかよッ！？ い、いや、ダメだろ！？ ダメなんだ！ っー訳で早く出るんだ！ いつまで見てんだチクシヨオオオオオオオオ！」

そんな問答が続いて崇華が立ち上がると、

一糸も纏われない、あられもない姿がそこに在った。

「ストオオオオオオツツツツツ！ 何でおまえも服着てねえんだよ!?」叫び過ぎて声が嘎<sup>か</sup>れてきたオレ。

「練磨。お風呂に入る時は、服は脱がないといけないんだよ?」物分りの悪い生徒を見る目で、崇華。

「んな常識分かつてるから! 何で覗き見るだけなのにおまえも服を脱いでんだよツ!?」おまえの常識は明らかにおかしい! と絶叫に疲れてきたオレ……。

「だってだって練磨、わたしが練磨の裸を見るなら、練磨もわたしの裸を見たいかな、って……」やっぱり頬を桜色に染める崇華。

「展開的にあり得ないだろツ!? 何おかしな交換条件持ち出してんだツ!?」またも絶叫するオレ。

「練磨はわたしの裸、見たくないの……?」ちょっと寂しげな崇華。「い、いや、そりゃ見たいけど……じゃなくて! そうじゃなくて! 違うだろツ!? 見たくても見ちゃダメだろツ!?」自分の頭が壊れてきた事を自覚し始めるオレ。

「練磨。我慢は好くないよう?」開き直り気味に崇華。

「てめえは少しは遠慮とか常識を守れエエエエ!」  
取り敢えずこのままだとオレの理性が完全に崩落しそうだったから、オレの方が先に退出してやった。

全く……幾<sup>いく</sup>ら幼馴染とは言え、この歳になつてまで一緒に風呂に入ろつだなんて言い出したら、ただのヘンタイだぞ……分かってるのか、あいつ……? ……いや、きつと分かってないんだろつな、うん。

早々に服を着替え、脱衣所を出ようとした瞬間、浴室の戸がガラリと開く。

「待つてよう、練磨! 置いてかないで!」寂しそうに崇華。

「うわっバカッ! オレが出てから出てこいよ! 完全に上から下まで見えちまうだろ!」慌てて自分の目に手を当てるオレ。ちやっかり隙間から崇華が見えてるけど。

「えう……えとえと、練磨なら、……いいよ?」再び紅潮する崇華。

「何がだよッ!? ちゃんと着替えてから出てこいよッ!」  
脱衣所から飛び出すと、居間に入って心を静める。

……それにしても……やっぱり、あいつももう十五歳だもんな。  
体も成長するよな……。

見ないように見ないようにと思っても、オレの煩惱はどうしても、あんな所やそんな所に視線が行ってしまう訳で……ちょっと得した気分。　って、ヘンタイかオレは!

まあ、オレも健全な十五歳の男の子であるから、こういう事が在ればどうしても興奮してしまう訳で……

しばらくオレは悶々としたまま、動けずにいた……。

「んもう、練磨つたらすぐに逃げ出しちゃうんだもん」

居間に入ってきた崇華は、今日も色の控えめな地味な服を着ていた。崇華に派手な服は似合わないだろうと分かっているけれど、毎日地味な服を着ていると、もしかして服装には無頓着なのかな、と思ってしまう。決して地味な服が似合っていないとか言う訳じゃないけれど、たまには別の趣向の服を着て来ないかな、とか考えてしまう。煩惱だ、煩惱。さっきの裸の件で、頭の中の理性機関が瓦解してしまっているようだ。復元を早急にせねば。

「あのな……あんな時、間違いが起こったらどうするつもりなんだよ、おまえは? 一応おまえ、女なんだぜ? 少しは警戒しろよ……」色々疲れてグツタリなオレ。

「あはは、何か練磨、お爺さんっぽいよう」「ケラケラ笑い出す崇華。  
「お爺さん言わない! ……それに今、ここにいるのはオレと崇華だけなんだぜ? それだけでも間違いが起こりそうだったのに……」  
母さんにも困ったモノだ。

……いや、それだけオレは信用されてるって事か。それならちよつと納得。　って、納得も何も、そんな事でホツとする自分と言うのも悲しいモノがあるな。

「……えとえと、間違いつて、何なのかなあ?」

「へ？」

「練磨は、どんな間違いが起こると思ってるの、……かな？」

……メチャクチャ応え辛い質問が来たな……

間違いってのはつまりその……なんだ。

「まあ……何でもない。気にするな！」

結論。説明できるかつ！

「え〜？ 気にするよう〜。練磨と二人つきりになったら、何が起こるのかな？ とっても気になる。うん、気になる」猫のような上目遣いで崇華。

「……それはだな。誤って母さんが買ってきたカップラーメンを食べてしまう事だ！」ズバリ指差して叫ぶオレ。

「ええ！？ おばさんのカップラーメンを食べる事が、間違い……？？ よく分からないよう？」本気で首を傾げる崇華。

「オレも崇華も料理はできないだろ？ そこで、カップラーメンを食べたくなる。という事は、たくさん在るカップラーメンの中に在る母さんの好物も食べてしまう……それが間違いなのだッ！ 母さんがいないから、間違えて母さんの好みのカップラーメンを食べる事が発生するから、今の状態は危険なんだッ！」言い切るオレ。

「ふわあ〜〜そんな所まで考えてるんだね、練磨は！ すごいなあ〜……」とても感動してる崇華。

まあ強<sup>あなが</sup>ち間違いつて訳でも無いんだけどな。母さんが大切に保存していたカップラーメンを食べて怒られるのはオレだし。

オレが適当な事を言っでごまかせたと感じて、今日はゲームでもしようかと崇華に勧める時、

「……意気地無し」

「え？」

「うつん、何でもないよう

そうだ！ 練磨、向こうの世界

の話なんだけど……本当に、死んじゃったの……？」

そう言えば、崇華に 風の便り を送っていないから、オレが生きてるか死んでるか分からない状態か。

……ん？ でも何でそんな『死んじやったの？』って具体的に分かってるんだ？

オレは少し不思議になって崇華に視線を向ける。

「オレが死んだの、知ってるのか？」

「うん……あのねあのね、風の便りを一度使った人が死ぬとね、その人と風の便りをした相手全員に死亡通知が届くの。だからわたしの所にも、届いたの……」

……て事は、やっぱりあの世界でオレは、死んだ事になってるのか。

恐らく黒一も、オレを殺した張本人だから分かりきってる事だろうし、死亡通知の届く相手……崇華だけじゃなく、一度ならず風の便りを使った鷹定にも伝わっているはずだ。……そうなれば、オレはあの世界では亡き者……《滅びの王》は死んだと偽装できるつまり、オレが狙われる事は無くなる。

願っても無い事だろう？ もう命も狙われる心配は無いんだ。これから、平和に……『普通』に暮らしていける。危惧する事が何も無くなるんだから。

……そんな人生の、何が面白ってんだ？

「……練磨がいなくなった世界なんて、わたし、悲しいよう。……だからね、今、ミヤリと葛生さんの三人で弔いに……」

「来るのか？」

「へ？ う、うん……だってだって、練磨、死んだままになってるでしょ……？ そんなの、わたし、もつと嫌だもん……」

「……」

言いたかった。オレは向こうの世界でも、ピンピンしてる！ って、大声で叫びたかった。……だけど、考え直した。言うのは、後でもいいかな、と。

それは、《滅びの王》が生きてる事をごまかすためじゃない。……結果としてそうなるけど、オレの目的はそこには無い。

鷹定もミヤリもオレを弔いに来る……つまり、あの場所まで来る



「よかつ、うつ、好かつた、よう……っ」「しゃくり上げる崇華。

「崇華？」思わず、動きが止まるオレ。

「うわあああああああんっっ」

オレの胸に頭をめり込ませて、崇華が泣きじゃくり始めた。

数瞬、呆気にとられたけど、……ようやくオレは、自分の吐いた嘘がどれだけ崇華の心を傷付けていたのか悟って、本当に申し訳なくなつた。

「ごめんな、崇華……」

「ひっ、ううう……っぐ、うわ、わあああああつっ」

……ここまで女の子に泣かれて、自分の命の重みをようやく悟れるなんて……何だか、自分がとても惨めみじで、滑稽こっけいに思えた。

オレは《滅びの王》である以前に、『神門しんもん練磨』なんだって事を、今とても感じる事ができた。

崇華の頭を撫でながらしばらく胸を貸していると、嗚咽が小さく  
なつて、涙を啜る音だけが聴こえるようになった。

「……落ち着いたか？」

「うん……ごめんね、ごめんね……」

崇華が顔を離れたのを見て、オレは無言でティッシュの箱を押し  
付けてやった。

「涙、出てるぞ」

「うん……ありがと……」

ずびびー！ と涙をかむと、崇華はようやく泣き腫らした顔で  
オレの顔を見据えてきた。その顔は怒っているように見えたけど、  
また泣きそうな感じに崩れてしまう。

「ごめんって崇華。オレが悪かったよ」

「うん……でも、本当に、好かったよう……」

「……でも、《滅びの王》が生きてたら、何かと不味いんじゃない  
のか？」

崇華が、今度こそ毅然と顔を上げ、オレを睨み据えた。

「練磨は世界を滅ぼさないんでしょ！？ だったら、《滅びの王》  
なんて関係ないよ！」

初めてかも知れない。こんな、怒鳴りつけるような崇華の声を聴  
くのは。

自分の信念を崇華に叩き込まれて、オレは一瞬、啞然とした。

オレは……やっぱりバカだ。崇華にまで怒鳴られてやがる。

こんな……こんな、一つの事さえ守れない男なんて、最低だ。

約束したら、最後まで守り通す位の男気を見せてやれ、神門練磨！

「……ああ、そうだな。崇華の言うとおりだ」

オレはしっかりと頷く事ができた。やっと、自分の事が分かって  
来たような気がする。

今まで、逃げてたのかも知れない。都合のいい、『滅びの王』という存在に、おれ自身が甘えていたのかも知れない。

そうだ。誰かに「おまえは『滅びの王』だ！」って言われたって、そいつの勝手な言い草じゃないか。オレは、オレだ。オレはオレ以外の何者でもないんだ、勝手に『滅びの王』にされても困る。

予言で定められてても、未来にそう書き刻まれていたとしても、オレはオレである以上、オレのする事はオレが決める！ オレしか、オレの人生を決める奴はいないんだ！

「オレは世界を滅ぼさない。……絶対に」

「……うんっ、それでこそ練磨だよ」

泣き腫らした瞳を擦こすって、崇華がはにかむ。……こいつ、今なんか、すげー可愛く見えた。

何故だろう。崇華と話していると、体という殻からを突き破って、心と心と芯にまで言葉が突き刺さって来るような感覚を覚える。……それだけ、崇華の言葉には色んな意味が込められてるんだろうか。それとも、深い所に在る意味が分かるだけの付き合いという事なのか。どっちにしたって、オレは嬉しかった。

そうこうしていると、崇華の腹から猫の鳴き声のような音が聴こえてきて、それに応えるようにオレの腹が犬の唸うなり声のような音で反応した。

崇華と見つめ合い、二人同時に笑い出す。

いつもの時間だ、と思えた。

「……ねえ、練磨。これって……おばさんのカップラーメンじゃないよね……？」

食べる物が無かったから戸棚に在ったカップラーメンを漁アタリってみただが……如何いかんせん量が少ないため、どれが安全ムスレでどれが地雷アタリなのか分からなかった。

「母さん、豚骨は食べなかつたはずだけど……あ、味噌バターはど  
うだろうっ？」

「おばさん、よくご飯に味噌付けて食べてるよ？」

「いつの時代を生きてるんだ……つか、そんなにウチの家計って危機的状况なのか!？」

「そんなこんなで。」

「わあ 練磨、カレー作れるんだっ？」

居間のテーブルに並んだのは、即席のカレーライスだった。チンするだけ、が売りなんだから、これで問題無しだ。

「いただきまーす」

「おう、いただきます！」

カレーライスを食べつつ、崇華と夢の中の世界の話を始めます。

「でもよ、本当にオレ、《滅びの王》なのかな？ ……未だに信じられねえんだよ、本当に世界を滅ぼしちまう奴なのかって……」

「練磨は世界を滅ぼさないんでしょ？ なら、《滅びの王》なんかじゃないよ。」

そうは言うものの、オレは自分の言葉さえ信じられない。

口では言っているけど、内心、疑問符だらけだった。あの世界の不可思議性には、もう疑う価値は無さそうだけど、あの世界で与えられたオレの役割……つまり《滅びの王》という役割こそが、どうにも解<sup>げ</sup>せない。

オレは何度も言うけれど、世界を滅ぼすつもりなんてこれっぽっちも無い。寧<sup>むじ</sup>ろ、オレ的には世界を救う側に成りたかったんだけど……まあそれはこの際いいとして、世界を滅ぼすつもりが無い奴が、本当に世界を滅ぼせるのか、それが常に疑問として付き纏<sup>まと</sup>う。

それとも、これからオレは世界を滅ぼす道筋を辿り、最終的にはどういった形になるかは分からないが、世界を滅ぼしてしまうのか？ ……いや、何が何でもそれだけは絶対にしない。固く自分に誓っている。世界は、絶対に滅ぼさない と。

なのにオレは《滅びの王》として、夢の世界に出現した。……もしかしたら、曆<sup>りき</sup>さんの勘違いという線も考えられないでもないが、今までの経緯を考慮すると、どうにも断言し難い。いや、単純にオ

レも一緒に勘違いしているだけなのか……。

結局は《滅びの王》の持つ力が分かるまで、何とも言えないのだけれど。現に、オレには今、向こうの世界でこれと言ったすごい力が宿っている訳ではないし、片鱗へんりんさえ見えない。故ゆえに、こうして悩んでしまうのだ。自分が本当にそこまで大層な人物で合っているのか、と。

「まあ、そうだよな。力らしい力も無いし、どう考えたって普通の人間だよな、オレ」

そう言つと、……どうしてだろう、自分に落胆せつかくしてしまう。折角せつかく、すごい人生が送れると思つたのに、それを自ら否定してしまう事が、どうしてもできない。どうせなら、《滅びの王》として生きてみたいし、もっとすごい人生を送ってみたいとも思う。

「……でもでも、練磨が一度死んだのに生き返つたのは……不思議だよな？」

「まあ、な。でも、それだって咲希さきが復活させてくれたからに違いねえよ。オレ、何も力なんて使つてねえし」

それとも、《滅びの王》の力とは、肉体を不死身にしてしまうものなんだろうか？ ……ちょっと想像できないけど、そう考えればオレが蘇よみがえった話は一応、筋が通る。俄にわかかには信じ難い事だが。しかし、そう考えると今度は鷹定の問題をそれで解決できるのか、という疑問が湧わいてくる。オレが不死身になっただけで鷹定の問題が解決できるとは、流石さすがに考え難いのだ。

「咲希ちゃん？ えとえと……それって、あの、妖精まじせさん？」

そう言えば、崇華に咲希を紹介した記憶が無いな。ちょうど、崇華がいる時だけ咲希は姿を現さなかった気がするし。

「どの妖精の事を言つてんのか分かんねえけど、オレに付いて来てた妖精の事な。あいつがきつと、オレを復活させてくれたんだって！」

妖精にはその位の力が備わっていても不思議じゃない！ と言つたのが、オレの中にできた通説だった。

……でも、よくよく考えてみると、あいつが何か力を使ったところなんて一度も見えていない気がする。ただ、オレに付き纏い、時折面倒臭そうに魔法やら魔言まげんやらの説明をするだけで……  
思い出した。オレに風の便りの術式を頭に刻み込んだのは、あいつだ。

実は役に立ってんだな、とちよつと感心していると、崇華が難しそうに顔をして、カレーライスのカレーとライスに分けていた。……こいつ、最後にどっちを残すつもりだろう。

「何かあつたか？」

「う、うん……。あのねあのね、妖精さんには、人を復活させるだけの力は、無いはずなんだよ。」

「……………え？ いやいや、それはねえだろ？ 現にオレ、復活してるし。」

「そしたら……………えとえと、妖精さんには不思議な力が在ってね、自分の精力を他者に与える事で、重傷を完治させる、って力が在るの。それを使えば、死者こそ蘇らないけれど、酷い怪我ケガなら治るの。」

「じゃあ、それだな。オレはそれで復活したんだって！」

「だけど……………自分で言ってる信じられなかった。」

頭を貫かれて死なない人間がいるか？ 重傷なんてもんじゃない、頭を貫かれて重傷で済む人間なんて、考えられない……………

ふと思いつ出したけれど、前に何かのテレビ番組で、頭を貫かれても死ななかつた人間の話をしてたシーンが脳裏に蘇った。その時、頭を貫かれた男は死ななかつたけれど、性格などに異常を来たして、結局どれだけかして死んじやつたんじゃないか。脳の一部が欠損した事によって、性格や気性に異常が出た、とか言ってた。

つまり、それがオレに起こって、辛うじて死ななかつたオレの頭の欠損を修復すべく、咲希が頑張ガンバってくれた、という事なんだろうか？

「……………でもでも、それじゃあ咲希ちゃんは……………」

何故か暗い顔をする崇華に、オレは疑問を懐いだいて話を振った。

「何だよ？ 咲希がどうかなるのか？」

「……えつとね、妖精さんが自分の精力を与えると……重傷だった相手に精力を与え過ぎちゃったりすると、自分の活動の源である精力が無くなっちゃうから、そのまま……死んじゃう事も在るの……」

「……それって……」

咲希が昏々と眠り続けているのは……？

死んだように起きてこないのは……？

まさか……もうあの体は……？

「……嘘だろ？ そんな、そんな簡単に咲希が死ぬかよっ」

「わたしも、断言はできないよう……実際に咲希ちゃんを見た訳じゃないし、妖精さんが全精力を注いだところも見た事無いし……だから、わたしにも分からないよう……」

冗談じゃない！

オレが助かっても、咲希が死んだら意味が無いじゃないか！

最悪の自己犠牲。そんな事をされて生き返ったって、オレは全然嬉しくねえよ！

やり場の無い怒りを抑えるべく、カレーライスを掻っ込んだ。野獣のように食らった。味が、分からなかった。

崇華が食事を終わると、時刻は二時に差し掛かるうとしていた。

「……でも、まだそうだって決まった訳じゃないよう、練磨？」

「……だな。ここでウダウダ考えたって始まらねえ。……でも、妖精も、やっぱ死んだら助からねえのか？ 何か、魔法の力が在れば復活するのかと思ってたけど」

ゲームの中で言う、不死鳥の尾とか、命の液体とか、そういうアイテムが在っても不思議じゃない世界だと思ってたんだけど……そういう都合のいい品は流石に無いか。

「……えとえと、妖精さんって精力……魔力が根源で生きてるから、それが無くなれば死んじゃうし、元通りになれば生き返るんじゃないかなあ……？」

「魔力、か……そういう薬は、あの世界には無いのか？」

「在るけど……とつても高いんだよう？ わたしも欲しいけど、わたしのお小遣いじゃ買えなかった」

まあ、お小遣いで買える程安いとは思ってなかったけど。

でも、薬が在ると分かれば、もう迷ってる暇は無い！ 咲希も、今でこそ姿を保っていられるかも知れないけど、いつ消えたつておかしくないんだ、できる手は全て打っておくべきだ。いきなりオレの前から消えられても、すげえ困るし。

あまりに憎まれ口を叩かれ続けて、オレの頭が変になったのかと思っただけど、……別にそれでもいい、そんな事はどうでもいいから、オレの前から勝手に消えてしまうのは、絶対に許さない。命は大事だとか諭す前に、オレは仲間に生きて付き添ってもらいたいんだ。理由はそれだけで構わない。

「よし！ 解決策は見つかったみたいだし、……ゲームでもするか？」

崇華は一瞬呆気にとられたが、はにかみ笑いを浮かべてコツクリと頷いた。

「ただいま〜 崇華ちゃん、練磨にあんな事やそんな事されなかつたあ〜」

……帰ってくるなりそれが、母上。

買い物袋を提げたまま居間を横切る母さんに、崇華は挨拶を返してから、

「あんな事やそんな事、されませんでした〜」

「……思っただけど、崇華、それおまえ分かってて言ってるのか？」  
ちよつと怖くなってオレ。

「あらそう〜 崇華ちゃんのご両親には許可をもらってるのにな

〜」ウキウキ母さん。

「オレが襲うの了承済み！？ どんな親だよッ！？」本気で驚くオレ。

「あら〜？ 誰も襲うだなんて一言も言っていないわよ〜？ 練磨つたら、お・と・し・ご・ろ」

……きつと、少年犯罪の源はここに在るんだと思う。

「お、お義母さん！ ……って呼んでもいいですか？」 崇華が思い切った感で叫び出した。

「何故ツ！？」 訳も分からずオレ。

「うふふ いつかこうなると分かってたわ」 お見通しの母さん……全てがオレの意思に関係ない所で進んでいく……色々と疲れてきた、今日この頃。

「じゃあ、また向こうの世界で」

崇華を家まで送ると、帰宅する前にちよつと立ち寄ってみたくなくて、小さな公園に入った。

ブランコと砂場、滑り台しか遊具が置いていない、町に埋もれたような小さな公園だ。昔はこの辺で崇華と遊んだ記憶が残ってる。

……あの頃から崇華は、向こうの世界に入り浸ってて、今でも夢の世界と現実の世界、どちらの世界でも生きてる……考えてみれば、それは凄い生き方だと、本気で思う。

小さなブランコに腰掛けると、西の空が橙色だいたいに染まってて、東側から闇やみの勢力がざわめき出しているところだった。……昔なら、この時間帯になっても外で遊んでいたな、と遠い過去を思い出してみる。もつと暗くなるまでって言って、それでも全然遊び足りなくていつまでも遊んでいたかった、あの頃。

ちよつとした感傷ふけに耽ふけっていると、不意に眠気に襲われた。

やばい……すげー眠い……

ブランコから立ち上がり、立ち眩くらみでブランコに腰を戻し掛けたが、無理にでも駆け出して、帰路を走り抜けた。

ここで眠るのは不味い！ また病院に運び込まれる……！  
色んな危惧きんが在って、でも、もう、体が……動か……な……

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます。――(・)――  
今章はこれにて終幕と相成ります。  
次頁をお楽しみに

「んま。練磨。起きなよ、練磨！」

「うう……？」

体を揺り動かされてる事に気づいて、オレは瞼をじつくりと開ける。

……眼前には、化粧つ気の無い、でも愛嬌が在って可愛げの在る、美少女の顔。

見覚えがある…… と、思い出す。

「八宵……？」

「他に誰がいるってんだい！ いい加減、寝惚けてないで、さっさと起きな！」

叩き起こされて、オレは布団から弾き出された。転がって、壁に思いつきり鼻をぶつける。

「~~~~っ」

「さ、朝飯の時間だよ、皆が待つてるから、さっさとしな！」

八宵が布団を全部剥ぎ取っていくと、部屋に残されたオレは鼻を押さえたまま、ゆっくりと立ち上がる。

「ねむ…… つか、ちょっと待て。オレ今、向こうの世界で……？」

大変だ！ 路上にぶっ倒れてるに違いない！ オレは二度寝をしようとして 扉の隙間からオレの様子を覗き見る存在に気づいた。

「……」 隙間を見てみる。

「……」 隙間の何者かも、オレを見ている。

「……」 しばらく沈黙してみる。

「……」 隙間の何者かの瞳が、輝き出す。

不味い！ と気づいた時には既に遅し！ 扉を撥ね開けて、子供達が雪崩れ込んで来る。

「おはよ ……」

「にいちゃんあそんで　　！」

「くらえ　　！」

「ぎゃああああああああ」

五人分の突進をマトモに受けて、オレは壁まで吹き飛ばされ、上から伸し掛かられ、潰れる。

「やあやあ！」

「とりやー！」

「うおりやー！」

バキ！ ドカ！ ボコ！ 乱打乱打の滅多打ちに遭い、オレは短い人生にピリオドを打った……

そんなエンド、在って堪るか！

「て、め、え、らアアア！」

「わー！ にいちゃんがおこった　　！」

「にいちゃんをたおせ　　！」

「あはははははは！」

「こら！ 朝から何騒いでるんだい！ とつとと飯、食べちゃいな！ 片付けできないだろーが！」

八宵が部屋の扉を開け放して、怒鳴り込む。子供達はクモの子を散らすように部屋から飛び出していき、銘々に喚きながら遠ざかっていった。

オレは呆気に取られつつも、八宵を見据えて、

「……ここって朝、早いんだな？」

「そうかい？ どこもこんな感じだろう？」

八宵は事も無げに応えると、腰に手を当ててオレを見据える。

「ほら！ あんたも早く来な！ 飯が冷めちまうよ！」

「あ、お、おう！」

……まあ、向こうの世界の事は、今日寝た後に考えるとしよう……

……また病院に運び込まれると言つのは、何だか嫌な感じだけだな。

豪勢！ とまではいかないまでも、オレにしては充分の量に、質も良かったから、すげー満足した朝食会だった。残念な事と言えば、子供達にオレの飯が幾つも奪われていった事だろうか。美味しかったし、食事中の会話も飽きず、どれもが新鮮で楽しかった。

まるで、小学校の頃の修学旅行みたいな感じで、懐かしい感じも受けた。

「じゃ、そろそろ出発しようか、練磨」

食事を終えて子供達と食後の運動をしていると、八宵が初めて逢った時の装備……サラシの上にジャンパーを羽織り、右手には抜き身の槍、背中には小太刀を鞘ごと吊って、既に準備を整えていた。

「出発って？ もう行くのか？ もう少しいたって……」

「早めの方がいいだろ？ 仕事を早めに終わらせて、戻ってくる時間を少しでも短縮したいと思わないかい？」

「まあ……そう言われると弱いんだけどさ」

「じゃあ出発だ！」

ジャケットだけじゃダメらしく、その上にフード付きの布を渡されて、全身を包むように装備した。まるで、これから砂漠にでも向かうような装備に、オレは少しだけ不安な気持ちになった。

ちなみに咲希は教会に寝かせておくのも何なので、オレのジャケットのポケットで眠らせている。

教会を出て少しの間は背中に子供達の声援が在ったが、離れるに連れて聴こえなくなり、何十分としない内に、砂風が吹き荒ぶ荒唐な場所に入っていた。

「なあ、八宵。オレ達、どこ向かってんだ？」

「知りたいかい？」

「こんな砂嵐の中、それ位教えてもらわねーと、ちよつと行く気が萎えるっつーか」

「想像が掻き立てられるだろ？」

「こつという時は、あまりプラスの思考はできねえからなあ」

ブツクサ垂れつつ、歩き続ける。

かれこれ何時間経ったか分からないが、取り敢えず長い時間歩き続けた。太陽が砂嵐によって遮られて見えないから、ほとんど時間の感覚が無くて、どれだけ歩いたのかも分からない状態だった。

だが、ようやく八宵の目的の場所に辿り着いたようだった。

「ここって……遺跡？」

砂嵐のせいで全体像はハッキリしないが、相当大きな建物が在るのは確かだった。だけど、人がいる気配が無い。寂れて、もう誰も住み着かなくなって久しい、といった空気が砂嵐と共に漂っていた。

「当たり！　ここで、ちよいと探検さっ」

「探検？　遺跡発掘？　……墓荒らし！？」

「悪く言や、そうだね」

八宵はそう言いつつ、遺跡の中へと足を踏み入れていく。

「待てよ！」

オレが呼び止めて、八宵が振り返る。

「やっぱ……不味くねえか？　遺跡を荒らすなんて……」

「……ウチに説法を説いたって無駄だよ」

八宵の瞳には、どこか寂しげな色が浮かんでいた。

「ウチの言い訳を聴かせてやるよ。……あの孤児院を守っていくためには、仕方ないんだ。どんな手を使っても、守りたいものがあるんだよ、ウチには。……練磨。あんたには無いかい？　どう在っても守りたい何かがある」

「……」

無い、と断言できる程、人間終わっちゃいない。

「……素直に頷けもしない。そういう人間は、世の中にどれだけでもいると思うし、それを否定したらいけない気がした。」

鷹定<sup>たかさだ</sup>だって、何をしようとしているのか分からないけれど、それに

「だってオレの力……《滅びの王》の力を使うって事は、そんな簡単に済む話じゃないって分かる。必死になってるのはオレにも分かるけど、それがいい事に使われるとは限らないんだ。」

それに、オレが考える「いい事」と、鷹定や八宵の考える「いい事」ってきつと同じじゃない。皆、それぞれに自分の考えが在るんだ。それを無闇むやみに否定していい訳が無い。自分だって、自分の考えが否定されればムカつくし、どうしてそんな事を言われたのか考えるだろう。

「……でも、遺跡に何が在るんだ？ やっぱり、価値的に高い品でも落ちてるのか？」

認める訳じゃない。……だけど否定する事もできなかったオレは、問題を脇おに措いたまま話を進める事にした。

きつと、こういうのを「弱い」って言うんだらう……。

八宵はオレの心情を察してくれたのか、不審に思う様子も無く頷いた。

「落ちてる、つてのも不思議な言い方だけれど、ここには 器石うつわいしが転がってるって噂うわさが在るんだよ。まあ、それはおまけなんだけどね」

「おまけ？ じゃあ、本当の目的は？」

八宵はオレを見てニヤリと口の端を歪ゆがめる。

「実は……町の方でね、もう一つ噂うわさが在るんだよ。最近、この遺跡に大鬼が住み着いたって専ほんらの噂うわさなんだ。おかげで、器石の回収にも来れない。町の人困こってるってんで、傭兵や旅人を雇うって話になってるんだけど、それをウチがやってやるうって申し出た訳さ」

「すげーじゃん！」

さつき遺跡荒らしを咎とがめてたオレが恥ちずかしくなりそうな発言にオレは少し心を打たれた。こういう、自ら進んで事件に乗り出したリ、人助けをしたりできる人ってのは、そうそういないし、それだけ凄すごいと思う。

ちよつと……いや、かなり見直した。

「その大鬼つてのは、やっぱり……でかいのか？」

「それが、分かんないんだよね」

八宵は前に向き直って、遺跡の中を無防備に突き進む。

「分かんないって？」

「大鬼を見た奴がないのさ。いつも、その尖兵せんべいにみーんなやられちまってるからさ」

「尖兵つーと……小鬼とか、つて事か？」

「ま、そんなトコ。んで、ウチがその大元を潰してきてやるうって、そついう話な訳」

八宵は気軽に言ったが、オレにはどうもそう簡単な話じゃないと思えた。小鬼を尖兵として出している大鬼……ボスがそうそう姿を現すだろうか？ 姿を拝むだけでも難しい話なんじゃないかって思う。

でも……八宵を見ていると、そんな不安を掻き消されてしまいそうだった。自信たっぷりな眼差しには、大鬼なんて一撃で倒してしまっぞ！ って気迫が満ち溢あふれている。

頼もしい事この上ない！

「……あ、あれって……」

オレは不意に視界に入ったものに眼を奪われて、八宵に声を掛けた。

八宵は振り返ってオレの視線を追うと

「隠れてッ」

「へっ？」

八宵に腕を引っ張られて、瓦礫がれきの山に身を隠された。

ちよつと埃ホコリが舞って、口の中に入った砂を吐き出していると、八宵が舌打ちした。

オレが顔を上げて覗き込むと、やっぱりどう見ても骸骨がいこつが座っているようにしか見えなかった。

「なあ、八宵。あれって」

「見た事無いかい？ 骸骨兵がいこつへいだよ」

「骸骨兵……」

名の通り、座っている骸骨達の腰には、細い刀が提さげられている。

服も着ているが、どこもかしこもツギハギだらけで、その上擦れたりしたのか穴が開いていたりする。

骸骨は三人分。三人の骸骨は互いに顎の骨をカタカタ鳴らしながら雑談に興じていた。

「おめえ知っでるか？ この間、太郎作の家さ行ったら、まあだ線香焚いてるだよ」

「んがははは！ 太郎作もそろそろ嫁えもらわねえどなあ。三十路過ぎたら嫁も来ねえっぺよ」

「なんだ」

…… やけに人間臭い会話だな。

「なあ八宵…… 何かすげー親近感湧きそうな奴らなんだけど……」

「何言ってんだい！ あいつらは魔族なんだよ？ ウチらの存在がばれたら、殺しに来るよっ」

そうとは思えない程、爺様のな会話を繰り返している骸骨三人組。

…… 本当に、人を殺すような人達なんだろうか？ オレには不思議でならない。

「奴らは、大鬼に与する魔族の一派に違いないよ！」

「そうかなあ……？ ちよつとオレ、確かめてくるよっ」

「確かめて来るって…… ちよつ、ちよつと練磨っ！？」

八宵の制止も無視して、骸骨三人組に駆け寄ってみる。

「すみませーん」

「なんだあゝ？！ おめえ、人間でねえか！」

「ちよつと聴きたい事が在って来たんですけど〜」

「そう言つと、骸骨さん達は戸惑ったように顔を見合わせた。

「おい、三与吉。どうするだあ？ 人間がわしらに話し掛けてくる事だ、初めてだあ」

「なんだ」

「どうするつぺおめえ……オラ達や守人だべ？ 話なんか聴けねえだ！」

「あゝ。話、できませんか？」

オレが食い下がると、骸骨さん達は互いに視線（瞳じゃなくて眼孔）を向け合つて、思案しているようだった。脳味噌が無いように見えるんだけどな……

「どうするだあ？ ちよこつとばかし、聴いてみるだか？」

「んだな、そうするべ」

「そこさ御仁、オラ達に何の話があるべ？」

「やった！ 話を通じたらしい。」

オレはちよつと思案してから、聴いてみた。

「あの、最近、ここに大鬼って来ませんでしたか？」

「！ あんの大鬼だべか？」

「おうよ、来たつぺ。あんの大鬼さには、わしらも困つとるべよ」

「どうにかしてもらおうと思つても、そこらの鬼じゃ勝てねえでさあ」

「オラ達や困り果てるでよあ」

「どうやら、この骸骨さん達も困ってるらしい。」

これは契機！ オレは早速、八宵を呼びに行った。

「あの骸骨兵が困ってる？ ……どうにも胡散臭いけどねえ」

「そう言うなって！　これで、大鬼の居場所が分かるだろ？」

「そりゃあ、まあ……」

「決まりだな！」

オレは八宵を連れてきて、骸骨さん達に言った。

「オレとこいつ　八宵で、その大鬼をぶっ倒してくるぜ！」

「そげな事できるだか！？」

「そげばすげーこつたで」

「んだんだ」

……方言が凄過ぎて、何を言ってるのか分からない……

「だからさ、大鬼のいる場所って分からないか？　すぐに倒してくるから」

「だどもなあ……」

「ここは肋骨さ括るべ、三与吉！」

「んだんだ」

腹じゃないんだ、と突っ込みを入れたかったけど、止めました。

「……んだ、オラからも頼むだ。あの大鬼さ、やっつけてける！」

「任せとけっ！」

オレが胸を張って叩くと、三与吉と言う名の骸骨兵が居場所を教えてくれた。

「オラ達や怖くて行けねえんだども、それでもいいが？」

「全然構わねえって！　ちゃんとぶっ倒してくっから、楽しみに待ってるよ！」

そう言い残して、オレは八宵を連れてその場所へ向かう事にした。

「……心配だ」

「え？　何が？」

不意に零れた言葉を拾って、オレは八宵を見据える。

八宵は眉を顰めて、難しい顔をしていた。

「こんなに簡単に大鬼の居場所が割り出せるなんて……わな畏とも考えられるんじゃないかな、と思った訳で……」

「そんな事ねーって！　あの骸骨達も、大鬼に苦しめられてたから、

あんなに正直に教えてくれたんだろ？ そうに違いねえって」

「そうかなあ……」

妙に憂鬱ゆううつそうな顔の八宵に、オレはちよつと不貞腐ふてくされる。

「心配なら、オレだけで行ってもいいんだぜ？」

「それはダメ」

ピシヤリと、まるで拒絶するような速度で、八宵は断言した。

オレはちよつと気圧されて、驚おどろいた感じで八宵を見やる。

「……あなたがこんな所で死ぬような奴だとは思ってないけど、何の武装も無く一人になるなんて、あまりにバカ過ぎるぞ？」

「あ……」

そうだった。今のオレには、あの人からもらった ぶつ飛ばし

の 附石ふせき も無い、ただの人間に過ぎないんだ。幾いくら《滅びの王》だからって、その力が分からなければ、その辺の人と全然変わらな  
い。まだ、教会の子供達の方が戦えるかも知れない位だ。

嫌な事を思い出して、ちよつとブルーになりかけたけど、何とか  
立て直そうと、話題を変えてみる。

「……そう言えば、八宵の武器は 附石 じゃないのか？」

オレには不思議に思っていた事が在った。

それは先日、虚無僧軍団こむそうぐんたいに襲われた時の事だ。オレはあっさりと  
やられてしまったが、あの時、確か麗子れいこさんが使っていたのは、  
附石 の杖つえだった。あんな風に、武器を 附石 として持つ事がで  
きれば、荷物にならずに済むんじゃないかって、思ったのだ。

その点、八宵は槍やりも小太刀こたちも 附石 ではないように見える。逆  
に、こうしていた方が相手に対して威嚇いかくになるのだろうか？

「 附石 の武器よりも、ウチはホンモノの武器を使いたいのださっ  
八宵はそう言っつて槍の表面を撫なでる。」

「…… 附石 の武器がニセモノって言いたい訳じゃないんだけど  
…… やっぱり、武器つてのは 附石 なんかじゃなくて、ちゃんと  
した物を使いたんだよ、ウチは。……ま、無理にウチの感性を理  
解してもらつつもりは無いし、忘れて結構」

……何か、オレにはよく分からない話だった。

まあ、八宵がいつて言うなら、オレも無理には追及しないけれど、きつと芸術家のそれに似てるんじゃないかな、とオレは感想を懐いた。

「それはともかく！ ……本当に行くのかい？ 大鬼の罠かも知れないのに」

「オレはさっきの骸骨……三与吉さんを信じるぜっ！ 絶対に罠じゃない！」

「……言っても聴かないか。分かったよ、ウチも付き合ってやろうじゃん。……ま、罠だとしても、臨むところだけどね……！」

八宵の頼もしくも恐ろしい発言を聴いていると、その姿が見えた。

遺跡の奥まった場所に在る祭壇。その棺の上で肘を立て、手のひらに頭を乗せ、寝転がっている男。年の頃は二十代前半のように見える。黒髪は刈り上げられ、黒瞳は大きくも無く小さくも無く。胸には小石のような物でできたネックレスを下げている。不機嫌そうに顔を歪ませている。

「おいおい、何か侵入者がいるんじゃないやねえのおー？」

男 頭に一角獣を思わせる小さな角を構えた、恐らく鬼は  
そう言つて唾を吐きつける。唾は然程飛ばず、オレのメートル手  
前位に落ちる。

「帰れよ、クソガキ。てめえのような雑魚が来る所じゃねーっつーの」

「おまえが大鬼か？」

「あん？」

鬼は起き上がり、不機嫌そうな顔に、更に瞳が血走り始めた。

「だったら、どうだっつーんだよ、ああ？ オレ様に何か用か？

大鬼の蟹頃黄一郎様によお？」

やはり、大鬼らしい。……つか、

「鬼なのに蟹なのかッ！？」

そこが疑問だった。

蟹頃は露骨に苛立つ。

「ンだこの野郎？ オレ様の名前に文句でもあんのか、おあ？」

「いや……じゃあ蟹頃、おまえ、何か悪い事してんだろ？ 止めるよ」

「ああ！？ 呼び捨ての上に命令か、クルア！？ てめえ調子扱き過ぎなんだよ、ええ？」

「……そうだ、何もオレはここに喧嘩しに来た訳じゃない。できる事なら、穏便に、平和的に終わろうじゃないか。」

「あつと、ごめんな？ じゃあ、頼む。悪さをするの、止めてくれないか？」

「練磨……？」

背後で八宵の不快そうな声が聴こえたけれど、それは無理矢理スルー。

蟹頃はオレを睨み据え、立ち上がって歩み寄ってきた。

「そつだなあ、悪さ、止めてやってもいいぜ」

「本当かつ？」

「おうよ、オレ様、こう見えても心は広いからな。じゃあまず、死ねや」

ゴツ、視界がぶれて、何も見えない、……気づくと地面に這い蹲ってた。腹に激痛が走って、瞬間、吐き気が変わる。

殴られたんだ 気づくまでに時間が掛かったけれど、その時は蟹頃の足が眼前に迫っていた

ざしッ、という物が切れる音がして、オレはまた痛みが走る事を予期して歯を食い縛った。……が、痛みどころか衝撃さえ伝わらず、そつと眼を開けてみる。と、そこには、

「つてんめえ……！」

「あんたこそ、調子に乗り過ぎだよ！」

八宵だった。八宵が、槍で蟹頃を牽制している。初撃は首元を狙ったのだらう、石のネットクレスがバラバラと落ちる音がした。

蟹頃は完全にお冠かんむりのようで、どこからか棍棒を取り出した。ゴツゴツの、まるで釘バッドを連想させる棒切れ。

「クソアマア！ てめえ、ぶっ殺されてエか！」

「そりゃこつちの台詞セリフだクズ鬼！ 今ここで、その腐った脳味噌貫いてやるよ！」

「んだとう……ッ!?」

売り言葉に買い言葉だ。流石さすがの蟹頃も、苛立ちと同時に動揺も生まれてきたらしい。

「さっ、掛かって来な、クズ鬼。ウチが軽く逝かせてやるからさ  
!」

「~~~~ッツ嘗なめやがって……! その体、スタスタにしてやらアアアア！」

蟹頃が棍棒を振り回して八宵との距離を一気に縮める！

八宵は槍を両手たすくで携え、鋭い突きを放つ！

一瞬、視線が追いつかなくて、瞬時に突き出された矛先を蟹頃が躲かわすシーンが見え、次の瞬間に矛先は引っ込み、更に続けて二撃目が走る！

突き出す、引っ込める、この二つの動作を極限まで高速化し、同時に相手の急所を的確に狙う攻撃は、そのまま防御ぼうぎょにも繋がった。高速化し過ぎてて、蟹頃もほとんど感覚で避けてる節つがが窺える。

「すげえ……」

ようやく体が動けるようになって、立ち上がると同時に下の方から声が聴こえてきた。

「全く……酷ひどい目覚めだわ」

「咲希!? 気づいたのかっ?」

「気づくわよ! あんた、何攻撃マトモに受けてんの!? ここにあたしがいた事、忘れてんじゃないでしょーね!？」

「あ」

そうか。さっきの蟹頃の一撃、もしかして咲希に……

咲希はジャケットのポケットから這い出ると、フワンと浮かんで

オレの鼻先を指差す。

「女は繊細せんさいなのよ？ もっと丁寧に扱いなさいよね！」

「わ、悪かったよ……。それで、大丈夫なのか？ もう、動けるのか？ 死んでないよな？」

「……勝手に殺さないでくれる？ あんた失礼過ぎ。蹴るわよ？」

「好かった……。ホンモノの咲希だ……」

「どこにニセモノがいるってのよ！」

本当に好かった……。無事で何よりだ。

安心し掛けて、現状を思い出す。

蟹頃と八宵を見ると、八宵の手数に押されて、蟹頃はほとんど手が出せない状態だった。が、このまま続けば八宵は負けてしまうんじゃないだろうか、そんな危惧きくを感じた。

「……その様子だと、まだ自分の力に気づいてないようね？」

「へ？ 何の話だ、咲希？」

「自覚も無いのね……。はあ。もう、あんたを見てると、あたしのしてる事がバカらしくなって来るわ、ホント」

何の話なのか分からなかったけれど、バカにされてる事くらいは分かる。ちよつとムツとして、咲希を睨みつけると、咲希は逆に睨み返してきた。

「あんた、 やっぱり《滅びの王》に間違いないわ」

「あんだ、 やっぱり《滅びの王》に間違いないわ」

「一瞬、言ってる意味が理解できなくて、頭が白紙に戻された。

白紙に戻った脳味噌に文字が書き込まれる。『あんだ、 やっぱり《滅びの王》に間違いないわ』。

《滅びの王》？ オレが？ やっぱり？

「《滅びの王》としての力は、地味だけど、超絶無比には違いないわ」

「えっ？ えっ？ オレの力が、《滅びの王》としての力が、分かっちゃまったのか？」

「今、確認してみるわ。 ちょうどいい塩梅あんばいに 器石うつわいし が落ちてるわね。拾って」

「コレか？」

指差された石 蟹頃かにころのネックレスに付いていた石を拾い上げると、咲希さきの指示を待った。

「念じなさい。あんだが欲しい力を」

「念じるだけでいいのか？」

「多分」

「多分って……」

「いいからやりなさいよ！ じれったいわね！ あんたも男なら言われたとおりやりなさいよ！」

男は関係ねえだろ……と突っ込み掛けたけれど、咲希の殺意さえ感じられる眼光を向けられ、黙って念じる事にした。

オレが欲しい力……それはやっぱり、あの大鬼をぶっ飛ばせるだけの力。何の小細工も要らない、ただ、ぶっ飛ばせる だけでいい……！

オレは、あの大鬼を ぶっ飛ばす 力が欲しい……！

「……後は、その石を握り締めて、使いたい力を使えばいいわ」「マジかよ……そんな簡単に使えていいもんなのか、これ？」

「い・い・か・ら・使ってこいイイイ！」

「はいイイイ！」

その時、八宵の槍が弾かれた瞬間に遭遇した！ 棍棒を使って、突き出されたばかりの槍を下から搗ち上げ、そのまま隙だらけの八宵に棍棒の魔手が伸びると 八宵の体を大きく吹き飛ばした！

「ガハうつ」

遺跡の一部を破壊して、八宵は瓦礫の中に倒れ込んだ。

瞬間、オレの頭の中のスイッチが入った。

思考はクリアになり、「あのバ力をぶっ飛ばす」という単純な目的だけが念頭に置かれ、他の雑念は全て抹消された。

蟹頃が振り向く直前 オレは眼前で立ち止まり、こちらに向くまで待つてやった。そして、完全に振り向いた瞬間、オレは顔面に石を握り締めた拳を叩き込んでやった！

「ぶっ飛ベクソヤロオオオオオオオ！」

「ぶげらアアア！」

蟹頃は遺跡を破壊しながらぶっ飛ばされていき、八宵と同じく、瓦礫に埋もれて止まった。

オレが全力で殴ったにしては威力がおかしい事に気づいて、手に握り込まれた 器石 を凝視する。

果たして、オレの手に握り込まれていたのは、器石 ではなく、ぶっ飛ばしの刻印が刻まれた 附石 だった。

「……中々、重てえ拳を持ってんじゃねえか……！」

「い……！？」

蟹頃が瓦礫から起き上がり、血走った瞳でオレを睨み据えた！

オレは思わず 附石 を握り締めると、体が勝手にファイティングポーズを取る。あいつ、ダメージは受けてるけど……何か、まだまだ無事そうだぞ！？

思いつつ、蟹頃の顔面を観察する。頬は腫れていたが、特に損傷

は無いようだった。……ただ、ダメージは期待できるみたいで、足が少し覚束無い。

「このオレ様を誰だと思ってるやがる……？ 大鬼の蟹頃黄一郎様だぞ！？ それを……人間のガキの分際でエエエエ！」

動きを止める程じゃなかったか！

瞬時に距離を縮めて来た蟹頃に向かつて、オレは本能的に拳を突き出し、それが偶然にも蟹頃の突き出した右ストレートとぶつかり合う！

壮絶な暴力が衝撃波を伴って弾け合い、オレは右腕が壊れそうな錯覚を感じて、思いつき顔を顰め、足だけは威力を殺しきれずに地面を滑っていく……！ が、地面から足が離れる事は無く、おかげで倒れる事は無かったけど、地面にはオレの足が滑った軌跡が刻まれていた。その長さが、蟹頃の素の一撃がどれ程のものかを物語ってた。

オレが正面を見据え直すすと、……蟹頃も吹き飛ばされてて、同じく右腕を押さえて呻いていた。オレの右腕と同じ状態で、痺れているように小刻みに震えて、上手く動かないようだった。

「ぎっけんな！ 何でてめえとオレ様の力が同等なんだよツ！？」

あり得ねえだろ！？ オレは大鬼

「うっせえな！ ンなこた百も承知だ！ ……分かったなら、もう止めてくれよ？ おまえが悪さをしないって約束してくれたら、こんな事、する必要なんて……」

「まだ、ンな戯言をオ……ッ！ ……そうだな。てめえは、認めてやる。このオレ様が認めてやるんだ、光栄に思え。だからてめえは、ここで完膚なきまでに、ぶっ殺す」

凄絶な笑みを浮かべて、蟹頃は宣言した。

おいおい……マジであいつとやり合わなくちゃならねえのかよ……シャレになつてねえよ……！

オレは 附石 を握り直すと、……呼吸を整える。

視線を右腕に下ろすと、蟹頃の一撃で既に瀕死の重傷を負って

るのが分かった。……蟹頃の右腕と同じで、麻痺したように小刻みに震え、指先が思うように動かせない状態になっている。……それでも、オレは握り拳を作って、蟹頃を見据え直す。

……ごめん、オレの右腕。おまえには、犠牲になってもらうぞ。

右腕が、オレの意志に呼応するように微動する。……幾らオレの体だからって、傷つくのは嫌だ。何より痛いし、傷ついた体を誰かに見られたいとも思わない。……でも、あの蟹頃を倒すには、それ位の犠牲は必要なんだ……！

人が犠牲になるのは嫌なのに、自分が犠牲になるのは何とも思わないオレは、やっぱり変な奴なのかも知れないな。

「……逝く覚悟はできたか、クソガキ？ オレ様は心が広いんだ、何なら祈るまで待ってやってもいいぜ？」

「……もう止められないんだろ？ なら、来いよ。オレも、全力で相手してやる」

オレは蟹頃を睨み据え、両手を持ち上げて、ファイティングポーズを取る。

「クソガキ……ッ！」

蟹頃は完全に我を忘れ、尋常ならざる速度を以てして接近した！

だけど、当初のそれじゃない！ 少なからずオレの二回の打撃が効いてるんだろう、走り寄る速度は落ちていたし、気迫も先程の比じゃない！

オレは右手をまたも突き出し、今度は蟹頃の右手の点に合わせるように、拳を砕かんと突き刺す！

「死ねエエエエ！」

「ッッ」

蟹頃の拳と、オレの拳が激突し、

オレの拳が弾かれたッ！

その現象を、蟹頃は異常な眼で見据えていた。……それもそうだ

ろう。何故なら、オレの右手には力なんて込められていなかった。もっと言うなら、附石 が握られていなかった。

「 てめえがぶっ飛べエエエツッ！」

右手をぶっ壊してでも、オレは決めなければならなかったんだ。

この 左手に握り直した ぶっ飛ばし の 附石 で！

「クソガキの分際でエエエエ

ツッ！」

左手は蟹頃の顔面に吸い込まれるように突っ込み、 次の

瞬間には、完全に顔面を打ち砕いていた！

鈍い破碎音が響いて、オレは拳を振り切り、蟹頃が瓦礫に突っ込む瞬間、オレもぶっ倒れてた。

その後、遺跡に音が聴こえなくなつて、……オレはようやく起き上がつて、終わった事を悟つた。

終わったんだ……オレが、終わらせたんだ……

「れん、ま……」

瓦礫の中から八宵の呻き声が聴こえて、オレは我に返つて走り出した。

瓦礫の中に埋もれていた八宵を引っ張り出すと、ようやくそこで安堵できた。

「その分じゃ、大丈夫そうだな？」

「まあね……骨にも異常は無いみたいだし。 それより、大鬼は

？」

「ああ。オレがぶっ飛ばした」

「……」

信じられない、といった顔をしていたが、その顔にはどこか分かっているとき暗黙の内に言つてるような空気を孕ませ<sup>はら</sup>ていた。

「見てたよ……あんだ、あの力はいつたい……」

「……」

《滅びの王》の力。

それは、今の所、咲希の言うとおりだとしたら……奇抜な力じゃない。寧ろ、地味な部類に入るだろう。地味に強い。そして、単純

なだけに、色んな効果が見込める。

オレはやっぱり、認めたくないけれど、……《滅びの王》なんだな。

「……ウチには、話せないのかい？」

「……」

「……そっか。残念だよ、練磨<sup>れんま</sup>」

八宵が背中に手を回すのが分かった。そこに在るのは、彼女がいづもぶら提<sup>さ</sup>げている武器

小太刀<sup>こたち</sup>が、オレに向かって振り抜かれた。

「……バカ、な」

オレの背後で呻き声が聴こえ、物が倒れる音が続いた。

音が聴こえなくなつて、オレはようやくその場に腰を下ろせた。

「……なあ、八宵」

「何さ？」

「できれば……そういう事をする時は、一声くれねえか……？」

背後に倒れている、首を斬られた大鬼を気配で察しながら、そう返した。

八宵は辛そうに起き上がって、快活そうに笑う。

「そんな事してたら、練磨がそいつになつてるところだぜっ？」

「マジかよ……」

オレは振り返ると、完全に息の根を止められた蟹頃を見て、ちよつと罪悪感を懐いた。

でも、殺さなきゃオレが殺されてたかも知れないんだ、いつだつて誰かを救えるなんて、そんな甘い事を言っていると、いつかのようにな、またオレが死んじまうかも知れないんだ。

認めたくないけど、オレが生きる事によつて、こうして死んでく奴らだつているんだ。いい加減、それは受け入れていかないと……。……でも、これで一件落着だよなっ？」

オレは無理にでも明るくして八宵に尋ねた。そうしなければ、自分が色々なものに潰されてしまひそうな気がした。

八宵は小太刀こたちに付着した血糊ちのりを振るつて落とすと、鞘さやに戻しながらオレに気づいて見据えてきた。

「ああ、そうだね。……気が引けるけど、あの骸骨兵がいこつへいに報告しとけばいいんじゃないか？」

「そうする。これで、あいつらも気兼ねなく暮らしてけるだろ？」

「……」

八宵は応えなかったけれど、オレは気にせず駆け出した。

「ほんまにやりよったんがい？」

骸骨兵の三与吉さん……つか、どの骸骨兵を見ても特徴が無さ過ぎて分からないんだけど……が、驚いたような声を、カラカラと発した。この骨だけの体のどこに声帯が在るのか、今更疑問に思った。

「おう！ これからは大鬼に悪さされないから、大丈夫だぜ！」

「そうが。ほんなら、気持ちだけでもお礼させてくんろ」

「なんだ」

「ええっ？ いいっていいって！ 大鬼をぶっ潰せばそれで良かったんだろ、八宵？」

オレは振り返って尋ねると、八宵は小さく頷く。

「だからさ、お礼なんてそんな……。あ！ これ、返しとくよっ」

「これは……附石 でねえだか？」

三与吉さんは 附石 を受け取って、視線を 附石 からオレに向ける。

「ああ、それな、ちよつとあつてさ……」

「おめえさん、《魔言使い》か何かかい？ オラ達や、これさ見るだ、うん十年振りだべなあ？」

「なんだ。がなり昔の戦争だつぺ」

「それじゃ、これをもらってくんろ」

附石 を突き返され、オレは困った感じに受け取ってしまふ。

「でもこれ……あんたらが守ってるモンなんだろ？ 受け取れねえつて！」

「気にするでねえだあ。あの大鬼さぬつ殺してくれたお礼ださ」

「なんだ。受け取ってくれねえど、わしらが困つちゆうでの」

「……分かった。ありがとう！ 大切にさせてもらうぜ！」

そう言つて、オレはぶっ飛ばしの 附石 を道具袋に納めた。ふと、骸骨兵の一人（三与吉さんじゃない）が、八宵に向かつて

骨をコキコキ言わせながら歩み寄っていった。

「嬢ちゃんにも、何かお礼させてくれねえだか？」

「ウチに？」

「んだ。嬢ちゃんも、一緒に大鬼さ退治してくれたただ、何かお礼ささせてくれっぺ。」

「そんな事言われても……」

八宵が困り果てた顔をしている。……もしかしたら、相手が魔族だから、変に遠慮しているのかも知れない。

魔族って、きつとこの世界では敵扱いされて来たんだろう。そんな奴にいきなり「何かお礼させてくれ」なんて言われたら、誰だつて惑うに決まつてる。

でも、こうやってきつと平和は築かれていくんだと、オレは思っていた。

「じゃあさ、八宵。あのガキ達に、こいつらと遊んでもらえば、いいんじゃないか？」

「練磨！？ そんな事したら、あいつらが……！」

「子供がいるっぺか？ そりゃー遊ばせるよりは、遊んでもらうしかないっぺなあ！」

「んだんだ。むしろ、いつつも遊ばれてるだからなあ」

「むしろで好ければ、いつだって相手になるだべ」

八宵は明らかに困惑していた。

だけど、オレはその八宵に耳打ちした。

「こいつら、絶対に悪い奴らじゃないって！ 気前もいいし、きつとあいつらのいい遊び相手になってくれるよ！」

「……そうだね。いつまでもグダグダ考えるのは、ウチの気性に合わないしな！」

八宵は骸骨兵に手を……槍やりを持ち直して、右手を差し出した。

骸骨兵の一人が白骨化した手を差し出し、手を握り返す。

「いつでも遊びに来てくれっぺ！」

「また、近くに寄ったら来てくれべや」

「ほんにありがとうな〜」

「ああ！ また逢おうな〜！」

愉快な三人組の骸骨兵と別れの挨拶を済ますと、教会へ戻ろうとして、八宵は別の道を歩き始めた。何故か教会へは向かっていない。

「どこに向かつてるんだ？」

「町さ。大鬼の首を持っていけば、褒賞金<sup>ほうしょうきん</sup>がもらえるんだよ」

そう応えた八宵の手には、ちよつと大きな黒い袋が握り締められている。……その大きさからして、恐らく、いや間違はなく大鬼の首……

ちよつと恐ろしい想像をして、慌ててその思考を掻き消す。

「やっぱり、あんたは間違はなく《滅びの王》だわ」

「うおわっ！ いきなり目の前に出てくるなよっ！」

咲希<sup>さき</sup>が眼前をふよふよと浮かんで指差す。

「これ、使ってみなさい」

「これ？ ……って、これ、器石<sup>うつわいし</sup>？ おまつ、これ、どこ

から!？」

「遺跡から拝借してきたのよ」

「返してきなさいっ。折角<sup>せつかく</sup>いい感じで別れたつてのに、何だってお

まえはそれを……!」

「いいじゃない、一つくらい」

「そういう問題じゃなくて……!」

「ごちゃごちゃとうるさいわね！ 使えって言ったら使うのよ！

あんた、心が狭過ぎるわよ!」

「うぐ……!」

……! 言ってる事はムチャクチャだけど、何で言い返せないんだオレ……!

相当ムカついたけれど、何とか自制心が働いて、呼吸を整え、器石を受け取る。

「……で、これを使ってどうしろって?」

「念じるの。……そうね、さつきは以前と同じで判別し難かったから、今度は 爆発 と念じてみなさい」

「何だそれ？ 何で 爆発 なんか」

「さつさとする！」

「はいッ」

言われたとおり、頭の中で 爆発 と念じる。……爆発したいつて、どう考えればいいんだ？ 爆発しろ……とか？ 爆発してくれッ……とか？ よく分からない。……けれど、無駄口を叩くとまだ怒鳴られそうだから敢えて独力で何とかしてみようと考える。

爆発……爆発しろ！ 爆発しなさい！ 爆発してよ！ 爆発！

「……大丈夫か、オレの頭」

「じゃあ、次はその石を握り締めたまま、……そうね、あそこに落ちてる岩を殴ってみて」

「岩を殴るなあ？ ンな事したらオレの手が」

「つべこべ言わずに……！」

「はいッ、畏まりました咲希様ッ」

癩癩起こし掛けの人には、できる限り穏やかに接しないと。とばつちりを喰うのはいつだってオレなんだから。

八宵が黙ってオレを見ていたけれど、構わず大きな岩の前に移動して、拳を一度摩さすってから、  
渾身の力を込めて、岩をぶん殴った！

瞬間、我が眼を疑った。

爆音に続いて破砕音が響き渡り、岩が木端微塵こしほみじんに爆破したのだ！  
バラバラと岩の破片が落ちてきて、オレはしばらく呆然と立ち尽くしていた。

「あんだ……やっぱり……」

八宵の驚きと困惑の音が聴こえて、ようやくオレは忘我ぼつがの境から帰還きかんした。

「これって……咲希、やっぱりオレ……！」

「次に、その 附石 に元に戻れって念じてみて」オレの質問は無

視して咲希。

「お、おう、分かった」

「念じるんだ……元に、戻れ……！」

その後、附石を見ると、ただの器石に戻っていた。

「それが還元……附石を器石に戻す魔言よ……」

「て、いきなり詠唱無しって……。まあいいわ……。そうよ。あ

んたの力……《滅びの王》の力とは即ち、『全ての術式の理解』よ」

「……うん？ 今、オレの考えと咲希の考えに喰い違いが在ったん

だけど。

「オレの力って、器石を附石に変える力なんじゃないのか

？」

「それは力の中に含まれているだけ。全体で言うと、あんたの力は、

今言ったように『全ての術式の理解』よ」

「全ての術式の理解……？ それってどういう事なんだ？」

「……つまり、あらゆる魔法が使えるって事かい？」

咲希ではなく、八宵が回答した。

その回答にオレは驚き、咲希の次の句を待った。

「……まあ有体に言えばそんな所ね」

「すっげーなそれ！ 何でもできるんじゃないか！？」

「そんな訳無いでしょ！ ……って言いたいところだけれど、実際

その状態に近いわ」

「マジか……」

オレも想像してなかった返答に、オレ自身がそれ以上切り返せな

かった。

「何でもできる力。それこそが、《滅びの王》としての力……真骨

頂と呼べる力なのか。」

「……だから、皆がオレの力を使おうと狙ってる訳か」

「皆がそうだとは限らないわ。あいつ……禍谷黒一はあんたの力に

気づいた様子は無いみたいだったし。恐らく現時点であんたの力を

知る者は、あたしとあんだ、そして獅倉八宵。この三人のみよ」

瞬間、ハツとした。

八宵を見て、オレはどう言い繕えばいいのか、全然分からなかった。

八宵はオレを見て、難しい顔をしていた。 が、急に破顔一笑した。

「八宵……？」

「あんたが普通の人間じゃないって事は、始めから分かってたさ。

……ま、《滅びの王》って聴いて驚きはしたけど、練磨は練磨以外の何者でもない。違つかい？」

「……」

妙に心が温まる言葉に、オレは素直に安堵する事ができた。

八宵のそう言ってもらえるだけで、心の底から安心できる……

「ありがとな、八宵」

「いいさ。ウチも、あんたには感謝してるしね。お互い様だよ！」

「さっ、話も付いた事だし、神門練磨。あんた、これからどうするつもり？」

荒野のど真ん中で咲希に指差され、オレは一瞬の沈黙の後、瞳に闘志の炎を燃やして、

「オレは、鷹定を助ける」

「それが世界を滅ぼす事になっても？」

「……何だつて？」

咲希の返答に、オレは思わず問い返す。

咲希は大真面目な顔で、オレを見据えている。そこには、嘘や偽りの影は見えない。純真たる眼差しで、オレを射抜いていた。

「鷹定は……世界を滅ぼそうとしてるのか？」

「仮にそうだったとしたら、あんたはそれを実行するの？」

「そんな事、する訳……！」

「それじゃあ、葛生鷹定は救えない。どっちも救おうなんて考えないでよね？ どっちか一つ。世界を取るか、葛生鷹定を取るか。それは、あんたに任せるわ」

「……………」

いつかは来ると思ってた、究極の二択。

こうなる時が来る事は、オレが《滅びの王》として生きると決めた時から、考えていた。いつか、鷹定のみならず、ミヤリや崇華、麗子さん、もしかしたら八宵のために、世界を滅ぼしてしまうんじゃないだろうかという危惧は、考えないようにしてたけど、でも心の深い所ではずっと懐いてた。

世界を滅ぼす力が在るとされている《滅びの王》。力が判明していなかった時のオレは、普通の人間として扱われ、ただ単純に判明する前に殺してしまおうという連中に殺され掛けた。……実際のところ、虚無僧軍団や禍谷黒一の目的はよく分からないけど、オレの力を悪用したり、連れ出そうとしたりしていた。あれだって恐らくオレの《滅びの王》としての力がどんなものなのか見極めるためだったと考える事もできる。でも、結局どちらも調査を諦め、《滅びの王》の殺害を敢行した。

そういう事が遭ったからだろう。オレは寧ろ仲間と世界のどちらかではなく、自分を生かして世界を滅ぼすか、自分を殺して世界を守るか、その二択が来ると考えていた。

どうなったとしても、オレは世界を滅ぼすつもりなんて、これっぽっちも無い。でも既に、世界を滅ぼす力が在る事をオレ自身が知り、尚且つ鷹定がそれを悪用するんじゃないかと咲希が言い出した。世界を敵に回す……世界を滅ぼしてしまう程の力を使役するとなれば、それだけの覚悟を持たなければ。否、覚悟だけじゃ足りないだろう。色んなものが必要になり、色んなものを捨てなければならぬまい。

「……………」オレは、

「 答を今すぐに出せとは言わないわ。…………… よく考えなさい、

神門練磨。何せ世界は、あんたの意思次第で変わるんだから」

「……………」

オレの意思で、世界が変わる。

鷹定を助けたければ、世界を滅ぼさなければならぬ。  
世界を救いたければ、鷹定を諦めなければならぬ。  
……オレは、まだその答を出せないのかも知れない。

歩き続けて、八宵が言っていた町に辿り着いた。

荒廃した町に似た、西部劇で見るとような、砂風が舞う閑散とした町だった。

カサカサと綿埃が転がり、町を行く者は皆、他人を見ないように、そそくさと少し早足気味に歩いている。それはまるで……人が人を拒絶しているような錯覚を植え付ける。

「こつちだよ」

八宵が首の入った袋を握り締めながら、迷いの無い足取りで町の中をズンズン突き進んでいく。

周りの人間は、誰一人としてオレ達に注意を払わない。見て見ぬ振りをするかのように、視線を向けないようにしてその場を立ち去っていく。

……何だか、オレには馴染めそうに無い町だった。

そう広くも無さそうな町を歩いていると、目に付くのが莫蔭を敷いただけの露天商だった。砂避けのためだろう、屋根には布のような物が被せてあるだけで、ほとんど意味を成していない。商品のどれもが、砂を被って価値を下げているような気がしてならない。

立ち並ぶ家々は煉瓦造りが多くて、頑強そうな雰囲気は、これまたよそ者を拒絶しているように映った。色は砂に塗れて全部同じように見える。流石に砂風の中、洗濯物を干している家は見かけなかった。気になったのは、家の窓を見るとガラスではなく木製の板のような物が遮っており、中を窺い知る事はできなくなっていた。カーテンの代わりなんだろうか？

「邪魔するよ」

ノックしつつ声を掛け、同時に扉を開けるという三重の行動を一遍にした八宵に続き、オレも家の中に入っていく。どうやら、土足のままでいいようだった。

中も閑散としていた。入ってすぐが応接間らしく、テーブルが一つに、ソファがテーブルを囲うように三つ設けられていた。部屋自体はそう大きい物ではなく、テーブルとソファ、そして奥に事務用らしい机が一つだけで、もう一杯になっていた。部屋の左手の奥に一つ扉が在る事から、他にも住居スペースは在ると悟った。

「ああ、あんたかい。やつぱり、大鬼はあんたの手には余るものだったろう？」

事務用の机で仕事をこなしていた男が顔を上げ、嫌味つたらしく言葉を吐いてきた。ニキビの多い顔は細面ほそおもてで、黒い髪はあちこちに無意味にカールしていて、どこかの音楽家にこんな奴がいたような気がした。黒瞳は目玉だけが顔の比率に合わない大きさで、妙にギョ口眼になっていて不気味だった。

八宵は男の声を無視して、つかつかと突き進み、事務用の机に袋を叩き下ろした。男はギョツとして袋と八宵の間を何度も視線で往復する。

「討ち取ってきたさ。言つたら？　ウチがやってやるってね」

「……本当にやりやがったのか？　……あり得ない！　王国の猛者もた共でも引き返してきたと言つのに！　どんなイカサマをやったんだ？」

「何て事無かつたさ。その猛者共が弱かつただけだろ？」

「嘘を吐け！　何を使った？　魔法　か？　附石ふせき　か？」

「うるせえなおまえ！　んな事どうでもいいだろーが！」

ビクツと男の顔に怯えおびが滲みにじ、弾はじかれたように、怒鳴りつけた才に視線を向けた。

「き、君は誰だね？　子供がこんな所に……」

「そんな事はどうでもいいから、さっさと出すもん出しやがれ」

「何を偉そうに……大体、君は　」

「ごちゃごちゃごちゃごちゃと、うるせえんだよー！」

「ひいっ！」

男はあからさまに怯えている。

オレはこういう奴が嫌いだった。相手を根っこから認めようという奴は、見ていて心底ムカついてくる。八宵がちゃんとやった事を、この馬鹿野郎に何度聴かせても無意味なら、こんな奴とは早々に別れた方がいい。

こんなムカつく奴は、本当に一発ぶん殴ってやりたくなる。

「……ま、そういう事。じゃ、褒賞金をいただくこうか？」

「わ、分かったよ……。全く、最近のガキはこれだから……」

ブツブツと呪詛を唱えながらも、男は引き出しの中から紙幣を取り出し、それをわざわざ目の前で封筒に入れ始める。その前に紙幣は何度と無く繰り返し確認していた。

「全部で十五万だ」

「あんがとさん。じゃ、また何か遭ったら一報頂戴ね」

「ふんっ」

男はまた事務に戻り、オレは八宵と外に出た。

「十五万ももらえるなんて……実はこの仕事、割がいいのか？」

「そんな事無いさ。仕事が無い日の方が多いいだからね。今日はたまたまだよ。……でも、やっぱり感謝しとくよ。ありがとな、練磨」

オレはキョトンとしてしまう。

「へ？」

「あなたの力が在ったからこそ、あの大鬼を倒せたんだ。きつと、あなたがいなけりや今頃遺跡の中で、あの骸骨兵と……。だから、あなたには感謝してる。連れてって正解だったよ」

「へへっ、そう言ってもらえると、やっぱり嬉しいな、オレも」

ちよつと得意気になって応えると、八宵も笑って応じる。

「じゃ、今日はウチの奢りだ！好きな物、食べさせてやるよ！」

「ホントかつ！？……って、実はこの世界の食に疎いんだよ、オレ」

「そう言えばあなた、《出人》なんだっけ？　じゃ、ウチの行きつけの店にでも行こうか？」

「おっつ、頼むぜ！」

そう言っただけで立ち寄ったのは、『茶屋』としか記されていない、小さな店だった。戸を開けて中に入ると、奥に向かつてカウンターが続き、椅子が五つしか用意されていない。椅子は固定されておらず、自由に動かせるみたいで、客は一人もいなかった。

「おやじ、いつもの二人前！」

「おつ、お嬢じゃねえか。今日は男引つ掛けて逢引かい？」

「んなに言っただけだ！ こいつはそんなんじゃないよつ。……ま、弟みたいなもんさ」

「照れんな照れんな どうせ誰も構やしねえんだからよ」

「おやじ！」

「はっはっは」

おやじと称されるおっさんは、見た感じヤーさんでもやってそうな強面だった。顔面には切り傷が幾つも走り、左眼には黒い眼帯を付けている。背の丈はオレよりも低そうだったし、格好もみすぼらしい感じがしたけど、何故だか侮れない雰囲気纏っている。まさに「おやじ」って感じの人だった。

「ったく……練磨は気にすんなよ？」

「弟、ね。まあ、八宵は『姉ちゃん』って感じるもんな」

「……真に受けてどうすんだい……」

やれやれと肩を竦める八宵。

「でも、弟分になら、してやってもいいけど？」

「へっ、それはお断りだな。オレは、八宵とは対等の位置に立ちたいからなっ」

「へえ？ そんな事言うんだ？」

半眼になって、やけに胡散臭げに呟く八宵。

言い返せば逆にオレが不利になりそうな感じがしたから、オレはそれ以上の追及を断念する。……こういう時、女は怖いって実感する。

「ほいよ、『いつもの』二人前」

おやじが運んできたのは、……団子と茶だけ。団子は餡子だけの

ようで、何の細工もされていない、シンプルな品だった。茶の方は淹れたてなのか、湯気が立ち上っている。団子の数も五本と、そう多くない。

本当にシンプルイズベストな品だ。

「……八宵、オレがこれだけで満足すると思うか？」

「まっ、そう言わずに食べてみなって」

八宵がニヤニヤと笑いつつ、自分の分の団子を歯で滑らせて口に納める。

……団子は、一つの串に五つ刺さっている。どれも餡子だけのように見える。何か、中に細工でもしてあるのか？

色んな疑惑を考えながらも、一つ、恐る恐る口に運んでみる。

もぐもぐ……ん？

素朴な味だった。何の味付けもされていない、調味料の類さえも感じられない、純然たる餡子だけ。その素朴さが、意外な程美味しい！ 思わず、二個目を頬張ってしまう。

「どうだい？ ウチの団子の味は？」 「美味いかい？ 練磨」

おやじと八宵に同時に訊かれて、オレは顔を輝かせて叫んだ。

「うめーよ、これっ！ 何か、自然……って感じだぜ！？」

「どうやら、気に入ってもらえたようだな。お嬢の連れにも分かってもらえたか、この味が！」

「当然！ ウチの眼はまだ曇ってないよっ」

「うめー！」

あつと言つ間に平らげて、 気づいた。

妙に口の中が甘ったるくて、茶を飲んで 少し苦めの緑茶が、また団子に合うのだ。飲み干した直後の何とも言えない快感を貪ると、妙に腹が落ち着いたような錯覚に陥る。

これぞ、団子マジック。侮れない。

「でも、やっぱ一皿じゃ腹が減るな。もっと食いてえよ！」

「あいよ、もう出来上がってるぜ！」

空になった皿の上に、新しい団子が載った皿が載せられ、オレは

瞳を光線が出んばかりに輝かせた。

「いただきます！」

「……あんたもムチャクチャたくさん食べるね。おやじの頭、落ちそうだったぞ？」

結局あの後、二十皿ほど完食して、ストップを掛けたのだ。それにしても……美味かった！

「でも、あれだけ喰っても、千円なんだな」

驚いた事に、団子一皿の値段は五十円。破格の値段だった。

八宵は頬を引き攣らせて、

「千円も、だろ！？……ま、奢るって言ったのはウチだから、文句は言いたくないけどさ」

「え？ 千円でも高いのか？」

「……あんたの世界はどうか知らないけどさ、この世界で千円って言えば、安週給の半分はいくよ」

「マジか！？」

千円、侮り難し……

ともあれ、今日も教会にお世話になる事を決めたオレ達は、砂嵐吹き荒れる荒野を、教会に向かって歩き続けていた。

「思ったんだけどさ……どうして八宵は動物に乗らないんだ？ こんな荒野だと、そういう動物がいた方が楽なんじゃないか？」

雪花や湖太郎を見ていると、こういう場所でも頑張っガンバて走ってこれそうな気がするのだ。そうすれば、きつと徒歩よりも何倍も早く着けるだろうに。

なのに、八宵は渋い顔をした。

「もしかして……八宵、動物が……？」

「嫌いな訳じゃないよ？ 寧ろ、ああいう奴は心を和ませてくれて、ウチは好きだな」

「じゃあ……？」

「……乗れないんだよ」

「へ？」

オレは一瞬、八宵が何を言ったのか理解できず、間抜けな顔をして振り返る。

八宵は砂風を遮るように顔を隠し、ぶつきら棒に続けた。

「ああいう動物に乗ると、どうしても酔うんだよ。……何か、足が地面に着いてないと落ち着かない性質でさ。乗せてくれるのは嬉しいさ、ウチも。……でも、一度乗ると……」

その先は続かなかった。

意外な発言に、オレは終始、眼を点にしたままだった。

八宵の意外な弱点、はっけーん……なんて。

「……言っとくけど、今の話は……」

「他言無用、だろっ？ 分かってるって」

「すつつごい不安だけど、……喋ったら、ぶつ殺すからな」

すつつごい笑顔でそんな事を言われた日には、もう怖くて発言権すら剥奪された気になります……。

日も暮れ、オレは教会で夕飯をご馳走になると、また子供達とはしゃぎ回って、食後の運動をこなした。……実は、蟹頃の時の傷が癒えてなくて、本気で悲鳴を上げそうになった事は、絶対に内緒だ。ふと、風の便りが届いているのに気づいて、そつと開いてみる。

崇華からだった。

内容は、『今、どこにいるの？ 場所を教えてよう』といった簡潔なモノ。

オレはどう応えればいいのか分からず、八宵に訊いてみた。

「ここって、場所的には何て所なんだ？」

「あんたに町の名前教えて分かるのかい？ 一応、さっきの町の名前は城峯だけ。ここはそこから東北に当たる場所だね」

「王国って、どっち方面？」

「城峯から更に南に行った所さ。……何だい？ もうどっかに行っ

ちまうのかよ？」

「それは……」

オレは鷹定たかさだの問題を解決させたい。その気持ちは未だに変わらな  
い。……でも、それが咲希さきの言うとおり世界を滅ぼしてしまうもの  
だとしたら……オレは鷹定のために世界を滅ぼす事になってしま  
う。

口を酸すっぱくして言うてるけど、オレは世界を滅ぼしたいとは思  
わないし、力が在っても行使しようとは思わない。命令されても、  
したくなかった。だけど、それを望んでいる奴がいる。……鷹定を  
見放してでも、世界を守りたいか？ オレは自分にも嘘を吐けない  
人一人救えなくて、世界を守るとか言うのは、偽善へいぜんに違いないし、  
何より説得力も信頼性も無い。愚か者の戯言ひょうげんだ。

だからと言って、そう簡単に世界を滅ぼせるものなのか？ 鷹定  
が望んでいるから、それだけの理由でオレは世界を滅ぼせるか？

……答は否。オレには滅ぼす力は在っても、それを使う意志が無い。  
序ついででに言うなら、覚悟も、そして度胸も無い。

どっちつかずなんだ。世界も、鷹定も、どっちも救えない。優柔  
不断と言われても、オレは何も言い返せない。言い訳しても見苦し  
いだけだ。そんな男にはなりたくない。

この場に鷹定やミヤリ、崇華が向かっている事を知って、オレは  
どんな対応をすればいいのか、未だに分からなかった。

……そりゃ、オレとしては、また鷹定達と旅ができるんだから、  
嬉しいに違いない。だけど、その目的……最終地点が世界の終わり  
だとすれば、否でも悩んでしまふ。オレみたいなガキに、世界の命  
運を握らせるなんて、荷が勝ち過ぎてるんだ。

「……ま、無理には聴かないよ？ そんな深刻そうな顔を見る位な  
ら、聴きたくないしね」

八宵はオレの頭をポンと叩くと、部屋を出て行った。

戸が小さな音を立てて閉まる。

「……そうだよな。もう、決めなきゃいけないんだ」

オレが、自分でできる限りの事を考えて、自分で決断しないとい

けない。大きな岐路きろに立たされてるんだ。選択を誤れば、この後オレは、どうしようもない後悔を懐いたり、悔恨かいこんで悶え苦しんだりするかも知れない。オレの独断で、世界は左右されるんだ。

……だから、オレには大き過ぎるんだよ、問題が。

ちよつと自分が惨めに思えて、しばらく黙考してから、崇華に風の便りを送った。

夜も更け、時刻は大体九時を回ろうという頃。

オレは眠りに就こうとしたのだが……どうしても起きた時の事を考えて、躊躇ためらってしまう。確かオレは、公園で意識を失うように寝たはずである。つまり……最悪、路上に放置されたまま寝ているか、病院にいるかのどちらかだろう。……また病院で目覚める事を考えると、気が滅入めいった。

別に病気じゃないのに病院に行くなんて……嫌な感じた。

そんな事を考えていると、自然と瞼まぶたが重くなってきた、……いい加減、眠りに就こうと考えた。

明日にでも、鷹定達はやって来るだろう。さつき崇華と風の便りをしてしていると、かなり近くまで来たらしい。逢えたら、今日にでも来ると言っていたが……時間も時間だ、今日は諦めて明日に回したのだろう。そう結論付けて、オレは現実の世界へと戻るべく、眠る事にした。

……色んな問題を抱えながら眠ると、頭の中で渦を巻いているよ  
うな気分だった……

20頁 神門練磨の書15

『滅びの王の力』

(後書き)

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます。――(・)――  
これにて『滅びの王の力』編は終幕と相成ります。  
次頁をお楽しみに

教会の表の扉が控えめな音で叩かれた。

時刻は夜半過ぎだ、こんな時間に来訪の予定は無かったはずだ。

ウチは槍 雲峰を携え、背中に小太刀 槍居を差し、警戒に警戒を重ねて教会の扉を開いた。

「誰だい、こんな時間に？」

「夜分申し訳ない。人を尋ねているんだが……ここに、神門練磨なる少年はいないか？」

嫌な予感が、背筋を這い上がってきた。

神門練磨とは、紛れも無く昨日訪れたあの少年の事だろう。その少年を追っている……もし、練磨の正体が知られているのだとしたら、扉の向こう側の男は《滅びの王》を探している、と直結してもおかしくないだろう。

何者だろう？ 気にはなったが、普通の人物ではないと気づいた。《滅びの王》の存在……練磨の事を知って、それもこんな辺境まで追って来たとなれば、並の人間ではないと感じる。

「……あんた、何者だい？」

「故在って話せない。……練磨に、葛生鷹定がやって来たと言えば、通じると思うが」

「……ちよつと待つてな」

葛生鷹定、という名に聴き覚えは無い。

……いや、咲希と練磨の話聴いていた時に、耳に挟んだ記憶がある。確か、鷹定を助けたとか、鷹定が世界を滅ぼしかねないとか……

考えつつも急いで教会の奥の部屋に入ると、布団で眠っている練磨を見つけた。完全に熟睡している。

「練磨、ちよつと起きとくれ、練磨！」

「……すう」

全く起きる気配が無い。……この肝心な時に！

どうしようかと考え倦<sup>あく</sup>ねていると、不意に眼前に小さな人が映った。

「神門練磨に何か用？」

「あんたは……確か、咲希とか言ったね」

「そうだけど……何か遭<sup>あ</sup>ったの？」

「葛生鷹定って奴が来てる」

「……そう。嗅<sup>か</sup>ぎ付けるのが早過ぎるわね……練磨のバカ、どっかで漏<sup>も</sup>らしたわね……」

ブツブツと独り言を吐き始める咲希には悪いけど、ウチも気が気ではない。

「あいつは……何者なんだ？」

「……何故かは知らないけれど、神門練磨が救いたがつてる人間よ」「救う……？ 《滅びの王》の力で、人が救えるのか？」

咲希はフヨフヨと宙を舞うと、足と手を組んで、ゆったりと浮遊する。

「力の使いようによっては、人を救えるだろうし、名の通り世界を滅ぼせるでしょうね。……言ったでしょ？ 神門練磨の力は、『全ての術式を理解している』事だつて。こいつなりに言うならば、魔法を全て使えるんだから、使いようは多種多様、千差万別でしょ？ 言い方は乱暴だけど、それさえあれば何だつてできるわ」

……全ての術式を理解している。

そんな事があるとは、思えない。ウチが生まれる前に遭った大戦争の時も魔法が多く使用されたらしいけど、その時でさえも全ての魔法を掌握<sup>しあつか</sup>する人物などいなかったはずである。それだけ術式を理解するのは難しいんだ。簡単な下級魔法……風の便りなどはすぐに頭に馴染むが、それだつて個人差が在るし、それ以上の中級魔法……談話室などは術式を頭に組み込む事だけでも難しく、一般には出回っていない。

その何れもが《魔法使い》……魔法の素質が在る人間しか使えないというのも、難点である。

そんな《魔法使い》でさえも、魔法の全てを掌握する事はできないはずだ。自ら魔法を創り出す事自体、《魔法使い》の中でも何十億に一人という割合だし、術式を理解するのも、やはり限界がある。頭の許容量の問題ではなく、それだけの数の術式を見つけれないのだ。

稀代の《魔法使い》が持っていた術式は、確か四十。……術式の数は未だにどれだけ在るのか定かではないのだが、今現在、その数は百を軽く超えているという説も唱えられている。

そう考えると、練磨は或る意味、地上最強の《魔法使い》と言える。

「……でも、そいつを救うつてのは、世界を滅ぼす事に繋がるんだろっ？」

なまじ咲希の話聞いていたから、こういう事を言える。

咲希は応えず、ウチを見て浮いているだけだった。

「そんな奴を受け入れる訳にはいかないね。……たとえ練磨が救いたがっていても、それが世界の滅びに直結するってんなら、話は別だよ」

もし練磨がそれでもあの男に就いていくと言うなら。

ウチは咲希を見据え、

「……頼みたい事がある」

「何？」

「立会人になつてくれないか？ ……ウチと、葛生鷹定とかいう奴

の

「……」

ウチの腕にも劣るような奴に、世界の行く末を委ねるつもりは更々無い。……そんな奴は、ここで斬つて伏せる！ これ以上、練磨の気を煩わせたくない。……練磨がどんな道を歩むのか、ウチには分からないけれど、世界を滅ぼす道を探るのなら、ウチは……。

「……いいわ。あたしがいた方が、話も通じるだろうし」  
「助かる」

ウチはそれだけ返すと、すぐに玄関に戻った。扉を壊してでも入って来るかと思っただけ、そこまで無作法ではないらしい。

「練磨は何と？」

「あんだ、ウチと一戦立ち会いな。……ウチを認めさせたら、練磨に逢わせてやる」

相手は一瞬沈黙したが、すぐに返答が戻ってきた。

「……分かった」

相手が扉の前から退く気配。ウチはそれが罷でない事を咲希に見てもらい、外に出る。

月夜の下に立つ男は、ウチよりも頭一つ分大きく、妙に落ち着いた雰囲気纏っていた。背後には、長刀を携えた少年と、眠っているのか走平虎に寝そべった少女と、最後に銀色の野渡狼が伏せていた。

「……こりやまた、えらい大所帯で来たもんだ。

この人数で相手となれば、流石のウチでも梃子摺るだろう。……

敵わない、とは思いたくない。

「おーうい、何する気だヤサイ」

「……ここで見極めるらしい」

葛生鷹定が充分に距離を取ってから、腰に佩いていた刀を抜く。

鞘に入れたまま。

「俺が、練磨に相応しいかどうか、を」

「……」

気配だけで、実力が知れた。

ビリビリと空気が振動しているのが分かる……！ あいつ、気力だけでも相当の強さだ。ただ、いるだけの重圧で、ウチは早くも気圧されそうだった。

「……どうすれば、きみは俺を認めてくれる？」

「……それは、自分で考えなっ！」

問答無用で接近し、男 葛生鷹定に、槍術 千突 を放つ！

千突 槍術の基本である『突き』を限りなく速く、そして防御する暇さえ与えずに何度も繰り返す突きの技で、一度ウチの間合いに入れば、そう簡単に脱出はできない。それどころか、急所を狙っている全ての突撃を受け止められるだけでも、体力は根刮ぎ奪われていく。受ける事も避ける事もできなくなった瞬間、勝負は決する。

この技を喰らった者は、繰り出される矛のあまりの突撃の速さに、まるで千本モノ槍が突き出されたような錯覚に陥り、実力の伴わない相手なら、それだけで死に至る技である。

だが、葛生鷹定はそれを全て、鞘に納まったままの刀で受け止めた！

きつ、ぎい、と刃物が擦れ合う閃きが走り、切っ先が月夜に照らされて青白く仄めく。

速い 自らの突きは自負できる位に速いのに、それを更に上回る速度で、男は全ての切っ先を鞘で受け止めていく。尋常じゃない速度に、ウチは驚嘆していた。

そして、  
「ぐツ！」

がぎいいんツ、と火花が散る程に凄まじい速さで、鷹定の刀が槍をすり抜けて、ウチの体に肉薄した。

が、ウチはそれを受け止めていた。千突 の隙間を抜かれる直前、小太刀の槍居を抜いて、防御を始めていたのだ！ それの間合に合わなかつたら、今頃ウチは……

「……俺の 抜刃 を受け止めるとは」

槍居に走る衝撃を殺しつつ、また距離を取って男を見やる。……息一つ乱れず、あくまで平常心のまま、ウチを見て鞘に納まったままの刀を構え直す。

「……あんた、いったい……？」

大鬼に負けたウチが言っても説得力は無いけれど、男の強さは尋常じゃなかった。あれだけの防御を呼気一つ乱さずに受け止めきる

など、人間業じゃない。……自分の力を過大評価し過ぎたかも知れない。けれど、あの技を完全に受け止められたのは、初めてだった。現に、あいつには全く外傷が無い。……手応えも感じなかった。……強い。心の内で、正直に思った。ウチじゃ、敵わないかも知れない。

「だけど、ウチだつてここで退く訳にはいかないんだ！」

「……あんたにや悪いけど、本気でいかせてもらうよ？」

「できれば、これ以上は戦いたくないんだが」

「吐かせ！ 勝負はこれからだよ ツ！」

男に先手を取るべく、今度は槍居を使って、その首を 千突 を放つ！

そして、今度は槍居を使って、その首を 取る！

男は刀を鞘ごと構え、ウチに対向する。

「ならば 俺も本気を出さねばな」

瞬間、鷹定の姿を見失った。

次の瞬間には、腹に強烈な衝撃が走つて、前に走っていたはずなのに視界がどんどん後ろに流れていき、 教会の離れである小屋にぶつかつて、大きな衝撃が音を伴って月夜に響いた。

「か……あ……？」

腹に衝撃が走つた後、鈍痛が全身に響き、動けなくなった。立ち上がれない……きつと、大鬼と戦った時に受けた傷に響いたのだろう、鈍痛に混じつて激痛が走る。

見えなかつた。分かつたのは、鷹定がさつきウチが立っていた場所に立っている事だけ。刀は、既に腰に納まっていた。

「ヤサイすげ〜な〜。流星は、《蒼刃》って呼ばれるだけの事はあるよな〜」

少年が気怠げに呟いたのが、ここまで聴こえてきた。

《蒼刃》……？ どこかで聴いたような気がするが、どこで聴いたか思い出せない。

葛生鷹定はウチを見下ろして、 手を差し伸べてきた。

「大丈夫か？」

「ッ」

瞬間、頭の中が沸騰ふっとうしそうになった。

屈辱くつじやくだ！

ウチはその手を払い除のけ、軋きしむ体を押し立て立ち上がった。

「敵に情けを掛けられる覚えは無いよ。……っ」

「っ」と

蹠めい踵しやういて倒れ掛けたウチの肩を両手で支え、防いでくれた。  
それも、屈辱くつじやくだった。

ウチはその手すら払い除けて、苛いら立たしげに毒づく。

「……逢あわせてやるよ。付ついて来な」

「あ〜と、一つ、いいか？」

長刀たさなを携たえた少年が手を挙げてウチら呼び止める。ウチも葛生かさい鷹定たかさだも振り返って、その姿を捉える。

「何だよ？」

「あ、おまえじゃなくて。ヤサイ。おまえ」

「……俺が、何だ？」

「一度、オレと手合わせ願いたいね」

「はあ？」

鷹定ではなく、ウチが素すつ頓狂とんきやうな声を上げていた。

「あんたら、仲間じゃないのかい？」

「仲間さ。……でも、戦ってみたくなつた。ヤサイ。オレと戦つてみるよ」

「……今はそんな事をしてる場合じゃ」

「大丈夫大丈夫。どうせメンマはまだ起きねえよ。スイカと同じで、

朝になるまで、な」

「……」

少年は鷹定に歩み寄り、背中に携たえた長刀ながたの鯉口こいぐちを切る。

「……本気なのか、矛槍むやり」

「あたぼーよう。……本気で来ねえと、オレもマジで殺しちまうかもよ？」

矛槍少年は歌舞伎役者のように右足を前に出し、踏ん張るように膝ひざを少し折ると、上体を前のめりに倒す。

「鉞まさかりの構え」

矛槍が呟つぶやくのが聴こえ

鷹定へと一歩で距離を縮め、長刀を抜き様に、振り下ろす！

「鉞の下ろし！」

「ッー！」

鷹定が刀を地面に水平に倒して受け止めようとして

受け止められないッ！

ウチが瞬間的に下した判断を、鷹定は先に読んでいたらしく、振り下ろされた長刀の刀身を滑るように鷹定の鞘が走り、矛槍の胴を殴りつける！

鈍い衝突音がして、矛槍がウチと同じく吹き飛ばされ、空中で姿勢を整えると、何とか長刀を杖代わりに持ち堪えていた。

「速いなー、おまえ。……今の速度に付いて来れるって事は、荒土耕耘も使えねえな……」

そう言つて、矛槍は長刀を振り被ると、先程と同じ構え 体の重心を低くし、相撲取りのように膝と腰を折り、長い刀身を肩に預ける 鉞の構えを取る。

「……効くとも思えねえけど、やってみるか」

「諦めてはくれないのか？」

「オレ、こう見えても諦めは早い方だから、すぐに済むぜ。」

地崩這駆

先程の構えから振り下ろされた長刀が地面に亀裂を走らせ、

そこに太刀風が生まれ、地面を挟りながら鷹定へと向かつていく！

視認できるのは、地面に走る亀裂だけだった。

鷹定はそれを冷静に捉え、避ける素振りも見せずに、瞬間移動したと錯覚する程の速度で、走る斬撃 地崩這駆 を躲し、矛槍へと間合いを詰め、鞘ごと矛槍の胴を振り抜く！

「はっやッ！」

矛槍が長刀を棒代わりに跳び上がり、空中で前転を決め、着地しながら長刀を横薙ぎに一閃！

鷹定も頭上を越えていった矛槍を尻目に、振り返り様に鞘を一閃する！

鮮烈な音が迸り、青白い瞬きが弾ける！

鞘と長刀が拮抗し、二人は刀の間合い越しに見据え合う。

「やっぱ、《侍》は強えーな。……まだ本気じゃねえんだろ？」

「……元《侍》だ。もう《侍》の肩書きは捨てた。それと、……俺を本気にさせるな」

見ていて、確信した。

練磨はやっぱり《滅びの王》で、その力を欲している者がいるという事を。

恐らく鷹定や矛槍ほどの腕が在れば、相手になる者など、そうはいないだろう。それでも《滅びの王》の力を欲するのは、今の自分の力よりも強大な力を使って事を起こそうとしているからに違いない。それが……或いは、世界を滅ぼしてしまう事なのかも知れない。それに……

「《侍》、だつて……？」

鷹定が無言で背中を向けている。

確か《侍》は、王国に二人しか残存していないはずだ。王国で一番榮譽の在る職業と言われている、大戦争時にも最前線で敵国であった帝国の兵士を震え上がらせた猛将……王国史上最強と呼ばれる人の事だ。何年前かに二人の少年が空位だった《侍》の座に就いた事から、確か《双刀》の呼び名に加え、一方を《蒼刃》、一方を《橙刃》と名付けたはずである。

そいつが、この男……葛生鷹定が、《双刀の蒼刃》であると同時に《侍》だつて言うのかっ!?

「本気になってくれねえと、オレも本気出せねえじゃん?」

「……今ので諦めるのではなかったのか?」

「オレ、次の一撃で諦めるなんて言つたか?」

「……」  
あくまで軽薄そうな口調で受け答える矛槍を、硬い表情のまま見据え続ける鷹定。

「別に、本気にならなくてもさ、……その剣、抜かせたいじゃん」  
「……」

ウチは完全に観戦の側に立っていたが、……ウチも見てみたいと思つてしまった。

ウチと戦った時も、あくまで鞘から刀を抜かずに戦い、そして勝利を収めた葛生鷹定。その実力……技術には底知れないものを感じる。だから余計に、鷹定の強さのそこを見てみたいと思ってしまうのだ。せめて、あの刀を抜き身にさせるだけでいいから、本気にさせてみたい。

どちらも初対面の相手だったけれど、この勝負には興味<sup>きょうみ</sup>が湧いた<sup>わ</sup>。どっちが勝ってもいい。ただ、決着までに葛生鷹定に一度でいいから抜刀してもらいたい。

「それとも、本気にならねえと抜いてくれねえの？」

「……無闇<sup>むやみ</sup>に抜刀するなという教えを受けたからな。力試しや興味本位でなら、止めてもらいたいところだ」

「ふうん、根っからの《侍》って事か。……尚更<sup>なほさら</sup>見<sup>み</sup>たくな<sup>く</sup>な<sup>な</sup>った。絶対に抜かしてやる」

葛生鷹定は無言で応え、矛槍が刀に力を込めて、鷹定を一步分、押す。

弾かれるように押された鷹定は、足を巧みに動かして、姿勢を崩さずに刀身の重心を移動させる。半ば倒れ込むようにして矛槍が前進すると、鞘で首を

「ふッ」

倒れ込みながら半回転し、無理な体勢になりつつも刀身を走らせ、首に振り下ろされた鞘を、矛槍は受け止めた。

涼やかな音<sup>すず</sup>が響き、矛槍は横に転がりながら鷹定と距離を取り、立ち上がり際に刀身を横に薙ぐ。

すると、宙を走る刀身から太刀風が発生し、それが飛ぶ斬撃となつて鷹定に肉薄する！

葛生鷹定は咄嗟<sup>とつと</sup>に防御の姿勢に入ったが、鞘で受け止められるような物ではなく、濃紺<sup>がいとく</sup>の外套に切り目が走る！

剃刀<sup>カミソリ</sup>で切ったような傷から赤い筋が飛散し、鷹定は一瞬、苦悶の表情を浮かべると、すぐに平常の難しそうな顔に戻った。

速い……ウチは何とか眼で追える攻防に息を呑んでいた。動きが

機敏過ぎて、眼で追うのがやつとだ。二人とも常人離れた剣技をこなしているんだ、きつとウチが入り込む余地は無い……

「まだ抜けねえか？ あと一歩かな？ ヤサイ、本気で掛かって来いよ。おまえ、この程度の腕じゃないんだろ？」

「……」

鷹定は黙考したように返答せず、鞘に入ったままの刀を、スツと脇に据えた。

「……抜かせるんじゃないよ……！」

低い咆哮を思わせる唸り声を発すると、鷹定は前屈みに姿勢を変え、脇に据えた刀を後ろへ滑らせる。

気配が、変わった。

今までの鷹定の動きは何と言うか……模範的だった。無駄な動きはせず、基礎で固めた動きで一つ一つ矛槍の攻撃を防ぎ、隙あらば攻撃に転じる……剣術の基礎だけで動いていたように思える。その象徴と言えるのが、抜刃。基本中の基本である、相手の体に刀を接触させるだけの剣技。それが彼の必殺技のようだった。ただ、基本技である抜刃でも、彼が使えば一撃必殺の技になるといふ、敏捷さが在るからこそその賜物だ。故に、鷹定は基本技だけで大抵の人を斬り伏せられるのだろう。

その『基礎で倒そう』という、或る意味『余裕』に近い気配を発していた鷹定の気が、落ち着いていた感情が、突如として殺意を剥き出しにしたような、そんな錯覚を感じさせたのだ。

「ついに来たか……！」

矛槍もその闘争心を感じ取ったのだろう、口許に薄い笑みが浮き出していた。

鷹定が腹を抱え込むような前屈みの姿勢で止まっていると、時間が止まったような錯覚が生じる。

いつ動くのか。刀を抜いたらどうなるのか。刀を抜いた鷹定はどれだけの強さを誇るのか……全く分からない。

ウチが生唾を飲み下そうとして、

気づくと、鷹定は矛槍の背後に立っていた。

瞬きもしていないのに、ウチは幻でも見たかのように、立ち尽くす矛槍と、その背後に立ち、一瞬だけ見えた蒼い刀身をしまう鷹定を見た。

「はっや……」

ばしツ、と脇腹から鮮血が飛び散り、長刀を杖にしても立っていないらしくに崩れる矛槍。

鷹定はすぐに振り返り、腰に吊っていた道具袋から包帯などの医療道具を取り出し始めた。

「そのきみ。手伝ってくれないか？」

「は？ あ、ああ。分かったよ」

一瞬、鷹定が何を言ってるのか理解できなかったけれど、すぐに矛槍に駆け寄ると、斬られた部分の服を捲り上げた。見て、また驚いた。

さっきの噴水のような出血は見られず、傷口はほとんど接着していたのだ。それは、矛槍の皮膚の再生速度が早いんじゃないか……見て分かったけれど、傷口がすごく綺麗だったのだ。綺麗過ぎる切断面は、『何とか力』が強く働いて、くっつくようになるか聞いた事がある。

それが今、矛槍の脇腹で発生したらしい。

消毒と軽い止血、包帯を巻くだけで治療は終わってしまった。

「……認めるしか、ないみたいだね」

ウチは腹を括って呟いた。と、

「きみは……」

「ウチ？ ウチは獅倉八宵ってんだ。八宵でいいぜ？ ウチもあんなを鷹定って呼ばせてもらうから」

「……獅倉。きみに、練磨の事を頼みたい」

「は？」「え？」

矛槍とウチの声が同時に発されると、鷹定は月夜の下、煌々と地上を照らす月を見上げた。

「練磨にはこれ以上、俺の問題に付き合わせる必要は無い。そう思ったんだ」

「……それは、世界を滅ぼすかも知れない問題だから？」  
ウチが問い詰めると、鷹定は小さく鼻で笑った。

「……かも知れんな」

「へえ？ 葛生鷹定。心境の変化でもあったのかしらん？ 初めの時と言ってる事が違うじゃない？」

咲希が皮肉っぽく感想を漏らすと、鷹定は視線を地上に戻した。  
腕と足を組んでいる咲希を見て、

「練磨が《滅びの王》じゃない可能性もある。……俺は、それを信じ」

「 神門練磨は《滅びの王》よ」

瞬時に断じられ、鷹定は言葉を失った。

数瞬の間が在ってから、鷹定は口を開いた。

「……何故、分かる？」

当然の質問に対し、咲希はあっさりど、

「《滅びの王》の力が分かったからよ」

「……」  
鷹定は眼を見開いて愕然がくぜんとしていたが、……その顔から驚嘆は薄れていった。

「……そうか」

それだけ返し、鷹定はウチらに背を向けた。

「ヤサイ？」

「……俺の気持ちは変わらない。練磨にこれ以上、俺の問題に付き合わせたくない。……このまま別れるのが、一番だろう」

「顔も見せないで行くのかい……？」

「幸い、ここには練磨の事を思ってくれる奴がたくさんいる。俺の事は、きみらが話してくれば事足りる。……頼まれてはくれないか？ 練磨を守る、と……」

「……」

約束できない程、自分に自信が無い訳じゃない。

ただ、……鷹定を一人にすべきじゃないって、ウチの中で何かが叫んでる。

きつとこいつは、一人で何かしようとしてる。《滅びの王》の力を頼ってしようとしていた事を、自分一人の力で成し遂げようと、そんな無茶を考えてる。それは……危険とか言う前に無謀だ。

でも……それが世界を滅ぼす事ならば、これでいいはずなんだけど……この葛生鷹定って男から、そんな気配は全然しないんだ。寧ろ、世界を好くしていこうという感じしかない。

鷹定は外套の下から煙草タバコ いやタバチヨコというお菓子を取り出すと、口に啜くわえて歩き出した。

「鷹定……あんたは、何をするつもりなんだい……？」

「……国を、動かそうと思ってるだけさ」

そう言っつて片手を挙げると、鷹定は銀色の野渡狼やわたろうに跨またがり、「それにしても、まさかウチの千突ちつきを全部受け止めるとは思わなかったぜ？」

ウチが捨て台詞せりふを吐いた直後、鷹定の動きが止まった。

「……何だって？」

「だから、ウチの取っつて置きの技が」

「千突 と言ったのか？」

鷹定が振り返り、さっきよりも強張こわばった顔で問い質たててきたので、ウチはちよつと怯ひるむ。

「あ、ああ、そうだよ？」

「……」

「何だい？ そんなに強かったかい？ ウチの千突 は、そんなによそこの魔物じゃ太刀打ちできないからねえ」

「……失礼だが、その技はもしや、辻宮つじみやという男から教わらなかったか？」

ウチは驚いた。何故こいつが、辻宮の名を ?

「どうして……？」

「……俺の剣の師なんだ。それだけだ。……もう逢う事は無いだろう」

そう言い捨てると、鷹定は野渡狼に跨って、そのまま走り去ってしまった……。

「……あ、やべー……」

「へ？」

不意に、地面から声がして、視線を向けると、矛槍が寝転がったまま、ポーっとした顔で夜空を見上げていた。

「スイカにヤサイを逃がさないように言われてたんだ」

「……何だい、そりゃ？」

疑問符ばかりだった。

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございますー(・ー・)ー

八宵の書はこれにて閉幕に相成ります。

次章は練磨くんの現実編　つまりはコメディ編と思って頂ければ  
良いかと。

次頁をお楽しみに

……どこだろう、ここは。

目覚めてみて、オレはそこが自宅でも病院でもない事に気づいて、不思議だった。

その後ようやく、

「誘拐ゆうかいされたッ!?」

「違うよう。拉致らちされたんだよう」

「どおうわっ!?!」

ベッドから跳ね起きると、崇華すしつかが正座してオレを見据えていた。

「おはよう、練磨れんま」

「おはようって……ここ、どこ!? 崇華も拉致されたのか!?!」

「うん。わたしは拉致されてないよう?」

「へえ!? じゃあ何だ!? どうなってんだ、オレ!? は?」

「?」

「……練磨、分からないの? ここ、わたしの家。わたしの部屋」

……訳が分からない。

えっと、つまり、オレは……

「おまえに拉致されたのかッ!?!」

「うん、そうだよ」

「『うん、そうだよ』……じゃねエエエエ! は? え? 何

でそうなってんの!? オレ、確か公園で……」

「うん、そうだよ」

「何が!? 何が『うん、そうだよ』なの!? 何でそんなに

満悦な顔してるのおまえはッ?!」

「えう……。練磨、そんなに質問されたら、応えられないよう……」

「あ、ああ、済まん。……訊きくけど、オレは、どういった経緯で、

ここに……?」

オレがちよっと頭の整理を兼ねてゆっくりと尋ねてみる。と、崇

華は昨日の事を思い出そうと小首をコックリコックリと振る。

「えとえと、昨日ね、練磨が帰った後、わたし、ジューズ買いに行つたの。そしたら、公園の中で練磨が倒れてて……ここまで運んだの」

「何でオレん家ちじゃないのツ!? 何で崇華ん家なのツ!? 普通、オレん家が病院に運ばない!? 倒れてたんだろ、オレ?」

「気を失ってただけだもん」

「気を失ってたら不味まずいだろ?! 救急車呼べよ!? 助からなかつたら、どうするつもりだったんだ、おまえは!?!」

「……酷ひどいよう。わたし、練磨を助けたくて……っ」

急に泣き顔になる崇華に、オレはやっちまった! と慌たぐてて慰めに入る。

「うわっ、ごめんっ、崇華、オレが悪かった! そうだよな、崇華はオレを助けたくて……っ」

「……わたし、悪い事、した……?」  
「うぐっ」

仔犬のようにウルウルした瞳で上目遣いされたら、何も言い返せない。罪悪感や悔恨かいこん、良心の呵責かしゃくがオレの心を覆い尽くしていく……。

「……ごめん、崇華。崇華はただ、オレを助けようとしただけなのに……。……てか、そしたら何で崇華の家に運んだんだ……。?」

「だって、練磨、気を失ってたもん」

「気を失ってたら自宅搬入はつしゆいなの!? またおまえは展開的にあり得ない事を堂々と……!」

まあ、気にしたら負けなんだ、きつと。

オレはベッドから降りると、 妙にスペースが余るな、と思つて、気づいた。

「……崇華。オレは今、重大な事に、気づいたんだ……」

「ふえ? 何かな? 何だろう?」

「おまえ……昨日、どこで寝た!?!」

「どこでって……ベッドだよ?」

「どこの!?」

「どこのって……そこ」

崇華が指差すのは、まさにオレが眠っていたベッド。

崇華はパジャマ。オレも、ちよつと大きいけれど、男物のパジャマ。

……頭がグルグルしてる……色々と考えちゃいけない事が回って

……

「……崇華さん。この家に今、家族の方は?」

「えとえと、……誰も、いないよ?」

「おおおおおおおおおおおおおおあああああああああああああああああああ  
あああああああ!」

オレ、暴走。

因みに、崇華を襲っていません。断じて。

落ちていた頃、ようやくオレは今の状況がいかに危険であるかを悟った。

「……崇華。よく……、聴くんだ」声を厳かにオレ。

「うんうん」コクコク頷く崇華。

「……家族の方がいないのに、女の子の家に男を上がらせちゃ

ダメだツ」断言するオレ。

「何で?」ブーイングする崇華。

「ダメなものはダメなの?。いいか!? こんな事したら、そりやあもう……ツ、ダメなんだぞ!」ちよつと理由を提示できないオレ。

「何がダメなの?」キョトンと小首を傾げる崇華。

「それは……つ、……いいか、よく聴くんだ崇華。男はな……狼おおかみになるんだぞ?」狼うし狽えつつオレ。

「カッコいいね!」意気揚々と瞳を輝かせる崇華。

「違アアアアう! そっじゃないだろ!? もっと怖がってくれよ

!? 話が続かないだろっ!?」半絶叫のオレ。

「じゃあ可愛いのか?」キョトンと小首を傾げる崇華。

「じゃなくて! 可愛いか、狼? じゃなくて! 違っだろ? 怖くないの、狼?」疑問符を浮かべつつオレ。

「カッコいい狼もいるし、可愛い狼もいたらいいなっ」「えへへ、とはにかむ崇華。

「『いたらいいなっ』じゃなくて! そういう問題じゃなくて、違っだっつて! ってもういいよ! 狼は止めだ止め! とにかく! 男を部屋に上げちゃダメなの!」ちよつと怒り気味にオレ。

「大丈夫!」自信満々に崇華。

「何がッ!?」絶叫気味にオレ。

「わたし、練磨となら……いいよ?」頬ほおを朱に染めて崇華。

「……」

疲れて、オレは項垂うなだれる。

ちよつと……つか全然だけど、崇華は、ずれ放題だ。もう、どうしようもなく箱入り娘だ。こんな奴を外に放しちゃうならない!

……敢あえて考えないようにしてたけど、これでもこいつ、向こうの世界……オレが見る夢の中じゃ、何年も生活してるんだよな。どんな生活なのかすげー気になるけど、ここまで箱入り娘な奴が普通に生活してる姿が想像できない。……まさか、向こうの世界じゃ一国の姫君なのか?

それもあり得ない想像だけれど。

項垂れたまま、ちよつと顔を上げる事ができなかつた。……不覚にも、頬が熱い。今、顔を上げたら、朱に染まった顔を見せてしまっう。それだけは、避けたい。

オレだっつて男だ。そういう、男と女の事情には興味が無い訳じゃない。……ただ、それを大っぴらにする事ができないだけで、同時に他人に知られたくも無い。思春期真っ盛り。

「……練磨? どうしたの?」

丁度その時、オレの腹が食糧難の警告音を発し、弾はじかれたよ

うに顔を上げた。

崇華と眼が合い、その瞳に笑みが生まれた。

「朝ご飯にしようか」

久し振りに入った崇華の家。

崇華を象徴する匂いが部屋に充満してて、ちょっとドギマギしてしまっ。

……生まれてこの方、女の子の家にはあまり寄らない類なので、こういう時はどういふ対応をすればいいのかわからない。でもまあ、今日は崇華の両親はいないようなので、そんなに緊張する必要は無いだろうけど。

って、言ったら崇華に怒られそうだな。そういう意味では、緊張してるんだけど。

「わたしが何か作ってあげよっか？」

そう言っただけで崇華が台所に立って数分、オレは暇そうにボーっとしていた。

まだ頭が醒めていない、という訳じゃないんだけど……何か、落ち着かない。

向こうの世界じゃ、今は夜中だから鷹定たかさだやミヤリも寝てるんだろうけど……それでも、気になる。もしかしたら、もう教会に到着してるんじゃないのか？ そうすれば、何日か振りに鷹定あに逢えるのだ。オレの心も躍り出すというものだ。

……でももししたら、その時にオレは選択を迫られる。世界を取るか、鷹定を取るか……心の中では、もう決まってるんだ。迷う事無く、そっちを選ぶ事ができる。……分かってるんだけど、もう答は決まってるのに、どうしても悩んでしまう。抵抗があるんだ、きっと。分かってても選べない時だって、あるに違いない。

悶々もんもんと考えていると、崇華が台所から帰還きかんした。

「できたよう〜 はい！」

「待ってました！ ……って、これって……グラタン！？」

「そうだよ」

見紛う事無きグラタンが大きな皿一杯に広がっている！ オレの嫌いなパセリを大量に投下して！

グラタン自体は、大好きだ！ でも……パセリが、あの緑色の物体が、オレの天敵だといつは知ってて……！

渡されたスプーンを掴んだまま固まっているオレを見て、崇華がポンと手を打つ。そしてオレの手からスプーンをもぎ取り、パセリを大量に載せたグラタンを掬い上げると、

「あ〜ん」

と、スプーンを口許に運んで来た！

ゴクリ、とオレの喉が蠕動する！

「ちよつ、待つ！ 崇華！ 待ちなさ あづつ！ あづい！ 痛い！ ホカホカのグラタンを あづつ！ 止めて！ スプーンをぶつけ あづつ！ あふつ、あふつ、あふい！ ぱっ、ぱふえふいは……！」

因みに状況説明。崇華の持ったスプーン（ホカホカのパセリグラタンが載った）がオレの口を目掛けて激突！ 熱くてオレが逃げようとしたところを、また崇華がスプーン攻撃を繰り返す！（熱い！）最後、オレの口にスプーンの中身が投入され……パセリの味が仄かに香る……（涙目で死に掛けの顔のオレ）。

グツタリと倒れ込むオレに対して、崇華は満面の笑みを浮かべていた。

「美味しいんだねっ」

「……この顔を見て、んな事言えるのは、恐らくてめえだけだろうよ……」

「じゃあ、あ〜ん」

その時、オレは自身の死を覚悟した。……マジで。

「……じゃあ、すぐそこまで来てるんだな？」

地獄のパセリグラタン（下の方はパセリが無かったから普通だった）を食った後、崇華の部屋に戻って夢の世界の話をする事になった。

「うん。葛生さんもミヤリもすつごく驚いてたよう　　練磨がいるべき場所にいないんだもん」

「そりゃあ、なあ……一度、死んだって連絡が来てるのに、死体が無かったらそりゃ不思議発見だぜ」

死体遺棄つつか何つか……ミステリードラマの殺人犯がよく使う手ではあるな。

……でも、鷹定もミヤリも来てくれるなんて……麗子さんが来なかったのは少し寂しく感じるけど、それは措いとくとして、……やっぱり、嬉しい。死んだという風の便りが来ても尚、オレに逢いに来てくれる……それが、オレじゃなくてオレの力に対してだとしても、やっぱりオレは嬉しい。

「今日には逢いに来るんだろ？……楽しみだよなあ、久し振りに鷹定の顔が見られるんだから……」

「そうだねっ。……二人とも、凄く戸惑ってたよ。驚いてたけど、それ以上に……凄く……」

「ん？　何か言ったか？」

「ううんっ、何でもないよう？　　あ、そうそう、練磨。わたし達、合流したらどうするの？　どこか、向かいたい所でもあるのう？」

言われて、オレはちよつと返答に窮した。

……何度目になるのか分からない位に考えたけど、オレは鷹定を助きたい。それがオレの力　《滅びの王》の力だとしてもだ。それが……世界を滅ぼしてしまう事だとしても、オレは……

「……まずは、鷹定に逢ってからだな。話はそれからでも遅くは無  
いだろ？」

「うん、そうだけど……葛生さんがいないとできない話なの？」

小首を傾げて不思議そうな顔をしている崇華を見て、オレは肯定  
の意を示した。

「じゃあじゃあ、仕方ないよね？ ……でも、楽しみだなあ、やつ  
と練磨と一緒に旅ができるんだもんね！」

「そう言えば、一番始めに逢った日は、あの黒一くろいちに邪魔されたんだ  
つたなあ……」

思い出して、怒りが沸々と湧いてきた。

あいつのせいで、色んな事がムチャクチャになったんだ。折角せつかく崇  
華と逢えたのに離れ離れにされちまうし、鷹定と合流できたかも知  
れないのに、オレは殺されてしまおうし……あいつ、不幸ばっか運ん  
できやがった。

次に逢ったら ぶっ飛ばす。今度こそ、この手であいつを泣か  
してやる！

ちょっと暗い気持ちも混じった顔で決意を固めるが、考えたくな  
い事だけど、あいつのおかげでオレの力が分かったのも、事実とし  
て確かにあるんだ。

……いっそ、分かなければ良かった、とも思ってしまう。

そうすれば、きつと鷹定と逢っても、普通に接せられると思うの  
だ。あの時の関係には、もう戻れないのだろうか？ それは、八宵やよい  
にも言える。

八宵だって、オレをただの《出人でひい》としか見てなかったのに、今  
は《滅びの王》だって分かってしまっている。幾いくら八宵が気にしな  
いって言っても、絶対に気になるはずなんだ。

「でも、好かったよう。練磨が、ちゃんと生きててくれて……」

「崇華……」

グダグダ考えていたが、崇華がはにかみ笑いを浮かべて言葉を掛  
けてくれたおかげで、全部払拭された気がした。

やっぱり崇華は優しい奴だ。いつもは抜け過ぎてるけれど、肝心な時に大事な事を思い出させてくれる、凄い奴だ。だからオレは崇華が好きだし、今もずっと付き合っていていられる。

……まだ、恋人とかの関係は早過ぎると思うから、それ以上の関係にはならないけどな。

「……そうだよな。生きててなんぼだよなっ！」

ちよつと励まし気味な感じで煮え滾る想いを抑え込めると、それでその気持ちとはオサラバだった。

時刻が夕方と呼べる時間帯に差し掛かると、オレはいい加減、自宅に帰還する事にした。

「ええ〜？ 練磨、今日は泊まっていけないのう？」名残惜しそうに崇華。

「……あのな。男が女の家泊まるなんて、そんなのは……いけませんっ」ぷいっと顔を背けるオレ。

「何で〜？」未練がましく崇華。

「何でもかんでもですっ！ いけない事なの！ 崇華さんもそれ位分かるでしょ！？」半絶叫気味にオレ。

「……練磨なら、……いいよ？」瞳を潤ませる崇華。

「ダメなものはダメ ツツ！ 最近の崇華さんは、ちよつと羽目を外し過ぎですよ？！ オレもいい加減、箠がぶち壊れますわよ！？」ちよつとお姐言葉に目覚め始めるオレ。

「練磨なら……いいんだよ？」瞳が潤みつつ放しの崇華。

「あああああああああもおおおおおおおお！ オレの理性を死滅させる気か！？ いいから！ 女の子がそんな軽々しく男に靡いちゃいけませんっ！ じゃあな！ オレはもう帰るから！ 変な人を家に上げるなよ！」近所迷惑な位に叫び放題のオレ。

「うん！ 上げないと、思つかも！」自身満々に崇華。

「どつちだアアア！」

と、漫才もその辺にして、オレは間儀家を後にした。

夕暮れの中でもオレの足は速かった。

何より、昨日起こった現象が今日も起こってしまえば、オレの身に危険が……今度こそオレの人生に亀裂きれつが入るだろう。それだけは避けたいのだ。

急ぎ足で帰宅すると、居間を横切る時に母さんを見かけた。

「あ、母さ」

「……そうか。練磨も、大人になったんだな」

「へ？」

居間に入ろうとしていた足が止まり、中を覗のぞき込んでみると、父さんも座り込んでいた。二人で何か話しているらしい。

ちよつと気になったので、耳を敬そはたててみる。

「そうなの　今頃……あんな事やそんな事を……」

「ふうむ。母さん、今日は赤飯だな。赤飯を炊こう！」

何を話しとるんだ……？　何故に赤飯を炊く……？

「練磨も、隅に置けんな、全く。……まあ、父さんは気づいてたがな！」

「そうねえ。練磨つたら、気づかない内に成長していたのよ。心も……体もね」

「あの……もしも？　何を話していらっしやいますか？」

オレがそろそろと居間に入ると、二人の好奇の視線が一拳に押し寄せる。

「あら、お帰りなさい、練磨」　妙に上機嫌な母さん。

「よく帰ったな、練磨。……さて、まずはその武勇伝を聴かせてもらおうか？」　したり顔の父さん。

「は？　さつきから気になってんだけど……何の話をしてんだ、二人とも？　オレには全然分からねえんだけど」

二人は一度顔を見合わせると、クスクスと母さんが笑い出した。父さんが少し慥ふせん然としてオレを見据える。

「何も隠さなくてもいいんだぞ？　練磨。父さんも母さんも、充分

承知の上だ」

「だから何の話を……」

「崇華ちゃんと夜を共にしたんだらう？」

「ッッ!？」

頭が暴走開始。

エラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラー  
ーエラーエラー。

認識できません認識できません認識できません認識できません認識できません認  
識できません。

は？ は？ は？ は？ は？ は？ は？ は？ は？ は？ は？ は？

は？ は？ は!？

はあ!？

「なんツツツで知ってるのツツ!？」

「崇華ちゃんから電話が在ってな。不束者ぶつつかものですかこれからよろしく

お願いしますと……何とも礼儀正しい娘こだよ、崇華ちゃんは」

あんんんのバカアアアアアアアア!

「違うって! 誤解だよ誤解! オレはそんな事……!」

「分かっている分かってる。ちょっとやり過ぎた位が丁度なんだよ、  
練磨れんりゃくらしいの男の子はな」

「待てよ!？ オレの弁明を聴け!？ お願いだからそんな眼でオ  
レを見るなアアア!」

逃げ出すように二階へ駆け込んで行くと、ベッドに頭から突っ込  
んで、そのままグチャグチャの心を治そうと頑張がんぱってみた。

…… そりゃ、崇華は可愛いさ。周りから見れば、礼儀正しいし、  
ちょっと天然なところも可愛げが在って人気もあるだろうさ。……  
でも、オレは今、そんな事考えられないし、そんな関係は早い……  
っ！か早過ぎるんだよ! …… いや、そういう奴もいるって話は聴  
くけど、オレはまだなんだって! まだ心の準備が整ってないんだ  
って!

オレだって青少年なんだから、そんな事だって考えるさ! 恥はじも

醜聞しうぶんも気にしないで言うなら、エロ本だつて見るさ！ 見たい時だつてあるさ！ オレだつて青臭いガキだよ！ それで充分かよ！  
「……つて、自分相手に何ムキになつてんだよ、オレ……」  
少しづつ落ち着いてきて、オレは自分の荒々しい呼気が整つてきた事に気づいた。

……きつと、オレは焦り過ぎてたんだ。ちよつとした揺さ振りに動揺し過ぎただけなんだ。うん、そうに違いない。全部、オレの気の迷いなんだ。

それに、オレは確かに崇華の家で寝泊りしたけれど、間違いがあつた訳じゃないしな。……つて、それならどうしてオレは知らない男物のパジャマを着ていたんだらう、つて話になるけど、その辺はスルーだスルー。うん。気にしたら負けなんだ、これも。

そうやって理屈では分かつていても、このまま居間に戻るのには敗北感漂うので、今日はこのまま寝てしまふ事にする。……へんつ、夕食の一つや二つ、抜いたつて……

犬の唸うなり声が腹から聴こえてきた。

「……………はあ」

悲しくなりつつも、オレは階下へと戻る事にした。何か……オレつていつも負け犬の気分を味わつてるような、そんな気がして仕方ないな、最近……

「おお、練磨が戻ってきたぞ母さん。赤飯の準備だ！」

「はいはい。練磨も座つて待つていなさい」

「……何でそんなウキウキになるかな……お願いだから、オレの弁明を聴き入れてくれよ……」

ちよつとゲンナリしつつも、席に着いて赤飯が来るのを待つ。一応、オレは赤飯が好きだから、食わない訳じゃないけど……今はあんまり食いたい気分じゃないな、どう考えても。……いや、こんな状況だからこそ、赤飯を食べて元氣にならなければ！？

とか考えつつも、運ばれてきた赤飯をパクパク口に運ぶオレ。……何か情けねーな、オレ……。

「練磨」

「……父さん？ 何でそんなに深刻ぶつた顔でオレを見る！？」

「孫は三人欲しいな」

赤飯が鼻から噴き出た！

「ごえっほごえっほ！ ……はあ！？ 何だこのヴァカ野郎！」  
咽返むせかえつて涙目のオレ。

「母さんと相談した結果、孫は三人欲しいという結論に達したのだ、練磨！」 踏ぞん返そって父さん。

「何でそんな事勝手に相談してんの！？ おまけにそれを自身満々に言つなよバカ！ いきなり何を言い出してんだおまえは！」 口調が激変のオレ。

「あら、母さんは男・女・男がいろいろ言つたじゃない」「ルンルン」と母さん。

「おお、済まん済まん。それを言い忘れてたぞ」 思い出したように手を打つ父さん。

「オレの話を聴けエエエ！」  
ほのぼのと話が続き、

「練磨。崇華ちゃんに無理させちゃダメよ？ 女の子は皆、とつても繊細せんさいなんだから」

「そつだぞ練磨。おまえが幾いくらハッスルしたつて、できない時はできないモノだ。なあ、母さん」

「うふふ もう、あなたつたら」  
……死あニソウ。トツテモ死ニソウ。

取り敢あえずその後、オレの弁明が二十分続いて、それを一蹴いっしょくする発言を父さんがしやがったから、仕方なく権力を行使して場を納めた。

落ち着いて部屋に戻ると、既に七時半を回っていた。

「……そついや、最近テレビ見てねえよな」

という事に気づいたけれど、特に見たい番組は無い。テレビを付けると、どうしても惰性だせいで見続けてしまうから、あまり見ないよう

にしている。ニュースは食事中に見てるからいいとして、アニメやドラマを全く見ないってのも何だか不思議な感じがする。まあ、昔からそんなに見ないんだけれども。

結局、ノストラさんが言ってた事は嘘だった訳で、世界は今日も平和も平和、何にも無い一日が終わろうとしている。

「って、考えてみりゃ、オレ、勉強何もしてねーな」

そろそろ登校日が近い。……はずだ。最近、夢の世界との往復で完全に時間の感覚が狂くるってしまった。今日は何日だろうとカレンダーを見ると、八月七日だった。向こうの世界に行ってから、まだ一週間しか経っていない事を、今更いまながらに知ってしまう。

確か、十日は登校日だったはずだ。宿題は……少しはやってあるけど、まだまだ残ってる。……ちよっとコレはマジでやばいかも知れない。そろそろ本腰を入れて取り掛おきからねば……！

机に着いて、引き出しを漁あさると、……見たくない紙が出てきた。

「……オレに何を書けって言うんだ」

それは進路希望の紙である。

希望欄らんは三つ。無理に三つ書かなくてもいいけれど、最低一つは書いて担任に見せなければならぬ、気が進むはずも無いプリントだ。

実を言うと、今のオレは高校に行く気すらない。行っても、どこかいいところに就職したいという気持ちは無いし、ただ何と無く就職先が見つからないから、仕方なく高校へ進学する位にしか考えてない。

……そりゃ、できれば好い職に就きたいとは思っけど、具体的に何かしたい訳ではない。夢が無い、と言えば嘘になるかも知れないけど、曖昧あいまい過ぎて実現しようにも、仕方が分からない。

そんな現状でこのプリントを見ると、どうしても破り捨ててしまいたくなる。……そんな事したら、また担任に怒られるんだろうけど。

「将来の夢、かあ……」

ちよつとセンチメンタルに浸つてみる。

昔は、……と言つても数年前なんだけど、小学校の頃はもつと気楽に考えてた気がする。先生の前で堂々と「凄い人になりたい！」とか言つてた記憶も、まだ薄っすらと残ってる。……あれをまた担任の前で言つとなれば、相当の度胸どきようが要いるな……つか、本気で怒られそうだ。

それに、「凄い人」って何だよ？ 何が凄いのか分からねえし。

……自分で言つててバカらしくなつてきて、ベッドに寝転がりながらプリントを手放す。

「……」

向こうの世界なら……と、ちよつと感慨かんがいに耽ふける。

向こうの世界でなら、オレは《滅びの王》って呼ばれてて、色んな奴に狙ねらわれてるけど、面白おかしく生きていける。きっと、生活にはそんなに困らないと思うし、何より楽しそうだ！ 色んな仲間と出逢つて、色んな冒険をして、色んな体験をして……でも、それじゃダメなんだって、自分でも分かっている。

向こうの世界は向こうの世界、現実の世界は現実の世界、と分別しないとダメなんだ。どっちかに入り浸りになつちやいけないだろう。オレの希望としては、向こうの世界で気ままに暮らす、つてのがベストなだけけど、それはきつと望んじゃいけない。楽な方に流されていくのが人間の性とか言うけど、それでも流されっ放しじゃダメだ。どこかで区切らないと、きつとダメな奴になつてしまふ。

だから、オレは向こうの世界で《滅びの王》として生きるためにまず、現実の世界で暮らしていけるようにならなければいけないと思つた。ゲームと同じだ。やるのは楽しいけれど、やり過ぎたらダメになる。それと同じ原理だと思う。

「……でも、なりたい職業つてのも、……ねえよなあ」

何もしないで生きていける程、世の中甘くないのは分かっているつもりだ。だからこのままホームレスになるつもりは無い。ちゃんと

自立して、父さんと肩を並べて働けるようになりたい。自分の生活費位は、自分で稼かせぎたい。自分の事は自分でしたい。

でも、何がしたいのか、オレにはまだ分からない……

トロン、と瞼まぶたが重くなってきた、オレはすぐに電灯を消すと、闇に閉ざされた部屋の中で、静かに意識を沈めていった……

……オレは……何が………したい………んだろう………

………

24頁 神門練磨の書16

『間儀家』

(後書き)

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます——(・——)(・——)

練磨の書16はこれにて終幕と相成ります。

次頁からは再び異世界編に突入です。  
次頁をお楽しみに

「あ、練磨れんまが起きたよう！」  
睨まぶたを開けた直後に声が飛んできて、オレは「ふえ？」と間抜けな声を返してしまった。

起き上がると、そこには見覚えのある連中が二人。

「崇華すつか！ それにミヤリも！」

「おはよう、練磨」崇華がニツコリ微笑み、

「うい〜」ミヤリはやる気無さげに生返事。

オレは二人を見て、心底安堵した。戻ってきたんだ、やっと……！ そんな想いが、心の中で灯火のように湧わいた。

妙にポカポカした胸をそのままに、オレは二人に問い掛ける。

「それで、鷹定たかさだは？」

「いねー」

ミヤリが即答した。

即答したけど……オレはちょっと意味を掴つかみかねた。

「いねーって……トイレか？」

「どっか行つちまったよ。……多分、王国に戻ったんだろ」

「え……？」

鷹定が……王国に？

それは……？

まさか……ツ！？

「……自分の問題を、一人で解決するつもりなんだろうね、鷹定は」  
「八宵やよい……？」

戸の前に立っていた八宵がしたり顔で呟つぶやき、オレを見据える。

「鷹定は、世界を敵に回そうとしてるんだろ？ 国を動かすとか言つてたけど、そんな奴の事を考えたって仕方ないぜ、練磨？」

「……待ってくれよ八宵。あいつは 鷹定はなあ！」

「落ち着けよメンマ。……えっと、シシトウ？ できればメンマの

奴を刺激すんなよ」

「あんたはウチを刺激してるけどな！」

八宵とミヤリが睨み合い、瞬間、殺し合いでも始めそうな空気になったため、崇華が止めに入った。

でも……徐々にオレは事態を呑み込めてきて、少しずつ心の淵から落胆色の感情が滲み出てきた。

鷹定は、一人で……

「……練磨」

崇華が心配そうにオレを見つめるので、やっと自分がしょんぼりした顔をしている事に気づいた。

「……まっ、あいつが一人でやるって決めたんだ、オレが口出しできる問題じゃねえよなっ」

空元気だつて自覚してるけど、それでも今はそう思っていたい。

鷹定が、オレを見限ったなんて、思いたくない。

「そいじゃ、メンマ。これからどこに行きてえ？」

「へ？」

「おまえ、《滅びの王》だけど世界を滅ぼさねえんだろ〜？ それじゃ〜、どこ行くんだ？ 世界中がおまえの命を狙ってるんだぜ？」

ミヤリの言葉を聴いて、ハツとした。

世界を滅ぼさないつもりのおレが次に取る行動は、完全に決定していたのだけど、それが無くなってしまって、呆然としているのだ。

世界なんて二の次でいい……そんな風に考えていたオレは、今まさにその問題と正面衝突する破目になったという事だ。

「……でも、世界を滅ぼさないために、オレはどうするべきなんだ……？」

生きてるだけで世界が滅んでしまうのなら、自分の体に就いて調べるための旅に出ればいいだろうし、オレの力によって世界が滅んでしまうのなら、オレの《滅びの王》としての力を制御できるようになれば問題は無くなる。

それに就いてちよつと考えてみたが、  
「……やっぱりオレ、鷹定の事、放つとけねえよ」

世界を滅ぼしてしまうとか、世界を敵に回すとか、そんなの後回しでいい。今は、困っているはずの鷹定を助けてやりたい。急にオレの力が必要なくなつたとしても、きつと役に立つはずだ。世界を滅ぼすだけの力が在れば、どんな事だつて可能にしまうだろう。鷹定がオレの目の前で助力を断つたら、……その時はオレも諦めよう。無理を言つても、逆に迷惑になるだけだろうから。やっぱり、そういう事は面と向かつて話してほしい。そうすれば、オレだつて諦めが付くつてもんだ。

だから今は

「王国に行こう。鷹定を助けに行くんだ！」

それがオレの……きつと今出せるベストの答だつた。

崇華も、ミヤリも、八宵も、皆分かりきつたような顔をしていた。「うんつ、やっぱり練習はそうじゃないとねつ」「嬉しそうに崇華が、ぴよこんつと飛び跳ねる。

「だつりいゝ折角今、王国からここまで来たつてのに、またその道程をやり直すつてえのは……すげー骨が折れるよなゝ……」  
「急に言う割には、人知れず笑みが零れているミヤリ。

「あんたなら、そう言うと思つたよ！ よし、ウチも付いてっ

てやるう！」呆れた顔から一変して、元気よく参戦を告げる八宵。

「おまえら……！」

ちよつと感極まつたけど、何とか堪えて、立ち上がる。

「そうと決まれば早速出発しようぜっ！」

「おう」「崇華が右手を突き上げ、

「ういー」ミヤリが胡乱な瞳のまま、

「任せな！」八宵が元気よく、応えてくれた。

勢いに任せまくりのまま、教会から出ると、

「ちよつと！ ウチにこいつに乗れつての！？」

早速、問題発生。

走平虎の湖太郎が伏せたまま八宵を見上げ、尻尾でペタペタと地面を叩いている、何とも微笑ましい光景を見つつ、八宵が青褪めた顔で続けた。

「ウチは歩いて行くよっ」

「湖太郎、おまえ嫌われてんな。そんなんだから振られるんだよ」  
「ガン、と湖太郎の心の叫びが聴こえた気がした。てか、誰に振られたんだよ？」

湖太郎が沈んだ顔で尻尾と共に顔を埋めてしまうと、崇華が必死になっ

「湖太郎くんはいい子だよっ？ きつと、湖太郎くんも、八宵さんに乗ってほしって思ってるよ！ ね、湖太郎くん？」

「がっ……と潤んだ瞳を八宵に向けるが、八宵はたじろぐだけで意志は変わらないようだった。

「な、何と言われようと乗らないよっ。大丈夫さ、走って追いつけるだろっ？」

「湖太郎の速度は飛脚の八倍を超える」

「はやあッ!? いや、速いのかそれは？ 基準が分からん」

「ミヤリのよく分からないコメントに、オレは思わず突っ込んだけれど、飛脚の速度が分からないオレには、八倍と言われてもイマイチ理解できない。

ただ、八宵はメチャクチャ驚いたのは確かだった。

「こいつは化け物かいッ!?」

「八宵さん……嘘ですよ、嘘。こら、ミヤリ！ 嘘ばかり吐かないの！ 八宵さん、騙されちゃってるじゃない！」

「おいら、そんなに速く走れないよ！」  
「擬人化した湖太郎も崇華と共に突っ込み、その矛先のミヤリは聴こえない振り。」

「とにかく！ ウチは走って行くよ。それだけは譲れないからな！」  
断言する八宵。

「全く、頭が高えんだよ、シットウは」はあ、とため息を零すミヤ

リ。

「殺されたいのかい!？」瞬間、頭が沸騰する八宵。

「済まん、ミヤリ。今、何を言いたかったのかサツパリ分からん」  
小首を傾げてオレ。

「……わたしも全然分からなかったよう」思わず苦笑する崇華。

「……済みません、玲穩さんは普段からこうなんです……」ミヤリを庇護しようとする湖太郎。

何だかよく分からないチームが、ここに誕生した! ……んだろ  
う、きつと。

「……ん?」

何だかんだ言い合っていると、不意に荒野の方から人影が近付いてくるのが見て取れた。

一人ではない。大勢の人間がここへ向かって歩いてくる。……それ  
れも、妙な気配がする。気配とか読める訳じゃないけれど、その人  
達の服装を見て、瞬間、オレは頭が真っ白になりかけた。

頭に天蓋、胸に袈裟、足に草履、手には錫杖。

虚無僧。そう呼べる集団だった。

しゃらん、と鈴の涼しい音色が風に流れて聴こえてくる。

その音に気づいた三人が、虚無僧集団に視線を移す。

「アレって……?」

崇華が口に手を当てて驚いたような声を上げた。思い出したのだ  
ろう、先日の戦闘を。

ミヤリは無言で、背中に吊っていた長刀に手を掛け、掛ける  
だけでそれ以上のモーションはしなかった。

一人、事情を知らない八宵は、八宵なりに異常を察したのだろう、  
握っていた槍に力がこもる。

湖太郎は獣化して、牙を剥き出しにして唸り始める。

オレはと言うと、道具袋からぶっ飛ばしの附石を取り出  
すだけで、構えも取らなかつた。

それぞれがそれぞれの警戒の意を表すと、虚無僧集団も警戒してか、オレ達を囲むようにして、立ち止まった。

「……何の用だい？ そんな大所帯で」

「聴こえないのかい？ 何の用だって訊いてんだけどね？ ウチは」

「……」  
苛立つているのか、低く舌打ちする八宵。

虚無僧集団は合計八人。全員が錫杖を引つ提げ、オレ達の周りを囲むように立ち止まると、一斉に錫杖を振り下ろして、しゃらん、と鈴の音を打ち鳴らす。

「……何なんだい、こいつら？」

「オレも知らねーよ。ただ……うぜーよな」

八宵の質問に面倒臭げに応えるミヤリ。

虚無僧の一人が前進して来た。回りの人と違う部分を探すのに手間取る、無個性の人物。

「……命を貰い受けに来た」

「オレの心臓が激しく脈動する。」

「オレの生存を知った輩が、もうここに？」

考えてみると、ミヤリや鷹定が既にオレの生存を知っていたのだから、あの虚無僧の連中が知っていても何ら不思議じゃないんだ。

虚無僧の男が一人、前に出てきて錫杖を振り下ろす。

「しゃらんっ、」

「邪魔立てすると、貴様らの命も貰い受ける」

「……だとさ、シストウ。おまえ、戦えるよな？」

ミヤリが虚無僧の男の言葉に続いて八宵に話を振る。

八宵は鼻で笑った。

「負ける謂れは無いね。あんたこそ、昨日の」

「オレは大丈夫。……気になんのは、この間の頭目がない事か。」

「……ま、どーでもいいけど」

「……あくまで邪魔立てをする気なら、致し方ない。その命、貰い受ける」

低く重い声でそう告げると、八人の虚無僧が一拳に押し寄せて来た！ 全員が錫杖を振り上げ、一撃必殺を狙ってくる！

「スイカ！ ……湖太郎と一緒に下がってる。メンマ、戦えるか？」  
「任せろ！ オレだって黙って見てる訳にやいかねえだろ！」

握り締めた ぶっ飛ばし の 附石 が力強く感じられる。

一人が飛び掛かって来たのを見て オレは思いつきり顔を殴りつけてやった！

「どおおおっりゃああ！」

ぶうんツ、と拳が唸り、でもきつとオレの拳の威力は蚊ほどのモノだろうな ぶっ飛ばし の力を得た一撃で天蓋がぶち壊れ、あつと言う間に虚無僧が吹き飛ばされていく。

振り切った拳を戻そうとする間に、別の虚無僧が飛んで来て、オレは裏拳で対応しようとしたが、その前に虚無僧の首から上が横に流され、大量の鮮血を巻き上げながら倒れていった。

その後ろには、長刀を携えたミヤリの姿。

「おうい、シシトウ。頑張<sup>ガンバ</sup>って薙<sup>な</sup>ぎ倒してくれよ」

「殺<sup>ころ</sup>しちゃってもいいのかい？ こいつら、人間っぽいけど……」

「あいつ、見てみるよ」

ミヤリの視線の先にはオレが顔をぶん殴ってやった虚無僧の姿。天蓋が破れ、その下の相貌<sup>そつぼう</sup>は

「……え？ あいつ……っ！」

生気の無い青白い顔。皮膚<sup>ひふ</sup>が、……腐<sup>く</sup>り掛けている？

「完全な死者かどうかは分かんねーけど、取り敢<sup>あ</sup>えず普通じゃねえわな。……それでも殺す理由が欲しいなら、殺さないと殺されちまうって事でどーだ？」

「異議なし！」

八宵は元気好く返すと、防戦一方だった戦いを一変し、槍と小太<sup>こた</sup>刀による両手攻撃で、一気に二人の虚無僧を斬り殺す！

「ふわ〜……八宵さん、双武士すうぶしだったんだあ……」  
崇華が背後で何か言ったけど、ほとんど聴き取れなかった。  
その間にも虚無僧が襲い掛かって来て、オレは 附石 を握り締たいじめて対峙する！  
虚無僧も一度見て分かったのだろう、迂闊うかつに飛び掛からず、錫杖を振り回してくる！

握り締めた附石を的確に狙ってくる錫杖を躲かわし、懐ふところに潜り込んで  
「必 殺！ ぶつ 飛べアツパー！」  
効果音付きで虚無僧の顎あごに 附石 の威力を伴ともなった拳を叩き込み、  
技名どおり頭を搗かち上げるように叩き上げる！

虚無僧の天蓋が吹き飛び、それに合わせるように虚無僧の体が天高く跳び上がり、無様に地面へと転がり落ちる。すぐに立ち上がらない事を祈りつつ、次に向かってくる者へと注意を向ける。

と、その時には既に虚無僧の集団は一人だけになっていた。  
残りの七人は全員、死ぬか倒れるかして、即座に動ける者はいなかった。

「誰の命で動いてるんだ、おまえ？」  
虚無僧の男の首筋に長刀を這はわせ、ミヤリが尋ねる。

隣では八宵が槍と小太刀を構えつつ、男の背後に回って逃げないように見張る。

連携を取るのが上手いなあ、と思わずにいらなかった。

「……知ってどうする？」

「知ってから考えるさ」

「……我ら世界最高執行機関に逆らった事、後悔こうかいするがいい」  
「なに？」

言った直後、男は懐から短刀を抜き、自害する直前、ミヤリが短刀を蹴り上げてしまい、短刀はどこかに素っ飛んでいった。  
「世界最高執行機関？ 何だそりゃ？ ぜひ教えてもらいてーなあ？」

「……………」  
男はミヤリを見上げ、不意に口の端を引き上げて歪な笑みを浮かべると、ギョルツと白目を剥き、引つ繰り返って口から泡を噴き始めた。

……もう、人間として機能しなくなっていた。

「そいつ……………」

「世界最高執行機関……………？ 王国の事か？」

八宵が横から口を挟んで、ミヤリに声を掛ける。

ミヤリは行き場の無くなった長刀を鞘に納めると、思案気な顔でもしているのかと思つたら、気怠げに欠伸を浮かべていた。

「知んね。……ま、碌な機関じゃあねえわな」

「見りゃ分かるよ、ンな事。……問題は、何を狙つたか、じゃないかい？」

ミヤリと八宵が会話を進める中、オレは疑問を懐いた。

「狙いはオレじゃないのか？」

「……………あいつらに《滅びの王》の生存を確かめる術が在ったとしたら話は別だけどよ、あいつら、『《滅びの王》の命を貰い受ける』とか言つてねえだろ？ あくまで、『その命、貰い受ける』だから《滅びの王》を狙つたつて言うのは正確じゃない。寧ろ、後ろを狙つたんじゃないか？」

「後ろ？」

ミヤリに言われたとおり振り返ると、そこには教会の姿。

教会を狙つたのだと、ミヤリは言いたいのか？

「でも、どうして？」

「知るかよ。知つてたら苦労しねーよ！ ……あいつら、『滅びの王』にも平然と命を投げ出してくるんだ、碌な奴じゃねえよ。それだきやー確かだな」

「……………」

オレが狙いじゃなけりや、どうして教会を狙つたんだ？ あいつら、世界を救うためにオレを狙つてきたんじゃないのか？ 世界を

滅ばさないために、オレを殺そうとしたんじゃないのか？

どうしても解けない謎に、オレは頭を捻り続ける。

「……世界最高執行機関、か」

大仰な組織名ではある。……そんな奴らが、《滅びの王》以外の何を狙うと言うのだろう？ それとも、名前だけの組織なのか？

「やっぱり、そうだったんだ……」

「へ？」

崇華の思わぬ一言に、全員の視線が集中した。

誰も何も口にしない中、オレが代表して問い掛けた。

「な、何が？」

「……さっきの虚無僧の人達、【世界の終わり】の一員だと思う」

「……【世界の終わり】？」

八宵が一同を代表して質問を重ねる。

崇華は小さく頷いて、八宵に視線を投じる。

「……わたしも詳しくは知らないんだけど、大戦争の発端は、……

あくまでわたしの推測なんだけど、大戦争を『運営』してたのは、

【世界の終わり】だと思うの。そういう噂も在るし……」

「大戦争を……運営？」オレが鸚鵡返しに尋ねる。

「帝国を騒けたのが、その組織だって言いてえのか、スイカは？」

怠くなったのか、ミヤリがその場に座り込む。

「帝国をその気にさせただけじゃない。王国に抗戦を提示させたのも、共和国を静観させたのも、全部だよ。【世界の終わり】は、

この世界を運営しているの。……ううん、完全には掌握できていないみたいだけど、確実に世界に干渉できる力が在る組織なの」

「……んな奴ら、反則じゃないのか？」

世界に干渉できるって……それも、帝国に王国、共和国と、三つの国を思うがままに動かせるなんて……、ハッキリ言って異常だ。

……でも、そんな奴らがいるとすれば、オレの力を狙ってきてても、不思議じゃない気がする。どんな力も行使できるのなら、オレを捉える事も、オレを殺す事も意のままにできるだろう。

そして、組織をより強大なモノにするために、オレの力を利用する事も、考えられる。

「……じゃ、行くか？ 王国に」

「……そうだな」

話も詰まった事だし、そろそろ行動に移すべきだ。

「ウチは走ってくから、さっさと行きな！ すぐに追いついてみせるから、心配要らないよ！」

と、こうしてオレ達一行は、王国へと向かう事になったのであった。

「……そうだ。麗子さんにも伝えとこう！」  
走平虎の湖太郎に跨った状態で、オレは不意にそんな言葉を漏らした。

振り返った崇華が、小首を傾げてオレを見据える。

「何を、かな？」

「オレが生きてた事だよ！ 知らないの、麗子さんだけだろ？ そんなの、何か仲間外れにしているみたいで、オレ嫌だし」

「めでー事するの好きだよな、メンマは」

「……おまえは絶対しなさそうだよな、風の便りとか」

「めでーもん」

「……」

まあいいけど。人の事をあれこれ言うのは好きじゃないしな。

麗子さんに頭の中で構築した 風の便り を送信して、それから前を向く。

たたたつ、たたたつ、と小気味好い走行音を立てて、湖太郎は疾走している。景色に変化はあまり無いけれど、それでも風を切る感覚や全身に伝わる振動、地面の流れ具合から、相当速度が出ているのが分かる。

乗り心地も好くて、ついつい湖太郎の背中を撫でてしまう。

「……八宵さん、大丈夫かな……？」

崇華が不意に振り返って、オレを通り越して背後に視線を投じた。オレも釣られて振り返るが、そこにはどこまでも続いていそうな荒野が広がっているだけで、人の姿は確認できない。

八宵は結局、徒歩の道を選んで、今頃フルマラソンしているはずだ。始めの頃はまだ見える範囲を走っていたけれど、……もうその姿は完全に視界から消えていた。

「大丈夫だろ？ 八宵の奴、体力は在るみたいだったし」

「存外テキストだなー、メンマ」

「てめえにだけは言われたくねえよ！」

と、 風の便り が返ってきたので、開いて聴いてみる。

『こんにちは、練磨くん。きみから 風の便り が来た事に、今凄く驚いてるわ。…… やっぱり、きみは《滅びの王》だったようね。

…… 残念だわ。私は、練磨くんが《滅びの王》であってほしくなかった。…… なんて、今更かしら？ それでも、私に 風の便り をくれた事、凄く嬉しく思ってる。ありがとう』

…… 何か、妙に照れてしまう内容だな、って思った。

次の言葉を聴くまでは。

『一つ、聴きたい事が在るの。…… 何も無かったなら、それに越した事は無いんだけど…… 私にとっては重要な事なの、よく聴いて…… 虚無僧の人達に、出逢わなかった？』

一瞬、背筋がぞわつとして、まるで冷たい手で撫でられたような錯覚を感じた。

『きみを一度襲った、あの虚無僧達よ。…… 逢わなかったのなら、今からでもいいいわ、警戒して。今、そこに鷹定たかさだちゃんと玲穩れいおんくん、崇華ちゃんがいるんですよ？ 彼らから離れないで。きみは、常に狙われてる存在なんだから。…… できれば、また逢いたいわ。場所と日時はきみに任せるから。早く逢える事を祈ってる。返信、楽しみに待ってるわ』

最後に投げキッスの音が聴こえて、 風の便り は切れていった。

…… 数瞬の間、オレは放心したままだった。

虚無僧の出現を、何故、麗子さんは予測していたんだろう？ …… それはやっぱり、崇華と同じで、虚無僧の連中が【世界の終わり】だと知っていたから…… なのだろうか？

分からないけれど、聴いてみるだけの価値は在りそうだった。

頭の中で適当に言葉を繋つなげて、送信。

すると、間も無く返信が来た。

『……【世界の終わり】を知っているのなら、話は早いわ。一応、極秘事項だから他言無用って事を念頭に置いてもらえると助かるんだけど……私が追ってる組織が、それなの。……連中は表の世界にはほとんど姿を現さないから、手掛かりは零ぜろに等しかったのよ。……ちよつと端折はしるけど、【世界の終わり】は何らかの形で、きみ《滅びの王》に接触して来ると、私は睨にらんでいたの。実際、案の定だったんだけどね。……あの後、彼らを追おうとも考えたんだけど、そう簡単にはいかなかった。今は手掛かりを探してる状態なんだけれど……。一つ、気になる事が在るんだけど。練磨くんは、鷹定くんの《滅びの王》の力の使い道を、聴かされたのかしら？ 聴かされていないのなら、……。その時は、また連絡するわ。返信、待ってるわ』

そこで 風の便り は切れていた。

……そう言えば、鷹定が《滅びの王》の力を欲していたのは知ってたけど、結局その使い道は、最後の最後まで聴かされなかったんだ。

聴こうと思えば、今すぐにでも 風の便り を使えば聴けるだろう。……でも、鷹定が敢あえて口に出そうとしなかった事を無理に訊き出すのも、何だか嫌な感じだ。

ただオレは、鷹定が世界を敵に回そうとしている事、国を動かすと言っていた事を含めた内容ぶくを紡つむぎ、送信した。

『……今ので確認が取れたわ。鷹定くんは恐らく……私の推測によれば、だけれど……王国と敵対するつもりよ』

王国と敵対する？

王国は帝国という大きな国を滅ぼす位の強大さを誇る国じゃないか。そんな国と敵対するって……尋常な話じゃない。

国という巨大過ぎる組織に個人で敵対するなんて……想像を絶する話だ。

『これも推測に過ぎないんだけど……鷹定くんは、《贄にえ巫女》の儀式ぎしを止めようとしてるんだと思うの。……練磨くんは知らないだ

るうけど、王国の一部では有名な行事なのよ。王国の官僚……お偉方しか参加できない行事で、世間一般には知られていない、ある種の呪い……儀式があるの。それが 《贄巫女》の儀式」

……思うに、名前からして不吉な感じだ。

でも、それが何だっけ言うんだらう？ それを止めると、王国と敵対する事になるのか？

『《贄巫女》の儀式の発祥は私も知らないの。でも、大戦争以前には無かったのよ。帝国を攻め滅ぼしてから、ある種の密教……表には出せないような忌事に近い儀式を行い始めた。行い始めた理由……それは、鷹定くんに聴けば分かると思うから端折らせてもらっわ。……とにかく、鷹定くんの狙いは恐らく、それよ。儀式を止めて、王国と敵対するつもりだわ』

話が見えない。

麗子さんの言ってる事は、難しいながらも何とか理解できる。……けれど、その話が正しいとして、鷹定の目的が未だに混沌に包まれたままだ。オレの《滅びの王》としての力を使えば《贄巫女》の儀式とやらは止められるだろう。そのまま王国と敵対関係を楽々と結べるのも分かる。ただ、何故、鷹定はそんな事をする必要が在るんだ？

オレには分からないだけで、鷹定には王国を憎んだり恨んだりする気持ちがあるのかも知れない。それは、結局オレには理解できないもので、聴かされてもきつと理解には至らないと思う。……でも、納得させるだけの動機くらいは、オレだって知りたい。

何の説明も無いまま、鷹定に王国と争ってもらいたくない。それだけは、確かなオレの気持ちだ。

『話は続くけど、その《贄巫女》の儀式を探ってみたの。……本当は私の管轄外なんだけど、鷹定くんの狙いでもしそれなら、私なりにちよつと罪滅ぼしをしたかった程度の事だったんだけれど……不思議な事に、ここにも不穏な影を感じたのよ』

「？」

『【世界の終わり】が、一枚噛んでたみたい。詳しい話は、逢つてからしたいわ。……いつ逢えそうかしら？』

ちようど 風の便りが切れた時、オレは二人を見て尋ねた。

「どれ位したら、王都に着けそうだ？」

「ん〜。早くて明日かな。このまま走り続けければの話だけ〜」

「……湖太郎くんは無理させ過ぎだよ」

考えてみると、湖太郎は何日も走りつ放しなんだ。崇華とミヤリを教会まで連れて来た時だって、碌ロクに寝てないに違いない。御者ぎよしゃと違つて、乗り物である湖太郎は走りながら眠るなんてできない。それに、自分の背中に乗って眠っているであろう崇華を氣遣つて走れば、自然と緊張状態が継続されるに違いない。

……オレとしても、これ以上湖太郎には無理をさせたくない。……でも、今はとにかく時間が惜しい。

「ごめん、湖太郎。明日には王都に着きたいんだ。……できるか？」  
背中の毛を撫でながら問い掛けると、湖太郎は不意に足を緩やかに減速させ、

「がう！」

と一声鳴くと、大きく足を踏み込ませ、力強く駆け出した！

「……ありがとな、湖太郎っ」

毛をくしゃくしゃにするように背中を掻き撫で回すと、オレは妙に嬉しい気持ちになれた。

湖太郎も、麗子さんも、皆……我儘わがままなオレに付き合ってくれる。

……それって褒められるような事じゃないけど、逆にオレも皆を信頼してる。オレが《滅びの王》だから付き合ってる、って部分もきつと在るだろうけど、それでも素直に嬉しい。

……今はとにかく、鷹定を止めなければ！ それだけを念頭に置いて……

オレは、湖太郎に身を任せた。

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます。(・|・)|  
これにて練磨の書17は閉幕、次頁からは鷹定の書が始まります。  
少しずつ謎が解けていくはずなので、最後までお付き合いして頂  
たら幸いです。(・|・)|  
次頁をお楽しみに

「……また、ここに戻ってくるとは、な」

王都・軍兵舎。

その中に在る《侍》の執務室へと赴いた俺は、叩扉もせず扉を開いた。

中には十畳ほどの部屋が佇み、どれも渋めの色で統一されているために、自然と厳かな雰囲気醸し出している。中心の奥寄りには執務用の大きな机が一つ置かれ、その肘掛け椅子には、真面目そうな面影を残したままの青年が腰掛けて、視線も上げずに呟きを漏らす。

「無礼だぞ。叩扉も無しに入ってくるとは、どこの部署の者だ。名乗り給え」

「……変わらんな、臣叡」

ピクリと、微妙に表情が変化した事に俺は気づいたが、敢えて気づかぬ振りをしたまま、青年 希塚臣叡を正面から見据える。

茶色の髪は伸ばさず短めに切っており、活発そうな印象を与える髪型だが、決して運動家ではない。やや細めで吊り気味の目のせいで、普段から眼光が強そうに見えてしまう茶色い瞳。身長は俺より高く、もう少しで一八〇に到達するだろう。見た目はとても良く、女性に見惚れられるなんてざらだ。

希塚臣叡。俺と並ぶ《双刀》のもう一人である《橙刃》……、俺と同じ師を持ち、同門であり、……親友だった、と言っべきだろうか。

「……敢えて問おう。鷹定。何故、王国に背いた？」  
生真面目な臣叡の事だ、その疑問が常に胸の中でしこりになっていたに違いない。

俺は扉を後ろ手に閉めつつ、部屋の中に置かれた長椅子の許まで歩きつつ、応えた。

「俺は今まで、一度も王国に背いたつもりは無い」

「巫山戯るな。私はそんな世迷言を聴きたいんじゃない」

「巫山戯てるつもりは無い」

俺は長椅子に腰掛けると、腰に差していた伽雅丸を、低めの長卓の上に音を立てないように置いた。

その間にも、臣叡は仕事の手を休めて俺を問い詰める。

「ならば聴かせてくれ。王国から離脱した訳を」

「……その話をしに来たんだ。訊かれずとも言うつもりだったさ」  
「……」

臣叡は椅子を軋ませて立ち上がり、黙ったまま長椅子まで赴くと、俺に直面するように腰掛けた。

白い着物の上に落ち着いた感じの緑色の毛編みの事務服という格好は、臣叡には似合っていないような印象を与える。こういう奴こそ、もつと若者的な服を身に付けられればいいのに、と思ってしまう。きつと、町に出た途端に声を掛けられるだろう。

「……私は未だに信じられん。おまえが何も告げずに王国を脱した事が。王室が大恐慌に陥り掛けた位だ。……私の一任でその事だけは伏せておいたが、それでも内部の混乱は隠しきれぬモノではない」

「ふ……だが、事実だな」

懐からタバチヨコを取り出して、口に咥える。最近、甘い物を食べる量が少なくなつたような気がする。以前までは、常に口の中に甘い物が入っていたと思うのだが、ここ最近、色んな事が在り過ぎで、習慣付いていた糖分の摂取を怠つていたようだ。

「……臣叡。おまえが《贄巫女》の儀式に就いて、どう思っているのか、それを先に聴きたい」

俺の出した単語に、臣叡は眉を顰める。露骨に嫌な顔をして、それはそれで格好が付いているので、きつと何をしても好青年なんだろうな、と思つた。

「王国の繁栄・発展に欠かせない儀式、といった所か。……まあ、私はあの儀式の反対派ではあるが……それが？」

「止めようと思う」

即答した俺に、臣叡は言葉を失った。……が、俺の返答はどうやら予測済みだったらしい。

「……本気なのか？」

「……ああ。幾ら臣叡でも、止めようとするなら斬って伏せるまでだ」

「……本気、なんだな」

ふー……と重いため息が漏れ、臣叡は組み合わせた指に額を乗せる。

しばらく沈黙が続いた後、臣叡はつと顔を上げた。

「理由を聴かせてもらおうか」

「……臣叡、菖蒲を憶えてるか？」

「ん？ ああ、春原菖蒲だろう？ 憶えているとも、懐かしいな」

「彼女が、今年の《贄巫女》だ」

「……」  
臣叡の顔から血の気が引いていくのが、よく分かる。

……俺も、知った時はこんな感じだった。まさか、嘘だろ？ 信じられない……そんな気持ちで、一杯になり、徐々にその事実を受け止めると……絶望した。

どうして？ 何で？ と今度はどうしようもない疑問を自問する。答など出るはずが無い。すぐに絶望の色が濃くなり……事実として受け止め、諦める。

でも……俺はそれで終わりたくなかった。

「……俺は、菖蒲に死んでもらいたくない。絶対に止めてみせる。そのために、《不迷の森》にまで足を運んだ」

「！ 《西の魔女》に逢いに行っていたのか？ ……それで、どうするつもりだ？」

「色んな事があったが、結論として俺一人で阻止する事にした。……とある奴に逢って、諭されたんだ。誰にも迷惑を掛けないつもり

だ。無論、臣叡、おまえにもだ」

「……」

諭された、と言つても練磨れんまが何か言つた訳じゃない。生き方と言  
うべきか、志しよんに打たれるモノが在り、俺は考えを変えられた。

《滅びの王》という存在の力は絶大だ。それは確かにそうだろう。  
だけど、その絶大な力に頼るだけじゃ、きっと問題の解決には至ら  
ない。……《滅びの王》の力を使えば、菖蒲を救う事ができるだろ  
うし、それ以後の王国の追撃しゆも凌げるだろう。だけど、それでは駄  
目なのだ。

この世界にとってはどうでもいい事件に、練磨を関わらせるべき  
じゃない。特に、これは俺の勝手な我儘わがままだ、そんな事のために《滅  
びの王》は在るんじゃない。《不迷の森》じゃ練磨の力を借りたい  
と言つたが、……それは藁わらにも縋すがる気持ちだったからで、練磨と行  
動を共にしてから俺の考えは変わった。

確かに、誰かに力を借りるのは悪い事じゃない。だけど、この問  
題には練磨を関わらせるべきじゃないと、俺は判断した。

「……《贅巫女》の儀式を止めれば、王国と敵対……謀叛むほんに直結す  
るだろう。それでも、俺は断念するつもりは無い。王国を敵に回し  
ても、儀式を止めるつもりだ。……臣叡しゆいだけには、その理由を知  
つておいてもらいたかった。同門の誼よしみとでも思ってくれれば、助か  
る」

「……私が、ここでおまえを全力で止めるとしたら？」

「無論、俺も……全力で相手させてもらう。……おまえと戦うのだ  
けは避けたいからな、菖蒲を連れ出して、とつと遁とんずらさせても  
らうぞ」

そうする事は無いと分かっているても、臣叡と一戦交える事になれ  
ば……本気で退却を考慮しなければなるまい。ここで争いが起これ  
ば、間も無く王国軍の精鋭達が押し寄せて来るだろう。ここは今の  
俺にとって、敵陣の真只中まっただなかなのだから。

それを承知の上で、臣叡に話をしに来たのは……自殺に等しい行

為だと分かっているとしても、臣叡にだけは分かってもらいたい、という心情からだろう。……自分でも、無理をするようになったものだと実感してしまう。

まるで昔に戻ったみたいだな、と苦笑してしまう。

「話は分かった。ならば私も」

「臣叡。おまえは……来るな。……いや、おまえだけじゃない。誰にも来てもらう訳にはいかない」

俺はタバチヨコを食べきり、懐から二本目のタバチヨコを取り出すと、指に挟んで口許へ運んだ。

「……結果的には王国と敵対する事になっても、やっぱり王国は……俺の故郷こきやにう変わわりないんだ。……それを守るべき《侍》がいなくどうする？ ……臣叡。おまえには王国を守り続けてもらいたい。烏滸おしがましい事を言うようだが、……俺のため、菖蒲のため、そして師のため」

「鷹定……」

「それに、裏切り者……売国奴ばいこくどは俺一人で充分だ。それ以上増やしてどうする？ 《侍》は二人しかないんだ、おまえが抜けたら、誰が王国を守る？ ……だから、頼む。この国を預けられるのは、おまえしかいないんだよ」

俺は立ち上がると、伽雅丸を腰に差し直す。

臣叡は俺を見上げて、不意に立ち上がり、机の許へと駆けた。そこから取り出したのは 《橙刃》と言われる証の靈劍れいけん……舜しゅん天童子てんどうじだった。

滑らかな白鞘に、使い込まれた感の在る柄。……相変わらず刀の手入れだけは欠かしていないようだ。

「約束しろ」

「……何を、だ」

臣叡は息を吸い込むと、俺を睨にらみつけるように見据えた。

「……何が遭つても、菖蒲を守り抜くと」

「……」

俺は一瞬呆気に取られたが、……不意に微笑が浮かんだ。  
やはり、この男になら任せられる。この……大きな国を。  
「なら、俺にも約束してくれ」

「……何だ」

「何が遭つても、この国を守り抜くと……」

臣叡は既にその約束事を察していたように、軽く微笑を浮かべた。  
……きつと、この男のこの笑みを見た瞬間、女性は見惚れるであろ  
う、会心の笑みだった。

「……ああ」

俺は差し直した伽雅丸を抜いて掲げると、臣叡も舜天童子をそれ  
に交差するように掲げ

た。  
二つの刀……《双刀》が交わった時、契約は確かに交わされ

俺は執務室を後にする時、ふと伝えていなかった事を思い出した。  
「臣叡。ようやく師の足取りを掴んだ」

「それは誠かっ？」

臣叡の驚く姿に、俺は共感めいたものを懐いた。……俺も、聴い  
た瞬間、自分の耳と相手の言葉を疑ったものだ。

「帝国領土に足を向けた事が在るらしい。……千突 を使える双  
武士を見た」

「……帝国領土……？ 鷹定、この数日間であちこち見て回ったよ  
うだな……だが、先生の足取りはそこまでだろう？」

ああ、と俺は頷き、思索した。

師……辻宮師父は放浪の旅に出たまま、王国に戻ってこない。……  
……ただ俺達が見ていないだけで、戻ってきているのかも知れないが  
……足取りを掴ませないように名前や姿を変えてると聴いた事もあ  
るが、実際見た事が無いために何とも言えないのが現実だ……。

「あの人も今頃、何をしているのか……そうだな。鷹定、国外逃亡  
する序でに、先生の足取りを追ってみるのはどうだ？ 案外、近く

にいるような気がするぞ」

「……師を探すとすれば、王国軍を総動員しても難しいような気がする。師には色んな後援者が控えているため、隠れ蓑が多過ぎるのだ。かくれんぼなどやらせると、一生掛かっても見つけるのは無理そうだ。」

「……それは、王国から無事に脱出できてからにするさ。済まん、無理に時間を取らせて」

「構わん。……これで二度と逢えないと思えば、まだ足りない位だ」  
臣叡は苦笑を浮かべて、舜天童子を机の脇に置くと、少し寂しげな空気を漂わせた。

「……私もでき得る限りの事をしよう。それ位の手伝いはさせてくれ。同門の誼だと思ってるな」

「……助かる」

俺は深く頭を下げると、臣叡を見て顔を引き締めた。

「さあ行け。私の気が変わる前に。それと、最後に一つ。……先生に逢ったら伝えてくれぬか？先生の故郷は、先生がいつでも戻ってこられるように、いつまでも平和で在り続けています、と」

「ああ。……じゃあな」

パタン、と扉を閉めて、……吐息を漏らした。

来て好かったと思う気持ちと、決意が鈍りそうな気持ちが緋い交ぜになって、不思議な昂揚感に包まれていた。

これで……もう後には戻れない。進めるところまで進んで、それで……

俺は固く眼を瞑ると、……ゆっくりと開いて、タバチヨコを噛み砕いた。

決意は、固まっていた。

軍兵舎を出て、王都内に在る喫茶店に入り、珈琲コーヒーを頼んだ。砂糖と牛乳をたっぷり入れて、甘ったるくする。

不意に 風の便り が届いた事に気づいて、人知れず開けてみる。

『鷹定たかさだ? オレ、練磨れんまだけど』

「 思わず珈琲を嘔き出しそうになって咽返むせかえったが、 風の便り は勝手に続きを紡つむぎ始める。」

『鷹定。……聴きたい事が在るんだけど、いいか? 実は……麗子れいこさんから聴いたんだけど、鷹定、おまえ、《贅巫女にえみこ》の儀式ぎしきを止めようとしているのか? ……もしそうなら、理由を聴きたいんだ。話せないなら、オレは我慢する。でも、話せる事なら……相談に乗れる事だったら、オレにも話してくれよ! オレ、鷹定の仲間だろ? それとも、鷹定はオレを仲間だと思ってってくれなかったのか?』

……違ちがう。俺は練磨を仲間だと思ってる。今も、ずっと。  
「 だけど……違ちがうんだ。仲間だからこそ、言いたくない事だつて、在るんだ……っ。」

『……返信、待ってるぜ? オレは、……鷹定を信じてるから』  
「 そこで 風の便り は切れていた。」

……分かつてる。ここで練磨に理由を話せば、俺の自分勝手な行動に巻き込む事ぐらい。

話したくないんじゃないやなくて、話せないんだ。話して巻き込みたくない。練磨が《滅びの王》だとしても、……それでも、練磨にはまだ、普通に生きていける道が残されてる。それを自ら潰す必要なんて、無いんだ。俺に関わったばかりに王国を敵に回すなんて、馬鹿げてる。それだけは、絶対に阻止せねばなるまい。

分かつてるのに、……俺の心は完全に動揺していた。

「……………」  
甘ったるく茶色い珈琲を飲み干すと、タバチヨコを啜くわえて黙然と  
考え込む。

……俺は、練磨のおかげで、こうして自ら行動を起こせる位に現  
状を考える事ができた。それは、俺にしてみれば凄い成長だ。よう  
やく、自分が何をしたいのかに気づけたのだから。

だからと言って俺の件に練磨を巻き込むのは、お門かどちが違いだ。わざ  
わざ泥沼どろぬまに浸ひからせる必要は、無い。

……やはり話さない方がいい。俺はそう決断すると、喫茶店を後  
にしようとして 風の便り に気づいた。

返信がすぐに来ないから、練磨がもう一つ余分に送ってきたのだ  
ろうか？ 開いてみると、

『こんにちは、鷹定くん。あれから逢ってないから、私は寂しいわ

』  
「……………」  
鈴懸すずかけ

はぁ、と重いたため息が漏もれて、思わず頭を抱える。

そもそも、この女が練磨に口添えしなければ、今みたいに苦悩す  
る破目にはならなかったのに……ちよつと八つ当たり気味に考えて  
しまつ。

『きみ、王国を敵に回そうとしてるんだって？ 《贄巫女》の儀式

を止めるとか？ そこで物は相談んだけど……私にそれを手伝わ  
せてくれない？』

「……………」

手伝わ？ 《贄巫女》を止める儀式を？ 何故？

色んな疑問が浮かんだが、鈴懸は一方的に話し続ける。

『鷹定くんは知ってる？ 【世界の終わり】って組織』

……聞いた事は在る。帝国の背後にいる、と言われていた組織の  
事だ。王国と大戦争を行った時にも、その影がちらついていたと聴  
いた覚えがある。

大規模な組織と聴いたが、実際のところ、どの文献にもそれらし

い組織名は記述されていないし、先人達もそう言った事は何一つ言い残さずに亡くなってしまっている。

謎多き組織ではあるが、王国軍内部ではそのような組織は夢幻という扱いを受け、暗黙の内に調査は中止されている。何より、軍上層部の連中が首を縦に振らないばかりか、申告した兵士を有耶無耶に抹消してしまうという実しやかな噂により、今では誰も調べたがらない、ある種の『禁忌』と化している。

『その組織が関与しているみたいなのよ。』  
《贄巫女》の儀式に、  
ね

……確かに、あの儀式はそういった色の強い存在だ。そういった組織が関与していても何ら不思議ではあるまい。

『だからお願い。私にも一枚噛ませてほしいの。……そうすれば、私も手伝ってあげられるわ。助けたいんでしょ、彼女？』

「……………」  
思わず頭を抱えて卓に突っ伏す。

……この女、全て計算ずくと言う訳か……油断も隙も在ったもんじゃない。

先読みされ過ぎて、どこまでが操作なのか分からなくなってくる。だから関わり合いたくなかったんだ、この女とは。

『じゃあ待ち合わせ場所は王立千万図書館と言う事で……最上階で逢いましょう？ 久し振りに、きみの顔を見たいわ』

そこで 風の便り は切れ、……俺はただただ頭を抱えていた。

### 王立千万図書館。

王都の華やかな印象がそのまま投影している。地上五階・地下三階の巨大さも圧巻ながら、中の様相は重苦しいものではなく色取り取りの色彩が眼に飛び込む。さながら、子供部屋を連想させる造りになっている。

最上階は閲覧室……屋上へと続く短い階段や、子供用の遊具が置いてある空間が広がっている。屋上は当然屋外で、今の時期なら日

光浴をするのに絶好の場所と言える。

昔は臣叡や師に連れられて来た事もあったが……最近は一度、《贅巫女》の儀式に就いて調べに来ただけで、流石に最上階まで来た事は無かった。

刀を差したまま中に入り、階段を踏み締めて最上階まで辿り着くと、手近の本を取って、木製の長椅子に腰掛けた。

「……結局、ここじゃ何も手掛かりを得られなかったんだよね……」  
《贅巫女》の儀式に就いて調べに赴いたと言ったが、その時は全く資料が手に入らず、結局何の成果も得られなかったのだ。……あの時は、一日掛け探したのに成果なしという現実に、心身ともに打ちのめされた、という苦い記憶が残っている。

今取って来た本は剣術の指南書だ。色褪せた、人の垢塗れの汚らしい本。

それだけ色んな人物が、色んな想いで使ったという証だ。

それを浅く読んでみると、こちらに向かつてくる足音と気配を感じて、俺は然程の警戒も無く視線を上げる。

「お待たせ　ちゃんと女よりも早く来てるじゃない　やっぱり、男の子はそうじゃないと」

「……待たせた事は謝ろう。何せ、都内を雪花で走り回っても、これ以上早く来る事はできなかったんだ」

「あら。気づいてたの？」

鈴懸麗子は俺が来る以前から図書館にいた。それを知って尚、彼女の許へ行かなかったのかと言うと、彼女が姿を現そうとしないから、無理に出向く必要も無いと思つての事だ。こんな風に待ち合わせを意識したかったからじゃない。

鈴懸は少し不満そうに口を尖らせたが、俺は無視して話を進める事にした。

「……どう手伝つつもりだ？」

「せっかちさん　少しは私を誘ってみせてよ？」

「生憎、俺にそんな余裕は無い。……できれば、今すぐにでもここ

から出たいところだ」

「じゃあ、私を思っでここに留まってくれてるの？ 嬉しいっ」

「……」

どうしても話を進める気は無いらしい。

俺が立ち上がり掛けて、隣に鈴懸が腰掛けたので、視線を向けつつ、座り直した。

「悪い話じゃないと思うわ。私の狙いも、《贄巫女》の阻止なんだから」

「……どういうつもりだ？ 何が目的で王国に敵対するなど」「王国に敵対するつもりはこれっぽっちも無いの。……結果としては、そうなるかも知れないけど、私の目的はあくまで【世界の終わり】。その組織を見つucker事が最優先事項なのよ」

「……【世界の終わり】が【贄巫女】の儀式を運営している、とでも言っつもりか？ ……仮にそうなら、王室はもう既に……」

「結論から言わせてもらえば、王室に意味は無いの。……王室の一部だけが傀儡だとしても、既に手遅れだと思うわ。今更、《侍》に儀式の取り止めを申告されても、何の動きも無いに違いないわ」

「……王室が既に【世界の終わり】の傀儡だとすれば、臣叢は……」「仮に【世界の終わり】が運営していたとして、きみはどうするつもりだ？ 王室内部にさえ干渉できる相手と、どう張り合っつもりなんだ？」

幾ら彼女が凄腕の間者でも、王国という国と戦おうなんて無理な話だ。賭けにもなるまい。

鈴懸は小さく笑むと、俺の腕に自分の腕を絡ませてきた。豊満な胸が俺の腕に密着する。

「きみがいるじゃない」

「……」

ふざけているとしか思えない発言に、俺は沈黙を返した。

「……確かに俺は王国を敵に回すと言ったが……それは別の意味と言っか……」

タバチヨコに手を伸ばして、口に運んだ。甘ったるい味が舌に広がる。

鈴懸が俺を見つめて、不意に脹れっ面ふくつらになった。

「……それとも、鷹定くんは小さい子しか守れないのかしらん？  
年上の女性は……嫌い？」

「……からかってるだろ？」

「あら。バレたかしら」

「……」

いつか呪のろわれる、と思いながら、俺は腕を振り解ほどいて立ち上がるうとした。

が、腕を極きめられて、立ち上がる事は叶わなかった。

「……離してくれないか？ 時間が無いんだ」

「うっん、時間ならまだ在るわ そんなに焦らずとも、きみなら  
できるわよ。ね、《蒼刃そうじん》さん？」

「……一つ、訊きたい」

「何かしら？ 私に応えられる事なら、何でも構わないわよ 体  
の寸法は秘密だけど」

「何故、俺が《贄巫女》の儀式を止めると分かった？ 俺は、一度  
もそんな事を言った覚えは無いんだが」

ずっと疑問に感じていた。何故、逢ったその日から《贄巫女》の  
儀式の話が出てきたのか。俺の事を即座に《双刀そうとうの蒼刃》……《侍  
》と見抜いてもいたし、彼女には千里眼でもあるのだろうか？

そう思っただけで問掛けると、鈴懸は俺の腕に絡んだまま、しな垂れ  
かかって、甘えるような口振りで告げた。

「女には秘密の花園を持たせるべきよ？」

「……応える気は無いんだな」

「うっふふ それはきみ次第だよっ、鷹定くん？」

完全におちよくってるな、こいつは。

ウンザリした気分で脱力すると、鈴懸は俺の口からタバチヨコを  
摘まみ出し、自分の口に運んだ。

「……ま、いわゆる賭けつて奴ね。私も、初めから知ってた訳じゃないわよ。色々、鎌かまを掛けてみないと分からない事も多いから、ね」

「……」  
どこまでが本気なのか分からないから怖い。

「きみが《贄巫女》の儀式をどうにかするつもりと分かったのは、本当について最近よ。色々と情報を組み合わせれば、自然と導き出せるしね。有力な情報　まず『《滅びの王》の力を借りたい』事。その時期。最後に、きみは『王国と敵対する』らしい……これだけ揃そろつていれば、私じゃなくても分かっちゃうわよ」

「……過小評価だな。分かる奴の方が少なかるう」  
「一応、こう見えて長い間この職に就いてるから、かしら」  
「うふふ、と妖艶ようえんに笑う鈴懸。その笑みには魔力を感じさせるものが在る。俺には悪魔にしか見えない。」

「次は私の番ね。　ずばり訊くわ。菖蒲あやめちゃんをどうやって救うつもり？」

全てはお見通し、と言う訳だ。隠し立てしても無駄だという事は、今までの付き合いで身に沁しみて実感している。

俺は周りから仲睦なかむつまじい恋人に見えるであろう体勢のまま、ため息いきを零す。

「……何の策も無い。こり押しで進める」

「懸命ね。……だけど、【世界の終わり】が黙もくっちゃいないわ。どうするつもり？」

「言っただろ？　策なんて無い。……強行突破しかあるまい」

「……呆れた。それでどうにかなると本気で思ってるの？　……そこで、よ。私が手伝ってあげるって、そついう話」

鈴懸は腕を回したまま、もう一方の手を使って、俺の太腿ふとももの上に「の」の字を書き続ける。

「一人でどうにかなる話じゃないわ。私と、……彼にも手伝ってもられないと、ね？」

「……練磨が本物の『滅びの王』だとしても、俺はあいつの力を借りるつもりは無い。これは、俺だけの問題だ」

「うっん、もうきみだけの問題じゃなくなってる。練磨くんは、もうここに向かっているわ。早ければ、明日には」

「……」

……俺のために、力を貸してくれるんだろう、練磨は。

もう、俺はそんな事を望んでいない。練磨には、『滅びの王』の力を使わずに、平和に暮らしてもらいたい。俺なんかのために、人生を棒に振らせたくない。

だから、もう縁は断ち切るべきなんだ。

「……練磨には悪いが、俺一人でやらせてもらう。……お願いだ、離してくれ」

俺にはもう、時間が残されていないんだ。

「きみは、練磨くんの気持ちを考えて事、あるのかしら？」

腕を離れた鈴懸の瞳を、俺は振り返って窺う。

碧眼へきがんは透き通ったまま、まるで鏡のように俺を映し出す。

「……何の話だ？」

「練磨くんがどうしたいのか、何できみに分かるの？ って話よ」

鈴懸は立ち上がり、俺の前を悠然ゆうぜんと歩いていく。

「練磨くんには練磨くんがしたい事をする権利が在る。それをきみが勝手に決めちゃ、いけないんじゃない？」

「……だが、」

「それとも、練磨くんにきみの考えを強要するのかしら？」

……だが、そうしなければ練磨は……

「少し、頭を冷やして考えてみなさいよ、鷹定くん？ きみ最近、根の詰め過ぎで、考え方が固まってきてるんじゃない？」

「……」

「明日、もう一度ここで逢いませよ？ ……その時、ちよつとは結論が変わってる……かも知れないしね 期待してるわよ、鷹定くん」

言っただけ言っと、鈴懸は階段を下り、姿を消した。

残された俺は、取られたタバチヨコを新たに取り出すと、口に運びつつ、青空を見上げる。

「……練磨の気持ち、ね……」

妙にしんみりする単語だった。

28頁 葛生鷹定の書4

『王国を敵に回す訳』

(後書き)

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます。――(。――  
これにて鷹定の書4は閉幕と相成ります。  
次頁は一頁限りの練磨くん現実世界編です。  
お楽しみに

「湖太郎くん、疲れてたね」

「ああ……できれば休ませてやりたいんだけど、今はそんな事も言つてられないからな。……今度、何か奢おしつてやりたいな」

「湖太郎くんはね、狗尾草ねこじやらしと鯖缶さばかんが好きなんだよっ」  
「目覚めて居間に下りてくると、いつの間にか来ていた崇華すつかと、そんな話を始めた。」

現在、八月八日午前九時前後。

今頃、向こうの世界では、湖太郎が終始走りつ放しの状態で、オレと崇華は背中中就寝タイム満喫まんきつ中だ。……何か、すげーダメな気がするけど、今の内に寝ておかないと明日大変だし、……って、言い訳だな。眠いから寝ました。済みません。

取り敢えずこの件が終わったら、湖太郎にたんまりと鯖缶を食べさせてやるとして、オレは今日中に宿題を済ませようと奮闘ふんとうしていた。

テーブルの上には宿題の山！ 一部は終わったので、隅に追いやつてある。

「ねえ練磨れんまあ。これってどう解くの〜？」

「……あのな崇華。さっきからやってるの、それ全部、中一の問題だぞ？」

向こうの世界の知識は十二分に持つてるくせに、基礎知識が足りないのかこいつは!?

それでも教えてやらねば、崇華はアホのままだ。仕方なく色々教えて破目になるんだけど……

「だから、こつやると、こつなるだろ？」

「ああ〜！ ナルホドナルホドお〜。やっぱり練磨は頭いいねえ〜」

「……だからこれ、中一の問題なんだって……」

解けないと不味いんだって、崇華……

そんな先が見えない勉強会を続ける事、二時間。

「ふにや〜」。もう疲れたよう〜」

崇華がダウン。

斯く言うオレも、ヘトヘトで、ちよつと小休憩を挟む事にした。

この間は午後宿題をやり続けられたのに、今日は気分が乗らないのか、それとも残っている宿題が難し過ぎるのか、一向に進む気配が無いのだ。

冷蔵庫から果汁百パーセントのオレンジジュースを持ち出して、コップにナミナミ注ぐ。

「かんぱーい！」

と、何が乾杯なのか分からない乾杯をして、ジュースを啣る。

「くうー！ うめー！」

キンキンに冷えたオレンジジュースが頭にキて、妙にハイになる。その後もず〜と宿題をやり続け、午後三時になって、ようやく終わりが見えてきた。

「……ふにやあ、疲れたよう、練磨あ……」

「ああ……オレももう限界だ……頭を酷使し過ぎたぜ……」

思いつつ、最後の宿題に取り掛かり、時刻は四時を回った。

「終わった ツツ！」

全ての宿題を消化し、ようやくエンディングが流れるところまでやってきた！

またジュースで祝杯を挙げると、崇華と二人で横になった。

「……そう言えば崇華。おまえは進路希望、何て書いた？」ぼんやりと尋ねるオレ。

「わたし？ えとえと……言ったら、練磨も教えてくれる？」ちよつと期待溢れる崇華。

「えつとな……実を言うとオレ、まだ決めてねえんだよ。だから、崇華の聴きたいな、と思つてよ」苦笑混じりにオレ。

「え？ 練磨、決めてないの？」

少し意外そうな崇華の声に、オレは逆にそれを意外に感じた。

「オレが決めてるとでも思ってたのか？」

「うん。……あ、でもでも、違ってた。ごめん、取り消し取り消し」  
慌てて訂正する崇華。

「……何だよ、気になるだろ？ オレを何にさせるつもりだったんだ？ 言え言えー」乗り気になるオレ。

「えとえと……言っても、怒らない？」凄く躊躇する崇華。

「……オレが怒るような事を言うつもりなのか？」

どんな職業だ、それは。

思っていると、崇華がもじもじと、どもりながら、

「……《滅びの王》……かな？」ポツリと告げる。

「……ほあ！？ オレが、《滅びの王》になる！

？ つか職業じゃねえし！ それにこっちの世界じゃ、なれねえだろおーがアアアア！」怒鳴り口調でオレ。

「ふやあ！ やっぱり怒った〜！」

体を丸めて蹲る崇華に、オレは呆れと共に徒労感を覚えずにいられなかった。

犬のような耳が在れば、きっと垂れているだろう、半泣き顔でオレを見上げる崇華は、素直に言う可憐い。

「……でもでも、練磨は《滅びの王》にならないんでしょ……？」

「そりゃあ……まあな」

厳密に言えば、《滅びの王》にならないんじゃないやなくて、世界を滅ぼさないってだけで、既にオレは《滅びの王》なんだと思う……。

もう準備は整ってる状態で、オレはいつだって世界を滅ぼせる立場にいるんだろう。

それでもオレは世界を滅ぼすなんて事はしない。世界を滅ぼす事になれば、崇華との約束は破棄されたも同然だ。そんなの、男が廃るってもんだ！ 絶対に破るもんか！

「じゃあじゃあ、将来は何になるの？ 《滅びの王》にならないなら、何になるの？」

崇華が瞳を輝かせて問う。

「だから今、それを考えてんだよ……つか、こつちの世界じゃまず、《滅びの王》にすらなれねーだろが」

「えう？ そうなの？」

「……おいおい、無理に決まってるだろ？ こつちの世界で《滅びの王》なんて……」

と、考えていたけれど、絶対に無理、って訳じゃないんじゃないか、って思い始めてきた。

現実として考えれば、無理な話ではあるけれど、試した事も無いのに端から無理だって諦めるのも、何だか嫌な感じだ。

絶対に無理なんて、無いんだ。人間、やれば何でもできるモノだ。為せば成る、だ。

「……とにかく、なる気はねえな。世界を滅ぼしちまうんだよ。そんな事していいと思ってるのか、おまえは？」

「ダメだよ！ 世界を滅ぼすなんて……絶対に、ダメっ」

「だろ？ なら、なっても意味ねえっての」

そおかあ、と変に納得してる崇華。……きつと、こいつの脳内細胞は死滅してるんだな。期待したら悲しい事になりそうだから、あまり深くは追求しないでおこう。

「……練磨、何だかわたしを陥れようとしてる……」

「ンな訳ねーつつの」

心眼を持つてるのか貴様はッ！？

それはさておき、

「オレはともかく、崇華は何になりたいんだよ？」

「えう？ えとえと……は、恥ずかしいなっ」頬を桜色に染める崇

華。

「今更何言ってるんだよ？ オレの前で隠し事なんてできると思ってるのかー？」軽めだけど、ちよいと凄みを利かせてオレ。

「練磨が怖いよう……」オレを見て妙に怯え顔の崇華。

「へっへっへ。さあ、とつと吐いて、楽になっちまいな！」ちよ

つとノリノリのオレ。

「えとえと……練磨の、お嫁さん、……かなつ？」

オレンジジュースが鼻から噴き出した。

「あー！ 練磨、笑った！ 酷いよう！」オレを見て拗ねたような顔をする崇華。

「ごほつ、げほつ、がはあつ……なんつ……はあ！？ 何だそのフアンタステイックな夢は！？ ドリームワールドか！？」半狂乱気味にオレ。

「支離滅裂だよ……意味分らないよ……大丈夫う、練磨あ？」オレを上目遣いに見つめる崇華。

「ためえが意味分からねえよ、だッ！ ……ま、まあいいや。今のは聴かなかつた事にしよう。崇華も、そんな幻想に囚われず、前向きに生きていきなさい」諭すようにオレ。

「……わたし、現実的な事、言ったのに……」やっぱり拗ねた感じの崇華。

「じゃあ、どうするかな……オレの進路希望調査、何て書きゃいいんだよ……」本気で悩むオレ。

「えとえと、立候補したいなッ」手を挙げて崇華。

「何をだよっ？ 何を立候補するつもりなんだおまえはッ！？」思わず突っ込むオレ。

「練磨は、わたしのお婿さんになるのっ」輝かしい笑顔の崇華。

「はいストオオオオオッ！ ダメだって言っただろ！？ そういふ事を考えるには、あんたはまだ早過ぎますッ。もう少し大人になつたら、考えなさいッ」ちよつと頬が熱いオレ。

「……わたし、もう充分大人になつたつもりなんだけどなッ……」崇華が潤んだ瞳でオレを見据え、にじり寄ってくる。

……崇華は、ちゃんと出るべき所は出ているし、女らしい体をしてると、思う……。女の子らしい、そんな空気も身に纏つて……。正直、可愛いとも思う……。ただどッ、オレにはまだ早過ぎるんだッ……！

「 なーんちゃって 」

「 へ? 」

「冗談だよ練磨 　　そうだ練磨。おやつ、食べよう? もう、三時過ぎちゃったけど」

崇華が立ち上がり、戸棚の方へ駆けていく。

……冗談?

本当に、冗談だったのか? ……何か、それはそれで、ちょっと寂しい気もするけど……ま、コレでいいか。コレで……。

「 って、おいおい! ここはオレン家だぞ!? 何故におまえがオレン家のおやつの在り処を知っている! 」

慌てて飛び上がるオレだった。

「 じゃあ、もう帰るねっ 」

五時を過ぎた頃。崇華が自分の分の宿題をバッグに詰めて、玄関へと向かうのを見かね、慌てて追いかける。

「 今日は見送りいいよう 」 振り返って、はにかむ崇華。

「 へ? いやいや、何でだ? 」 思わず問いかけるオレ。

「 ……また、わたしの部屋に來たいの? 」

わたしは、それでもいいけど? という顔をする崇華。

「 ……なら、気を付けて帰れよ? 何か遭ったたら、すぐに叫べよ? 」 食い下がるのを断念するオレ。

「 そしたら、練磨が助けに來てくれる……? 」

「 ちょっと自信が無かったけれど…… 」

「 ああ。任せとけ! 」

「 ……うんっ 」

それじゃ、と崇華は玄関を後にし、オレは居間に戻った。

台所で母さんが晩飯の準備をしている間、オレは寝転がって物思いに耽った。

……進路希望もそうだけど、鷹定の件も考えないと、だよなあ……

…。  
鷹定からは結局 風の便りが届かないまま昨日は眠っちまったから、今日返信が来てる事を祈るしかない。

……鷹定の目的……《滅びの王》の力を使ってまでしたかった事。それが……《贄巫女》<sup>にえみこ</sup>という儀式<sup>ぎしき</sup>を止めるため、そして、それこそが王国と敵対する理由……。

鷹定に拒絶されたら、オレはそれ以上の事はできない。それでも見放す事なんてできない。鷹定は、オレの仲間なんだ。オレの一方的な考えかも知れないけど、……オレは信じていたい。もし、鷹定がオレの力を欲したなら、オレは王国と……《贄巫女》の儀式を阻止するために、敵対するだろう。

……不謹慎かも知れないけど、正直すげーワクワクしてる。

王国と敵対するってのは、オレが一人で日本と戦争起こすようなもんだろうけど、それでも仲間のため、友達を守るためなら、オレは国と敵対したって、構わないと思ってる。

オレは決めたんだ。鷹定……仲間のためなら、国とも戦うって。

「ただいま。……お？ 練磨、もうおねんねの時間か？」

「お帰り、父さん。……まだ寝ねーけどよ。でも、早寝するつもりだぜっ」

そうじゃないと、向こうの世界で寝坊する事になっちゃうからな。父さんは背広姿のまま脱衣所へ向かっていく。

「母さん。風呂は沸いてるのかーい？」声が遠ざかりつつ父さん。「バツチリ沸いてるわよ」 六〇度くらいに「ニッコリと母さん。父さん、入っちゃダメだアアアツツ！」慌てて叫びまくるオレ。

「ん、心配するな練磨。父さん、身を粉にする位に疲れてるんだ、浸かせてくれ」疲れ声の父さん。

「身が粉から液になる！ 液になっちゃうよ父さん！」叫びながら立ち上がるオレ。

「練磨！」父さんの怒声。

「はえッ!?」オレの頓狂な声。

「……男には、行かねばならない時が在るんだ……」妙に超越的な父さん。

「それが今なのッ!? 違つたる!?」裏返つたままのオレの声。

「練磨……父さんの骨は、煎餅せんぺいにして食べてもいい……」それきり聴こえなくなる父さんの声。

「……どんな納骨だよ……」もう疲れて声が出ないオレ。

十秒後、父さんの絶叫が家中に木霊こだました。

「母さん、あの風呂は、いったいなんだね!? 父さん、火傷やけどしちゃつたぞう?」

風呂上りの父さんと、料理を並び終えた母さんと、そして並べるのを手伝つたオレと、三人で食卓に着き、料理を次々に口に運んでいた。

「うふふ あれは母さんの、父さんへの愛の温度よっ」  
咽むせる咽むせる。

咳せき込みながら、どう突つ込むべきか悩んでると、父さんが照れて頭を掻かき始めた。

「そ、そっかあ! 父さん、母さんの愛で火傷しちゃつたよ」

「……」  
咽返つていると、その間に気分が悪くなつてきて、青褪あおせめサメサメ。

「……ま、溺おぼれなくて好かつたよ」

どんな突つ込みだよ! と自分で自分に突つ込んだ。心の中で。

「そつだ練磨。崇華ちゃんとはどうだ? いつ、孫の顔は見られそつだ?」

「べほっ!」

かなり間抜けな声でご飯を嘔き出し、母さんが「あらあら」と言いつつお手拭を持ってくる。

自ら惨めな感じで辺りを拭き終えてから、父さんを見据えて一言。

「何言ってるんだためエエエエ！」オレの怒鳴り声。

「何言ってるんだと言われてもな。父さん、こう見えて、気になりっ子だから、気になり放題なんだよ。」

「どんな表現だよそれ?! 気になりっ子って何!? こう見えてって、どう見えたら気になりっ子じゃないんだよ!? 放題の使い方もきつと違う!」叫び放題のオレ。

「うんうん、練磨も突っ込み方が昔の父さんに似てきたな。やっぱり母さんの子だ」満足気に父さん。

「何で父さんの子って言わないの!? 父さんに似て来たら母さんの子なの!? オレ、誰の子なの!?!」

「心配するな練磨。……母さん、あの話は止めておこう。今は練磨の成長を待って……」

「何? 何の話!? 何をこそこそと話してるのそこオオオオ!?」

「練磨、食事中にそんなにはしゃいだら行儀が悪いわよ?」母さんがニコニコとオレを見やる。

「く……っ、色々突っ込みたい所は山積みだけど、ここは敢えて退こうじゃないか……ッ!」

という訳で、静かな食卓へ戻る事に。

「それで練磨。孫の件だが……」

「てめえがはしゃがせてんだろオオオオオオがアアアア!」

すかさず父さんの頭にチョップをお見舞いし、沈黙させる。

静かな食卓には、父さんの声が一切無い、平和な空気が漂っていた……

「じゃ、おやすみ〜」

風呂に入り、歯磨きも済ませ、宿題も全部終えた日の夜の清々しい事!

こんな日が続けばいいの……と思ったりもするけど、これは昼間の猛勉強の功勞によるモノだ。できればあんな目には二度

と遭あいたくないから、まあ、いつもは続いてほしくないかな。  
部屋に入ると、 ドツと疲れが出て、眠気めまいのために軽い眩暈めまいが  
した。

「やべ……向こうで起こされてるのか……?」  
足下がふらつき、急いでベッドへと向かう。

ベッドに辿り着いた瞬間 ヒューズが飛ぶように、意識が暗転  
した……

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます——(・——)(・——)

今回は一頁限りの現実世界編と相成りました。

ここより現実世界編は無くなり、異世界編をぶっちぎりでお送り致します。

次頁をお楽しみに

「……んじゃ、後は任せたからな」  
目覚めて間も無く、ミヤリが湖太郎に跨またがって去って行ってしまっ  
た。

残されたのはオレと崇華すづかの二人だけ。

「……どうしろと!？」

「えとえと、葛生かさいさんに逢あいに往くんじゃ……?」  
そうでした。

一応、指定された場所……つか、いつの間にか麗子れいこさんが決めて  
くれていて、オレと崇華はそこに向かえばオールオツケー的な流れ  
になっていたりする。

とは言え、オレは王都に来たのは初めてなんで、崇華に案内を頼  
んでるから、ただ付いて行けばいいという簡単さ! 感動で死にそ  
うだネ!

「それで……王立ちよろり図書館ってのは、どこに在るんだ?」

「王立ち・よ・ろ・ず・図書館! だよ。……えつとね、こつち  
こつち」

崇華が歩き進んでいく道を、オレが苦も無く追っていくというこ  
の構図……何だか微妙な感じだな。

何が微妙って、崇華に頼りっ放しってのが、オレの美学に反する  
っつーか……美学って何? って感じだけど、何だか気分が悪い。

ここはオレが先頭切って「崇華、こつちだ!」って感じの光景なら、  
認める。つか、それで行こう! それ以外あり得ない!

……心の中でなら何とでも言えるさ。それができないから、こつ  
ちして困ってるんだろ、オレ!?

と、胸の内むねで腐くさっていると、不意ふいに既視感きしを覚えた。

どこかで見た覚えの在る、……顔。風体ふうていも、一度見た気がする。  
でも、どこかは分からない。分からない……分から、な……い?

パツと振り返り、オレは後ろへ流れていく人物の顔を眼で追った。  
傍そばを抜けていく横顔に、見覚えが、確かにあった！

機械のような何の表情も浮かんでいない、仮面のようにのっぺりした顔……間違いない！

こいつは、あの時の……！

オレは自然と男へ足を向け、その背中を追い始めた。

オレを、殺しそうになった男……そして、殺そうとした虚無僧こむそつを束ねていた、リーダー的な存在の男。

こいつこそが 【世界の終わり】 の人間！

追わずにいらなかった。

逃がすまいと自らに誓い、息を殺して背中を追い続ける！

殺したい程に憎くても、狂くるいそうになる程に我を忘れそうになっても、オレは自我を保ったまま男を追い続けた。

その背中が、建物の中へと吸い込まれていく。

オレは自分の行動に自我の有無を忘れそうになりつつも、追った中にはパーティ会場のような煌きらびやかな部屋が広がっていた。

会食が行われ、あちこちから色んな話が聴こえてくる。政治の云々うん々、先日の件の是非せい、気になる相手の彼是かれこれ。全てがどうでもいい事だったため、オレは何もかも聴き流した。

重要なのは、あの男！ オレは背中が動きを止めた事に気づいて、こっそりと近くまで接近し、耳みみを敬そなたてた。

「……には間に合いそうか？」

男の声。だが、虚無僧を束ねていた男の声とは質が違う。妙に強こ張こった別の男の声だ。

「その件だが……《滅びの王》の訃報ふほうを知らせようと思ってな」例の虚無僧を束ねていた男の声！

「何！？ ……《滅びの王》を、殺したと言っのかね？」強張こった男の声。

「然様うらやま。些細な不手際が在ったようだな、手違いで殺害してしまっ  
た、と」虚無僧の男。

「……空殻よ。このままでは世界最高執行機関の名に瑕きずが付くのでは？」強張った声の男。

「それも致し方ないと存ずる。……だが、《贄にえ巫女》の儀式ぎしきさえ終えれば、事足りる。……何も、《滅びの王》などという存在の力を借りずとも、事が成せる事の証明になろうぞ」

空殻と呼ばれた虚無僧のリーダーが低く笑う声が聴こえてきた。

「……それにしても、こんな場所でこうも機密事項を述べてしまっているのか？　と思ってしまう程、二人とも警戒感無さ過ぎだ。ここがパーティ会場だという事を知らないんじゃないか？」

でも、どうやらこの空殻という男、やはり【世界の終わり】の一人に間違いないようだ！

「……だけど、まだ情報が欲しい。ここで引き下がれば、きっと空殻の居場所が掴つかめなくなってしまうに違いない！　できれば、こいつの行方ゆくえが分かれば……」

思って立ち聴きしていると、不意に声を掛けられた。

「あなた、殺されたいの？」

「っ」

驚おどろいて振り返ると、オレの肩の上に腰掛けた咲希さつきが、退屈そうに足をぶらつかせていた。

「このままだと、あんた見つかるわよ？」

「……分かってる。……けど、このまま引き下がれねえだろ？　やっつと、手掛かりが見つかったかもって時に……もっと有益な情報を手に入れれば、そしたら……！」

「あほくさ」

「なにおう!？」

「ま、あんたが何をしようと勝手だけどね、一言言わせてもらえんなら……その命、大切にしなさいよ？　その命のために、色んな奴が身を預けてきてんだから」

それは……分かってる。鷹定たかさだも、麗子さんも、崇華も、ミヤリも、八宵やよいも、皆、オレを助けようと、必死になって守ってくれた。それ

は、純粹に嬉しい。

でも だからこそ、ここでオレも役立つ事を示したいんだ！  
守られてばかりじゃなくて、ちゃんとオレだって皆の役に立てるところを、見せてやりたいんだ！ 皆に、恩を返したいんだ！

「……ま、あんたを諭した所で、言う事を聴く訳無いしね」

咲希は呆れたようにため息を零し、ふわっと浮かび上がった。

「まっ、せいぜい死なないようにしなさいよっ」

そう言つて咲希が消えると、オレはその事を肝に銘じて、再び空殻の会話を聴こうとして

「ここに闖入者がいるみたいだが、誰の連れ子だね？」

眼前には、いつの間にか巖のように大きな男が立っていた！ そして、背後から空殻と呼ばれていた虚無僧の男が近付いて来る！  
見つかった！ その事実に気づいた時には遅過ぎた。

「ほう？ 小僧、生きておったのか」

「……あんた、黒一とも繋がってんのか？ 黒一も、【世界の終わり】の一人なのか？」

空殻は驚いたように眉を顰めると、大男に目配せし、再びオレに視線を戻した。

「……何を嗅ぎ回つておるのか存せぬが、それを私が教授するとも思つのか？ 私に何の益体も無いのに？」

「てめえ、見てろよ？ 絶対にぶん殴つてやつからな！」

「空殻。この餓鬼は何者だ？ 随分とでかい口を叩くようだが」

大男が尋ねると、空殻は皮肉気な笑みを口許に浮かべた。

「皆はお初にお目に掛かるな。彼こそが《滅びの王》だ」

「何と！ こんな餓鬼がか？ 信じられん……」

ああそうだろうよ。オレだって未だに信じられねえよ。

大男が驚いてるのを無視して、オレは道具袋に手を忍ばせ、ぶっ飛ばしの附石を握り締めた。

今度こそ、この空殻とかいうバカ野郎をぶん殴つてやる！ オレにはそれだけの権利が在るはずだ！

周りにいる男や女は、空殻を合わせて合計四人。一人は強張った声の大男。一人は赤いドレスを身に纏った、厚化粧の女。残りは空殻と、体格のいい、やけに冷えた感じの瞳が特徴的な男が一人。他の男や女はパーティに夢中のようだった。

この場を脱するとなれば、相当の労力を費やしそうだ。

「……小僧。抵抗しようと思念しているのなら、止めておけ。二度も死にたくないだろう？」

「てめえ……！ 調子に乗ってんじゃねえぞ……？」

「室崎。適当に遊んでやれ」

「言われなくても」

大男が一步前進し、オレに掴みかかろうとしてくる！

オレは拳を固め、室崎の手を掻い潜り、顔面に拳を叩きつける

！

めぎよツ、と鼻の潰れる感触が伝わって、大男の顔が仰け反り、そのままパーティ会場を横切る形でぶっ飛び、壁面に叩きつけられると、ようやく動かなくなった。

会場は騒然とし、視線が一気に大男からオレ達へと向けられる。

「……まだ持っておったのか。《背信》め、壊したなどとほざいておったが、また与太話か」

空殻が分からない事を言っつて、騒然とする会場の中から姿を消そうとする。

「待ちやがれ！」

「おい餓鬼」

言われて振り返り、腹に重い衝撃が走って、体が『く』の字に曲がった。

あまりに大きな衝撃に立っていられなくなり、腹に入った拳の先に在る腕を掴んで、そのままずると地面に倒れ込んでいった……

……  
チクシヨウ……こんな所で、眠る訳には……いか、ない……の……  
……に……

意識がオレの意志に関係無く、遠ざかっていった……

……浅い眠りの中、オレは短い会話を聞いた……

「……この餓鬼が本当に《滅びの王》だと言うのか？ その辺の餓鬼と何が違う？」オレを殴って昏倒させた男の声だ……多分、あの冷えた瞳の男だと思う……

「持つてる 附石 は特別な物ね。…… ぶっ飛ばし の 附石 なんて、見た事無いわ」多分あの赤いドレスの女だ……

「……《背信》の言った事が与太ではないとするならば、まず間違いないだろう。一度は死んだ人間、生き返るはずが無かるう？」コレは空殻だ……

「この餓鬼は生かしておくのか？ 貴殿の話では、此奴がいなくとも、計画に支障は来たさないうのだが」大男……室崎だ……

「此奴は隠し玉として匿かくまっておこうではないか。……なに、小僧の力はこの 附石 のみ。これさえ取り上げれば、赤子も同然よ。飼いき殺しておけば、私の計画に支障を来たさぬばかりか、それ以上の結果をも弾はじき出せるというもの」空殻の押し殺した笑声……

「匿かくまうと言つても、場所は在るのか？ 貴殿の書斎にでも幽閉するつもりか？」室崎の皮肉った声……

「牢ろうに閉じ込めておけば、何もできまい？ ……後は頼んだぞ、荻おぎ沢さわ」空殻が立ち去る気配……

「心得た」冷えた瞳の男の名前は荻沢らしい……

「此奴、まだ意識が在るみたいだな。……どれ、今一度私が眠らせてやろう」室崎の興奮した声……

顔面に衝撃が走ったかと思うと、意識が混濁こんたくとした場所へ沈んだ……

「……………」  
目が覚めても、そこは現実の世界……………って、どっちも現実っぽいから、いい加減名称を変えるか……………つまり、日本じゃなかった。

体を起こすと、腹に鈍い痛みが走って、吐き気が込み上げてきた。  
「う……………え」

それ以上体を動かすと大変な事になりそうだったから、慎重に動いて、起き上がらずに寝転がる事にした。石の床の感触が冷たくて、自分の体が熱っぽい事に気づいた。少しだけ気持ちいい。

アレから……………どうなったんだっけ。

鷹定たかさだに逢いあに行くはずが、途中で空殻くうかくを見つけて追っかけて……………んで、こうして捕まった訳だ。

「……………バカみてえ」  
情けなさ過ぎるぞ、オレ。

口の中が切れてたみたいで、喋しゃべったら、ちよつと痛かった。

顔、殴られた覚えが無いのにな。……………もしかしたら、眠ってる間に、あの室崎むろみきとかいう男に殴られたのかも知れない。

こうしてまたオレは仲間の足を引っ張る。……………でも、分かった事もある。

やっぱりあの空殻は【世界の終わり】の一味で、《贄巫女にえみこ》の儀式しきと何らかの繋つながりがある。それだけは確信できる。

……………て、コレももう、麗子れいこさんは知ってるんだよね……………

「はあ……………どうしてオレって奴はこう……………」  
どうしようもないアホさ加減に、ほとほと呆れるぜ。……………オレの事だけだ。

ムシャクシャして、起き上がった。吐き気もしたけれど、それ以上に自分自身の事でム力ついた。

石でできた壁を全力で殴って、  
痛かった。

痛くて泣きそう、……ようやく目が覚めた気がした。

「そいじゃまず、どうやって脱出すっかな……」  
牢屋、には違いない狭い空間。

無論、トイレやバスは付いていないし、当然ベッドや机は無い、質素な部屋だ。在るのは、二メートル程上の小さな格子窓と、その向かいにある小さな鉄扉。鉄扉には丁度大人の目線位の場所に格子窓が付いており、奥を覗いてみると、……角度の関係でほとんど何も見えないけど、眼前には鈍色の石造りの壁。鉄扉を北だと仮定すると、東西の壁の下の方には通気孔なのか小さな穴が開いていた。歩き回る程の大きさは無いんだけど、取り敢えず、考えながら壁をペタペタ触ってみる。感触は冷たくて、オレから熱を奪い取っていく。……まだ体は火照ってて、壁の冷たさが丁度いい感じで気持ちいい。

漫画とかだったら、壁の薄い所を見つけて、掘ったり叩いたり削ったりして、活路を作り出すんだらうけど……生憎、オレの手にはスプーンもメスも無い。

と、思い出した！

ぶっ飛ばしの附石を使えば、どうにかなるかも知れない！  
思って道具袋から取り出そうとして、……道具袋が無かった。恐らく、没収されたんだらう。囚人にわざわざ脱出用の道具を持たせる看守なんていないだらうし。

ガツカリと肩を落として、その場に座り込む。

……天井を見上げて、ため息を吐く。……何だか悲しくなってきた。

「どーすんだよ、オレ……このままじゃ、鷹定に逢えねえじゃんよ……」

時間ばかりが過ぎ去って、何れは鷹定の目的である《贄巫女》の儀式が始まってしまっただらう。そうなれば、手遅れだ。鷹定は一人で《贄巫女》の儀式を止めようとするだらうし、流れるには鷹定は王国に反旗を翻す事になり、……ここからはオレの予想だけど、き

つと鷹定は死んでしまっただろう。

そんなの、嫌だ。オレは鷹定に死んでほしくない。そう思うのは当然だ。……だけど今、それを止める術が無い。

ため息ばかり漏らしていると、小さな囁きが聴こえた。

「あの……お隣さん……ですか？」

は？ と色々な意味で、どう言葉を返せばいいのか分からなくて、辺りを見回すが、……どこにも人の姿は無い。

「咲希か？」

「あたしじゃないわよ」

不意に浮かんできた咲希を見て、妙にホツとした気分になれた。

「おまえは無事だったんだな……」

「当然じゃない。こんな所であんたと心中なんて、死んでも嫌よ」

「……シヤレになってないから、それ」一応突っ込むオレ。

「あの……お隣さん、ですよね？」

声は壁の下方に開いている穴からだった。

覗き込もうと思っても、穴の位置が低過ぎて奥が全く見通せない。だけど、隣に誰かがいるのは確かなようだった。

「てか、どう返せばいいんだ、その問い？ 一応、お隣さんだとは思っただけど……」

「やっぱり、お隣さんでしたか」

妙に間抜けな返答だな、と思った。

何が訊きたいのかサツパリ分からない。何者？

「えっと……あなたは誰ですか？」と訊いてみるオレ。

「菖蒲、菖蒲って言います。春原菖蒲。そういうお隣さんは、どんな名前ですか？」

「ああ、オレは神門練磨。えっと……春原さんも捕まってるんですか？」

声の感じからして、年下のように思えるけど、顔が見えない相手だから、一応敬語で尋ねてみる。

声の調子で分かったのは、それだけじゃない。どうやら女性のよ

うだという事と、若いという事。

……まあ、声だけ若々しい人もいるけど、それは置いておく。

「はいです。でも、捕まってるんじゃないかって、皆さんは身を清めてるんだって、言ってますです」

身を清める？ 牢獄らうごくで？

……新たな悟りでも啓ひこつとしてるのか？

よく分からないけれど、悪い人じゃなさそうだ。

「春原さんは、いつからここに？」

「あはは。菖蒲の事は菖蒲でいいですよ。菖蒲、いつも皆さんに菖蒲って呼ばれてるですから」

「じゃあ……菖蒲……で、いい？」

「はいです。……あ、質問の答がまだでしたね。えと……随分前からいると思うです。一年は過ぎたと思うです」

「一年もここに!？」

年季の入った人だな……。一年もこんな所に閉じ込められたら、気が滅めい入いらないか？

「それを、『身を清める』って言うそうです」

……そりゃ、こんな所に一年もいたら、清められそうな気もするけど……寧むしろ、悶もん々と考え過ぎて、煩ほん悩のうが多くなっちゃうんじゃないか？

でも……一年もここにいると考ただけで、本当に気が遠くなりそうだ。まだ病院の方が、色んな患者さんがいて楽しそうだと思える。今いるこの部屋が、菖蒲のいる部屋と同じ造りなら、オレならどうなるだろう……考えてみて、ゾツとした。どこかで自我が崩壊しそうだと思った。

「大変じゃない？」ちょっと他人事とは思えなかったけれど、他人事のように尋ねてしまった。

「大変でもないですよ。毎日毎日、自分の成長をゆっくりと観察できますですから」

やけにサツパリした答が返って来て、少し驚いた。

……確かに、こんな部屋にいれば、楽しみはその位しかないのかも知れない。

やっぱりオレには無理だ。身が清められる前に狂くるってしまうだろう。

一刻も早くここを脱して、鷹定に逢いに行かなければ！

「それですね、練磨さん。……あなたさつき、鷹定って言いませんでしたか？」

「ふえ？ うん、言ったけど……？」

「それって、葛生かさい鷹定の事ですか？」

思わず壁の向こう側を見たくなくなってしまった。

鷹定を知ってる？ どうして？ 鷹定って有名な奴なのか？

「どうして、鷹定の事を……？」

「ああ、やっぱりタカさんの事だったですか。……タカさん、葛生

鷹定は、菖蒲の幼馴染おさななじみなのです。昔、よく一緒に遊んでましたです」

「！」

「今はタカさん、王国のお偉いさんになっちゃって、もう逢えないと思ってましたですけど……練磨さんの口からその名前が聴けるとは思っていなかったです」

はにかんでるのが目に浮かぶような声音だった。

……鷹定の幼馴染。そいつが……何でこんな所に？

待てよ。『身を清める』って言ったか……？ ……まさか、

まさか！

「……菖蒲。一つ、聴きたい事が在るんだけど……いいか？」

「何なりです」

「……菖蒲は、もしかして《贄巫女》……なのか？」

「はいです。よく分かったですね？ 驚いたです」

……繋がった。

鷹定が《贄巫女》を阻止しようとする理由。

《滅びの王》の力を借りてまで為なそうとする動機。

鷹定は……菖蒲を助けようとして……

って、待て待て。早とちりするな、オレ！

「そもそも、《贄巫女》ってどんな儀式なんだ？」

「えつとですね。《贄巫女》と呼ばれる女の子をまず選別するです。選別された女の子は一年間、菖蒲みたいにくっついて身を清めて、明日には《和冥の門》を潜るです」

「明日！？」

何っ—気の早い……！

本気で急がなければならなくなって来たぞ……時間が足りない過ぎる……！

今すぐにも脱出しなければ……それと同時に、菖蒲をどうにかせねばなるまい。

ここに来られたのは完全に偶然だけど、利用しない手は無い。

菖蒲が《贄巫女》になつたら……でも、《和冥の門》って？

「菖蒲も実物は見てないですけど、どうやら《贄巫女》の皆さんはその門を通して、王国の繁栄を築いてくれた《冥王》と契約しに行くそうです」

「《冥王》……ん？　つまり、冥界に続く門って事か？　……え？

んじゃまさか……」

「はいです。死なないと通れないです」

ナルホド。

詰まる所、王国の連中は、《贄巫女》と称する女の子に、《冥王》への生贄として門を潜らせ、王国に利益を齎すように『契約』するという事が……

だから鷹定は止めようと思ったのか？　幼馴染である菖蒲が、王国の不条理によって、殺されてしまうから。

辻褄は合う。だけど……そうだとしたら、鷹定は王国と完全に敵対する事になるんじゃないのか？　王国は自国に平穏と繁栄、安寧を齎そうとしたからこそ、《贄巫女》なんて不条理の塊のような儀式を執り行って来たんじゃないだろうか。なら、それを阻止される

のは、王国にとって最悪の事態だ。

その最悪の事態を、鷹定は起こそうとしている。……一人の幼馴染の命を救うために。

「菖蒲。……ここから逃げよう？ きみは、ここで死ぬために生きて来たんじゃないだろ？」

そう言いつつ、辺りに視線を配る。どこかに、どこかに脱出路は無いか……！と。

隣の部屋では、一瞬だけ沈黙が在ってから、……短い返答が在った。

「それは違つです。菖蒲は、そのために生きてきたです」

「え……？」

「菖蒲は王国の繁栄のために、こうして生かされてるです。ここで《冥王》との契約が結べなければ、菖蒲は一族の恥曝しになつちやうです」

……それが何だ。何だつてんだ？

そんな事のために死ぬなんて、馬鹿げてる！

「んなバカな事、罷り通つていい訳ねえだろが！」

知らず、怒鳴つてた。

「何のためでもいい、そのために人が死んでいいなんて……ボケた事吐かしてんじゃないやねえぞ！ いい訳ねえだろ！ 勝手に死なすな、バカ！」

怒鳴つて、……少しずつ熱が冷めてきた。

オレは、今更ながらに早まった事を言つたと思つた。

……いや、早まつてなんかいない。……そうじゃなくて、今の菖蒲は、『身を清めた』後だ。そんな、もうこの世とは決別寸前の奴に、何を言つたつて無駄なんじゃないかつて、思えてきただけだ。

「……聴いてくれ、菖蒲。あいつは……鷹定は、おまえを助けに、絶対に来る……！」

「……タカさんが？」 妙に吃驚した菖蒲の声。

「だから、……死ぬな。つか、絶対に死なせねえ。オレは、おまえ

を生かす。……王国の繁栄？　んなモン、クソ喰らえだ。人の命の犠牲の上に立ってるもんなんざ、壊れちまえばいい。オレは、そう思うぜ」

諭そうとか、説得しようとか、そういう気持ちで言ったんじゃない。

ただオレは、オレの考えを言葉にしたかっただけで、誰かに納得してもらいたかったんじゃない。

……気持ちを言葉にする事で、オレは『オレ』を保とうとしたのかも、知れない。

「……タカさんは、どうして菖蒲を助けに来るですか？」

菖蒲の不思議そうな声音に、少しずつオレは『オレ』を取り戻してきた気がする。

「そりゃ、大事だからだろ？　菖蒲を死なせたくないって、そう思ってるからだろ？　……菖蒲じゃなくなったら、人が死んじゃうなんて事、在っちゃいけないだろうけどよ」

終戦から《贄巫女》が始まって、現在まで二十年経ったという事は、十九回もの《贄巫女》が執り行われ、十九名の女の子が無益に殺され続けたんだ。……無益とか、有益とか、そんなの関係ない。十九人ものが殺された事実が、大事なんだ。

そんな事、許されていいはずが無い。

……段々と、鷹定の気持ちが分かってきた、気がする。

王国が二十年もの間、十九人も女の子を殺し続けてきた事を、誰が許せるだろう。王国の繁栄？　……だからどうした。そんな事のために人の命が使われるなんて事、在っていいはずがねえだろ！　そんな国なんて、滅びちまった方が、断然いいに決まってる。オレだったら、……鷹定もそうだ、王国とは敵対してでも、馬鹿げた儀式を阻止するだろう。……全力で。

「……じゃあ、タカさんに言ってもらえないですか？　そんな

事は、止めた方がいいです、って」

「……そんな事？」

「はいです。菖蒲は王国の繁栄を築くために、今ここにいます。それを止めるなんて……王国に住まう何十……何百……何千万の人達に申し訳が立たないです。そんなの、菖蒲は嫌です」

「だから！」

「練磨さんは、自分の命と何千万の命を天秤てんびんに掛けて、どちらを取りますですか？ ……単純に数の多さじゃなくて、大切な方を取りますよね？ 菖蒲は、自分の命よりも、何千万もの人達の安寧あんねいと平和を取ります。国がたった一人の命によって支えられるのであれば、菖蒲はそれを選ぶです」

「~~~~」

分かつてる。今の彼女に何を言っただって通じない事は。

……でも、悔しいじゃないか？

鷹定が命を賭としてまで救おうとしてる奴が、こんな奴だったら、

……すつげえ、悔しいじゃないか……。

「……オレは、そんなの認めねえ」

冷静になれ！ と頭の中で命令が出て、本能だけはそれに逆らった。

絶対に、認める事なんてできない。そんなの認めちまったら、その瞬間、オレはオレを許せなくなる。

現実がそうだったとしても、実際にそうなんだとしても！ ……

そんなの、嫌なんだ。絶対に、そんな事は、認めないし、許さない。

ここだけは、妥協たきようしたくないんだ！

「でも、菖蒲が死なないと何千万もの命に平和おひさずが訪れないですよ。

菖蒲は、そんなの嫌です」

「おまえが死んだら意味ねえんだよ！ 何千万もの命の中に、何で菖蒲が含まれてないんだ！ オレは、そっちのが嫌だ！ 何千万もの命に平和が来る前に、どうしておまえ自身に平和が来ないんだ？

そんなの、おかしいじゃねえかよ！」

「皆が皆、幸せにはなれないです。誰かが背負わないといけないですよ。寧ろ、何の危険むじも伴ともなわない幸せの方こそ、嘘つぱちみたいで

す。皆が救われる世界なんて、天国だけですよ」

「誰かが救われない世界が現実なら、現実を天国に変えればいい！  
オレは、誰かが不幸になってまで幸せになんかなりたくない！

菖蒲はどうなんだ？ 鷹定を死なせてまでして、おまえは幸せになりたのかツ？ どうなんだよ！」

……沈黙。

頭に血が上り過ぎて、少し落ち着こうと壁に凭れ掛かった。

……聴かせてくれ、菖蒲。おまえの意見を。気持ちを、意思を。

仲間が、死んでまで自分を救おうとするそれをおまえはどう思う？ それを許せるのか？ 一生、仲間の死を背負って生きていけるのか？

……そんなの、嫌だよ、オレは。誰かの命の上に生きてるのは、分かってる。でも、それが実際問題、目の前に浮上してきたら、止められるものなら止めたいじゃないか！ ……他人事だつて分かってても、自分の事じゃなくても、助けたいんだよ、オレは！

「……そんなの、菖蒲は嫌です」

ポツリと零れた一言に、オレは人の温かみを感じた。

ちゃんと血の通った人間の言葉だつて、確信できた。

オレは、それを聴きたかつたんだ。

「タカさんには死んでもらいたくないです。……でも、菖蒲は、何千万もの命も救いたいです」

「救いたい気持ちは、オレにも分かる……とりたい。だけど、それが菖蒲の命の上で成り立ってるなんて言ったら、鷹定はどう思うだろう？ ああ、菖蒲が死んでくれたおかげで、オレは今もこうして生きていられるんだ……なんて、思えるか？ 違うだろう？ 菖蒲が生きている世界で、自分も生きていられたら、それで満足じゃないか。他に何を望むんだよ？ 生きてるだけで、人つてのは幸せを一杯もらってるだろ？」

我ながら、よく舌が回る。

言うだけ言うと、オレは少しずつ頭が冷静さを取り戻してくれた

ような気がした。

「……菖蒲。菖蒲が死ななくても皆が平和に生きていける道を探さないか？　それが、今できる一番だと思うぜ、オレは」

「……そんな方法、本当に在るですか？」

言われて、オレは苦笑を隠せなかった。どうせ誰も見ていないと思つて、乾いた笑かわい声を発してしまう。

「分からない。……無責任だけど、分かっていたら苦労しないぜ？

分からないから、探すんだ。……もしかしたら一生見つからないかも知れない。でも、いつか見つかるって思つていれば、見つかるものさ。人間、前向きに生きていかないと、ダメになっちゃうよ」

「前向き……ですか」

「ああ。ポジティブポジティブ」

言つと、隣から忍び笑い聴こえてきて、オレも釣られて笑い出した。

今の状況がとっても危険な事だつて分かつて、余計に笑えた。現実を忘れて笑つていたら、もう何でもできそうな気さえしてき

た。……本当に、何でもできたらいいのに、と思つてしまった……

32頁 神門練磨の書19

『春原菖蒲』

(後書き)

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます——(・——)(・——)

これにて練磨くんの書は終幕と相成ります。

次は八宵さんの書から物語は始まります。

次頁をお楽しみに

ようやく王国と帝国を分け隔てる国境……《津波の長城》が見えてきた。

走っていると、風に乗れた気分になれて爽快だ。……何かに乗っていけば、もつと風を感じられると聴き及んでるが……やっぱりウチは走らせるより走る方が性に合ってる気がする。

国境に設けられた関所を探し、そこへ向かってみる。

……と、向こうから走平虎に乗った玲穩が駆けて来た。走平虎……確か湖太郎とかいう奴だ……の背中には玲穩だけで、練磨も崇華も乗っていない。

何だろう？　と想着、走っていた足を緩めると、玲穩が見下ろし気味に声を掛けてきた。

「どうしたんだい？　何か問題でも在ったのかい？」

「おせーぞー」

「それだけ言いに来たのかい！」

びしいっ、と突っ込みを入れて、……妙に脱力。

それよりも気になる事が在った。

「練磨と崇華は？」

「王都に送り届けた」

「国境はどうしたんだい？」

問題は、そこだった。

国境……《津波の長城》は確か今、封鎖されているはずだ。何が遭ったか知らないが、王国側が勝手に嚴重に警戒し始めて、ほとんど通行不可になっていたのだ。

そこをどうやって通行したのか。それが、ウチの懐いた疑問だ。

「ふつゝに通ってきたぜ？」

「へ？　封鎖されてたんじゃないのかい？」

「されてねえよ。この間からな」

玲穩は湖太郎に跨またがって、歩きながら話し始めた。

「知ってるか？ 王国が国境を封鎖した理由」

「さあ？ ウチは何も聴かされてないけど……」

「《滅びの王》 さ」

「……どういう事だい？」

玲穩は得意気でもなく、世間話のように淡々と話し続ける。

「王国は、《滅びの王》を危険視していた。……とまあ、それは恐らく、表向きの理由だけ。それは措おいとして。つまり王国は《滅びの王》を招き入れないように、国境を封鎖していたって訳だ」

「だったら……王国はどうして封鎖を解いたんだい？ ……まさか！」

「王国の何者か……恐らく王室の誰か、もしくは官僚かんりょうくらいに就いてる者だろーな……が、《滅びの王》がどうにかなった事を知ったんだろーよ。それに、封鎖を解く位だ、生け捕り・殺害・監視下に置けた……それ位しか考えられねーな。それを知ってる奴がいるんだろーよ。王室各位のどこかにな」

「……王室関係者だとして、何で知ってるか。……なんて、言わなくとも玲穩は察しの上か」

「あんまし考えたくねーけど、王室関係者の中に、【世界の終わり】と通じてる輩やかいがいるんだろーさ。まあ、案外そうなんじゃねえかとも思ってたんだけどさー」

玲穩は湖太郎に跨またがったまま、怠だるそうに寝そべり始めた。……こいつ、本当にいつでも無気力状態だな。

「何でだい？」一応問うてやるウチ。

「王国の過敏な反応が、何と無く臭わせるだろ？ 共和国の《聖女》が予言するのは知ってるけど、何でまた王国が《滅びの王》に對して過剰に警戒してんのか……そこを突き詰めて考えていきゃ、自然とその流れに行き着く訳だ」

……ウチが言つとバカみたいに聴こえるかも知れないけど、この玲穩とかいう奴の言ってる事、途中でよく分からなくなるな。

話の筋は通っているように見えるけど……無理に繋がった感じがする部分もあるし、無理矢理筋を通しているような感も否めない。

……つまり何が言いたいかって言うと、玲穩の奴、事実として知ってる部分があるんだ。それを仮定じゃなくて本筋に通して話すから、全てが事実っぽく聴こえるけれど、実は大部分が勝手な推測なんじゃないだろうか。

「……でも、もしかしたら、王様が純粹に《滅びの王》を警戒していたって、おかしくは無いんじゃないかい？」

「だからと言って、王様の一存で、国を動かしてまで、国境を封鎖するなんてできねえんだよ。そんな権限が許されてる訳じゃねえ。王室関係者を納得させるだけの材料、それに官僚の口添えも無けりゃ、国境に厳戒態勢敷けねえだろ。国境を塞ぐ<sup>ふさ</sup>って事は、国益にも多大な影響が出るだろーし、色んな面で負の方向にしか働かねえ。そんな考えを王様だけ、もしくは官僚だけ、王室関係者の何者かだけが持っていて意味がねえ。その全員が動いて初めて、国境に厳戒態勢を敷ける状態に成り得る訳だな」

……こいつ、実は頭がいいのかい？

あつさりと納得させられて、ちよつと頭にキたけど、確かに正論だ。間違っても、ウチじゃ見つける事ができない。

惚<sup>とほ</sup>けた顔して、こいつ……すごく切れる奴なんじゃないかい？

思いつつ、尋ねてみる。

「それで、そんな敵陣真只中<sup>まっただなか</sup>に練磨と崇華を置き去りにして、あんたは何してんだい？」

「足おせー奴の觀察」

「ぶっ殺すよ！」

「……あ」

玲穩がふと顔を上げ、それから面倒臭そうに湖太郎の毛の中に頭を埋めた。

「……何だい？ 何か遭ったのかい？」

「ん……大した事じゃないんだけどよ……」

「あん？ 便所かい？」ちょっと皮肉っぽくウチ。

「スイカの奴、メンマを見失ったって」あっけらかんと玲穩。  
すっ転ぶウチ。

「おおああ！？ 大変じゃないか！ どうすんだい？ 崇華も何や  
つてんだよ、あの子ったら……！」

「仕方ねえから、一旦ヤサイと合流だな。……その前に、うぜー奴  
が来たけど」

「え？」

走っていると、国境の《津波の長城》から歩いてくる影を、ウチ  
も視認した。

葬式中みたくないな真つ黒な服装に、白い帽子を被り、顔には猫の面、  
手には黒い杖つえ。そんな男がこちらへ向かって歩いてきていた。

「いやーどーもー。矛槍むやりくん、またまた逢いましたね」

「逢いに来たんだろー？」

「あははは そうとも言いますね」 そちらの方は、初め

てですよ？ 間儀まぎさんとは別人のようですが……矛槍くんも隅に  
置けませんね」

「中央がどこか分かんないけどな」

……何だろっ、この緩々ゆるゆるの会話は。

妙に脱力しつつ、……男の隙の無い体勢を見て取った。

戦い慣れしてる、と即座に気づけた。それに、……嫌な感じだ。  
純粹に敵意が無くて、でも敵対してて……おかしな気分だ。

「そこですが矛槍くん。僕は最近、不思議な体験をしたのですよ」  
世間話でも持ち掛けるように、男は小首を傾げつつ気安く話し掛  
ける。

玲穩は心底どうでも良さそうに、湖太郎に「進め」と命令を出し  
続けていた。湖太郎は湖太郎で懸命に命令に逆らっていた。頑張ガンバれ、  
湖太郎！ と今だけ心の中で湖太郎を応援してみるウチ。

「矛槍くんは信じられますか？ 死人よみがえが蘇るといふ事を」

「死人以外に、何が蘇るんだろうっな？」

「実はですね、僕の友人様が不思議な事を言い出しまして、気になったのですよ。『《滅びの王》様は死んでいない、まだ存命してる……ああ、話し忘れてました。僕、以前に《滅びの王》様を殺してるんですよ。殺したはずの人がまだ存命してる……そんな事、あり得るのでしょうか？ 僕には未だに信じられないのですよ」

……《滅びの王》様を、殺した？

……練磨を、殺した？

なのに、練磨は生きてる。確かに、それは不思議だ。いや、あり得ないだろう。

死人が蘇るなど、あり得ない。

だけど現に練磨は生きてウチに逢った。それだけじゃない。教会で寝泊りしたし、鬼を退治しに遺跡にも赴いた。

という事は……考えられるのは、男が殺した人物が練磨じゃないか、男の言ってる事が虚偽か。

「そんな与太話を聴かせに来たのなら、お門違いだぜ？ 帰れよ」  
玲穩の口調に労わりは欠片も無い。突き返すように、齒に衣を着せない言葉で薙ぎ払うだけだ。

男は猫の面のせいで、全く表情が掴めないまま、小首を傾げつつ、杖を地面に何度も突いて、まるで踊るように足を踏み鳴らし始めた。「おかしいですね？ ならば何故、さっき練磨さんの話をしていたのでしよう？ 死んだ方の話をしてるにしては白熱していたように思えますが？」

「死人の話で白熱してたんだ。な、シストウ？」

「な訳あるかいっ！」

つと、思わず突っ込んでしまった。

視線を男へ向けると、猫の面の中から、くぐもった笑い声が聴こえてきた。

「お嬢さんは正直な方ですね ……さて、矛槍くん。お話、お聴かせ願えませんか？」

「あんたに話す事なんざ腐ってもねえ。帰れっ言っただろーがよ。」

だろ、シシトウ？」

「そこでウチに振るのっ!? 何でそこでウチに振るのっ!?!」

「だって……なあ、黒イチゴ?」

「そこで僕に振るのですか? はてさて、僕にどのような返答を期待してるのやら」

「てか、あいつの名前、黒イチゴってんだ……」

そこに驚きを覚えるウチだった。

「因みに、僕の名前は黒一くろいちです。何度申したら覚えてくれるのやら」

あ、黒一ってんだ。

「邪魔すんなら、斬って捨てるけど?」

湖太郎から飛び降りつつ、玲穩が黒一に歩み寄る。

黒一は杖を突いてから玲穩を見据えると、

「できますか?」

挑発的に一步前へ歩み出る。

二人は肉薄し、玲穩が背中なかの長刀に手を掛けた!

「じゃあ、てめえは地獄逝き決定だな っ」

長刀を抜き様、刃を叩きつけるように黒一に振り下ろす!

確かあの技は 鉞まさかりの下ろし!

黒一は杖でそれを受け止めようとし、咄嗟ひしとに背後へ一步分跳

び下がった! その反応は正しい。あのまま玲穩の 鉞の下ろし

を喰らっていれば、間違いなく杖が折れていただろう。それだけの

威力が、あの一撃には含まれていた。

だが、一撃を躲かわしても玲穩の攻撃は止まない!

「 っ、」

続けて玲穩は長刀を地面に叩きつけ、地面に輝ヒレを走らせる程の太刀風ちかぜを発生させ、それが一直線に黒一へと走る! 後方に跳ぶだけじゃ躲せない二撃目だった!

……だが、

「 中々の腕になりましたね、矛槍くん?」

太刀風 地崩這ちほうはいく駆 をも躲し、黒一は杖を振り被って、玲穩

へと駆ける！ 距離が殺され、杖が玲穩に　っ！

当たる瞬間、玲穩も長刀を振り上げ直して、何とか受け止め、流して次の攻撃へと立て続けに走る！

「ふっ」

長刀と杖が交差した次の瞬間には、玲穩が杖を弾き、その間に生まれた空間に、無理矢理長刀の刃を割り込ませ、横薙ぎの一撃を繰り出す！

黒一は後方に流されつつ、玲穩の横薙ぎの一撃を躲し、横薙ぎの攻撃の際に生まれた太刀風も杖で受け止め、次の瞬間、杖で地面を突いて跳び上がり、大きく跳躍して玲穩を跳び越えると玲穩の背後を取る！

玲穩は眼ではなく気配でだろう、黒一の曲芸師じみた動きに追いつき、横薙ぎに振り被った長刀の反動をそのままに、背後に立った黒一へと振り抜く！

杖と長刀が噛み合い、火花が散る！

「……流石に、時間というものは人をあらゆる意味で『進ませ』ますね」

「素直に強くなつたと言えよ。自覚は無いけど」淡々と玲穩。

「成長はしてますよ。……確実にね」猫の面の奥から黒一。

そんな次元じゃない。この二人の剣技は、……きつとウチを超える。

でも、ウチが超えられない次元じゃ　ない！

「……こんな所で時間喰ってる場合じゃねえんだけどよ。……まだ邪魔するつもりか、黒イチゴ？」

「黒一ですよ　邪魔をしてるつもりはございませんよ。僕はただ、本当のところを聴きたいだけです。話してくれませんか？　練磨さんの事、《滅びの王》様の事」

「シトウ。おまえ、先に行け。オレがこいつを惹き付けておくから」

玲穩は長刀を持ち直しつつ、ウチに告げる。

そつだ。こんな所で時間を喰つてる場合じゃない。急いで練磨を探し出して、合流しなければ。鷹定たかさだも止めないといけない。時間が足りないんだ！

ウチは頷うなずいて駆け出す。と、黒一が猫の面をウチに向けて、向けるだけで視線を玲穩に向け直した。

「こういう時に折敷おしきさん達がいてくれれば助かるんですが……無い物ねだりは無意味ですよ。仕方ありません。矛槍くん。きみだけでもここで足止めさせていただきますから」

「任せる。あんたの地獄逝きだけは決定してる」

また玲穩の長刀と黒一の杖が衝突する！

何度も何度も、間隙すら与えずに斬り合う！

それをウチは

「何の真似ですか？」

長刀を躲しつ、ウチの槍やりを杖で弾いた黒一は、不思議そうに声を上げた。

ウチは弾かれた槍　雲峰くもみねの合間ぬを縫うように小太刀こたち　槍居やりすえで

空を斬る！

黒一は流石に受け止められないのか、数歩下がって走り来る槍居の斬撃ざんげきを躲した。

玲穩が面倒臭そうにウチを見据え、長刀を背負うように構え直す。「行けつ言いつたろー？」

「あんたに見せ場を取られなくなかったんだよ。……こいつは練磨の敵なんだろ？　なら、ウチの敵でも在るんだよ。そんな奴を見す見逃す事はできないだろ？」

「変な奴」

「あんなだけには言われたくないけどね！」

二人で言い合っていると、黒一が杖で肩を叩きつつ、やけに疲れたようなため息を零こぼした。

「二対一、ですか……矛槍くんだけでも実力は充分僅差なんですけど……このままだと僕、負けちゃいますね」

「だったら、退きな。追わないでやるから」

ウチが雲峰を突きつけて宣言すると、黒一はおかしそうに笑い出した。

「あっははは！ 何とも気の強いお嬢さんだ …… そうですね、ここは退かせていただきますでしょうか。これ以上戦っても、僕の命の危険すら感じられますからね。残念ですが、今日はこの辺で退かせていただきますよ」

そう言うと、黒一は恭しく礼をして、背中を向けずに、後ろ歩きで去っていった。

幸い、黒一の去った方角は国境とは反対方向で、ウチらはようやくホツとできた。

「……今の奴が、【世界の終わり】なのかい？」  
ウチは小太刀をしまい直すと、玲穩に尋ねた。

玲穩は長刀を背中の中の鞘に戻すと、どうでも良さそうな顔で湖太郎に跨った。

「さあーな。……だけどまあ、そうかも知れねえな。そんな奴だろ、あいつ」

「んな適当でいいのかい……」

「ほら、速く走れ走れ。無駄に時間喰っちゃまってんだから」

「分かってるよ！」

全速力で駆け出して、ふと背後に視線を向けると、そこにはもう、黒一の姿は無かった。

図書館という場所に來たのは初めてだった。

その屋上……やけに暖かな陽射しを浴びつつ、練磨れんま関係者が一堂に集まった。

「……それで、大事な大事な王様がいない、と」

やけに艶なまめかしい姿の女がそう言つて、悩ましげにため息を吐く。つて、あんた誰だい？ 練磨の仲間なのかい？」とウチが訊きくと、

「初めまして 私は鈴懸麗子すずかけれいこ。練磨くんの味方よ 麗子、つて呼び捨てでいいわ」

「ウチは獅倉八宵ししかうやせい。ウチも、八宵で構わないよ」

「練磨くんつたら、どんどん新しい女に手を付けてくのね。……困つたちゃんだわ」

何の話だツ！？

思いつつ、崇華すづかがむくれているのが見えて、それ以上は追及しない事にする。

「……駄目だ。風の便り を送つても何の反応も返つてこない」

鷹定たかさだが呟つぶやいて、懐ふところからタバチヨコを取り出し、口に啣くわえる。

大の大人がチヨコを啣くわえてる姿は、妙まがに奇怪きうがいだ。寧ろむし、本物の煙草タバコにしてほしい。……まあ、遠目には煙草にしか見えないから、それだけが救いだけだ。

練磨に 風の便り を送つてみても、誰にも反応が返つてこない。そんな状況だった。

「練磨、どうしちゃったんだらう……？ もつ、もしかして死ん……？」

「だったら 風の便り が届くはずだらう？ 最悪の形で、だが」

崇華の不安を、鷹定が一蹴する。

「……まあ、メンマの事だから 風の便り に気づいてねえだけかもだろ？ あいつ、そういうところ、抜けてそうじゃん」

玲穩れおんの言つ事にも一理ある。

だが……この現状では、それは最悪の状態だ。せめてどこにいかくらい突き止めねば、練磨を独り歩きさせておくなど危険過ぎる。《滅びの王》とはそれだけの存在だ。

「……或いは、風あろの便り が届かない場所だとすれば」「え?」

鷹定の不意の一言に、全員が視線を集中する。

そして麗子ひらめが何か閃いたのか、ポンと手を打つ。

「《清錬場せいれんじょう》の事? でもどうして? あそこは《贄巫女にえみこ》しか」

言つて、何かに気づいたのか、麗子が黙り込む。

話が見えないのはウチだけじゃなく、崇華も同じだったらしい。

「《清錬場》って何? そこに練磨がいるの?」

「……確証は無い。……ただ、あいつが《贄巫女》の儀式ぎしきを知り、独自に何かをやらかすつもりなら……考えられなくも無い」とは鷹定の弁。

「だけど、あそこは王室内部でも禁制区域よ。練磨くんが一人で入れるなんて事……」とは麗子の弁。

「何の話してんのか分かんねーけどよー、結局どこなんだ、そこ?」玲穩の一言に、二人が黙り込む。

そこでウチが話を促そうとした時、鷹定が顔を上げた。

「《贄巫女》が身を清める場所だ。……とは言つても、実情は牢獄らうごくと大差無い。《贄巫女》を逃かがさず、且つ完全に《贄巫女》として機能するように、ある種の催眠さいみんを掛ける場所だ」

「何で、んな所にメンマが……?」

「……あそこだけが、王国で唯一、風あろの便り が届かない場所だからよ」

応えたのは麗子だった。

鷹定が麗子に視線を移すと、麗子は深刻そうな顔で話を話し出した。

「……《贄巫女》の身を清める……つまり雑念を完全に取り払うためには、外界と《贄巫女》を切り離す必要が在るのよ。だから、風の便りは邪魔なの。どこの誰とでも話ができるし、外界の情報を取り入れる事になるし、以ての外なの。それを断つには、風の便りを使用不能にすればいい。そういう理念の基に造られたのが、《清錬場》よ」

「……そんな場所が」

ウチが人知れず呟くと、崇華がキョトンとした顔で小首を傾げた。「でも、何で練磨がそんな所にいるの？ さつきまで一緒にいたのに？」

「だから、あくまで確証は無い。……だが、あそこならば練磨を捕囚しておくのに、これ以上無い打ってつけの場所だ。何せ、《清錬場》自体、王室が定めた禁制区域……王室内部の者でさえ、入るのに何重もの許可の申請が必要だからな」

「あのバカ、捕まえられちまったのかよ」

疲れたように屋上に寝そべる玲穂。……メチャクチャ目立つから止める、と言うべきだろうか。本人のためにも。

「確証は無いがな。……ただ、そうだと仮定すると、俺達にできる事は少ないぞ」

「葛生さんには何か手立てがあるんですか？」

崇華の純真無垢な質問を受けた鷹定は、小さく頷いた。

「……時間が無いからだが、無茶な手しか考え付かなかった……攻め入るしか、あるまい」

「王国と全面戦争押っ始めるつもりかよ。流星は《侍》、やる事がちげーな」

二人とも本気で言ってるのか分からなかった。

……もつとも、本気でやらなきゃ話は進まない、という事だけは分かった。

そして、これでもう後戻りは絶対にできなくなる、と。

「真正面から突っ込むのか？ 幾らなんでも、それは無理じゃない

かい？」とはウチの弁。

「裏口から入ってたか？ どこだよ裏口って」突っ込む玲穩。

「でもでも、急がないと明日には《贄巫女》が始まっちゃうよう？」  
慌てて崇華。

「鷹定くんは妙案、無い？ 私、ちょっと期待してるよっ？」茶化す麗子。

「……」沈黙の鷹定。

しばらく何の案も浮かばないまま、時間が過ぎ去った。

「ん？」

不意に鷹定が、疑問符の付いた声を発して、四人の注目を集めた。  
その後しばらく鷹定は無言だったが、その表情が変わった。

「……どうしたんだい？」ウチが訊いてみる。

鷹定は驚いたままの顔を引き締め直し、しばらく沈思ちんししてから、  
徐おもむろに口を開いた。

「……《贄巫女》が、《清練場》から脱出したらしい」

瞬間、その場にいる全員が驚きに顔を彩られた。

34頁 獅倉八宵の書2

『欠けた合流』

(後書き)

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございますー(・)ー(・)ー

これにて八宵の書は終幕と相成ります。  
次頁は再び練磨くんの書、因みに異世界編に突入です。

これでようやく残り10頁を切りました！

あともう少しの間、練磨くん達の冒険にお付き合いして下さいー(・)ー

次頁をお楽しみの

「……でも、もう時間が無いですよ。明日には、菖蒲は《贄巫女》の儀式（しき）に出る予定ですから」

「分かってただけだよ……でも、ここから出ようにも、何も無いしな……せめてスプーン……いや、メスでも在ったら……」

「そんなの無いです」

「だよな〜ああ〜どうしよう〜……」

本気で悩み出したけど、案が浮かばない。

この牢獄（むじく）から今すぐにも脱出して、鷹定（たかさだ）と合流せねばならないのに……合流さえできれば、菖蒲を保護できるし、《贄巫女》の儀式も止められるし……一つ問題なのが、それによって王国と敵対する関係になる事だけ……そんなの後回しだ。今は今を生きる。それが大事なんだっ。

段々（だんだん）と頭の熱も冷えてきて、少しずつ冷静に物を考えられるようになってきた。

「……そうだ。咲希！」

「そんな叫ばなくても聴こえてるわよ！……で、何？」

フヨフヨ浮かんでる妖精（ようせい）を見据えて、

「魔法の使い方、教えてくれよ」

と、訊（き）いてみた。

咲希は黙考してから、……空中で足と腕を組んで、オレを見据えてきた。

「……魔法の力で脱しようって考えてるのね？」

「ああ。今こそ、《滅びの王》の力を使うべきだろ？こんな時くらい使わないと、何のための王なのか分かったもんじゃないやねえぜ」

「あんた、《滅びの王》にはならないんでしょ？」

「《滅びの王》になるならないと、力を使う使わないは別問題だろ。

……それに、こんな所で殺されちまうなら……《滅びの王》になら

なくても、自分の身くらいは自分で守りてえんだよ」

「そ。……ま、あたしが何を言っても聴かないだろうしね、あんたは」

よく分かっていらっしやる。

咲希は「全く……」と呆れ気味だったけれど、それでも話をしてくれた。

「因みに、あんたの使える魔法は、未だに不明瞭な点が多いわ。何でもできるだなんて思わないで頂戴」

「あれ？ 前の話じゃおまえ、《滅びの王》の力は『全ての術式の理解』とか言ってたか？」

「理解できても使えるかどうかはあんたに掛かってる、って言いたいの。自転車の乗り方を理解しても体が追いつかなきゃ意味が無いでしょ？ それと同じよ」

……確かに自転車で例えるなら、車の仕組みが分かっても、必ずしも運転できるとは限らない、という事だろう。

なら、それを教えてくれればいいのでは？

「……魔法 っつのは、或る意味『感覚』に近いものだから、そう簡単には使いこなせないと思うわ。……それに、あんたを見てて思ったのは、『全て』の術式を理解できるんじゃないかと、もしかしたら一部なのかも知れない、って事」

「はあ？ おまえが一番初めに『全ての術式の理解』って言ったんじゃないかねえかよ？」

「……あたしは曆ちゃんみたいに完璧じゃないの。色々考えて、もしかしたら違うんじゃないかって思い至っただけよ。あたしだって間違い位するわよ！」

ぎゃ、逆ギレだ……

ま、まあ、咲希が完璧じゃないのは、オレだって分かってる。そこを責めても詮無い事だ。それに、そんな事で咲希と喧嘩なんてしたくないし。

「じゃあ、どれ位の魔法なら使えるんだ、オレ？」

「……取り敢えず、うつわいし 器石 を ふせき 附石 に変えるだけの力は確認したわ。それだけは確実よ」

「つー事は、だ。」

「器石 が在れば、ここを脱出できるッ!？」

「在れば、ね」

「はい……」

見た所、何も無い牢獄で、道具袋も没収されて、何ができようか!？

困り果てて鉄扉を叩いてみるが、……反応が返ってくる訳も無く。

「咲希」

「何よ？」

「魔法、試してみようぜっ? もしかしたら、使えるかも知れねえじゃん!」ちよつと興奮あが気味にオレ。

「まあ……ね。じゃあ、足掻あがいてみる?」ふふんと鼻で笑う咲希。

「せめて『努力してみる?』とか言ってくれよ……もうダメみたいじゃんか、それ……」悲しげにオレ。

「つべこべ言わない! ……じゃあ、初歩の魔法 が使えるかどうか試してみしよう? ……そうね、まずは物を動かす力から」

言われて、咲希を見据え直す。

「つー事は、サイコキネシス?」

「念力 の事よ」

「同じ事だろ!」

「まあ何でもいいから使ってみなさい。……じゃあ、簡単な物からいきますか。ここに在る物を使って……使って……って、何も無いじゃない!」

見りや分かる!

「どうするのよ!? 何も動かせないじゃない!」

「……あの、何故に咲希さんがキれてらっしゃるのでしょうか? 寧むしろ、ここはオレが……」

「お黙り!」

「はい……」

強気の咲希には勝てん……つか、もしかしたら最近のオレが弱ってきてるのか？

分からないけど、無理に逆らわない方が好きそうな事だけは、経験上、何と無く悟れた。

咲希がブツブツと何か唱え出したのを機に、オレも牢獄内を見回してみる。

本当に質素な部屋で、何も無い。……脱出しようにも、道具のよ  
うな物が無ければ、意味が無いんだよなあ……

思いつつ、ふと視線を鉄扉に向けて、考えた。

「……なあ、咲希」

「何よ！」まだ怒りの抜けない咲希。

「物を動かす力……ってのは、どんな物でも動かせるのか？」少し  
ビクついてオレ。

「はあ？ ……まあ、慣れれば、ね。熟練の《魔法使い》なら、大  
岩でさえ、念じるだけで動かせるって話だし」半分どうでも良さそ  
うに咲希。

「じゃあよ。思ったんだけど……この扉の、錠の部分だけを動かす  
ってのはどうだろう？」

錠が掛かっているのは、鉄扉を動かしても開かない事から分かって  
る。だから、その見えない錠をオレの力で動かす………というのを思  
いついた訳だ。

咲希は一瞬、毒気を抜かれたような顔をし、それからしばらく無  
言で顎あごに指を添えていると、やがてオレを見て頷うなずいた。

「悪くないと思う。やってみればいいわ。……でも、見えない物を  
動かすなんて、相当の技術を要するわよ？」

「要するも何も、今しなきゃ、どうしようもないだろ？ やれるだ  
けの事は、やっときたいんだよ」

そう言ってから、咲希を見て尋ねた。

「教えてくれ。魔法の……念力の使い方ってのをさ」

念じる……心の中で、「錠よ動け！」と思い続ける……  
だけど、現実では何も起こらない。当然だ。それこそが世界、それこそが現実。

あり得ない力。それが　魔法。それをオレは今、念じるだけで使おうとしている。傍はたから見ればバカそのものだろう。

それでも、やるだけの事は、やっておきたい。

「う・ご・けエエエ！」

念じるだけじゃなくて言葉にも出して、意識を集中させる！

ハアアアア、と呼気も加えてみる。

……が、まるで微動だにせず、鉄扉は誇らしげたたずに佇んでいる。

「ハアアアア……はあ、咲希。全ッ然動かねえんだけど」

……魔法　の術式が理解されてる状態で、念じても動かないのなら異常だけれど、見てると、あんたの場合、単純に術式が組み込まれていないみたいね」

「マジかよ……」

これで、オレの一時間程の労力は、水泡に帰した……

疲れ果てて、オレは牢獄に寝転がった。念じるだけで開く程、鉄扉はやわにできてないって事か。

「咲希、これからどうするんだよ？　このままじゃ《贄巫女》の儀式が始まっちゃう！」

「あたしにそれを言ったところで、どうしようもないでしょーが！　そんな事言ってる暇が在るなら、少しは考えなさいよ！」

逆に叱られたので、オレは素直に黙り込む。

そうだけ、エキサイトしてる暇は無いんだ！　今こそ冷静に、冷静に……って、できるかアアアア！　冷静に考えて何も思い浮かばないから、こんなに困ってるんだろぅがアアアア！

悶々もんもんと考えてる時間が長かったからだろうか、頭が完全に熱あつで沸騰たぎしてる。

ここは一度、頭を鉄扉にぶつけて、落ち着くのを試してみるべき

か!?

と、不意に考えを止めて、呼気も静めてみると、隣の部屋から、小さな音が聴こえてきた。

こつ……こつ、……こち……

小さな、何かをぶつける音で、オレは何をしてるのか連想してみた。

壁を指で叩いてる? ……それにしてもはやけに硬い音だ。

鉄扉を手で叩いてる? ……いや、明らかに音が違う。

床を爪で叩いてる? ……もつと硬そうな音だ。

答が分からないから、回答を求めてみる事にした。

「菖蒲? おまえ何してんだ?」

「扉を叩いてるです」

「何で?」

「石です」

「石?」

「はいです」

どこにそんな石が?

もう一度部屋全体を見渡してみるが、……ダメだ、どこにもそんな石は落ちていない。

でも、菖蒲の所に在るその石が在れば、脱出も不可能じゃなくなるかも知れない!

「その石で扉、壊せそうか?」

「それが……無理そうです。ピクリともしないです」

当然か。石なんかで鉄扉が壊れたら、牢獄の意味が無い。

それに、オレがその石を使って扉を壊そうと思っても、きつと先に壊れるのは石の方だろう。

打つ手無しか、と思つてまた寝転がると、隣の部屋に続いている穴が見えた。奥は流石に角度の問題が在って見えないけれど、手を伸ばせば何とか握り合えるんじゃないかと思えた。

「……菖蒲」

「はいです」

「その……石をこつちに渡してくれないか？ その穴を使って」  
「はいです」

穴から女らしい細い指が見えた。手には石が握られていて、オレは小さな穴に手を伸ばして、何とか石を受け取る。

引き摺り出すと、その石が 器石 だって事が分かった。

「コレって……！ 菖蒲、コレをどこで？」

「菖蒲の首飾りに付いてたですよ。少し大きかったから、使えないかと思っただです」

「これ、 器石 だよ！」

触ってみて、何が普通の石と違うんだと言われたら少し応え難いけれど、何と無く分かる。これが、 器石 だって。

一応、咲希に確認を取ってみた。

「……嘘みただけけど、あんたの言うとおり、 器石 だわ」

オレの勝ちだった。

これで、ここから脱出できる！

オレは 器石 に力を込めるように念じる……

「やっぱり……単純なのがいい……壊す……いや、ぶっ飛ばすがいいな……」

「……あなたにはそれしかないの？ ……単細胞」

どこからか酷い罵倒が聴こえたけれど、敢えて聴き流してやるつもりじゃないか。

念じ終えたオレは、拳に石を握り締めると、 思いつきり鉄扉を殴りつけてやった！

バカッ、と鉄扉が内側からぶっ飛ばされて、すぐに向こう側の壁面に激突し、大きな音を立てて倒れた。

隣の菖蒲が息を呑む気配を感じつつ、オレは牢獄を脱した。

出ても、石の壁面が続く牢獄が並び、やけに狭い廊下が奥まで続いているだけで、風景の変化は乏しかった。

取り敢えず、隣の牢獄にまで移動して、

「菖蒲、扉から離れてろ。その扉、吹っ飛ぶから！」

「は、はいですー！」

あわあわと動く音が聴こえた。「大丈夫ですー」と合図が出てから、オレは鉄扉を思いつきりぶん殴った！

鉄扉は牢獄の向こう側に叩きつけられ、大きな音を立てて外れた。

中には、白い着物だけを着了た女の子が座り込んでいた。

小柄な女の子で、きつと崇華すつがと同じ位の大きさだ。歳はオレと同じ位だろうか。黒髪は短く切られていて、女らしい男の子に見えない事も無い。クリクリした瞳は水色で、透き通っているように見えた。顔も体格も、まだまだ幼く見えて、実年齢が分からなかった。見た目だけで言えば、まだ十代半ばに差し掛かっていないように思える。崇華きょうわよりも華奢かしゃに見えた。

「あなたが……練磨さん、ですか？」

「おう、そうだ。……さあ、逃げようぜ？ んでもって、鷹定に逢うんだろ？ 話はそれからだ！」

そう言って牢獄から連れ出すと、早速迷った。

言い訳だけど、オレここに来るまで気絶してたからなあ。どこから来たかなんて憶えてねえぞ？

「菖蒲は覚えてるです」

流石！

菖蒲が先行するのを、オレが追う形になり、しばらく走っている。

「っ……疲れたです……」

「早いなッ！？」

と思っただけれど、考えてみれば、菖蒲は一年間も牢獄の中で瞑想めいそう……みたいな事をしてたんだ。体力がガタ落ちしてても不思議じゃないか。

オレはすぐに菖蒲の前で前屈みになった。

「乗れ！」

「え？ いいですか？」

「じゃねえと追いつかれちまう！　すぐに逃げっぞ！」

「じゃあ……えいつです」

ぴよこんつ、とオレに飛び乗った瞬間、オレは駆け出していた。

「道案内は任せたぞ、菖蒲！」

「はいです。菖蒲はちゃんと道を覚えてるです」

「オレがバカみたいに聴こえるから、その事はもう言いつこなしな！」

走って、走って、……どれだけ走ったか分からないけど、きつと十分も走ってないんだと思う。その前に体力が尽き掛けて、倒れそうになった。

「大丈夫ですか？」

気遣わしげな菖蒲の声を聴くと、否でも頑張らないといけない気がしてくるから不思議だ。

と、視界が開けて、広間に出たんだと分かった。

夕暮れ時だった。

窓から差し込む光が、広間を黄昏色たそがれに染めていた。儂はかないような、懐かしさを覚えるような光景を見て、オレはゆっくりと菖蒲を下ろした。

「ここなら……誰か来てもすぐに逃げられそうだな」

広間の壁に凭れ掛かり、オレはそんな結論を出していた。

菖蒲はオレを気遣ってるのか、不安げな眼差まなざしで、オレを見据えていた。

「大丈夫ですか？　菖蒲、まだ走れるですよ？」

「……そうだな。ここからは、一人で走ってもらおうかな」

「え？」

菖蒲あやめがオレの視線の先の存在に気づいて、息を呑む。

オレは乱れた呼気を整えつつ、男 空殻くうかくを見据える。

「よもや《清錬場せいれんじょう》から脱するとは……その根性、御見逸おみそれした」  
「なら、見逃してくれねえ？ オレ、おまえと戦いたくねえし」

空殻は低い笑い声を発し、光の無い瞳でオレを射抜く。

「吠ほえるな、小僧。貴様が私に敵うとでも？」

「やってみなくちゃ分かんねえだろ？ それとも、怖いか？」皮肉  
つぽくオレ。

「ふん……生意気を言うだけの余裕は在る、か……。ほざけ。  
貴様が私に敵う要素など、微塵みじんも無いわ」

言い切る空殻に、オレはちよっぴり怯ひるむ。

今まで喋しゃべってたけど、……実際、こいつには敵うはずが無いって  
自覚してた。

圧倒的な力の差が、そこに歴然と聳そびえ立ってる……！

オレは菖蒲を庇かばうように前に出て、握り締めた 附石ふせき を固く握  
り直す。

「……なあ、空殻とかいうおまえ」

「……貴様に名で呼ばれようとはな。……序ついででに名乗ってやるうで  
はないか、小僧。私は伽藍堂がらんどう空殻。二つ名は《虚無きよむ》」

「何でもいい、んな事。んで、空殻。取引しないか？」

空殻の瞳に陰りが映り、それがまた沈んで、また光の無い眼差まなびし  
が浮かんできた。

「私と交渉しようと言うのか、小僧？」

「ああ」

「度が過ぎた真似まねだな。……それとも何か？ 私と交渉できるだけ  
の物を用意しておるのか？」

良かった、乗ってくれた……！

ちょっと安心しつつ、オレは小さく頷いた。

「あなたに取っちゃ、いい事だと思っぜ？ ……オレに、つまり《滅びの王》に、《贄巫女》をやらせてみるつもりはねえか？」

「何？」「練磨さん？」

空殻が、そして菖蒲までもが驚いている。

オレは零れそうになる笑みを隠しつつ、話を続ける。

「《和冥の門》を通る役を、オレにやらせてくれって言うてんだ。

……悪い話じゃないだろ？ あんたらが《滅びの王》をどうしたいのかは知らないけど、《滅びの王》に《贄巫女》をやらせるのは、中々凄くねえか？」

「……本気か、小僧？」

空殻が眉を顰めてオレを見据える。

……本気だ。本気だけど、死ぬのはオレだって嫌だ。菖蒲を諭した意味が無くなるんだから。

王国の何千万もの人間の命を救うために菖蒲が死んで、その菖蒲を助けるためにオレが死んで……そんなんじゃ堂々巡りだ。意味が無い。

だけど、オレは死なずにこの件を終わらせたいと願ってる。そのためにはまず、《贄巫女》なんていう馬鹿げた儀式を止める事が先決だ。

「ただ一つ、条件がある」

「……其処の《贄巫女》の解放、といったところか」

「分かってるなら話が早え。……どうだ？」

空殻の全く表情の無い顔に、純然たる殺意のような物が浮かび上がってきた気がした。

「下らぬな」

空殻が一步前に出て、錫杖を、しゃらんつ、と鳴らした。

「そうなれば、其処の小娘の価値は無に帰す。要らぬ事まで知られた以上、見す見す生かしておくと思うか、小僧？」

「だよな。……菖蒲、こっからは一人で逃げてくれ。オレはこいつ

を……空殻をぶつ飛ばしてから追いかける」

「勝てるですか？」

当然の問いかけに、オレは苦笑しか浮かばなかった。

「やってみなくちゃ分かんねえ、だろ？」

附石　ぶつ飛ばしの　附石　を握り直すと、空殻を見据えて両手の拳を固めた。

「いいから逃げろよ、菖蒲。……んでもって、鷹定たかさだと合流するんだ」「練磨さんはどうするです？」

「オレの事はいいんだ。……大丈夫、絶対に死なねえよ。それと……」

オレは、とある作戦を話した。

「……分かったです。できる限りの事はやるです。けど……約束ですよ？」

言つて、菖蒲が駆けて行く。

それを追わずに、空殻はオレを見据えて、静かに錫杖を振り下ろした。

しゃらんつ、と鈴すずの音が広間に響く。

「……私を止められると思うか、小僧？」

「それこそ、やってみなくちゃ分かんねえなっ」

言い終える前に駆け出して、空殻の顔面目掛けて拳を振り被る！

「ぶつ飛べエエエ！」　オレの拳が空殻の顔面に吸い込まれ、

「……愚かな」

呟つぶやきが聴こえて、

何の感触もしなかった。

「え……？」

確かに、オレの拳は空殻の顔面を捉えている。……にも拘かわらず、拳には何の感触も伝わってこない。微かすかに感じる皮膚ひふの感触が在っても、空殻を押しているはずの力が、全く加わっていない。

ただ触れているだけ。こっちは全力で空殻を押しているはずなの

に……！

「退け」

錫杖がオレの側頭部を捉え、ガツ、と脳味噌を揺さ振られて、オレは広間を転がった。

容赦の無い一撃に、オレはまたも動けなくなって、何とか意識を保つだけで精一杯だった。

痛い……痛くて泣きそうだ……。でも、ここで倒れる訳には

……！

「……まだ昏倒には至らぬか」

「行かせつ……るか、よ……っ！」

オレは空殻の足を掴んで 触れてるだけだけど 何とか逃がさないようにと、力を込めて立ち上がろうとした。

行かせてはならない……菖蒲を絶対に逃がしてやるんだ……それが、鷹定へのせめてもの礼だ……っ。

そして、菖蒲への礼でもある。

……だから、このバカ野郎は、オレが……！

空殻がオレを見下ろして、錫杖の先をオレの腕に突き下ろした！

「あぎッ」激痛が走って、空殻を掴んでいた手が落ちる。

痛くて手を摩りたかったが、錫杖に叩きつけられたまま動けず、痛みだけが全身を走り回る。

涙が少し込み上げてきて、自然と歯を食い縛ってた。

「……そうまでして、何故あの小娘を逃がしたい？ 小僧。貴様の行動は、逢った時から、意味不明な事ばかりだ。それとも、そういう基盤となる行動理念が、貴様には無いのか？」

……何を言ってるか分からねえ。けど、ムカつくのは確かだ。

こいつの言う事は、全部ムカつく。……だから、オレは、

「……てめえみたいなクソツタレをぶっ飛ばすのが、オレの基本方針なんだよ……っ！」

「……解せん。それだけのために自分を殺すか？ ……誠に解せ

んよ、貴様は。何から何まで、解せぬ奴だ」

そうかよ、分かったなら、その杖を退かせよ……！」

痛みと憎しみで、睨みつけるように空殻を見上げると、空殻は血の通っていないような無表情で見下ろし、オレの顔を蹴り飛ばしたッ。

錫杖から手が滑り抜け、オレは鼻頭を押さえたまま、色んな意味で動けなくなつてた。鼻血が出て、痛みと衝撃で次の動作ができず、意識も少し朦朧として……。

ただ、分かったのは……オレが負けたつて事だ……。

「少しは学習したか、小僧？ いい加減、自分の力では敵わぬ事を覚えぬと、いつぞやのように命を落とすぞ？」

こいつ……やっぱり知ってるんだ。オレが黒一に殺された事を……！

という事は、やっぱり黒一は空殻の仲間だったんだ。

皆してそんなにオレを殺したいのかよ？

《滅びの王》は、やっぱり殺されなくちゃならないのかよ!?

……負けるもんか。こんな所で、死んで堪るかッ。

オレは生きる。生きて、《滅びの王》が世界を滅ぼさない事を、証明してやる！

「……まあ、貴様のその根性に免じて、小娘は逃がしてやろう。あの小娘に力が在るとも思えぬしな、逃がした所で何も変わらぬだろう。……それに、貴様で《贄巫女》を試せばどうなるか、其方の方が興味を引く。……まあ、固よりその心算だったかな」

「……ま……よ」

「……何だ？ 聴こえぬぞ、小僧」

「黙れよ……っ、てめえだけは、絶対に……ッ！」

意識が、途絶える……

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます——(・——)(・——)

これにて練磨くんの書は終幕と相成ります。

次頁からは最後の鷹定の書が始まります。

間も無く最終決戦が始まるつと言つところまで来ました！  
次頁をお楽しみに

「……という事が遭ったです」

一連の説明を終えた菖蒲あやめは、ペコリと頭を下げると、俺をジツと見据える。

「だから、今すぐ助けに行くです。練磨れんまさん、きっと今頃、大変な目に遭ってるです」

それは分かってる。あいつの事だ、その空殻くわくとかいう男と張り合  
い、……恐らく、やられてしまっただろう。殺されていない事を祈  
るしかないが、その男が練磨の事を《滅びの王》と呼んでいたの  
であれば、……今、非常に不味まずい事態になりつつあるのは、間違いな  
かるつ。

「……鷹定たかさだ。ここは行くべき……いや、行かなくちゃならない、だ  
ろ？ ウチは止められても行くよ。練磨をむざむざ死なせるなんて  
真似まね、ウチにはできない」

獅倉ししくらの言う事には、確かに俺も同感だ。

「……どこかで踏ん切りが付かないんだ。」

練磨は俺の仲間だ。何も知らない世界……この世界に来て、何よ  
り俺を信じて、付いて来てくれた。自分が《滅びの王》と言われて  
も、未来を疑わずに前に進んでいた。そんな奴を、ここで死なせる  
訳にはいかない！

「……分かってるんだ、そんな事は。それでも俺は、練磨を今すぐ  
に助けに行けずにいる。」

自分が最低だって自己嫌悪しても、どうしてもどこかで踏ん切り  
が付かず、一步出て行く事ができない。そんな自分が情けなくて、  
反吐へどが出るのに……ッ、動けない……！

「……まっ、ヤサイの目的は達せられた訳だしな」

「矛盾むじやん……？」

俺は矛盾に視線を向ける。矛盾は何事に対しても、どーでも良さ

そうに、走平虎そうへいこの湖太郎こたろうの上で寝転がり、俺を横になつて見据えていた。

「ヤサイの目的は、アメの救出。だろ？ なら、おまえもう終わってるよ。後は帰って寝るだけ。他に何が在る？」

「おい、玲穩れいおん！ そんな言い草……！」獅倉が苛立つたような声を飛ばす。

「……鷹定くん、きみはそれでいいの？ 練磨くんを助けたいと思わないの？」鈴懸すずかけも便乗する。

「タカさん……？」菖蒲も不安げに俺を見上げる。

「俺は！」

……助けたい。練磨を、腐敗した王国から救いたい！

「……俺は何のために、菖蒲を助けた？」

「は？」

「……王国のやり方が嫌になつたからじゃない。《贅巫女にえみこ》が【世界の終わり】と繋がつていたからでもない。……菖蒲を……、一人の女の子を、助けたかつたからだ」

全員が俺を見、俺は小さく頷いた。

「時間が無い。練磨を救いに行くぞ」

言つて、俺は全員の顔を見渡した。

「おせーよバカ。見ろ、日が暮れた」空を指差して矛槍。

「日が暮れたのは葛生かさいさんのせいじゃないよう！ 菖蒲ちゃんを探してたから……！ 葛生さん。わたしも、練磨を助けたいの。一緒に、頑張ガンバろうねっ」ニパツとはにかむ間儀。

「そう来なくちゃな！ あんな腐つた鷹定は、寧ろ死んだ方が世のため人のためつてね」残酷ざんこくに笑う獅倉。

「そうと決まれば、王国に喧嘩ケンカでも売りに行くのかしら？ 私、怖

いわあん 鷹定くん、ちゃんと私を重点的に守つてね」「色目を使う鈴懸。

「タカさんは菖蒲を守つてくれるです。麗子れいこさんじゃなくて、菖蒲

です。ですよ、タカさん？」ちよつと脹れつ面な菖蒲。

全員、想いは同じなんだ。

俺だけが、ちよつと腐つてただけで……それも今、払拭された。待っている練磨。俺が……俺達が今、迎えに行つてやる……！

時刻も夕方から夜へと変わる頃、俺達は王都に在る王城へと赴いた。

「……正直じられないのは、国を相手にする人数が、たったの五人つて事よね」

そう言つて俺の腕に鈴懸が腕を絡ませてくる。……正直、歩き辛い。

「練磨と菖蒲を含めりゃ、七人だぜ？」と言うのは獅倉。

「何ならオレと練磨の二人だけで王国をぶつ潰したつて構わねえぜ？」やけに自信満々の矛槍。

「ミヤリすごい自信！ じゃあじゃあ、その時はわたしも混ぜてね」「やけに嬉しそうな間儀。

……確かに、この一団で王国を敵に回すなんて、信じられない話だ。

武力でも、人数でも、恐らく策略でも、他諸々全ての点で、俺達は国に劣る。それでも俺達は国を敵に回し、一人の男の子を助けに行くという無謀な事を止めようとしなない。

これは戦争じゃない。……喧嘩だ。国を相手取つた、たった七人で起こす、些細な喧嘩だ。

因みに、菖蒲は一時的に臣叡に預ける事にした。あそこなら、王国の中でも一番安全だと、信じているから。

「でも、どこから攻略するつもり？ 明日に《贄巫女》を控えた王城は、相当守備が堅牢なはずよ。真正面から行くにしても、それなりの覚悟は必要じゃない？」

鈴懸の案には、誰もが頷いた。

警備が手薄な昼間に比べて、夜半は否でも守備が堅くなる。ただ、

昼間だと人目に付き過ぎるといふ難点のために、已む無く断念したのだが……それでもなくとも、《贄巫女》の儀式の前夜となる今日は、厳戒態勢を敷かれていても不思議じゃない。

恐らく、裏口を探しても、万全の警戒態勢で迎えられるに違いはない。

見つかつてでも侵入するとなれば、強行突破以外考えられないのだが……俺には秘策が在った。

「こつちだ」

「鷹定？ そつちは守衛室……」

獅倉の忠告を無視して、俺は灯りの点つた小屋……守衛が寝泊りする守衛室の一つを叩扉した。

瞬間、全員の顔に驚愕の色が浮かんだが、俺は構わず対応を待った。

木製の扉が開いて、中から出て来たのは、守衛の一人だった。

「お待ちしておりました、《蒼刃》様」

「へ……？」ポカンと獅倉。

「ささ、こちらへ」

守衛が懐中電灯を片手に出てきて、小さな裏門を開き、中へと俺達を誘う。

背後で固まっている五人を見かねて、俺は小さく声を掛けた。

「早く来い。時間が無いんだ」

「つて……鷹定？ いつの間にそいつとそんなに仲好くなつてんだ……？」

獅倉が守衛の男を見て啞然としていた。

俺は小さく笑みを零すと、今も王国のために尽くしている男の顔を、脳裏に浮かべた。

「菖蒲が助けられた後、すぐに旧友に連絡を入れておいたんだ。練習を助けるために、な」

俺が応えていると、矛槍が門の前まで歩いて来ていた。全く警戒の色は窺えない。

「んじゃまー、ご厚意に甘えて通らせてもらおうか」

「ちよつとミヤリ？ そんなパサパサな言い方じゃ、嫌な眼で見られちゃうよう？」

「お気になさらないでください。私は、《蒼刃》様を慕したっているだけでありますから」

守衛は直立不動のまま応えると、間儀に輝かんばかりの笑みを返した。

……王国にいれば、こういう奴とも、ずっと関わられたらろうに……

王国を敵に回す以上、もうこれで彼と逢う事は無い。在るとすれば……戦場か。そう考えるだけで、胸が痛くなる。……が、それも慣れていかなばなるまい。既に、臣叡とも縁を切ったようなものなのだ、これ以上迷惑は掛けられないし、これで終わりにすべきなんだ……

王城内部に侵入した俺達は、そろそろと歩いてしたが、誰にも出くわす事が無く、ただ警戒心を露あひにしたまま歩き続けた。

「……何で、誰とも出くわさないんだい？ これって……妙だよ」  
獅倉が気味悪がるのも無理は無い。

矛槍は全く意に介さないようだったが、それ以外の者は全員同じような見解だった。

「《贄巫女》前夜だというのに、この兵士の配備はおかしいとしか言いようが無いわね。……鷹定くん、これって……畏わな、じゃないかしら？」

「……だとしても、ここで止まっていられるか？ ……俺達の行動が見破られていると考えればいいかも知れん」

これだけ兵士に出くわさないとすれば、官僚かんじょうの一部が根回ししている、という規模じゃなさそうだ。もつと大掛かりな……王国軍全体に腐敗が広がっているのか？

月明かりが窓から差し込み、綺麗きれいな陰影を描く廊下を歩いていると、  
気配が三人分、感じ取れた。

「……やるか？」と訊いてきたのは獅倉。

「待て。……どうやら、守衛じゃなさそうだ」

俺も刀 伽雅丸かがまるを握り直し、警戒して廊下の先に視線を送る。奥から現れたのは、青い着物を着た男だった。手には黒鞘くろさやの刀。両脇にも男が一人ずつ。どちらも刀を手に握り締めている。

「こんな夜遅くに何の用だ？ 子供の来る所じゃあねえぞ？」男の一人が下卑げひた笑みを浮かべて告げる。

「……誰かと思えば、……誰だっけ？」矛槍が小首を傾げる。

「小ケ田おがただ！ 小ケ田悟さとし！ こっちが方雲直輝かたぐもなおてるで、こっちが折敷幹久おしきみき！」

……どこかで見た覚えがあると思えば、練磨と出逢った時に、練磨を追いかけていた連中か。変な縁を感じてしまう。

「……てめえらを始末しろって、雇い主から命令が出てんでね。何も言わずとも殺すつもりだが……逃げてみるか？ 何なら、十、数えてやってもいい」

折敷幹久と呼ばれた男が黒鞘の刀を持ち上げて、刃先を俺達に差し向ける。その顔には、挑戦的な笑みが張り付いていた。

俺は無言で伽雅丸を構えようとして

「ここはオレとシストウに任せな」

矛槍が一步前に出て宣言した。

「何でウチッ!？」

と思わず突っ込む獅倉を無視して、矛槍は幹久に向かう。

「今度こそ決着着けよーぜ？ えっと……おまえ誰だっけ？」

「ウチは無視ッ!？」突っ込みっ放しの獅倉。

「……てめえに覚えてもらうような名前じゃねえしな。小ケ田。直輝。……殺すぞ」

幹久が低い声で宣言すると、二人の男が頷いて刀を鞘から抜き放つ。

「……矛槍。任せても大丈夫なのか？」妙に不安を感じて俺。

「任せる。主にシトウに」どーでも良さげに矛槍。

「だから何でウチなのッ!? そういう時は『オレに任せなっ』的な事言わない普通!?’」突っ込み<sup>さ</sup>冴え渡る獅倉。

「さっさと行けよ。」折角<sup>せっかく</sup>シトウが時間稼<sup>かせ</sup>いでくれてんだからいつもどおりの矛槍。

「ウチは何もしてねエエエエ!」

……何だか大丈夫そうだが、大丈夫じゃなさそうにも思える。

俺は頷くと、進路変更をして《清錬場<sup>せいれんじょう</sup>》を<sup>せ</sup>目指して走った。

走っていくと、……やがて地下へと続く階段に行き当たり、速度を殺さず駆け下りた。

湿っぽい王城地下は蠟燭の火しか灯りが無く、石造りの壁のあちこちに陰影が刻まれていた。

ほとんど無音に近い状態で、聴こえるのは俺達の足音と息遣い位だった。

「……誰？」

間儀が呟いたのを聴いて、俺は足を止める。

すると、地下室の奥から男が現れた。

官僚の男だ。王室内部に関与している……確か、室崎とかいう……

……  
「《蒼刃》様……！？ 何故、このような場所に……？」

室崎は露骨に驚いていた。演技ではなく、本当に、ここに俺がいる事に驚愕している。

…… 何故だ？ 確かに俺は王国を脱して消えた存在。こんな所にいるのはおかしいが……どうにもそれだけじゃない気がする。

「室崎。おまえは、ここで何を……？」

「……《蒼刃》様。何故あなた様がこのような場所に？ 私に説明を願えませぬか？」

「はぐらかすな。ここで何をしている、室崎？」

室崎は始めこそ狼狽しているようだったが、その瞳にはやがて微かな炎のような揺らめきを見て取る事ができた。

「何故、今更戻って来られたのですか、《蒼刃》様？ 私はつきり、王国に反旗を翻したものだとはかり」

「…… 何度言えば分かる？ ここで、何をしているんだ、おまえは？」

怒気を込めて告げると、室崎は怯む気配を見せ、小さく舌打ちを

返した。

「……今、我らが頭首、伽藍堂空殻様が《贄巫女》の儀式を執り行っているのですよ」

「馬鹿な!？」 《贄巫女》の儀式は明日じゃないのか!？」

俺が驚くと、室崎は大きな体を震わせて、忍び笑いをし始めた。

「早まったのですよ。誰かは知りませぬが、《贄巫女》を脱走させたらしいのでね。代わりの者に今、《贄巫女》の儀式をさせているのです。王室内の方々にも了承を得ていますので。元《蒼刃》のあなた様には関係ない事ですが」

「代わりの者? ……まさか……っ!」

「あなた様は知らないでしょうが……私達は《滅びの王》の捕獲に成功したのですよ。彼に代行させる事に決定したのは、つい先程です。空殻様もどうなるか楽しみにしておられた。私も、一個人として興味が湧きますしな」

…… 《滅びの王》に《贄巫女》をさせる?

これでは、何の解決にもなっていない! 菖蒲を助けられても、代わりに練磨が殺されたのでは、結局何も変わらないじゃないか……!

俺は室崎を見据えると、伽雅丸を構えようとして、不意に肩を突かれた。

「鈴懸?」

「ここは私の出番。 でしょ? きつと練磨くんも、私よりきみの登場を待ってるわ。勿論、崇華ちゃんもね」

鈴懸はそれだけ言うと、俺の前に立つて「杖よ」と唱え、

杖の附石を杖に変化させた。

「ほう? 女、私を楽しませてくれるのか?」 室崎が下卑た笑みを浮かべる。

「うふふ。きみが私を楽しませてくれないと …… 実力が口先だ

けじゃない事、ちゃんと証明してみせてね?」

「売女が……!」 顔を怒りで赤らめ始める室崎。

「ほらっ、鷹定くん、崇華ちゃん。練磨くんが待ってるわ。早く行

「つちやいなさい」

鈴懸が含みの在る笑みを浮かべて告げると、俺は頷いて後ろを振り返った。間儀は覚悟ができてきているといった感じで力強く頷いた。

だが、廊下には室崎が頑として立ちはだかつていた。

「私が見す見す不審人物を通すと思うかね？ ……些か度が過ぎておるぞ。ここを通るには」

「大丈夫、このおじ様は私が軽うく捻つておくから 気にしないで行つちやって」

「貴様……ッ！」

頭にキているんだろつ、室崎が腰に携えた細剣を抜き放ち、鈴懸へと斬りかかる！

相對する鈴懸は冷静で、附石の杖で刃を受け止めると、そのまま鎧迫り合いに持ち込んだ。

「さつ、今の内に」

「女ア……！」怒りを滲ませながら室崎。

「ああ、頼む。 間儀、行くぞ」

「う、うん。麗子さん、頑張つてっ」励ましつつ、俺の後を追う間儀。

王城地下を走り続けた。……まさか、こんな形でここにもう一度足を踏み入れるとは思わなかった。

菖蒲を救うために来る事は考えていたが、作戦が違っていたら、

《贄巫女》の儀式が始まった時に、官僚や王室関係者に紛れて混乱を起こし、混乱した中で菖蒲を連れ去る……もしそうだったら、ここに来る事は無かつたんだ。

つくづく練磨の起こす奇跡には驚嘆を隠し得ない。

練磨がいたらこんな考えはしなかつただろうし、こんな現状も訪れようが無かつただろう。……結末だつて変えてくれる……そんな気がしてならない。練磨には、きつとそれだけの力が在るんだ。

「……もしかしたら、それこそが《滅びの王》の力なのかもな……」  
「え？」後ろから間儀。

「いや……独り言だ」

全部が全部、《滅びの王》の力なんだ、なんて考えると練磨に怒られそうな気がする。……きつと、世界を変えていく力と言つのは、《滅びの王》に在るんじゃない、練磨が持っていたんだろうな、と考え直し、それも訂正。

生きとし生ける者、皆が世界を……全てを変える力を持つてるんだ……！

地下を走り続けると、上りの階段に辿り着く。少し急な階段だが、今は気持ちが高揚してるためか、そんなに辛いとは思わなかった。

そして、ようやくその場に辿り着いた。

「練磨……！」

ただっ広い空間……中央が円柱形に切り貫かれた外側の壁面の上部には、観客 官僚や王室関係者が座るはずである席が並び、開けた空間の中央には底の見えない空洞が口を開いている。

大きく口を開いた穴……それこそが《和冥の門》と呼ばれる《贄巫女》を《冥王》の許へと送り届ける門だ。

その門の前に立たされている男の子こそ 練磨に違いなかった。

「……室崎はどうした？」

「……おまえが、伽藍堂空殻……！」

練磨の隣に立つ男 袈裟に草履、手には錫杖を握り締めた虚無僧のような形の、二十歳前後だろう男は、俺を見て表情も変えずに口先だけを動かす。

「……ん？ よく見れば、貴様……《蒼刃》か？ ここで何をしておる？ 王国を離脱したのではなかったのか？」

驚きも感じさせない淡々とした口調に、俺は底知れない恐怖を感じてしまった。

俺……《蒼刃》がこの場に現れて尚、あの余裕か……正直、勝てる気がしなかった。

今まで出逢った誰とも違う、別種の恐怖を感じさせる人物だった。

「……空殻とやら、練磨を、返してもらおうか？」  
俺はそう言って一歩踏み出し、その足を止めざるを得なかった。

空殻が練磨に触れるだけで、練磨は奈落ならくの底に落ちてしまう。そんな状態になっていた。

「私に乞こうか？ ……残念だが、その乞こいに応える事はできぬな。此奴こやつは今、ここで死ぬ。私のために、な」

「鷹定……それに、崇華も……」俺と間儀を見て、練磨が呟つぶやいたのが風に乗って聴こえた。

「練磨……！」「練磨あ！」俺と間儀の声が重なる。

空殻はその様子を見て、小さくため息を零こぼした。

「最後の顔見せは済んだか？ ……ふん、どうやら私にも慈悲の心は在ったようだな」

「……なあ、これで最後なんだろ、オレ？」練磨が視線を奈落に向けて、小さく呟いたのが聴こえた。

「練磨……？」俺は不安げに呟く。

練磨は別に縛られている訳でも、空殻に捕まっている訳でもない。ただ、奈落に飛び降りるための台の上に立たされているだけだ。なのに、そこからピクリとも動かない。

……まさか、何らかの魔法を掛けられているのだろうか？

「……なに、貴様は此処で終わるが、世界のために死ぬのだ。何の悔いいが在ろう？ 何より貴様は、世界を滅ぼすであろう王だぞ？」

世界を救って死ぬるのであれば、本望ではないのか？」

空殻の言ってる事は滅茶苦茶だが、絶対におかしい、とも言えなかった。

どうやっても捨てきれない考えというものは在る。幾いくら菖蒲や練磨を死なないようにしようと思っても、どこかで破綻はたんする事が在る。それが……今の場合で言う『王国の繁栄はんえい』だ。王国の何千万の人間の命が平穩に暮らせるために、たった一人の人間が死ぬだけで守られるというのであれば、それはどれだけ名誉な事だろうか。それが

人道的に間違いだつて分かっている、どうしてもそれを選んでしまう人は必ずいる。

数とか質とか、そんな問題じゃないって分かっている……自覚していてもできない事だつて、確かに在るんだ。

「……ならば、最後に少し訊かせてくれよ。死ぬ前に少しくらい訊いたつて構わねえだろ？」

練磨がどこか諦めた感じで呟き、俯いたまま顔を上げようとさえしなかった。

空殻はそれを見て、表情も変えずに頷いた。

「……そうだな。これで全ての準備が整うのだ、話しても構わぬだろう。何を聴きたい？」

そう言つて、空殻は虚ろな瞳で練磨に視線を向けた。光の無い瞳は、ただただ空虚だつた。

「……おまえさ、帝国領土の教会を襲うように、手下に命令したか？」

「……何故その話を存じておるのか気になるが……ああ、確かに下した覚えが在るな。それが？」

「単刀直入に訊かせてくれよ。何で襲わせた？」

練磨が尋ねると、空殻は思案するように沈黙すると、……虚ろな瞳を上げて頭上を見た。

天井は無く、大きな月が顔を覗かせていた。

「……深い意味は無い。ただ、純潔たる魂を欲していたのだ」

「純潔たる魂？」練磨ではなく、俺が呟きを返す。

「そもそも、『贄巫女』の儀式が何故執り行われていたのか、貴様らは存ぜぬだろう？」

「……王国の繁栄を築くために、『冥王』と契約しに行くつて……その『冥王』の許に行くために門を潜るつて……」

「王国の繁栄……『冥王』との契約、か……。……懐かしい響きだ」「え？」

空殻は頭上に輝く銀月を受け止めるように両腕を広げると、低い

声のまま続けた。

「王国の繁栄などに、私は然したる興味は湧かない」

詠つように、空殻は滔々と言葉を紡ぎ出す。

「私の目的……それは王国になど無い。……《冥王》と契約する事、それだけにある」

「だから、《冥王》と契約して王国を繁栄させるんだろ……？」

「王国の繁栄？ ……そんな下賤な事に感<sup>か</sup>じている暇など無いわ。

……まさか、私が二十年もの間、王国のために動いていたと申すか？ ……甚だ愚かしい。下らぬにも度が過ぎるわ。……今日でそれ

も終わるがな。王国に干渉するのは、今この時を以て終わりとなる」

声は低く、感情もほとんど窺えないが、やけに饒舌だ。

恐らく、今の今まで誰にも話した事が無かつたのだろう。初めて自身が企てた作戦を話せる機会が訪れたために、話したい事が怒濤のように押し寄せてきているのだろう。

「でもでも、王国の繁栄のためじゃないのに、どうして《冥王》と契約を……？」 間儀が不思議そうに口を挟む。

空殻は見上げていた月から視線を下ろし、間儀に虚ろな瞳を向けた。

「解らぬか？ 《冥王》の降臨だ」

「《冥王》の……降臨？」

「《冥王》との契約には、些か骨が折れた。……何せ、二十年もの間、毎年、純潔の魂を捧げねば契約に応じぬと申されたからな。……

……だが、それも今この時を以て完遂される。最後に《滅びの王》の魂を捧げる事によって、事は成されるのだ。……王国の繁栄など、何の関係も無い。王国の連中を利用するための方便に過ぎぬ」

言うだけ言つてスッキリしたのだろう、空殻は落ち着いた空気を纏い、やはり無表情のまま練磨に向き直る。

「今、貴様の魂を以て、《冥王》はこの世に降臨なされる。良かつたな、小僧？ 貴様のおかげで世界は、滅びるのだよ」

練磨の体が、ピクンと動いた。

世界が……滅びる？

……否、そんな事は話の流れで何と無くだが掴めていた。

《冥王》がどんな奴なのか俺には分からなかったが、二十人もの魂を吸ってこの世に降臨する奴がいい奴の訳が無い。そんな奴が、世界を滅ぼすと言われても、そこに大きな驚きは無い。寧ろ、それを狙っているんじゃないかと先読みできてしまう。

「《冥王》の力さえあれば、王国を滅ぼすなど一晩も掛かるまい。

……やはり貴様は《滅びの王》、その運命からは逃れられなかったようだな」

くつくつと低い笑声を発する空殻。

……何が王国の繁栄だ。

何が何千万の命の平穏だ。

全てが奴の……伽藍堂空殻の計画の建前だったんじゃないか！

二十年もの間、《贅巫女》となり、若くして命を絶った女の子達は皆、王国の繁栄、何千万もの命の平穏を祈って身を捧げたというのに……それが全て、この男の馬鹿げた計画のためだったなんて……！

死んでも死にきれないだろう……結末があまりにも残酷過ぎる……！

「……じゃあ、オレがここで死んでも、誰も救われねえんだな？」

小さな、でも意志を持った練磨の呟き。

空殻が無表情のまま、確信を持って頷く。

「貴様は世界を滅ぼす礎となる《冥王》を降臨させるために、今ここで亡き者となるのだ」

それが答だった。

それが、合図だった。

「鷹定！」

練磨が叫んだ瞬間、俺は伽雅丸を抜刀　力を全て前身に傾け、重心を低くして一瞬の間に空殻との距離を殺す　っ！

空殻は俺の行動を先読みできなかったのか、一瞬の間が生まれ

ッ、俺の伽雅丸の　抜刀　が空殻を　ッ、

「ほう？　これが貴様の二つ名の由縁たる《蒼刃》か。……業物と言う物を初めて見る。鈍らと然して変わらぬものだな」

「な　ッ？」

俺の　抜刀　は完全に決まっていた。あとは、一押しするだけなのだ。

どう考えても、空殻は胴体を両断されているはずだった。見たとおり、俺の抜き身の伽雅丸の刃は空殻を捉え、体との距離も完全に殺されている。……にも拘らず、肉を断せずに、皮膚を斬る寸前で威力が死んでしまっていた。

これ以上、刃が進もうとしない。靈剣である伽雅丸が通さぬ物など無いはずなのに……！

俺の《蒼刃》たる由縁の伽雅丸の刃が、月光よりも青白い光を淡く湛えていた。

「私を殺せるなどと努々思わぬ事だな、《蒼刃》。否……貴様もだ、小僧？」

「鷹定！……こいつ、力を殺す力を持ってやがるんだ……っ！」  
練磨がそう言うのが聴こえたが、……もう少し早くに言ってもらいたかったな。

言うべき機会が無かったと言えば、それまでだが……、魔法でも掛けられているのか……？

「……さて。茶番は終わりだ、《滅びの王》よ。貴様の命は此処で潰え、世界を滅ぼすであろう《冥王》と成って生まれ変わるのだ。なに、恐れる事は無い。今思えば、小僧、貴様はこのために生まれてきたのであるうな？　漸く、本来の働きを為せる……故に、共和国の《聖女》は宣ったのだ。貴様が、世界を滅ぼす王にある……と

な」

……そんなの認めない。

「……認められるか、そんな事……っ」

「鷹定……？」

「練磨は世界を滅ぼすために生まれてきたのではない！ それを決めるのは、練磨自身だ！ おまえじゃないんだよ伽藍堂空殻！」

気づくと怒鳴っていた。

自分の人生は、自分で切り開いていくからこそ価値があるんだ。意味があるんだ。生きていくからこそ、自分で自分の道を歩めるんだ。それを……この腐敗しきつた男に決められて堪るか！

練磨は誓っていた。自分は《滅びの王》と呼ばれても、世界を滅ぼす事なんてしない。自分に課せられた運命さえも、自分で変えていくと。そう言っていたのだ。

それをこの男に壊された気がして、俺はどうしても黙っていられなかった。

「……それを証明できるか、《蒼刃》？ この小僧こそ《滅びの王》と呼ばれ、世界を滅ぼさんとするために生まれてきたと予言も告げられ、そして今現在、此奴は世界を滅ぼす布石と相成り、此処に立っているではないか。それを承知の上で貴様はどう証明する？ 小僧が世界を滅ぼさない者だ、と」

「……証明する必要なんて無い。俺がおまえを殺せば、それで世界は守られる」

「愚かな。貴様が私を殺せるとしても？ 馬鹿も休み休み申してくれぬか。貴様は万が一にも私を倒せない。それは火を見るよりも明らかではないか」

……黙れ。

おまえをここで倒さねば、練磨は本当に《滅びの王》になつてしまっ……！

そんなの、認めない。

俺でも未来を変えられると、信じたいから……！



きたという訳だ」

「長かった……と空殻がやけに懐古的に呟く。

「二十年だぞ？　二十年もの間、純潔の魂を創り続け、漸くそれが実を結んだのだ。……何とも素晴らしい時に貴様は訪れたものよ。今を逃せばもう、二度と眼に掛ける事は無かつたろっしなあ」

「……馬鹿な。

俺は腹を抱えながら、必死に思考を纏めていた。

「……もう、止められないのか？」

練磨を、《滅びの王》になんてさせたくない。

《冥王》を復活させた時点で、練磨は完全に《滅びの王》として死んでしまう。それだけは、絶対に許せない。

たとえ《滅びの王》になっても、世界を滅ぼさないと宣言したのに、守れない練磨。その宣言をぶち壊そうと、練磨を《滅びの王》にしようとする空殻。そのどちらも容認する世界、そして俺。全部許せない。

俺が止めねばならない。

ここで奴を殺さねば、どうしようもない。

「……最後の戦いだ。俺は死んでも構わない。練磨を《滅びの王》になんかさせない……っ！」

「空殻！」

背後から強張った声が聴こえて振り返ると、首筋に細剣の刃を突き付けられた鈴懸と、細剣を握る室崎の姿が映った。

「見る！　女を捕らえた！　こいつを《贄巫女》に代用できないか！？」

室崎が血走った瞳で大声を張り上げる。

俺が腹を抱えたままそれを見据えていると、空殻の物憂げなため息が聴こえてきた。

「《贄巫女》の儀式は既に完了済みだ。その女に用は無い」

「そ、そうか。……ならば、ようやく目覚めるのだな、《冥王》が！」

鼻息も荒く室崎が叫ぶと、空殻は無表情で頷く。

「……室崎、おまえも冥王の復活を……？」

俺が痛む腹から手を離しつつ尋ねると、室崎は鈴懸から細剣を離して、低く笑い出した。

「狙<sup>ねら</sup>っていたとも。私と空殻の二人で《冥王》を復活させ、王国を滅ぼすのだよ！」

「室崎、おまえは……！」痛みと怒りで俺の顔が歪<sup>ゆが</sup>む。

「そして行く行くは帝国を再建するのだ！ 我らが母国を再建させ、今一度、大陸を統一するのだよ！ ふはははははは！」

室崎の強張り気味の哄笑<sup>うしろや</sup>が響き渡り、

「帝国の再建？ 大陸の統一？ ……懐<sup>なつ</sup>かしい事を言っておるな、室崎。誰<sup>たれ</sup>がそんな下賤<sup>げせん</sup>な真似<sup>まね</sup>をしようと云うのだ？」

「はははは！ は？」

不意に室崎の哄笑<sup>うしろや</sup>が途絶える。

またも静寂に満たされた空間で、室崎が固まった顔のまま、空殻を見やる。

「何を、……言っておるのだ、空殻？ 我らが至上の望みは、帝国の再建であろうっ？」

「寢言は寝てから申せ、室崎。《冥王》は王国だけでなく、大陸をも滅ぼすのだよ。……帝国の再建？ そんなものに何の興味も無いわ」

空殻が無感情な眼差<sup>まなざ</sup>しを向けつつ、口許に歪んだ笑みを浮かべ始める。

「貴様の役割は、二十年の間、王室を管理する事<sup>こと</sup>だけだ。偏<sup>ひとへ</sup>に《贄巫女》を永續させるためにな」

室崎の顔から血の気が引いていくのが見て取れた。

そして、その顔に再び血色が戻った瞬間、それは爆発する。

「謀<sup>たはか</sup>ったのか、空殻ッ！」

「謀る？ ……利用させてもらったただけだ、それ以上の働きなど固<sup>も</sup>より期待しておらぬよ、室崎」

室崎の細剣が唸りを上げ、直後、室崎は空殻へと突進していった。

「貴様アアア！」

対する空殻は錫杖を下ろし、右手のひらを室崎に向けて、静止した。

室崎の細剣が空殻を捉え

「放てよ斬衝」

空殻が唱えた瞬間、右手のひらから見えない斬撃が飛び、室

崎の胸を薙いだ！

「己エ……ッ、空殻……ッ、地獄に……ッ、堕ち、ろ……ッ」

呻きながら室崎が崩れ、大量の血液が台を濡らしていった。

「さて。邪魔者は消え去るのみ。《蒼刃》に女、貴様らもいい加減失せよ。今よりこの場は聖域と化す。世界は浄化されるのだ。他ならぬ、私の手によってな……！」

「そうは問屋が卸さねえぜ！」

不意に聴こえてきた声に、俺も鈴懸も、何より空殻が驚いた。辺りに視線を配り、その出所を知った瞬間、誰もが我が目を疑った。

「小僧……！」「練磨くん……？」「練磨！」

三人が三様にその名を呼び

「おう！地獄の淵から戻って来てやったぞ、空殻！」

練磨は、間儀を抱き抱えて、《和冥の門》より飛んで帰還した。

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございますー(・ー(・)ー  
これにて最後の鷹定の書が終幕と相成り、いよいよクライマックス  
間近となってきました。

もう残すところあと僅か！

最後までお付き合い頂けると幸いですー(・ー(・)ー  
次頁をお楽しみに

《和冥の門》に落ちた瞬間、オレは咄嗟に隠し持っていた 附石  
を取り出した。

隠し持っていた、って言うか、咲希の奴が忘れたんだよな。あいつ、大鬼を倒した時に盗んだ 器石 をまだ持ってやがって。それを《贄巫女》の儀式が始まる前にズボンのポケットに隠したんだ。道具袋は取られちまったままだったからな。

「飛べ！……飛ぶんだ！……飛んでください！……飛ばうよ！……飛んじゃおうよ！」

色々念じて、 飛び の 附石 に変えて、一気に地上に戻ってやるうと思っただけど……

「練磨あああ！」

「崇華ツ！？」

が落ちてきて吃驚して、慌てて抱き抱えると、崇華がいつの間にか瞑っていた瞼を開け、オレと目を合わせる。

「……あれ？ 練磨だ」抱き抱えてるのに、オレを指差す崇華。

「おう、練磨だぞ？」自分がおかしい事を言っていると、半分自覚してるオレ。

「……あれあれ？ 練磨、落ちなかった？」人差し指でオレの鼻の頭を突く崇華。

「確かに落ちたぞ」鼻の頭を突かれつつオレ。

「……あれれれ？ じゃあ、ここどこ？」段々と怖くなってきたのか、辺りを見渡し始める崇華。

「地獄かもな」ちよつと意地悪なオレ。

崇華は数瞬の間を置いて、

「……ううん、天国だよ。だってだって、練磨がいるんだもんっ」

「……恥ずかしいから止めるって……」

真面目に気恥ずかしくて、ちよつと顔が火照ったオレだった。  
その後、附石の力を頼りに浮かび上がって、地上へ戻ってきた！

「馬鹿な……！ 貴様、いったいどんな魔法を……？」  
空殻が露骨に驚いているのが、オレには少し笑えた。  
着地を決めると、オレは崇華を離し、空殻を睨み据えた。

「これで、『贄巫女』の儀式は失敗だな、空殻！」  
言つて、妙にスツキリするオレ。こんな馬鹿げた事を阻止できたんだ、スツキリもするだろうさ。

満足気に空殻を見据えると、空殻の奴は驚いていた顔を無表情に戻し、冷淡な目つきでオレを見返した。

「……貴様は何処まで私の邪魔立てをすれば気が済むのだ？ ……  
思えば、出逢つた時からそうであつたな、貴様は……！」  
怒りを隠しきれない空殻の声音に、オレは威圧の空気を受けて怯み掛けた。

「……だけど、怯まない。こんな奴に屈した時点で、オレの負けなんだ！

「てめえが罪を悔い改めるまでは、いつまでだつて邪魔立てしてやるさ、空殻！ ……さあ、これで終わりだろ？ 観念して自首してくれ」

「……自首、だと？ 私に勧告する余裕さえ懐いたか、小僧。……  
巫山戯るな。私の命は『冥王』と共に在る！」

言つた瞬間、空殻の首筋に刀の刃が添えられた。  
きつと刃を首に喰い込ませようとしているのだろう、鷹定が持っている刀は、カタカタと小刻みに揺れていた。

「鷹定！」  
「……空殻とやら。おまえはやはりここで死ぬべきだな。……俺が  
引導を渡してやる……！」

明らかにエキサイトしてる鷹定に、麗子さんが附石の杖を構えて歩み寄つた。

「殺すのは、まだ早いわ、鷹定くん。……空殻、あなたには【世界の終わり】に就いて、洗い浚い話してもらわなきゃ」

「……小娘。貴様は若しや【夜影】の者か？」

麗子さんは妖艶な笑みを浮かべるだけで、応えるつもりは無いように見えた。

空殻は眼前に立ち尽くす鷹定を見て、鼻で笑いやがった。

「《蒼刃》よ。私に靈剣が通じぬと未だに解せぬか？」

「……ああ、やってみるまで分からんものさ」

「愚かな……貴様もあの小僧に毒されたか、《蒼刃》？」

ムカツとキたけど、今はそれどころじゃないって分かつてる。

崇華もハラハラして見てるようだけど、……あの空殻の力は未だに解明できていない。

威力を殺すのは分かる。どんな力も、あいつに触れた瞬間、霧散されるし、刃も拳も皮膚に当たるだけでそれ以上の力は加えられない。

彼は《魔法使い》なんだろうか？

「放てよ斬衝」空殻が唱えつつ、鷹定の胸に手を添える。

「ッ」ばしッ、と鷹定の胸が裂ける音が走る　ッ。

「鷹定ッ！」

胸から鮮血を滴らせながら、鷹定が二・三步下がって、  
跪いた。

オレが駆け寄ろうとすると、鷹定は手を挙げて制止した。

「大丈夫……だ。死ぬ程じゃ、ない……」

「鷹定……」

「其奴の心配ができる程に余裕か、小僧？」

ふと視線を向けると、空殻が淀みない歩調でオレに歩み寄って来ていた。

「空殻、てめえ……！」

「案ずるな。ここに居合わせた者、皆が《贄巫女》となる。……小僧も、《蒼刃》も、【夜影】の小娘も、間儀家の者も、だ」

無表情のまま歩を進めて来る男に、オレは恐怖を覚えていた。

どうすればいい？ このままじゃ、鷹定みたいにオレも……！

「……ゆう、だ……」

「え？」

突然聴こえてきた微かな声に、オレは視界を巡らし、倒れている男へと行き着いた。

よく見れば、空殻と一緒にいた男……室崎と呼ばれていた男だった。

「おまえ……？」

「聴け……《滅びの王》、よ……。空殻、は……吸収の、附石……持つてるのだ……」

「吸収の附石？」

「黙れ」

ガリツ、と嫌な音がして、室崎の頭が踏まれたッ。

空殻が草履で室崎の頭を踏みつけつつ、室崎を見下して続ける。

「未だ逝ってなかったのか、室崎？ 余計な事を口添えしおって……」

……故に貴様は昇進できぬのだよ」

「黙れ空殻……！ 祖国を、裏切りおつた貴様こそ、万死に値する

わ……！ ……王よ、貴様なら敵うはずだ……私の最後の望みは、

此奴の死のみ……！」

「戯けが」

がちゅッ、と頭が踏み潰され、……室崎はそれ以上口が利けなくなってしまった。

室崎だった物を地面に擦り付けると、空殻はオレを見据えて冷淡な瞳に殺意という名の炎を点した。

「小僧、貴様も此奴の後を追わせてやる。……《滅びの王》は此処で自らを破滅させるのだよ」

「てめえ……！ そいつは仲間だったんだろ？ 何で殺した！」

仲間を容易く殺しちまうような奴は、クソ喰らえだ！ そんな奴人じゃない！ 人の皮を被った鬼に違いない！

怒りで興奮しているオレを無視して、空殻は鼻であしらいやがった。

「仲間、だと？ 此奴がか？ ……笑わせるな。此奴は利用してやっただけだ。……それさえ満足に出来ぬような愚図ではあったがな」「てめえ……ッ！ どこまで腐ってやがる、空殻ッ！」

思わず飛び掛かって拳を叩き込む！ が、空殻はやはり痛みも感じないし、オレの拳も皮膚に触れるだけで、それ以上進まなかった。

空殻が「やれやれ」と大仰にため息を零した。

「学習せぬ奴らばかりだ、少しは足りない頭を使ってもらいたいものだな。 放てよ斬衝」

「ッッ」

唱えた瞬間、オレは咄嗟にバックステップを踏んで、空殻の手から逃れた。 が、

ざしッ、ッッ！と、ガードに回していた腕に裂傷が走るッ。

空殻は然程驚きもせず、ただ冷淡な瞳でオレを見据えると、ゆっくりと歩み寄って来た。

「楽に死ぬると思うなよ、小僧？ 貴様は私の逆鱗に触れたのだ…痛みを以て、死で償ってもらわねばなるまい」

「ちッ、ふざけてんじゃねえぞ、おい？ てめえこそ、ここでぶっ飛ばされる！」

考える、考えるんだオレ！ このままじゃ、あの見えない斬撃で、オレの体がバラバラにされちまう。それだけじゃねえ！ オレだけじゃなくて、崇華も、鷹定も、麗子さんも皆、殺されちまう！

皆、オレを助けに来てくれたんだ、ここで死なせる訳にいかないんだよ！

だから、考えるんだオレ！ 何か、あのクソツタレをぶっ飛ばす方法は……！

「そうか」

ふと思いついた考えを、自分の中で何度も確認する。本当にいけ

るのか？ どこかに破綻はたんしてる箇所は無いか？ 在り放題だよチクシヨウ、試してみるまで分かんねえしな、でもやるしかねえ！

「おい、空殻！」

眼前へと赴おもむいて来る男に大声で叫ぶ。

空殻は無表情のまま、応えずに歩み寄って来る。

「三発だ！ 三発で、てめえを伸す！」

宣言して、オレは拳を握り締めた。

空殻が無表情から陰鬱な笑みへと表情を変貌へんぼうさせる。

「貴様には最後の最後まで驚かされてばかりだった、小僧。心配せずとも皆、同じ道を歩ませてやる、冥府めいふでも寂しくないようにな」

コレがこいつの本性か……って、あんまり変わんねえな、こいつ

……

「練磨……？ 何を、する気だ……？」

鷹定が、呻うめきながらも必死に体を動かそうとするのが見えて、オレは何も言わずに、立てた親指を見せた。

麗子さんも、恐らくオレが何かしようとしているのを察したんだろう、杖を構えたまま動こうとしなかった。……きつと、二人とも何も言わなくても分かっているんだ。だから、オレがいざって時にトチっても、フォローに入ってくれるはずだ。

いるだけで安心できる人って、やっぱり大事だな、とか思ってみたりする。

空殻が眼前まで歩み寄り、手を持ち上げて、攻撃の態勢に入ろうとする！

「放てよ斬衝」

「ッ」

少し動きが鈍いのは、見て分かっていた。

空殻は魔法のような技と守りに頼り過ぎて、動きが全体的に緩慢なんだ。オレでも避けられる程の速度で攻撃を放つものだから、よっぽどこの魔法（？）に頼っているんだろう。

手から飛び出すであろう斬撃を避けつつ、その胸に拳を叩き

つけるッ！

……が、やはり衝撃も何も無く、ただ力無く触れるだけだった。

「退け、  
穿てよ貫衝」

「ッ、と目に見えない衝撃が腹に走って、吐き気を催しながらも、足を滑らせたけど、何とか踏み止まって空殻を睨み据える。」

「まず、一発目……ッ」

吐きそうで、腹が壊れそうな軋みが走ったけど、それでも平気そうな顔をして何とか言ってやった。

それが、オレにできる抵抗の限界だった。

空殻はオレを見て忌々しそうに表情を歪ませると、徐々にその頭角を表してきた。

「貴様のような下衆げすを見ていると、吐き気がするのだよ、小僧……ッ！」

「へっ、そりゃ良かったぜっ。てめえみたいな奴に、好かれてえとは思わねえしな！」

実際吐き掛けたけど、喉のどに無理矢理に留めて、次の一撃に全身全霊を掛けておく。

これで、決まるはずだ。……いや、分かるはずだ、ってところか。

オレは拳を開いて、ちゃんと握り締めていた附石を、ギュッと握り直し、再び空殻を見据えた。

「……空殻。今一度訊くぜ？ 自首してくれねえか？」

「断る。……よもや、此処で私が折れるとも思ったか？ ……下らぬ。貴様の首から上に付いている物は飾りか？」

「なら仕方ねえな。てめえをここでぶっ飛ばす！」

駆け出しは最高だった。

オレの行動を、空殻は眼で追っている……かどうかも分からない虚ろな瞳だったけど、錫杖を振り上げたって事は、オレの走行はそれだけの速度しか出てないって事なんだけど……ッ、充分だ！

その顔面を目掛けて、オレは渾身の力を振り絞る！

「ぶっ飛べエエエエエッ！」

瞬間、皮肉った空殻の顔が、

ボギイツ、「ぶぐッ」

完全に潰されたッ！

空殻がもんどりうって吹き飛び、台を滑って倒れたのが見えた。

鷹定も、麗子さんも、崇華も、そして空殻も、愕然とした表情で、現状を把握しようとしていた。

オレだけが満足気にガッツポーズを取る！

「っっしゃあああああ！ どうだっ、見たか空殻っ！」

ビシィッ、と指差して叫ぶと、空殻は未だに我が身に起こった事を理解できないらしく、ただただ驚愕の表情を浮かべて、沈黙していた。

「いったい、何をしたんだ、練磨……？」鷹定が驚きの顔を隠さずに問うてきた。

「へっへっへっ それは、あいつが一番よく分かっているはずだぜっ」

そう言っただけは、空殻に歩み寄って行く。

空殻は愕然としたままオレを見上げると、無表情だった顔から血の気が引くような変化が見られた。

「馬鹿な……っ！ 貴様、何をした……っ!？」

「あれ？ 本人も分かかってねえのかよ？ 還元さ」

「そうかつ！ 練磨、あの人の吸収の附石を還元

して、ただの 器石 にしちゃったんだ！」

一番早く理解できたのは、崇華だった。

その通り。オレは空殻の持つてる 吸収 の 附石 を 還元して、力を無くしてしまつた訳だ。故に、殴つたら普通にダメージを与えられるつ。そういう事だ！

「だけど、いつの間になんな事を？」疑問符を浮かべる麗子さん。

「一瞬しかなかったら？ 一発目、殴つた時さ」

殴つた瞬間、 還元 を念じた訳だけど……これが上手くいったのが功を奏した。この時点で上手くいつてなければ、今度こそオレの命は無かつたかも知れない。

だから賭けだった。一撃でも入れればオレの勝ち。 還元 できていなければ負け……、つまり死んでいた……

「……あり得ない。私の 附石 は、体内に在るのだぞ……？ それを 還元 するなど……！ 第一、詠唱も無しにそんな事、可能はずが……！」

「だけど、できちまつたもんは仕方ないだろ？ 何て言われようが、事実は変わらねえぜっ？」

得意気に話して、オレは空殻の胸倉を掴んで引き摺り起こした。

「てめえはクソツタレだよ、腐り過ぎてる。……そんな奴、生かすとしても、世界のためにならねえ」

「……っ」

「だから 分かるよな？」

会心の笑みを浮かべて、オレは胸倉を掴んでる左手をそのままに、ぶつ飛ばしの 附石 を握り込んだ右手を振り上げた。

「これで、三発目だッ！」

「ッッ」

空殻の情けない顔が一瞬過ぎり 空殻の顔面が再度殴り込まれ、首から上が千切れそうな程に仰け反り、そのまま意識を無くした。

「……殺しはしねえよ、空殻。 悔い改めろ。それがおまえにで

きる最低限の償いだ、くそっ」

胸倉から手を離して、空殻と共にオレも倒れ込んだ。

「練磨っ」

すぐに駆け込んできた崇華に抱き起こされ、ちよつと苦笑が漏れるオレ。

「へへっ……やっぱり甘いかな、オレ……」

「ううんっ、やっぱり練磨は最高だよ」

「……練磨」

視線を向けると、跪いた鷹定が眼前に迫っていた。その後ろには、ちよつと切り傷を付けた麗子さんの姿。

「鷹定……。どうだ？ オレ、少しは役に立ったか？」ちよつと苦笑気味のオレ。

「……ああ。おまえには、助けられてばかりだ。……心から礼を言っても、まだ足りない位だ。……ありがとう」

そう言ってから静かに、そして深く頭を垂れる鷹定。  
後ろから鷹定の肩を抱く麗子さん。

「私からもお礼を言わせて、練磨くん。……ここまでできたのは、偏に練磨くんのおかげよ。……でも私、何も無いから……体でお礼しちゃうかしら」

「！ そっ、それはダメですうっ！」何故か応えたのは崇華。

「あら？ 崇華ちゃんも体で払いたいの？」妖艶っぽく麗子さん。

「えっ！？ えっ、えとえとっ……練磨、いいのう……？」何故かオレに尋ねる崇華。

「いやいや！？ 何でそんな話につ！？ 嬉しいけどさ……じゃなくって！ ちがつ、お礼は言葉だけで充分ですっ」どもりつつオレ。

「それじゃあ……んっ」オレの頬にキッスを麗子さんッ！？

思わず顔が発火しそうになっただけど、麗子さんは構わず妖艶な笑みを浮かべたまま、オレから顔を離していく。

「れっ、麗子さあん……！」何故か涙目になる崇華。

「んふ 大丈夫よ、崇華ちゃん 練磨くんを取ったりなんかし

ないわ 今のところは、だけどねっ 「あくまでからかっている  
みたいに麗子さん。

ちよつと嬉しいけど…… 崇華が涙目で訴え掛けてくるのを見ると  
…… 何か、何故か知らないけれど、申し訳なくなってしまうですよ？  
そんなハプニングもあつたけど…… オレは三人の仲間を見回して、  
ようやく言える言葉が浮かんできた。

「…… ただいま」

「お帰りなさいだよう、練磨」

崇華が返してくれて、鷹定が穏やかな微笑を浮かべ、麗子さんが  
小さく小首を傾げて頷いた。

オレは嬉しくて、…… 泣きそうになつたけれど、泣いちゃいけな  
いと思つて、笑顔を浮かべて見せた。

…… 終わつたんだ、これで。

帰ってきたんだ、ここへ……。

「…… まだ、終わらんよお…… ツ」

「！」

不意に呻き声が聴こえて振り返ると、空殻がふら付きながらも立  
ち上がるうとしていた。

顔面は鼻血と打撲で凄まじい色をしていたけれど、虚ろだった瞳  
には今、鈍い輝きが点っていた。

「私の望みは、果たされねばならぬ…… ツ、二十年もの歳月を掛け  
たのだ…… ツ、必ずや果たしてみせようぞ……！」

ヨタヨタと千鳥足で動く姿に、もう戦う力など残っているはずが  
無かった。

なのに…… まだ何かをしようとしている姿は、執念だけの醜悪な  
姿にしか映らなかつた。

諦めが悪いという点が醜く見える瞬間だった。

「空殻…… おまえは負けたんだ、いい加減、観念しろよ……」

オレは崇華の腕から離れて起き上がり、空殻を諭そうと声を掛け

る。

「私が負けた？……そんなはず無かるう？……ッ、私が負けるなど、あり得ぬのだよ……ッ！」

顔面に叩き込んだダメージが足にもキているはずなのに、その足を引き摺ってでも、ズリズリとオレ達に歩み寄って来る空殻。

執念……自分の望みに執着し続けた男の成れの果てを見るようで、酷く気分が悪くなった。

でも、あいつにはあいつの考えが在って今に至ったんだ、それだけは変わらない。どんな結末になろうと、あの男はこうなる事を望んでいたんだ。……実際はこうなる事ではなくて、世界を滅ぼそうと考えていたんだけど、その行き着いた果てがここだっただけなんだ。

もしかしたらオレだって空殻と同じ道を歩んでいたかも知れないんだ。《滅びの王》だけど《滅びの王》にならないという道を歩もうとしているオレが、いつか空殻のようになってしまう事だって、充分に考えられるんだから……

「世界は……私が滅ぼすのだよ……私しかおらぬ……私がやらねば……！」

「空殻……」

「私が……私が……私、が……わた、し、が……ッ」  
ヨタヨタと覚束無い足取りで近付いて来て、オレをスルーした。

鷹定や麗子さん、そして崇華さえも無視して、その先、大きく口を開いた穴《和冥の門》へと足を進ませる。

「空殻？」

「……くく、ははははははー」  
突然の空殻の哄笑に、オレだけじゃなく三人とも一様に驚いていた。

その視線の集中点で空殻は一頻り笑うと、不意にオレ達に虚ろな瞳を向けてきた。

「 見せてやる。貴様らは特別だ、《冥王》の復活を目の当たりにするのだから！」

「 どういう意味だ……？ 」鷹定の、一同の心を代弁する呟き。

空殻は腕を大きく広げ、潰れた顔を月夜に向け、言葉を紡ぐ。

「 《贄巫女》は私により補完される……私が死す事により《冥王》の復活は確かなものとなる！ ……滅び行く世に私がないのは誠に忍びないが……もうそれしか残されておらぬ！」

瞬間、オレ達の中に電撃が走った！

危険信号が点った瞬間、オレも鷹定も行動に移していた！

鷹定の尋常ならざる速度を以てしても、空殻には届かない……ッ！

「 去らばだ。黄泉路で再び相見えようぞ 」

「 止せ ッ！」

鷹定の声も空しく、空殻は何の躊躇いもなく背中を倒してい

く……！

間に合わない！ 分かっているのに足が動いていた。

「 逃げるな、空殻ウウウウ！」

オレの叫びも虚空を走るばかりで、鷹定が《和冥の門》の前まで来た時には、空殻は完全に闇の中だった……。

オレも一秒後に辿り着き、……何も残されていない穴の前で、膝を突いた。

「 く、そ……っ！ 何で、おまえは……ッ 」

悔やんでも悔やみきれない……ッ。

殺しておけば良かったとか、止めを刺せば良かったとか、そういう事じゃなくて、どうしてあの時、空殻を止められなかったんだと、そればかりが脳裏を過ぎって、胸の中がグチャグチャになってた。

……空殻こそ、生きて、王国に引つ捕らえられて、拷問なり尋問なり受けるべきだった。それだけの事をしたんだ、ちゃんと償ってもらいたかった。

更生の余地だって、どこかに在ったはずなのに……。これはオレのただの思い込みなのかも知れないって分かっているけど、……信じ

たかつたんだ、空殻を。

「これで《冥王》の復活は果たされる」  
不意に背後から声が聴こえて振り返ると、大勢の男女が入り口に集まっていた。

数えてみると、男が六人、女が三人の計九人の大人が集結していた。何れも、錫杖を手に、虚ろな瞳をしていた。更によく見ると、生きているようには見えない連中が二・三人含まれていた。

そのリーダー格と思しき男には見覚えがあった。

「荻沢……!!」  
空殻、そして室崎と一緒にパーティ会場にいた、冷えた感じのする瞳を持つ、体格のいい男だった。

オレを昏倒させた本人だった……!

「我ら空殻様にお仕えする者、空殻様が亡くなりし今、我らがその願いを果たそうぞ」

「てめえらも《冥王》を復活させて世界を滅ぼそうって奴らか!」  
自然と怒鳴り込んでいた。もう、感情が上手くコントロールできない。

何で、何でこんな奴らばかりなんだよ……っ!

世界がどうしてそんなに憎いんだ……っ?

悪いのは世界じゃなくてオレ達の方だろッ?

「いかにも。貴様らは空殻様が認めた者。……見るがいい。彼こそ、

冥府の王

言われた瞬間、《和冥の門》から、すっごく嫌な空気が駆け抜け、辺りに散り始めた。

「崇華っ」

具合が悪くなるような空気を、モロに受けた崇華が倒れ込んだので、今度はさつきと逆に、オレが崇華を抱き上げた。崇華の顔は明らかに血色が悪く、気分が悪いのは火を見るより明らかだった。

「だ、大丈夫だよ、練磨……」

「んな訳在るか！……どうなっちまうんだ、この後……《冥王》とかいうのが、復活しちまうのか？」

「えとえと、……分かんない。でも……この瘴気は間違いなく、冥府の物だよ……」

て事は、《冥王》じゃなくても、冥府関係者って事かよ……っ！正直このまま逃げ出しちまいたいけど、そんな事したら、王国どころか、世界が滅ぼされちまうんだ……！そんなの、見過ごせないっ。

《滅びの王》の名に懸けて、オレは世界を救ってみせる……！

「さあ、今こそ我らに御身を御見せください、《冥王》……！」  
荻沢が叫んだ、瞬間。

《和冥の門》より一人の男が浮かび上がってきた。

上半身が裸に近い状態で、着ている物はゆったりとしたズボンだけという、十代後半の美男子だった。見えている裸体はほとんど筋肉で引き締まり、体格も文句の付け所が無く、スポーツマン的な肉体の持ち主だった。髪は漆黑で、短く切られていた。

背丈は鷹定と同じ程。そんな男が、ゆっくりと台の上に降下し、裸足で着地する。

「……あなたが……《冥王》？……」

男は応えず、ゆっくりと瞼を開いた。黄金色の瞳が、月夜に映えた。

「其の方が喚び出したのか、余を」

「はい、そうです……！」少し高揚した感じで荻沢。

「ならば、往け」

男が言った瞬間、瞳から光条が走り、荻沢の胸を貫いた！

「……え？」

突然の出来事に、荻沢は瞠目したまま固まり、ゆっくりと自分の胸に手を当てると、手に付いた赤い液体を見て、再び男へと視線を

向け直した。

「な、にを……ッ?」

「余を喚び出した礼じゃ。嬉しかろう? 余の住まう世界へと往けるのだからのう」

男はそう応えて、荻沢へと歩いていく。裸足のために、一步踏み出す度にペタペタと音が聴こえた。

「そ、んな……!……めい、お、うう……!」

「余の御前で見苦しいぞ。余が往けと言ったら往くがいい」

倒れ込みそうになっていた荻沢の頭を右手で鷲掴みにし、何の躊躇いも無く握り潰した。

びちゃッ、と辺りに血やら液やらが飛び散ったが、背後に控えていた大人達は微動だにせず、潰した本人も然して不快な様子も無く、手に付いた肉の破片を払い落としていた。

想像以上に恐ろしい光景が広がった。

「おまえが……《冥王》なのか?……」

荻沢と同じオレの問いかけに、男は視線を向けて応えた。

「如何にも。して、其の方は何奴じゃ? 其の方も、余を喚び出した下郎の一人か?」

「違う! ……頼みがあるんだ、《冥王》さん。このまま……冥府に帰ってくれないか?」

《冥王》と自称する男は瞳を細め、オレを醒めた感じで見据えた。

「余を喚び出しておきながら、早々に帰れと吐かすか。……中々肝っ魂の据わった男よのう」

「頼む……!」

頭を下げて頼んでいると、不意に虚ろな顔の大人達が動き出したっ。

全員が全員、錫杖を振り上げて、《冥王》へと飛び掛かる!

「やれやれ。余に矛先を向けるとは……熟々愚かよの」

《冥王》は深く嘆息すると、掛かってきた大人達を、黄金色の瞳の視線で突き刺した!

刹那、大人達は動かなくなり、虫のようにバタバタと地面に落下し、倒れたまま動かなくなってしまった。

見た瞬間、悟る。大人達が一人残らず絶命している事に……

「……其の方らは、掛かって来ぬのか？」

《冥王》が見据える先には、オレ達しか残っていないかった。

「……鷹定くん、真面目に戦って勝てる相手じゃないって、分かっているわよね？」

「……死ぬと確定していて戦う程、俺も馬鹿じゃない」

麗子さんと鷹定が呟きを交わし、オレは崇華を抱き起こしたまま、《冥王》を見据えた。

「お願いだ、このまま冥府へと帰ってくれ……ッ」

「……ふむ。其の方らは此奴らとは別口かの。……まあ良い。還してくるのであれば、早々に支度を整えるが良い。余も此の様な不浄の地に何時までも留まりたくないのではな」

「え……？ いいのかっ？」

「良いも何も、余は其の方らに勝手に喚び出されたに過ぎぬ。還してくれるのであれば、其れに越した事はあるまい」

「……と言つと、空殻は契約も何も、ただ単に《和冥の門》を開くためだけに《贄巫女》を行っていたって事なのか？」

何はともあれ、たった今、《冥王》に関する情報を持っていた人物が皆、《冥王》自身によって殺害されてしまったのだけれど、どうしたものか。

「誰も存ぜぬと申すか」

冥王は呆れた感じでため息を零し、苛立ったように腕を組んだ。

このままだと、《冥王》はこの世に留まり続け、気分次第で世界を滅ぼしかねない。それだけは、絶対に避けねばならないのだけれど……っ、《冥王》を還す術を知らないオレ達には、これ以上どうしようもなかった。

「やっぱり復活しちゃったのね」

「咲希っ？」

唐突に現れた妖精に、オレは驚きつつも声を掛けていた。

「おまえ、今までどこ行ってたんだよっ？」

「そんな事は、どーでもいいの！……それで、《冥王》を冥府へ還す術を知らないのね？」

「あ、ああ。そうだけど……咲希はその方法を知ってるのか？」ちよつと期待を込めてオレ。

咲希はキョトンとオレを見返し、

「あんた、さつき一人で伽藍堂空殻を倒しちゃったじゃない」

「へ？ あ、うん、まあ倒したけど……それで？」

「その方法を使えばいいだけの話よ」

は？ へ？ ふ？ どういう事？

思わず回想してみるけど……オレのした事って言えば、  
附石  
を 還元かんげん した……だけ……

…… 還元？

「……《冥王》の基礎構成は、二十人分の純潔な魂を封じた 附石  
よ。それさえ 還元 できれば……《冥王》は、自然と冥府へ還  
るわ」

「マジでかッ！？」

つか、何でそんな事知ってるのおまえ！？ って突っ込みたくな  
ったけど、今はそんな時じゃないって分かってるから、暗黙の了解  
で通した。

「余を還す術を会得えとくしたか？」《冥王》が暇そくに腕を組んでオレ  
を見据えている。

「あ、ああ。今、還してやるから、ちよつと待ってくれ！」

《冥王》の体に直接手を近付け、 念じた。

元に……、戻れ……っ！

さあ つと、《冥王》の体が砂のように砕けて、粉末状にな  
って消え始めた。

「もう二度と、余を喚び出すで無いぞ？ 次こそ、余は不浄の世を  
滅ぼすやも知れぬでな」

「ああ、本当にすまねえ。……こんな事、もうさせねえよ」

「ふん、人間風情ふせいが約束を守るものか。……最後だ。《滅びの王》よ、余に誓え。其の方こそが世を滅ぼすと」

それだけ告げると、冥王は消え去った。

「……それはできねえよ。たとえ《冥王》を敵に回しても、世界が認めなくても、オレは絶対に、世界を滅ぼさねえよ……っ！」  
オレは何も無くなった空間を見定めて、ちゃんとした意志を持って応える。

『あくまで宿命に逆らうと吐かすか。精々せいせい、足掻あがくが良い。

余は 何時までも冥府で待ってしようぞ』

そんな声が聴こえた気がして、オレは少し驚き、

「……任せる、冥府に逝くまで、……いや、逝っても世界を滅ぼさねえからな……！」

と、確かに約束した。

「おーい、終わったかあ〜？」

「……あんたは何だつてそんなに元気かね、全く……」

入り口からミヤリと八宵やよいが入ってきて、……ようやく收拾が付いた、というところだった。

長かった夢が、終わったような気がした。

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます——(・——)(・——)

これにて色々の問題に終止符を打つ事になります。  
次頁も書が変わりながらも練磨くん視点で最後の纏めを綴っていきます。

残り2頁、加えて後書の書も綴るつもりなので、3頁。

最後までお楽しみ下さいませ

結局、八日は一睡もせずいっすいに起き続けたが、九日は眠くならなかった。

それでも一応眠って、一旦現実の世界に戻り、気掛かりなので、すぐに眠った。夢の世界で目覚めると、オレは起き上がって仲間達を見渡した。

「……夢じゃない、よな？」

ちよつと間抜けな質問だつて分かつていたけれど、オレはそう尋ねていた。

部屋に佇む皆がオレを見て、笑ったり頷いたりする。

「……夢であつてほしいか？」ちよつと意地悪な返答をする鷹定。

「んな訳あるかよつ。……終わつたんだよな。これで、全部……」

「うんつ そうだよ、練磨」

崇華が朗らかに笑つた顔が眩しくて、ついつい照れてしまう。

終わつたんだ……長い旅も、これで。

その後、王国のお偉いさんと、鷹定とも菖蒲とも幼馴染の希塚臣あやめ おさななじみ きづかしん 叡えいつて人がやつて来て、オレ達を介抱してくれた。

どうやら、菖蒲に頼んでおいた作戦も成功したらしい。

その作戦というのは……

「……王室関係者並びに、官僚及び王国軍上層部、延いては国王にも聴いてもらった。……まさか、【世界の終わり】に感化された者が四十名も超えるとは。知つた時には、私も鳥肌が立ったものだ」

……実は、オレは一つの附石ふせき 録音の附石を創つて、空殻を退治している間中、作動させていたのだ。もう一つの

附石 再生の附石を菖蒲に渡し、リアルタイムで菖蒲達に空殻の動向を知らせていたのだ。

オレの作戦では、王国のお偉いさんに聴かせればそれで良かった

んだけど、希塚さんが考慮して、希塚さんの一存で、王国の官僚・王国軍上層部・王室関係者、そして国王様にまで聴かせたらしい。その時に空殻側の連中が何人が暴動を起こし掛けて、全員引っ捕らえられたらしい。

【世界の終わり】の根は深いらしく、王国の中に何名かまだ息を潜めていて話話を聴かされたけど、きつと希塚さんがどうにかしてくれろと思ってる。何せ、鷹定と菖蒲の幼馴染なんだから、悪い奴の訳が無い。

ただ残念だったのが、  
「…………ごめんな、麗子さん。【世界の終わり】の人達、全員死んじまっしたし…………」

麗子さんは【世界の終わり】の情報を入手するために動いていたのに、全員が《冥王》に虐殺されたのは、冥王を復活させてしまったオレの責任だ。あそこで空殻を止めていれば…………と、今でも悔やみきれない。

「いいのよ　王国が、序でに世界も、救われた事には変わりないんだから、それ以上の利益を求めらるなんて欲深いわ　だから、この話はここまで！　私が気にしないんだから、練磨くんも気にしちや、駄・目・よ　」

ちよんつ　と、鼻の頭を突かれ、オレもそれ以上は言及できなかつた。

「…………それとさ、鷹定。《贄巫女》ってこれからどうなるんだ？」「撤廃されるだろうな。《贄巫女》の誠の意味を知った以上、王室全体で《贄巫女》の存在そのものを隠匿するだろう。そんな存在を国民に知られた時点で、王室の体裁が保てなくなるのは火を見るより明らかだからな」

汚い世界だな、と思った。

そんな事だから、王室の中に腐敗が広がっても誰も気づかないんだって言いたかった。…………だけど、気づける人もいるんだから、無理には追求しない方がいいかも知れない。し過ぎれば、きつと国が

滅んでしまつから。

……そんな国なんて滅びちまえばいい、って考えも捨てきれない。だって、そんな国だからこそ、《贄巫女》なんて不条理な儀式きしきが罷まがり通つてしまつたんだから、やっぱり国民としてはそんな国にいたとは思わないだろう。

この国の在り方を今、希塚さんに期待するばかりだ。

何が『正しい』なんて、オレには分からなかったけれど、もっと『いい』国にしていってもらいたい。

「……それで、皆はこれからどうするつもりなんだ？」

王都の広場の一角を、オレ達七人が占領せんりょうしていた。

皆それぞれに腰掛けたり凭もたれ掛かったりと、楽な姿勢を取り、オレの質問を口の中で転がしているようだった。

「……俺は、菖蒲あやめと共に王国から一旦離れようと思う。……放浪ほうろうの旅、という奴かな」

鷹定が苦笑を浮かべた。

「もう、俺はやるべき事をやつたつもりだ。後は……気ままに過すごしてみようと思う」

「そつか……菖蒲も、それでいいのか？」菖蒲に話を振ってみる。

「菖蒲は構わないです。でも……また練磨さんと逢あいたいです」オレを見据えて菖蒲。

「オレ？ 何で？」ちよつと驚おどろきつつオレ。

「練磨さんは菖蒲を助けてくれたです。そのお礼を……」

「ダメえ つ！」

突然オレと菖蒲の間に割り込んでくる崇華。

訳が分からずオレと菖蒲が目を白黒させていると、崇華は菖蒲を見据えて、

「れつ、練磨はもうお礼を充分もらったのう！ だからもういいのう！」

「いや、お礼がもらえるなら欲しいけど……」ちよつと困惑気味の

オレ。

「だ〜め〜なの〜う！」

崇華が駄々（だだ）を捏ね始め、オレはいつたいどうすれば……

「私は一旦共和国に戻るわ。一度本部で会合を開くの。【世界の終わり】に就いて、ね」

オレと崇華の様子を見て、くすくす笑いながら、ブランコから立ち上がる麗子さん。

「皆とはここでお別れね。ちょっと寂しくなっちゃうけど、また

風の便り 頂戴ね？ 特に鷹定さんと練磨くんは」

「タカさんは麗子さんへの 風の便り は禁止です」 菖蒲がピシヤリと告げる。

「あら〜ん？ 菖蒲ちゃんったら、釣れないわねえ？」 麗さんが猫撫で声で菖蒲を見やる。

「練磨もっ、麗子さんばかりに 風の便り したらダメだからねっ」 崇華まで言い出した。

「あーもー、うっさいねえあんたらは！ ンな事どーでもいいだろがッ！」 突っ込みを入れたのは八宵。

菖蒲がプイツと麗子さんから顔を背け、鷹定の腕を絡ませる。…… やっぱり幼いって感じが抜けないなあ、菖蒲は。オレと同年とは思えないぜ。

と想ってたたら、崇華もオレに腕を絡ませてきた。

「……崇華？」

「ち、違つよう！ これはっ、練磨が飛んでいかないように……！」  
どんな状況だろうそれは。オレは風船かつ？

…… そう言や、飛んだな、昨日。

「ウチもいい加減、教会に戻らなくちゃ。あまり長い間空けとくとあいつらも寂しがるし。あんたらとは、ここでお別れだね」

八宵がちよつと視線を逸らしながら告げたのを見て、オレも苦笑を浮かべた。

「八宵も、……元気でな」

「……何でウチだけそんな返答なのさ？ もう二度と逢えないような事言うんじゃないよ！ 全く……ウチだけ仲間外れだなんて、酷ひど過ぎないかい？」

「そうだぞメンマ。シシトウの奴、寂しがってるじゃねえか。年上はもっと労わってやれ」

「ウチを年寄り扱いするんじゃないやねエエエ！」

ミヤリの首を絞め始める八宵は置いて、崇華を見やる。

「オレの力を見た訳だけど……崇華。オレをどうする？」

《滅びの王》としての力を見せた時、崇華の好きなようにすればいいとオレは言った。今、まさにその答を聴く時だった。

崇華は向日葵ひまわりのような笑みを浮かべて、

「じゃあじゃあ……わたしのお婿むこさんにするっ」

「何故にッ！？ いや、あり得ないだろ！？ 展開的に！」

どんな理論でそこに辿り着くのか、オレには理解できん！

突っ込んでいると、崇華が可愛くはにかんで、

「練磨は世界を滅ぼさなかったんだから、それでいいのっ それにわたしっ、練磨と一緒に旅がしたいなっ。……ダメ、かなあ？」

「……いいのか？ オレは別にそれでいいけど……。でも、ミヤリは？」

「オレか？ オレも暇だし、おまえらに付いてっってみるさ。それに、今回の事件が終わっても、おまえが《滅びの王》には違いねえんだし」

ミヤリの一言で、全員が妙に暗そうな顔をしたので、オレは慌てて突っ込んだ。

「大丈夫だって皆！ オレは世界を滅ぼさねえよっ！ 心配すんなってー！」

「……ま、本人もこう言ってたんだ、皆、察してやれよ？」と言ったのはミヤリ。

「ミヤリが察してないんでしょ！？ 皆、分かかって言わなかったのに……」ちょっと怒り気味に崇華。

……そっか。皆、オレを氣遣って……

その気持ちは嬉しいし、しみみりと心に響いて、ちょっと泣きそうになった。

「じゃあ……ここから、それぞれの道を歩み出すんだな、俺達は」  
鷹定が菖蒲の肩に手を添えて、皆を見回す。

「ああ、そつだな。……でも、『さよなら』は無しにしようぜ？  
オレ達は別れても仲間なんだからよっ」

「そつそつ。シストウも、泣きたいなら泣かずに怒れよ？」と続けたのは当然ミヤリ。

「何でウチが泣くんさい！ あんたは最後までこんなか！」突っ込みが冴え渡る八宵。

「じゃあどうするのう？ 何も言わずに別れるのは、……何だか寂しいよう？」小さな声で崇華。

「そつね……。『また逢いましょう』、でいいんじゃないかしら？」案を出したのは麗子さん。

「ほら、咲希も出て来いっつ」オレが小生意気な妖精の名を呼ぶ。  
「うっさいなー、……何であたしがこんな事……」ブツブツと咲希。

「それ、いいです。菖蒲は賛成です。どうせなら皆で言っつです。  
せーのっ」菖蒲が音頭を取り、

「また逢おうぜっ！」とオレが言っつて、

「また逢おう」鷹定が穏やかな笑みを浮かべ、

「また逢おうねっ」ぴよこんつと崇華が笑み、

「また逢えたらいいわねっ」咲希が恥ずかしげに、

「また逢いましょう」麗子さんが妖艶な感じで、

「また逢おうぜ」ミヤリが最後までテキトーに、

「また逢おうな！」八宵が元氣ハツラツと、

「また逢いましょうです」菖蒲がペコリと頭を下げ、

オレ達は、歩み出した。

また、出逢える事を願って……

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます。――(。――  
これにて長い夢物語の仲間達ともお別れです。  
始まりあるモノに必ず終わりがあります。  
最終書もお楽しみに

「おはよう、練磨れんまっ」

「おーっす、崇華すつか」

八月十日。今日の天候も、雲ひとつ見えない晴天。アスファルトの照り返しが、殺人的にキツイ日だった。

オレと崇華は制服ではなく、私服のまま中学校への通学路を歩いていた。

昨日……つか、今日の未明も向こうの世界にいたのに、こうして現実の世界でも起きてるって感覚が、未だに掴つかめないんだよな。寝てるのに、もう一方の世界では起きてるんだから、やっぱり不思議な感覚だ。一日が余計に濃厚あおになった気がして仕方が無い。

「今日も暑いね〜」崇華が青空を仰あおいでポツリと呟つぶやく。

「ああ、そうだなあ〜。もういつそ、太陽、休業しちまわねえかな」  
如うだるような暑さにグロッキーなオレ。

「ええ！？ ダメだよ練磨、そんな事しちゃ！ 太陽さんだって必死に皆をチリチリしてるのに！」慌わてて抗弁する崇華。

「どんな太陽だそれッ！？ 必死にチリチリしてどうするつもりなんだッ！？ オレ達を焼死させる気かッ！？」そうだったら仰天ぎょつてんのオレ。

「えとえと、……そしたら皆、トーストみたいにならない、かなっ？」

「やっぱりパンなのか、こいつは……」

人間がパンみたいに焼かれちゃったなら、生きていけねーだろーがよー、と突っ込みを入れつつ、山道のような通学路を歩き続ける。

「……でも、良かったよう」

「皆がトーストになる事がカッ！？」

「違うよう！ ……練磨が、ちゃんと生きてた事っ」

崇華はオレを見上げて、ちよつと上目遣うめづいに瞳を潤うるませると、二

パツと可愛げのある優しい笑みを湛えた。

「葛生さんも、菖蒲ちゃんを助けられて良かったし」

「だよな。……でも、やっぱり忘れられねえな、アレは」

「練磨……」

オレが気にしてるのは、……空殻の死だ。

助けられたはずなんだ、あいつだって。あいつは死なずに、生きて罪を償うべきだった。絶対に。

なのに……あいつは死ぬ事によって逃げやがった。……現実から、そして、……自分からも。

もう二度と、あんな奴を死なせてなるものか！ とか思ったりするけど、……そんな事が何度も起こる訳ねえとも思うし、もしかしたら！……って考える時もある。

向こうの世界ではミヤリと崇華、そして湖太郎と、三人と一匹で旅をしてるけど、……これが平和と言うべきなのか分からないような感じで、問題はっかり起こりやがる。

もしかしたら、オレはそういう体質なのかも知れないな、って最近、気づき始めた。

……って、やっぱり遅いよな、気づくの。

「練磨は全力を尽くしたんだもん、何も間違っただけだよ！」

必死にオレを励まそうとする崇華の気持ち、今のオレには嬉しくて、……ついつい抱き締めようとしてしまう。

けど、練磨、おまえもいい加減に大人になるんだ！……って自分に言い聴かせて、それだけは避けているつもり。……なんだけど、こいつ、実はわざと言ってないか？……って、何をだよ。

「ありがとな、崇華」頭を撫で撫でしてやるオレ。

「えへへ」呑気に喜ぶ崇華。

言いつつ、……不意に思い出してしまう、ここ数日の出来事。

色んな事があった……一番初めが重要なんだけど、いきなり異世界に飛ばされた日は、今でも脳裏に焼き付いている。忘れようにも忘れられない……一種のトラウマだと思う。衝撃的過ぎて、理屈抜

きで体が忘れようとしななんだ。

あの時、鷹定たかさだに出逢っていなければ、オレは今、恐らくここに立っている事なんてできなかつたと思う。それだけ鷹定には助けられ、仲間にも恵まれた。……こればかりは、運命の神様に感謝してもしきれない。

そして、オレが《滅びの王》だと言われた事も……

「……結局、曆しちさんが間違えちまつたんだよなあ」

それとも、これからオレは世界を滅ぼしてしまうのだろうか？

生きている限り、オレはずっと《滅びの王》という名の重荷を背負っていかなければならない……

でも、それって結構楽しそうな気がするんだよなつ。

だって、何だかそれって、凄い気がするんだ。

「えとえと、それって練磨が《滅びの王》って事？」

「ああ。……曆さんは、オレが《滅びの王》だって断言してたし」

「じゃあじゃあ、……きつと、練磨は《滅びの王》なんだよう」

そりゃ分かつてただけどさ……

「世界を滅ぼすんじゃなくて、『世界を滅ぼす人』を滅ぼす王様なんだよう！ だから、練磨は『世界の滅びを救う』王様なんだよう！」

妙な励ましの言葉を受けて、オレは思わず噴き出した。

「ははははっ！ それって、何だかややこしいな」

「え、えへへ。……だって、練磨は世界を滅ぼさないんでしよう？

なら、きつとそうなんだよう！」

……『世界の滅びを救う』王、か……それも、悪くないかなつ。

「そう言えばさ練磨。進路希望の紙は書けたのう？」

崇華がオレの顔を窺うかがいながら尋ねてきたのを見て、オレはちょっと恥ずかしかつたけど、苦笑でごまかして応えた。

「ん？ ああ、実はな……」

「……なあ、神門。訊きたいんだが……おまえ、先生を辞職させた  
いのか？」

進路指導室に呼び出されたオレは、担当の先生に向かい合って、  
木製の生徒用の椅子に腰掛けていた。

やっぱり、不味かつたかな、と思いつつ、でもそこだけは妥協し  
たくなって、オレは首を横に振ってから応えた。

「先生を辞めさせたいなんて思ってたませんよ、オレは」

「じゃあ、……コレはどういう意味なんだ？」

進路希望の紙が突き返された。

オレはその欄を見て、ちよつと苦笑。

「そのまんまの意味なんですけど」

「……いいか、神門。先生もちよつと良心があるから言い辛いんだ  
が……ゲームのやり過ぎには注意すべきだと思っただ」

「ゲームの世界と現実を混同させてるつもりは無いっすよ」

「そこまで分かっていて……コレなのか？」

先生の真剣な眼差しを受けて、オレは小さく頷いた。

「コレだけは、譲りたくないです」

「……分かった。だけど、この用紙の提出は先延ばしにしよう。神  
門の考えが変わるかも知れんからな。先生はそれを期待して待つて  
いよう」

きつと変わらないけどな、と口の中で呟く。

進路希望の紙を受け取ると、オレは立ち上がって、椅子に腰掛け  
たままの先生を見下ろした。

「でもオレ、やっぱりこれが一番だと思っただんすよ」

「……そうか。神門には神門の考えが在るだろう。……次の登校日  
を楽しみに待つてるぞ？」

「期待しても、きつと変わりませんって。オレは、」

《滅びの王》になりたいんです。  
世界を滅ぼさない、世界の滅びを救う《滅びの王》に、オレはな  
りたいと思ったんだ。

……一九九九年八月。

今年も暑く、……いつに無く平和だった。

そしてオレは、 『凄く』生きていた！

【滅びの王】・・・【完】

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございますー(・)ー(・)ー

これにて物語は完結の運びとなりました。

と言っても、練磨くんの物語は今、始まったばかりと言えるでしょう。

この先、彼はまた苦難にぶつかるとも知れませんが、一先ずこの物語はここで終焉を迎えます。

一応、次頁に【後書きの書】なんぞを書いていますがお目汚しになるかと思うので、物語の余韻を楽しみたい方はここで本書は閉じた方がよいかと。

また、感想などお待ちしておりますー(・)ー(・)ー

本当にここまでありがとうございました!!

特に必要は無いとは思ったんですが、ネットに公開して初めて完結までこぎつけた作品なので、それなりの感慨があり、後書なんかを最後に載せておこうかなと、筆を取りました。

改めて、どうも、著者のP琢磨たくまです。特殊能力と言うか邪気眼じゃきがん大好きっ子です（笑）

【滅びの王】と言う作品をここまで全部読まれた方、本当にありがとうございます（・。・）  
まだ読まれていない方、是非一度、目を通して下さい。お願い致します（・。・）

【滅びの王】は全編を通して、練磨れんまが眠ると辿り着ける夢の世界  
異世界で冒険し、且かつ現実世界でもちゃんと生活している、と言う姿勢を貫けたと思います。

こういう形式の物語は、私が知っている中で一つ挙げるとしたら【ネシヤン・サーガ】でしょうか。実はその作品は1巻しか読んだ事が無いのですが、それに似た系統だと感じています。

異世界と現実世界は時間がリンクしている……異世界で起きていた分、現実世界では眠り続けている……異世界で起きてい主人公がいかに異世界と現実世界に折り合いを付けるか。

や、きつと執筆当時はそんな事を意識して綴っていた訳ではないと思います；

私の場合、執筆する時はもっと単純な思考で綴つづっているはずです。

「異世界に行ったら、自分は変わるだろうか？」

多分、テーマなんてそんな簡単なもので創作していたはず。

読者がそんな事を感じ取れるのかに就いては、甚だ疑問ですがね  
(苦笑)

主人公の練磨の話を少しだけ。

練磨は昔から「凄く生きたい」と考えている少年です。小学校の作文でもそんな事を書いてしまう位に、「凄く生きたい」意志が強かったのです。

でも、歳を重ねるに連れ、どうしてもそういった夢は失われてゆきます。昔は容易く「宇宙飛行士になりたい」「ケーキ屋さんになりたい」と夢を語れたのに、中学生、高校生となって体も心も成長していくと、どうしても思考も現実的なものに切り替わっていきま

す。  
夢が、輪郭を伴う確実な「何か」へと変貌していくであろう、そんな年頃の少年が主人公 練磨です。

昔は「凄く生きたい」と考えていたのに、中学校を卒業して、オレは一体何がしたいんだ? 「凄く生きる」って、どういう意味だ?

そんな時に、突如として眼前に広がった異世界。そこで彼は、《滅びの王》と言う、現実世界に置き換えれば《恐怖の大王》と同じような存在だと宣言されてしまいます。

これこそが練磨の一大転機だったと言えるでしょう。私にもいつかそんな白々しい程に分かり易い転機が訪れないものかと、今か今かと待っているんですが、中々訪れませんね。

さておき、練磨は異世界にて強大な力を内包した存在として扱われる訳ですが……続々と問題の波が押し寄せてきます。

そういった荒波を越えた後に、練磨は一体どんな事を考えるのか? 世界を滅ぼしてしまうと予言された彼は、自分の力を抑える事ができなくなってしまうのか? その結末とは?

……とまあ、そんな物語を一年も掛けて公開し終えた訳ですが、読者の方は楽しめたでしょうか？ その点が不安でなりません。

自分では【滅びの王】は長過ぎる物語だと考えていたのですが、この【滅びの王】を登録させて頂いている【小説家になろう】様では、この話よりも何倍も長い物語がゴロゴロ転がっていたので、少し驚かされました。

【滅びの王】は短編の部類に入る長さなのだと知り、安堵もしました。これなら読者の方も最後まで読んでくれるかな……と。

まあ、最後まで読む如何いかんに就いては、作品が面白くなければ当然読み続ける事なんてあり得ないのですが……

もしおかしな点や、疑問に思われた事がありましたら、是非私までご意見等お寄せ下さい。勿論、感想も滅茶苦茶お待ちしております  
すー(・ー・)ー

最後になりましたが、ここまでお読み頂き、本当にありがとうございました  
いましたー(・ー・)ー

また出逢える機会に恵まれる事を祈っています。  
それではこれにて筆を擱おかせて頂きます。

スペシャルサンクス

文章の校正：神子ちゃん

著：P 琢磨

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3145d/>

---

滅びの王 下巻

2010年10月8日13時52分発行